

萩原遺跡

第2・3次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第120集



2004

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



正 誤 表

山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第120集

萩原遺跡第2・3次発掘調査報告書

頁	行	誤	正
例言	30	4 発掘調査並びに	5 発掘調査並びに
	37	5 本書の作成	6 本書の作成
	38	6 委託業務は	7 委託業務は
	43	7 出土遺物	8 出土遺物
凡例	28	断面図中に▲で表示した	断面図中にスクリーントンで表示した
本文 1	17	平成11年度(第3次調査)、平成12年度(第3次調査)の3カ年にわたって	平成11年度調査(第3次調査)の2カ年にわたって
	19	第4次調査は	補足調査は
138	5	強く外反する	強く外反する
139	3	中世であろうと	中世であろうと
	16	強く外反する	強く外反する
142	2	1.墳時代の	1.古墳時代の



は ぎ わ ら

萩原遺跡

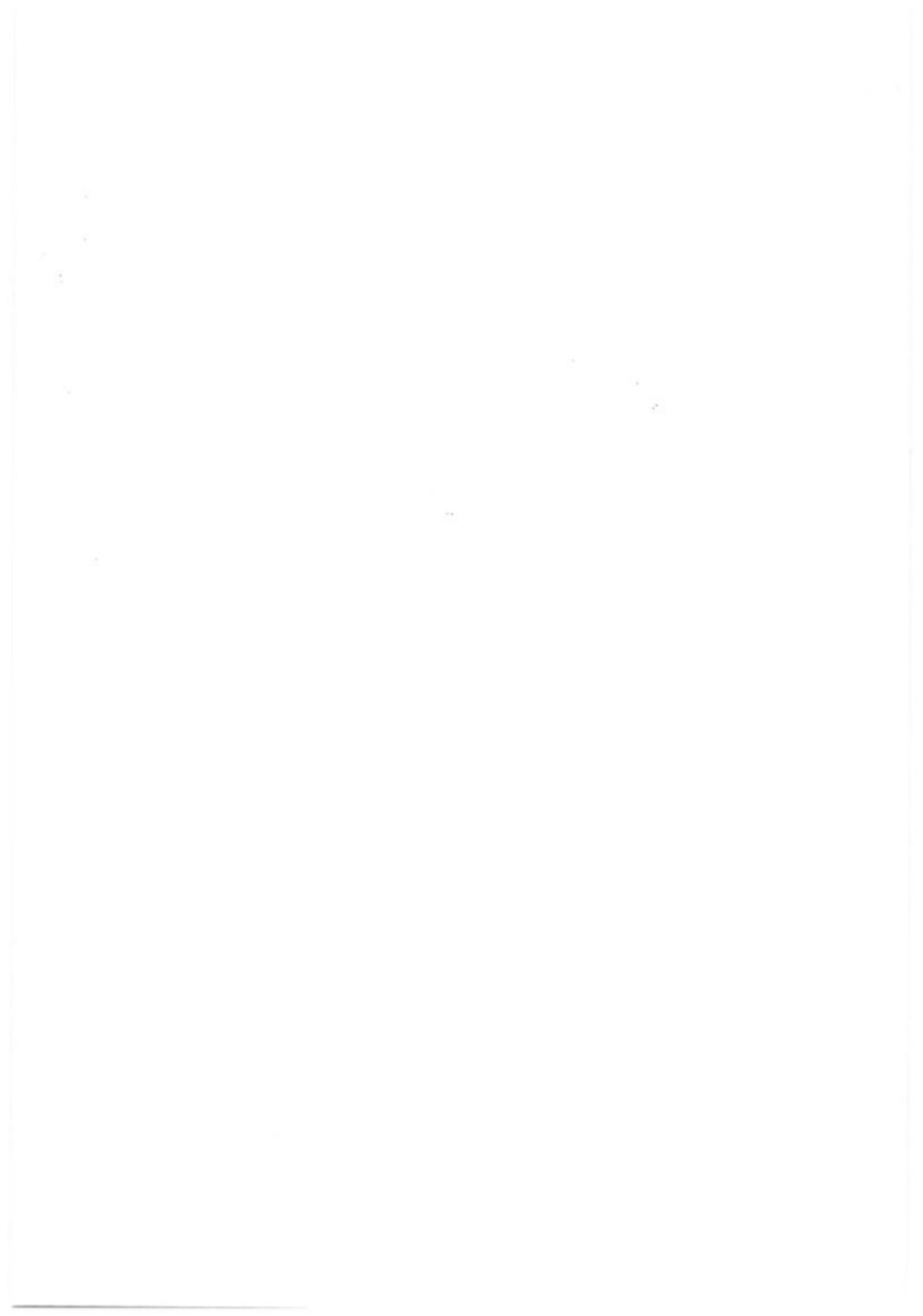
第2・3次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第120集

平成16年

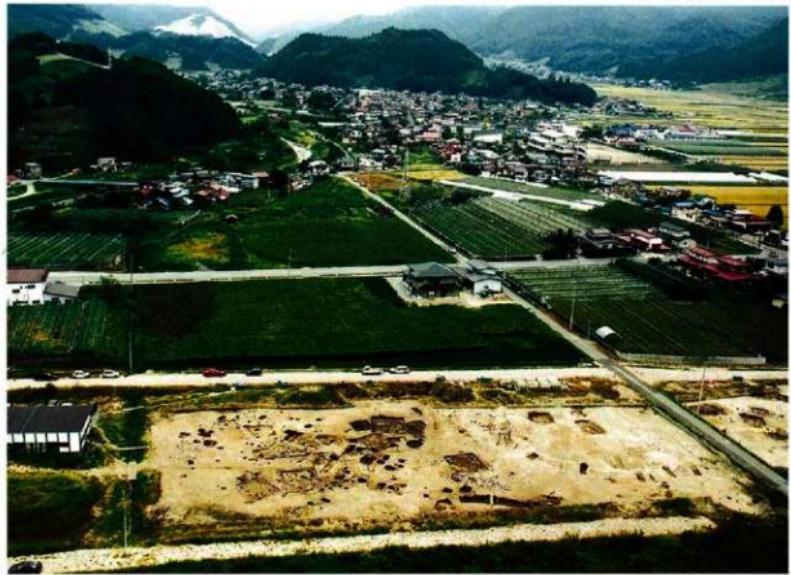
財団法人 山形県埋蔵文化財センター







遺跡遠景（南より）



遺跡空中写真（東より）



3次調査ST 4 住居跡出土遺物



3次調査ST12 住居跡出土遺物

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、萩原遺跡の調査成果をまとめたものです。

今回の発掘調査は、日本道路公団の東北中央道相馬・尾花沢線（上山～東根間）の建設工事に伴いおこなったものです。調査は、東北中央道相馬・尾花沢線の建設工事に合わせて行われ、平成9年、10年、11年の三次を重ねました。

萩原遺跡は山形県の県庁所在地であります山形市にあります。山形市は古くから政治経済の要衝として発展し、戦国時代の武将最上義光は、ここを拠点として、出羽国に号令を発しました。遺跡の所在地は市街地の西南、南山形地区にあたります。ここは豊かな畑地やブドウ畑が広がる地域であります。

遺跡からは、古墳時代の土器群、平安時代の住居跡・掘立柱建物跡、さらには中世の堅穴建物跡などの遺構が見つかり、古墳時代から中世までという長期間にわたり断続的に利用された遺跡であることがわかりました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられてきた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの貴重な責務と考えます。さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木村 宰

例　　言

1 本書は日本道路公団東北中央自動車道相馬～尾花沢線にかかる「萩原遺跡」の第2・3次発掘調査報告書である。

2 既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3 調査は日本道路公団の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

4 調査要項は下記の通りである。

遺跡名　萩原遺跡

遺跡番号　101

所在地　山形県山形市大字長谷堂字萩原

調査主体　財団法人山形県埋蔵文化財センター

理事長　木村　宰

受託期間　平成10年4月1日～平成11年3月31日（第2次調査）

現地調査　平成10年8月24日～平成10年10月23日

調査担当　研究課長（兼）調査第一課長　佐藤　庄一

主任調査研究員　佐藤　正俊

調査研究員　鈴木　徹（調査主任）

調査研究員　斎藤也寸志

調査員　志田　純子

受託期間　平成11年4月1日～平成12年3月31日（第3次調査）

現地調査　平成11年6月24日～平成11年10月6日

調査担当　調査第四課長　名和　達朗

調査研究員　山口　博之（調査主任）

調査研究員　斎藤也寸志

調査員　吉田江美子

整理期間　平成12年4月1日～平成16年3月31日

整理担当　調査第三課長　佐藤　正俊

調査第三課長　阿部　明彦

調査研究員　山口　博之

調査研究員　斎藤也寸志

調査員　吉田江美子

4 発掘調査並びに本書を作成するにあたり、日本道路公団東北支社山形工事事務所、山形県教育庁文化財課（当時）、山形県教育庁社会教育課文化財保護室、山形県土木部高速道路整備推進室、山形県山形工事事務所高速道路用地対策課、東南村山教育事務所、山形市教育委員会、最上川中流域改良区等関係機関にご協力をいただいた。また報告書の作成にあたり、以下の方々に指導・助言を得た。記して感謝する次第である。

田嶋明人、北野博司、松井敏也、三上喜孝、吉田歓、齊木秀雄、飯村均、八重樫忠郎、藤澤良祐、中野晴久、斎藤弘（敬称略）

5 本書の作成、執筆は、山口博之、吉田江美子が担当し、全体については、阿部明彦が監修した。

6 委託業務は次の通りである

放射性年代測定　パレオ・ラボ

敷物状遺物の解析　東北芸術工科大学

胎土分析　パリノサーゲイ

焼失住居出土炭化材の樹種同定　パレオ・ラボ

7 出土遺物、調査記録類については、報告書作成終了後すみやかに山形県教育委員会に移管する。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S K…土坑	S B…建物跡	S T…住居跡	S D…溝跡
S L…炉跡	S P…ピット	E L…カマド跡	E P…遺構内柱穴
E K…遺構内土坑	R P…登録土器	R Q…登録石製品	S…縄
E U…埋設土器	S X…性格不明遺構		

- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。
- 3 調査区を年度と地点を総合しながら便宜的に6地点に分けている。3次調査地点のうち市道長谷堂・二位田線をはさんで、北側を北区、南側を南区とする。さらに2次調査の地点のうち、南区の西側をA区、東側をB区とする。同様に北区の西側をC区、東側をD区とする。
- 4 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N - 38° 50' - W を測る。
- (3) 遺構実測図は1/20、1/40、1/80、1/200縮図、その他で採録し、各押図にスケールを付した。
- (4) 遺構実測図・拓影図は1/2、1/3、その他で採録し、各々スケールを付した。遺物図版については任意としたが、重要なものについてはスケールを入れている。なお、実測図断面を黒く塗りつぶしたものは須恵器を表している。
- (5) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
- (6) 土器の拓影の内、表裏を表したものについては、断面図を挟んで右が表面、左が裏面として図を作製した。
- (7) 遺物観察表中の()内数値は、図上復元による推計値、または残存値を示している。
- (8) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。
- (9) 図版中に()で番号を記したものは、押図中の遺物番号に一致する。
- (10) 押図中の遺構・遺物のうち2-、と文頭につくものは、2次調査の検出遺構であることを表す。3-は同様に3次調査を表す。
- (11) 1次調査の遺物については、すでに山形県埋蔵文化財センター調査報告書第68集『東北中央道相馬・尾花沢線関係 予備調査報告書(2)』にて報告済みである。
- (12) 黒色土器については断面図中に▲で表示した。
- (13) 第2次調査、第3次調査の2次にわたる調査をまとめて、報告することになる。各調査については、できるだけそれぞれの次数に分けて報告する。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の概要	
1 調査区と層序	7
2 遺構と遺物の分布	8
IV 検出された遺構	
1 古墳時代前期の遺構	15
2 古墳時代中期の遺構	32
3 奈良・平安時代の遺構	35
4 中世の遺構	77
V 出土した遺物	
1 古墳時代中期の遺構	88
2 奈良・平安時代の遺構	90
3 中世の遺構	138
VI まとめ	140
報告書抄録	卷末

表

表1 出土土器器幅年表（案）	141
----------------	-----

図 版

第 1 図 道路周辺地形分類図	2	第 39 図 3 次 S T 16 (1) 住居跡	56
第 2 図 遺跡位置図	3	第 40 図 3 次 S T 16 (2) 住居跡遺物出土状況	57
第 3 図 調査区真要図	4	第 41 図 3 次 S T 17 住居跡遺物出土状況	58
第 4 図 造構配置図	5	第 42 図 3 次 S T 18 住居跡遺物出土状況	59
第 5 図 基本層序図	7	第 43 図 3 次 S T 19 (1) 住居跡遺物出土状況	60
第 6 図 古墳時代前期・中期遺構分布図	9	第 44 図 3 次 S T 19 (2) 住居跡遺物出土状況	61
第 7 図 泰良・平安時代造構分布図	11	第 45 図 3 次 S T 20 住居跡遺物出土状況	62
第 8 図 中世造構分布図	13	第 46 図 3 次 S T 21 (1) 住居跡	64
第 9 図 2 次 S T 1 住居跡遺物出土状況	16	第 47 図 3 次 S T 21 (2) 住居跡遺物出土状況	65
第 10 図 3 次 S T 2 (1) 住居跡	18	第 48 図 2 次 S B 20 建物跡	67
第 11 国 3 次 S T 2 (2) 住居跡遺物出土状況	19	第 49 国 2 次 S B 30 建物跡	68
第 12 国 3 次 S T 3 (1) 住居跡	20	第 50 国 2 次 S B 50 建物跡	69
第 13 国 3 次 S T 3 (2) 住居跡遺物出土状況	21	第 51 国 2 次 S B 70 - 75 建物跡	70
第 14 国 3 次 S T 5 (1) 住居跡	22	第 52 国 3 次 S X 18 遺物出土状況	72
第 15 国 3 次 S T 5 (2) 住居跡遺物出土状況	23	第 53 国 3 次 S X 26 遺物出土状況	73
第 16 国 3 次 S T 6 住居跡遺物出土状況	24	第 54 国 3 次 E U 1 球設土器遺物出土状況	74
第 17 国 3 次 S T 8 住居跡遺物出土状況	26	第 55 国 3 次 破跡	75
第 18 国 3 次 S T 10 (1) 住居跡	27	第 56 国 3 次 S K 1 - 10 土坑遺物出土状況	78
第 19 国 3 次 S T 10 (2) 住居跡	28	第 57 国 3 次 S K 11 - 12 - 13 土坑遺物出土状況	79
第 20 国 3 次 S T 10 (3) 住居跡遺物出土状況	29	第 58 国 3 次 S X 4 - 5 - 15 遺物出土状況	80
第 21 国 2 次 S T 14 住居跡遺物出土状況	30	第 59 国 3 次 S X 8 - 10 遺物出土状況	81
第 22 国 3 次 S X 14 遺物出土状況	31	第 60 国 3 次 S B 1 建物跡	85
第 23 国 3 次 S T 4 (1) 住居跡	33	第 61 国 造構外出土遺物 (1)	91
第 24 国 3 次 S T 4 (2) 住居跡遺物出土状況	34	第 62 国 造構外出土遺物 (2)	92
第 25 国 3 次 S T 7 (1) 住居跡	38	第 63 国 造構外出土遺物 (3)	93
第 26 国 3 次 S T 7 (2) 住居跡遺物出土状況	39	第 64 国 造構外出土遺物 (4)	94
第 27 国 3 次 S T 12 (1) 住居跡	40	第 65 国 造構外出土遺物 (5)	95
第 28 国 3 次 S T 12 (2) 住居跡遺物出土状況	41	第 66 国 2 次 S T 1 - 6 - 9 - 80 - 125 出土遺物	96
第 29 国 2 次 S T 6 - 9 - 80 (1) 住居跡遺物出土状況	44	第 67 国 3 次 S T 2 - 3 (1) 出土遺物	97
第 30 国 2 次 S T 6 - 9 - 80 (2) 住居跡	45	第 68 国 3 次 S T 3 (2) 出土遺物	98
第 31 国 2 次 S T 125 住居跡遺物出土状況	46	第 69 国 3 次 S T 5 出土遺物	99
第 32 国 2 次 S T 130 住居跡遺物出土状況	47	第 70 国 3 次 S T 6 出土遺物	100
第 33 国 2 次 S T 131 住居跡遺物出土状況	48	第 71 国 3 次 S T 8 - 2 次 S T 6 出土遺物	101
第 34 国 2 次 S T 132 住居跡遺物出土状況	49	第 72 国 3 次 S T 7 - 10 出土遺物	102
第 35 国 2 次 S T 133 - 135 (1) 住居跡遺物出土状況	50	第 73 国 3 次 S T 4 (1) 出土遺物	103
第 36 国 2 次 S T 133 - 135 (2) 住居跡	51	第 74 国 3 次 S T 4 (2) 出土遺物	104
第 37 国 2 次 S T 198 住居跡	52	第 75 国 3 次 S T 4 (3) 出土遺物	105
第 38 国 3 次 S T 14 - 15 住居跡遺物出土状況	55	第 76 国 3 次 S T 4 (4) 出土遺物	106
		第 77 国 3 次 S T 7 出土遺物	107

第 78 図 3次S T12 (1) 出土遺物	108	第 93 図 3次S T19 (1) 出土遺物	123
第 79 図 3次S T12 (2)・2次S T14出土遺物	109	第 94 図 3次S T19 (2) 出土遺物	124
第 80 図 2次S T130 (1) 出土遺物	110	第 95 図 3次S T19 (3) 出土遺物	125
第 81 図 2次S T130 (2) 出土遺物	111	第 96 図 3次S T19 (4) 出土遺物	126
第 82 図 2次S T131・132 (1) 出土遺物	112	第 97 図 3次S T19 (5) 出土遺物	127
第 83 図 2次S T132 (2) 出土遺物	113	第 98 図 3次S T19 (6) 出土遺物	128
第 84 図 2次S T133 (1) 出土遺物	114	第 99 図 3次S T20出土遺物	129
第 85 図 2次S T133 (2) 出土遺物	115	第 100 図 3次S T21出土遺物	130
第 86 図 2次S T133 (3) 出土遺物	116	第 101 図 3次E U 1・S D・S K 1出土遺物	131
第 87 図 2次S T135・198・S X178出土遺物	117	第 102 図 3次S X14・18 (1) 出土遺物	132
第 88 図 3次S T15・16 (1) 出土遺物	118	第 103 図 3次S X18 (2)・26出土遺物	133
第 89 図 3次S T16 (2) 出土遺物	119	第 104 図 3次S K 2・S X 4・5・6・S K 10 ・S X 10・S K 12・S X 13出土遺物	134
第 90 図 3次S T16 (3) 出土遺物	120		
第 91 図 3次S T17出土遺物	121	第 105 図 3次その他のS X・西高參1・2出土遺物	135
第 92 図 3次S T18出土遺物	122		

写真図版

卷頭写真 1	遺跡遺景	写真図版31	3次調査 S T12遺構遺物 (2)
巻頭写真 2	遺跡空中写真	写真図版32	3次調査 S T12遺構遺物 (3)
写真図版 1	萩原遺跡全景	写真図版33	3次調査 S T12遺構遺物 (4)
写真図版 2	北区・南区第3次調査空中写真	写真図版34	2次調査 S T 6・80遺構遺物
写真図版 3	北区・南区第2次調査空中写真	写真図版35	2次調査 S T125遺構遺物
写真図版 4	第2次調査状況	写真図版36	2次調査 S T130遺構遺物 (1)
写真図版 5	第3次調査状況	写真図版37	2次調査 S T130遺構遺物 (2)
写真図版 6	第2次調査状況	写真図版38	2次調査 S T131遺構遺物 (1)
写真図版 7	遺構遺景 (1)	写真図版39	2次調査 S T131遺構遺物 (2)
写真図版 8	遺構遺景 (2)	写真図版40	2次調査 S T132遺構遺物 (1)
写真図版 9	S T1遺構遺物	写真図版41	2次調査 S T132遺構遺物 (2)
写真図版10	2次調査 S T2遺構遺物 (1)	写真図版42	2次調査 S T133・135遺構遺物 (1)
写真図版11	2次調査 S T2遺構遺物 (2)	写真図版43	2次調査 S T133・135遺構遺物 (2)
写真図版12	2次調査 S T3遺構遺物 (1)	写真図版44	2次調査 S T198
写真図版13	2次調査 S T3遺構遺物 (2)	写真図版45	2次調査 S T14・15遺構遺物
写真図版14	3次調査 S T5遺構遺物 (1)	写真図版46	3次調査 S T16遺構遺物 (1)
写真図版15	3次調査 S T5遺構遺物 (2)	写真図版47	3次調査 S T16遺構遺物 (2)
写真図版16	3次調査 S T6遺構遺物 (1)	写真図版48	3次調査 S T17遺構遺物 (1)
写真図版17	3次調査 S T6遺構遺物 (2)	写真図版49	3次調査 S T17遺構遺物 (2)
写真図版18	3次調査 S T8遺構遺物 (1)	写真図版50	3次調査 S T18遺構遺物 (1)
写真図版19	3次調査 S T8遺構遺物 (2)	写真図版51	3次調査 S T18遺構遺物 (2)
写真図版20	3次調査 S T10遺構遺物 (1)	写真図版52	3次調査 S T19遺構遺物 (1)
写真図版21	3次調査 S T10遺構遺物 (2)	写真図版53	3次調査 S T19遺構遺物 (2)
写真図版22	2次調査 S T14遺構遺物 (1)	写真図版54	3次調査 S T20遺構遺物
写真図版23	2次調査 S X14遺構遺物 (2)	写真図版55	3次調査 S T21遺構遺物 (1)
写真図版24	3次調査 S T4-1・2遺構遺物 (1)	写真図版56	3次調査 S T21遺構遺物 (2)
写真図版25	3次調査 S T4-1・2遺構遺物 (2)	写真図版57	その他の遺構遺物 (1)
写真図版26	3次調査 S T4-1・2遺構遺物 (3)	写真図版58	その他の遺構遺物合・合口亮 (2)
写真図版27	3次調査 S T4-1・2遺構遺物 (4)	写真図版59	その他の遺構遺物 (3)
写真図版28	3次調査 S T7遺構遺物 (1)	写真図版60	その他の遺構遺物 (4)
写真図版29	3次調査 S T7遺構遺物 (2)	写真図版61	掘立柱建物他
写真図版30	3次調査 S T12遺構遺物 (1)	写真図版62	遺構出土土器

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

今回の発掘調査は、日本道路公団の東北中央自動車道相馬・尾花沢線（上山～東根間）の建設工事事業に伴って実施されたものである。

本遺跡は、平成9年11月に、同事業に係る県教育委員会により、路線区内の試掘調査が行われた。試掘調査では、土坑、柱穴などの遺構が確認され、古墳時代・平安時代のものと考えられる須恵器・土師器が検出された。

その結果をうけて平成10年4～5月に、財団法人山形県埋蔵文化財センターが日本道路公団の委託を受け、建設事業計画と緊急発掘調査計画などの調整を図るために予備調査（第1次調査）を実施した。1次調査では、竪穴住居跡、土坑、溝跡、柱穴などの遺構が確認され、古墳時代・平安時代のものと考えられる須恵器・土師器が検出された。その結果、東西140m、南北150mの分布範囲を呈し、面積は12500m²となることが確認された。

予備調査の結果をもとに関係機関による協議が行われた結果、建設工事事業区内について緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることになり、財団法人山形県埋蔵文化財センターが日本道路公団の委託を受けて発掘調査を実施することになったものである。

2 調査の方法と経過

発掘調査は、平成10年度（第2次調査）、平成11年度（第3次調査）、平成12年度（第4次調査）の3カ年にわたって行われることになった。第2次調査では遺跡内の高速道路予定地の側道部分の4,900m²、第3次調査では本道部分の5,400m²が調査対象となり実施された。第4次調査は、遺跡内の市道長谷堂・二位田線の付け替え工事に伴って実施された。

調査区を覆う座標は、調査区の中央を東西に走る東北中央自動車道相馬・尾花沢線建設予定道路内の中央を南北に走るセンター用測量杭をY軸の基準とし、それと直交する線をX軸とした。これを起点として5m四方の方眼（グリッド）を設定した。Y軸は西から東に11～25まで、X軸は南から北に3～55まで付番して「11-4」のように表記した。

方眼のX軸は、N-38°50'-Eを測る。

以下、萩原遺跡第2・3次調査における現地調査工程の概略を記す。

第2次調査は、調査区をA区とB区に分け平成10年4月9日から開始され、10月16日に現地調査が終了した。

第3次調査は、平成11年6月24日から開始され、10月6日に現地調査を終了した。補足調査は、市道長谷堂・二位田線の付け替え工事に伴って実施され、関係者立ち会いの上で引き渡しを行った。

いずれの調査でも面整理を繰り返しながら遺構検出・マーキング・遺構登録・遺構精査を行った。遺構の精査に合わせ、遺構平面図・断面図の作成、遺物の検出および登録、写真撮影、土層注記等記録作業、遺物取り上げ等を行った。

II 遺跡の立地と環境

萩原遺跡は、山形市街の南西方約4km、山形盆地の南、山形市大字本沢地区に所在する。本沢川右岸の自然堤防上の微高地に立地し、縄文時代から中世まで営まれた複合遺跡である。遺跡の範囲は東西約140m、南北約150mに広がり、面積が約12500m²と推定される。標高はおよそ130mを測る。地目は、ぶどうなどが栽培される畠地となっている。

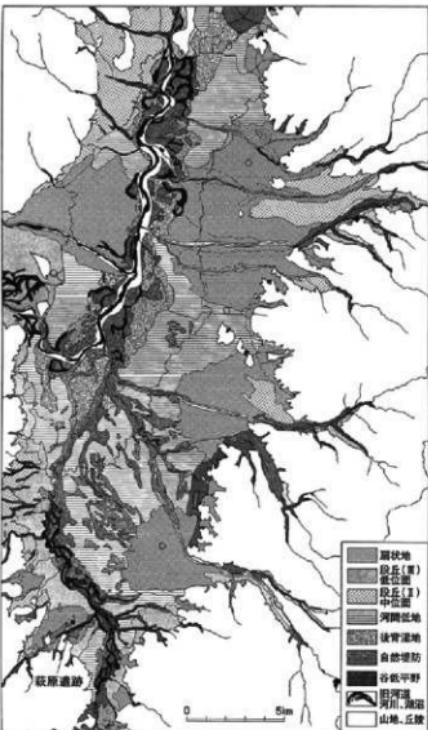
遺跡からは、東に雄大な蔵王山や龍山、北に月山・葉山の穏やかな稜線が見え、山形市の中心街を見下ろすことができる。

本地区を流れる本沢川は、白鷹丘陵から谷間を流下し長谷堂城の東南麓を通り平野部に扇状地を形成している。その段丘上や旧水路の氾濫によって形成された自然堤防上の微高地には、多くの遺跡が集中して分布している（第1図）。

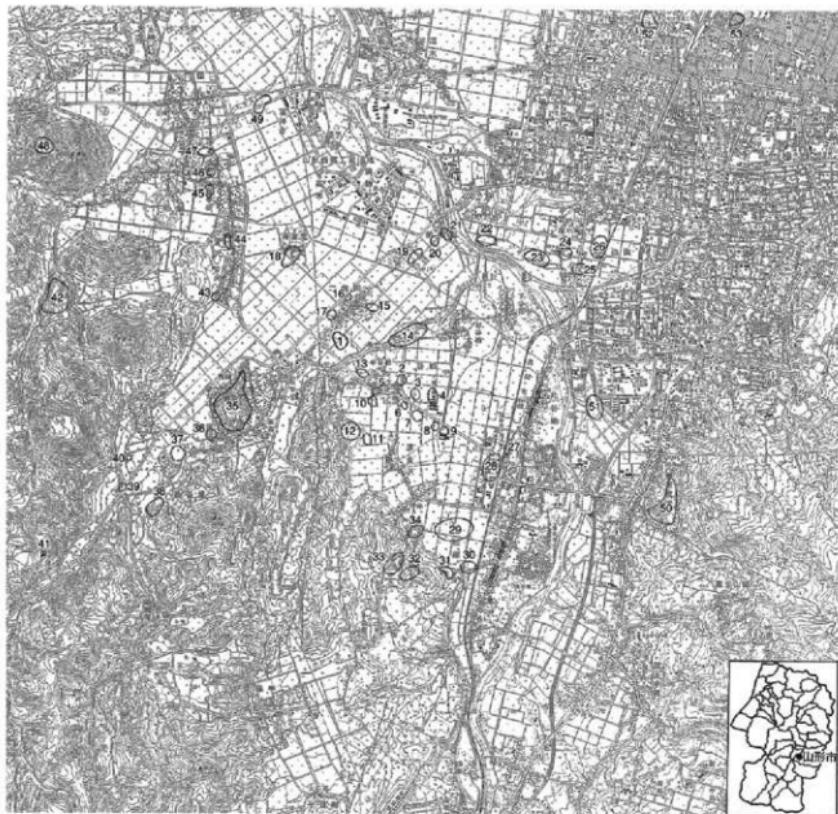
遺跡の立地は、本沢川扇状地の自然湧水の豊富な扇端部付近や自然堤防上の微高地であり、縄文時代から各時代にわたる遺跡が集中して立地している（第2図）。縄文時代の

百々山遺跡 遺跡では、中期の百々山遺跡、後期前葉の集落跡の前田遺跡がある。沢田遺跡からは弥生時代中期の「桜井式」土器が出土し、また県内で最初

石包丁 の石包丁が発見されている。古墳時代の遺跡では、近くの丘陵地帯には円墳として東北地方最大の菅沢二号古墳のある、菅沢古墳群がある。律令制下において、萩原遺跡は最上郡福有郷に比定されるとされ、後背湿地を利用した水田經營が一段と安定したことが窺える。中世になり、長谷堂山には慶長五年（1600）に、上杉氏と最上氏とが死闘を繰り広げた、長谷堂合戦が行われたのもこの地である。

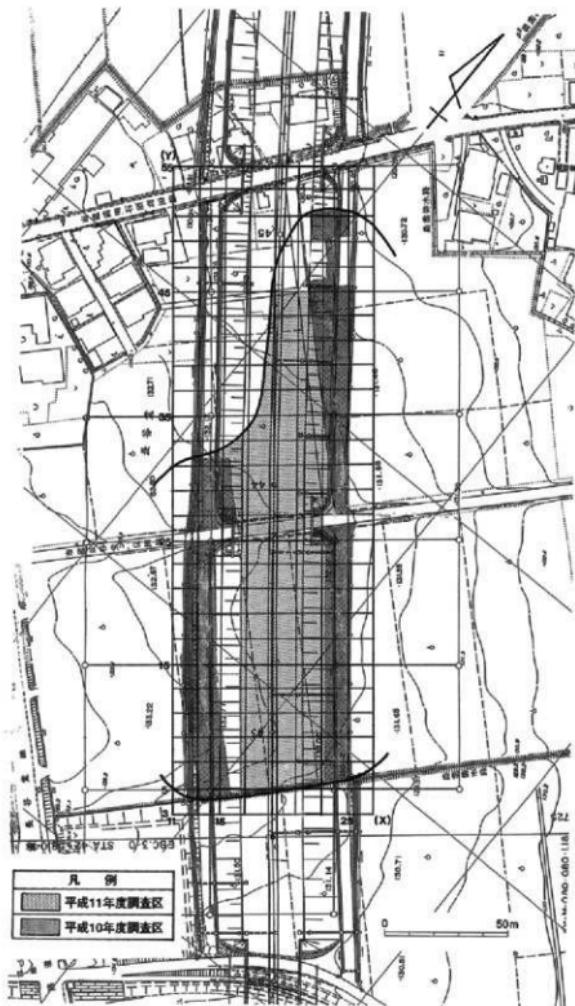


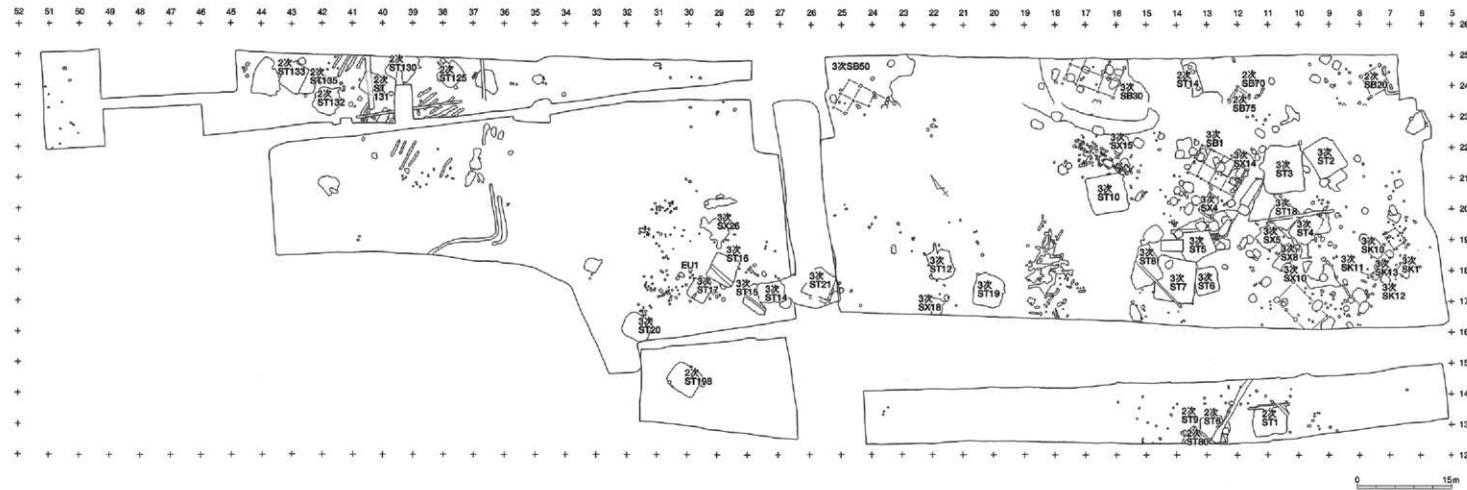
第1図 遺跡周辺地形分類図



- 1 萩原遺跡（古墳～中世） 2 前田遺跡（縄文） 3 沢田遺跡（弥生～平安） 4 谷柏遺跡（古墳～平安） 5 谷柏丁遺跡（縄文）
 6 石田前Y遺跡（弥生） 7 石田前遺跡（古墳） 8 花沙門遺跡（古墳） 9 花川遺跡（弥生） 10 石田遺跡（奈良・平安）
 11 高崎遺跡（奈良・平安） 12 谷柏古墳群（古墳） 13 谷柏丁遺跡（古墳～近世） 14 本沢川遺跡（縄文） 15 二位田遺跡（縄文～平安）
 16 寺裏遺跡（古墳～平安） 17 川落遺跡（古墳） 18 百目鬼遺跡（奈良・平安） 19 前明石遺跡（古墳） 20 萩合遺跡（古墳～平安）
 21 錦ヶ瀬遺跡（奈良・平安） 22 古原龜ノ内遺跡（縄文） 23 古原I遺跡（奈良・平安） 24 古原III遺跡（奈良・平安）
 25 吉原I遺跡（平安） 26 吉原II遺跡（奈良・平安） 27 片谷地遺跡（奈良・平安） 28 横手口遺跡（縄文・古墳～縄文）
 29 六塊遺跡（縄文） 30 松原遺跡（奈良・平安） 31 オサヤズ窯跡（奈良・平安） 32 秋葉山経塚（平安） 33 八ヶ森遺跡（旧石器）
 34 天神山遺跡（古墳） 35 長谷堂跡（室町） 36 谷地前遺跡（縄文） 37 百ヶ山遺跡（縄文～平安） 38 風穴遺跡（縄文～近世）
 39 丸山遺跡（縄文～弥生） 40 律坊遺跡（奈良・平安） 41 亂乃山寺院跡（奈良・平安） 42 牧倉館山船跡（戦国）
 43 菅沢山本陣跡（近世） 44 菅沢古墳群（古墳） 45 犬遺跡（縄文） 46 猿遺跡（縄文） 47 塙平田A・B遺跡（奈良・平安）
 48 曲轟山遺跡（戦国） 49 鋸波遺跡（奈良・平安） 50 成沢城跡（室町） 51 泉出城跡（室町） 52・53 山形城三ノ丸跡（近世）

第2図 遺跡位置図 (S=1:50,000)





第4回 遺構配置図

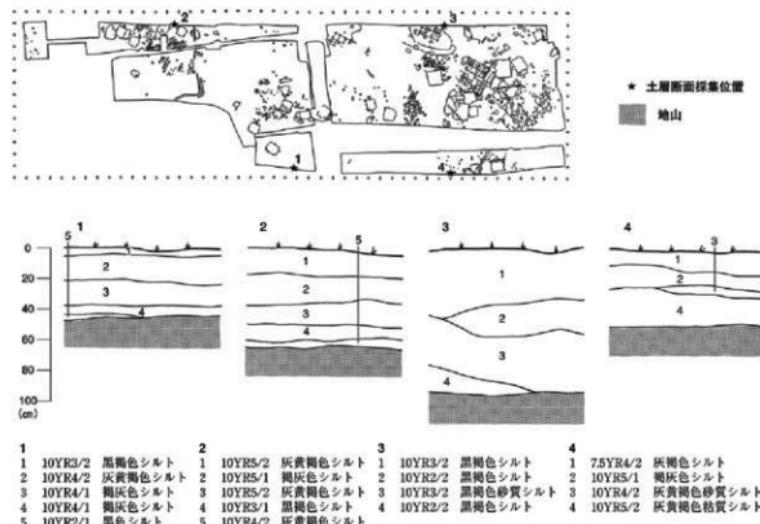
III 調査の概要

1 調査区と層序

萩原遺跡は、本沢川の氾濫源上に営まれた遺跡である（巻頭カラー写真）。ここに3次にわたりて調査が行われている（第3図）。2次調査では堀造部分、3次調査では本線部分が調査され、補足調査では、中央市道部分が調査された。

基本層序を見てみれば、遺跡の地山を成すのは礫層であった。その上位に、河川によって運ばれたと考えられる、礫層や砂層そして黒色土などの堆積があり、これが遺物包含層となり、遺構の基底面を形成していた。礫層は南北に見受けられるところがあり、河川が調査地区内部を走っていたときがあったことがわかった。また、この礫層は、ST 8住居跡を切っているため、古代よりも新しい時期に、河川が洪水などのために流路を替えたのであろうと考えられる。発掘区は、畑地あるいは果樹園として耕作されていたため、大部分が平坦になっているが、本来の微地形は平坦ではなかったものとおもわれる。

1～4として、調査区の基本層序を探集した（第5図）。基本層序の採集にあたって、地層の堆積が明確であった場所を特に選んだ。1～4の土層断面図によれば、標高の高い南側が北側よりも土壌の堆積が薄いことが分かる。調査面までは、深いところで1.0m浅いところで60cmほどの堆積が見受けられる。



第5図 基本層序

2 遺構と遺物の分布

萩原遺跡の2次調査と3次調査で、検出された遺構の種類は、堅穴住居跡・掘立柱建物跡・畝跡・埋設土器・堅穴状遺構・土坑・柱穴・性格不明土坑・その他の遺構・河川跡などである。時期的には、古墳時代から中世、一部近世に及ぶ。

次に簡単に各調査年次の内容について述べる。

第2次調査 第2次調査で検出された遺構は柱穴をはじめ、古墳時代前期の堅穴住居跡2棟、平安時代の堅穴住居跡10棟、掘立柱建物跡5棟、溝跡、土坑数基が確認された。この他に、古墳時代前期の土師器と平安時代の土師器と須恵器が出土している。

第3次調査 第3次調査で検出された遺構は、古墳時代前期の堅穴住居跡8棟、平安時代の堅穴住居跡8棟、掘立柱建物跡2棟、溝跡、畝跡、土坑数基が確認された。中世に属するものとしては、堅穴状遺構、土坑がある。この他に、古墳時代前期の土師器と平安時代の土師器と須恵器が出土している。中世に属する遺物としては、中世陶器、砥石、陶磁器、銭や釘などの金属製品がある。

補足調査では、平安時代の堅穴住居跡が1棟検出された。

古墳時代前期の遺構 古墳時代前期の遺構は発掘区の西側に集中している。古墳時代中期の遺構は古墳時代前期の遺構とはほぼ重複する位置で存在するが、20~12グリッドを中心として分布し、1棟のみが存在する。遺構は発掘区全域に分布しているわけではない(第6図)。

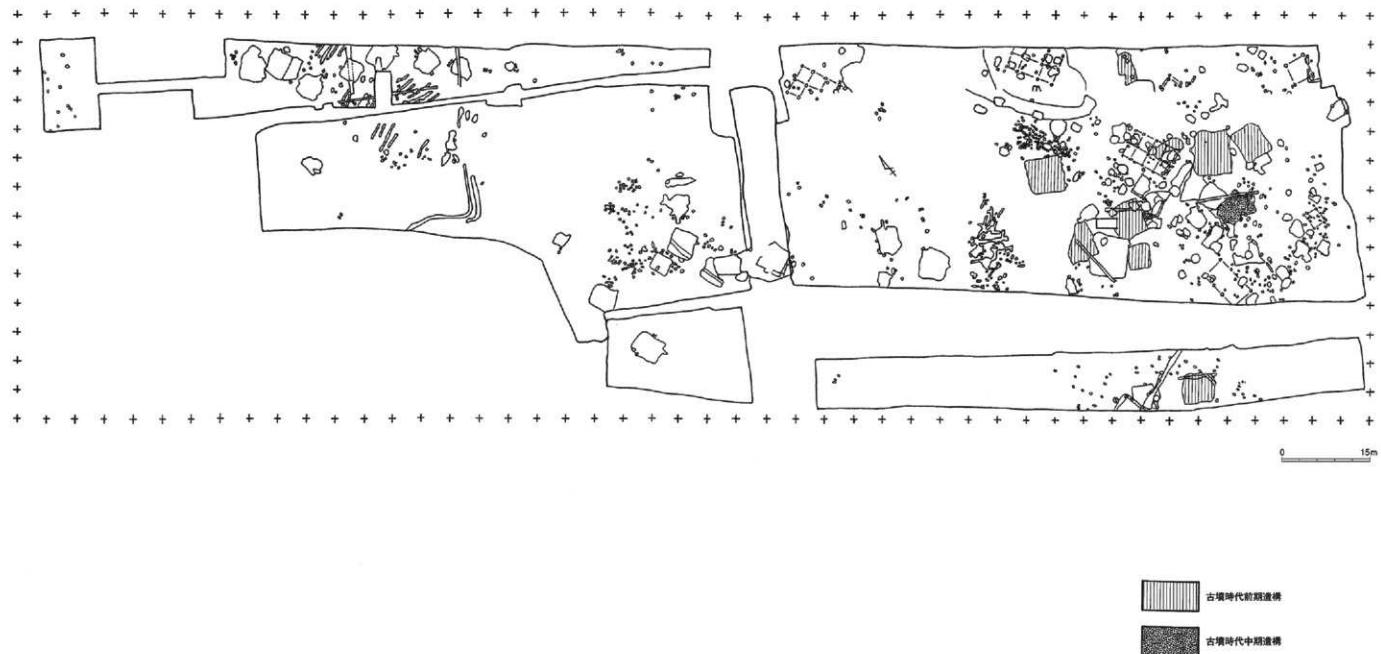
奈良・平安時代の古墳時代前期の遺構は、調査区のはば全域に分布している。掘立柱建物跡は、調査区の東側に集中して分布し、第3次調査区では、この時期にかかる掘立柱建物跡は検出することができなかった。このほかの遺構としては、19~30グリッド付近に、埋設土器が存在し、18~19~18~19グリッドには畝跡が存在する(第7図)。

中世の遺構 中世の遺構は、調査区の西側に集中している。この分布は、ほぼ古墳時代前期の遺構の分布と重複する。遺構は、掘立柱建物跡と方形堅穴状遺構から構成されている(第8図)。これらの遺構は、ほぼ軸線をそろえているため、何らかの立地に対する規制が存在したものであろう。こうした規制は、条理地割や、道路などの地理的な要因か、扇状地上の遺跡であるために、地理的な規制が発達したことなのであろうと考えられる。

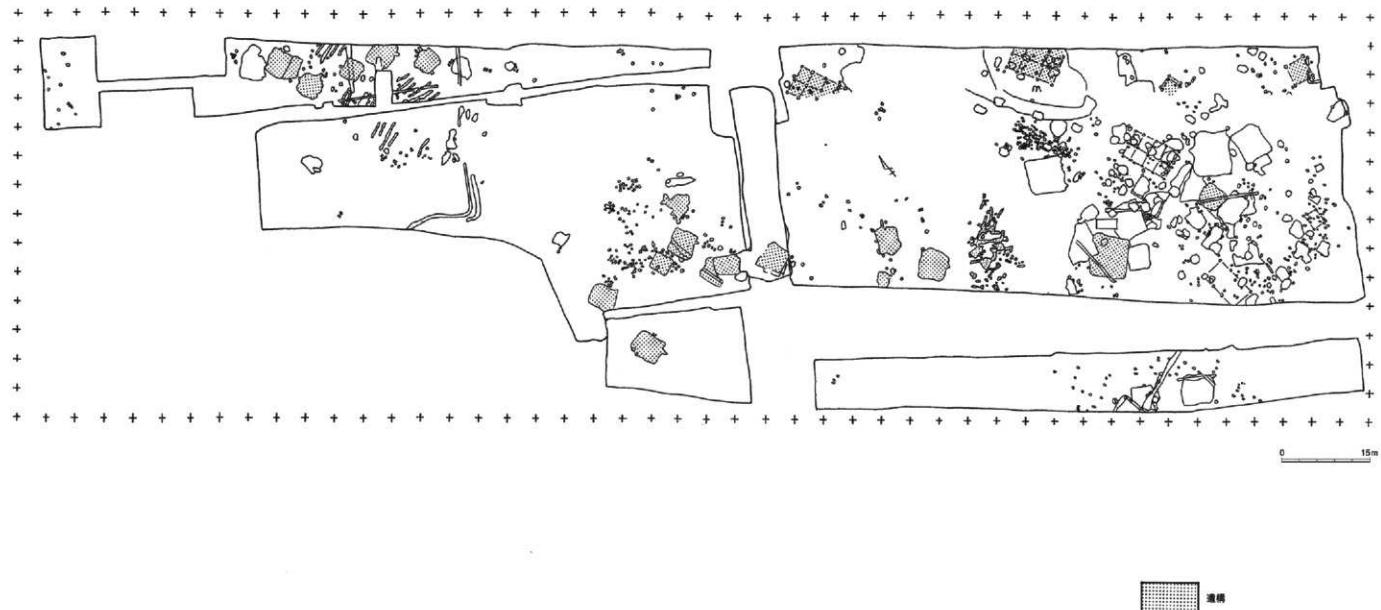
全体的な、遺物と遺構の集中から見ると、調査区のより西側と東側に遺構は密集している傾向があり、14~25~20~27グリッドでは、分布は薄い傾向が強い。これは、この地域は砂礫層が発達しており、河道であった可能性が高い。

こうしたことから、遺構の分布は希薄になるものと考えられる。また、14~25~16~18グリッドにかけても、河道の痕跡を伺うことができ、この河道によって、18~19~15~16グリッドに立地する、古墳時代前期のS T18住居跡は侵食を受けている。こうしたことからすれば、河道は幾度か移動を繰り返したものであろうと考えられる。

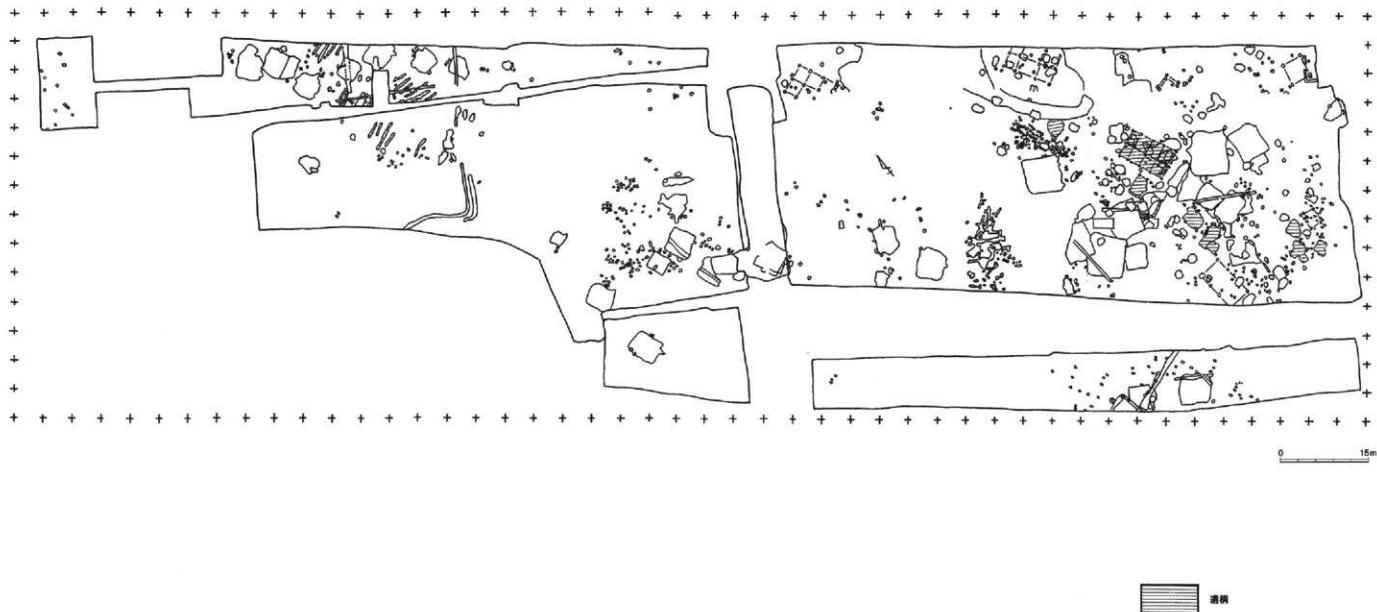
北東側に堅穴住居跡が存在していることから、遺跡はさらに東側につながる可能性が高い。今回の調査で検出された遺構や遺物は、それで完結するものではなく、あくまでも遺跡の一部の調査にあたることを、確認しておきたい。



第6図 古墳時代前期・中期遺構分布図



第7図 奈良・平安時代道橋分布図



第8図 中世道構分布図

IV 検出された遺構

萩原遺跡から検出された遺構について、次に述べることとする。萩原遺跡からは、古墳時代前期、中期、奈良・平安時代、中世の各時期の遺構が検出された。ここで図化できた遺構は、古墳時代前期が8遺構、古墳時代中期が1遺構、奈良・平安時代が29遺構であり、中世が11遺構である。合計で49遺構である。

1 古墳時代前期の遺構

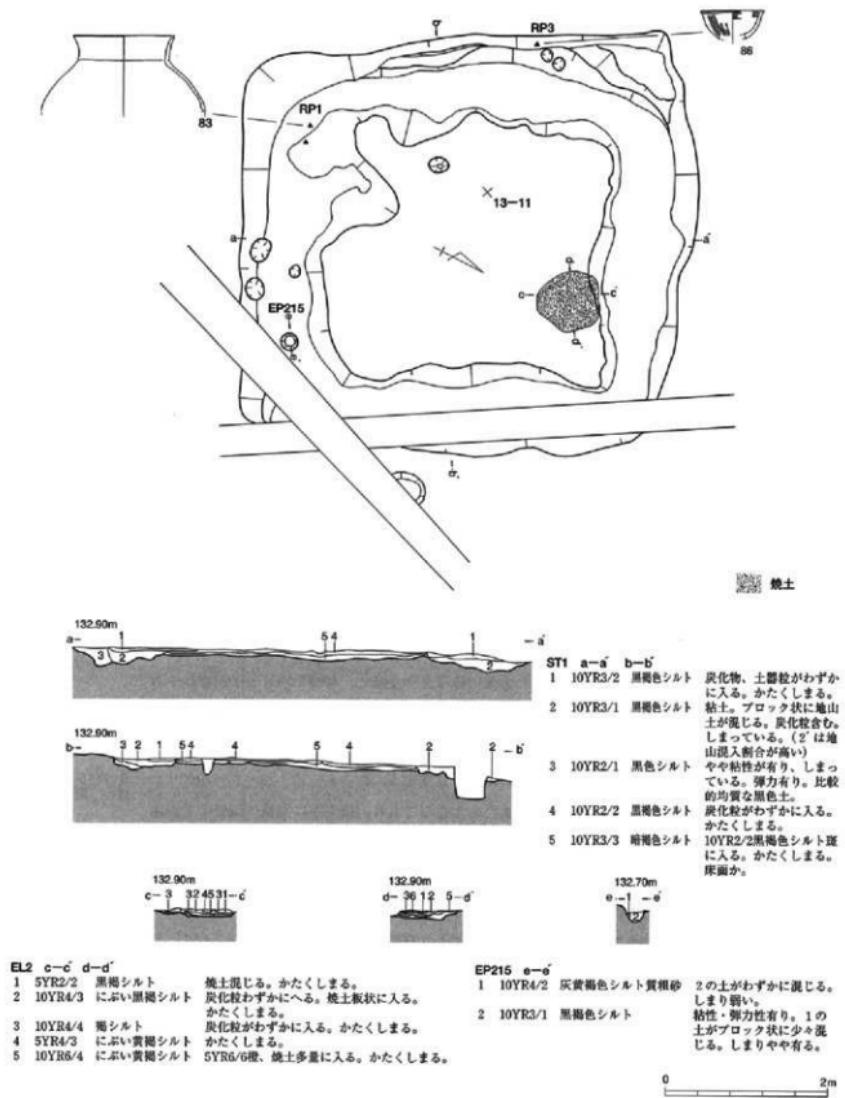
・古墳時代前期の住居跡

2次S T 1住居跡 (第9図) 調査区のA区に位置する、13・11～12・14・11～12グリッドで検出された。ここは、発掘区の南側にあたるところであり、高速道路の側道部分、調査区の南端にあたる。検出された竪穴住居跡の規模については次のようにある。平面形はやや長方形を呈するものと思われる。長軸は約5.5m、短軸は約5.2m、検出面からの深さは約7～10cmであり比較的浅い。覆土の様子は自然堆積であり2層に分けることができる。壁の立ち上がりは割合に急であり、床面は波打っている。床面にはピットが1つしか存在せず、しかも浅い。主柱穴を構成するものは検出することができなかつたと考えられる。床面には、壁側に寄って焼土が存在し、80cmほどの円形を呈する。焼土はやや深い彫り込みを持っており、5層程度に堆積を分けることができる。また、壁際には巾1m程の溝がめぐる。箱掘り状を呈し、立ち上がりは急である。これらの性格は不明である。この溝に伴うような形で、6つの小ピットが存在するが、いずれも掘り方は浅く明確なものではない。出土遺物としては高杯、壺の各器種がある(第66図)。

3次S T 2住居跡 (第10・11図) 調査区の南区に位置する、22・9～10・23・9～10グリッドで検出された。ここは、発掘区の西側にあたるところであり、緩やかに東側に傾斜する斜面になっている。このためか、調査の当初の粗掘りにおいて遺構上面が擾乱を受けていた。付近には古墳時代前期竪穴住居跡が集中して存在している。検出された竪穴住居跡の規模については次になる。平面形は南北に長い長方形を呈する、長軸は約5.9m、短軸は約5.0m、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子は1層であり自然堆積である。壁の立ち上がりは急であり、床面は割合に平坦である。床面には10数個のピットが存在する。このうちE P 1～4は、主柱穴を構成するものと考えられる。これ以外のピットは深いものが多く不明である。床面には、2つの80cm程度の楕円形を呈する土坑が存在するが、これらの性格としては、貯蔵穴と考えられる。中央より壁際には焼土があり、炉であると考えられる。S T 2竪穴住居跡の南側に存在する遺構は、検討の結果、中世に所属する遺構であると考えられ、S T 2竪穴住居跡との直接的な関係はないものと考えられる。出土遺物としては壺、壺、小型壺の各器種がある(第66図)。

2次S T 1
住居跡

3次S T 2
住居跡



67図)。出土位置は、竪穴住居跡の東南隅にある土坑からであり、集中しており、一括性が高いものと思われる。

3次S T 3住居跡 (第12・13図) 調査区の南区に位置する、21~23・10~13グリッドで検出された。ここは、発掘区の南東にあたるところであり、付近には古墳時代前期の住居跡が集中する。検出された竪穴住居跡の規模については次のようなになる。平面形は略方形を呈する、長軸は約7.5m、短軸は約6.2m、検出面からの深さは約10cmである。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは急であり、床面中央部は平坦である。床面には2個のピットが存在する。主柱穴を構成するものとは考えられない。これ以外のピットははっきりしないのである。床面には、中央部よりやや壁側に寄って焼土が存在する。1.2m×1.0mほどの楕円形を呈し、焼土は盛り上がって堆積していた。これらの性格としては地床炉であると考えられる。地床炉に近接して、方形の土坑がある。規模は長軸が1.0m、短軸が60cmほどの方形をなすものであり、時期的には中世に属するものと考えられる。明確な貯蔵穴と考えられる遺構は存在しない。竪穴住居跡の壁側の立ち上がり付近に、本住居跡も周溝が巡っている。規模は巾が70cmから1.0mであり、深さは10cm程度である。遺物は床面と壁際の周溝覆土から出土している。出土遺物としては古墳時代前期の壺・甕・壺などがある、一部には須恵器坏がある(第67・68図)。須恵器の坏の時代は、明らかに古代であり時期的に差がある。出土遺物の様相から、本竪穴住居跡は古墳時代前期である。

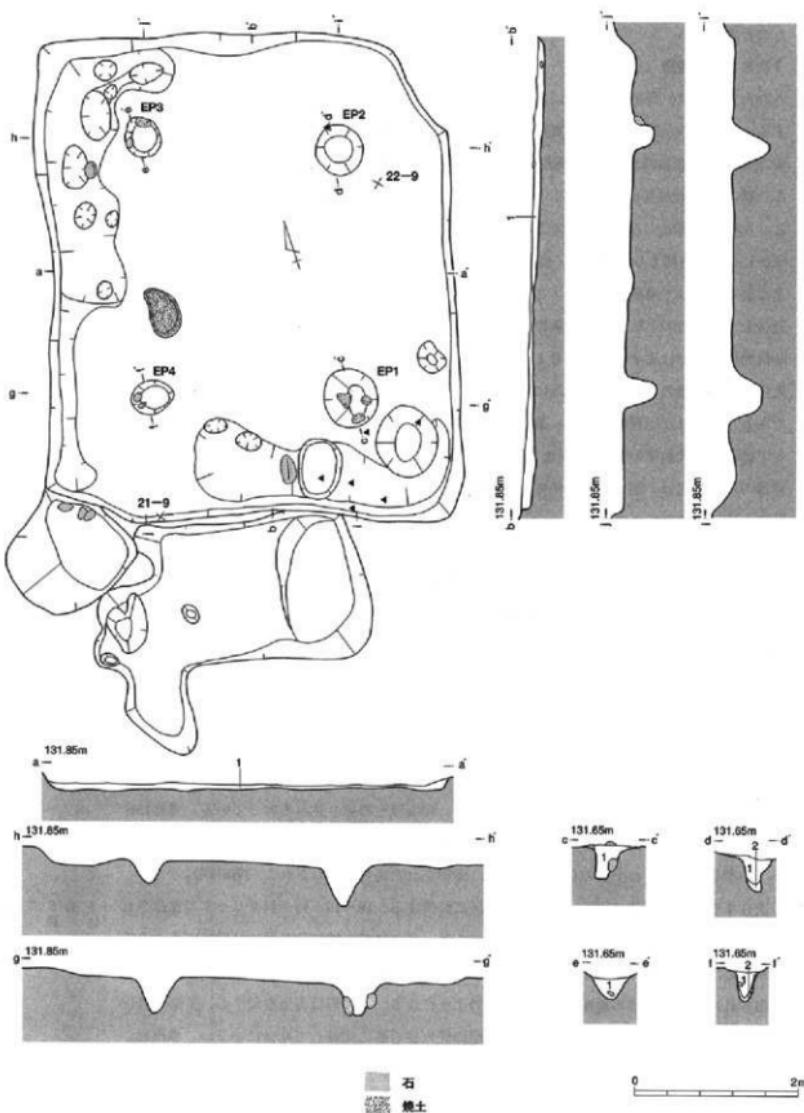
3次S T 3 住居跡

3次S T 5住居跡 (第14・15図) 調査区の南区に位置する、19~20・13~15グリッドで検出された。ここは、発掘区の南側にあたるところであり、付近には古墳時代前期の竪穴住居跡集中してある。検出された竪穴住居跡の規模については次のようなになる。平面形は略方形を呈する、長軸は約6.0m、短軸は約5.5m、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面には8個のピットが存在するが、いずれも主柱穴を構成するものとは考えられないと思われる。床面には、E K 1とE K 3の土坑が存在するが、これらの性格としては貯蔵穴と考えられる。ほかの古墳時代前期の住居跡で確認されたような周溝はここでは確認されなかった。地床炉と考えられる焼土がE L 1~3の3カ所確認された。いずれも平坦であるが、10cmほどの掘り込みを持っている。遺物は床面に接している傾向が強く、床面上から出土するものが多かった。出土遺物としては壺・甕・壺・小型壺・てづくね土器の各器種がある。赤影された高杯が注目される(第69図)。

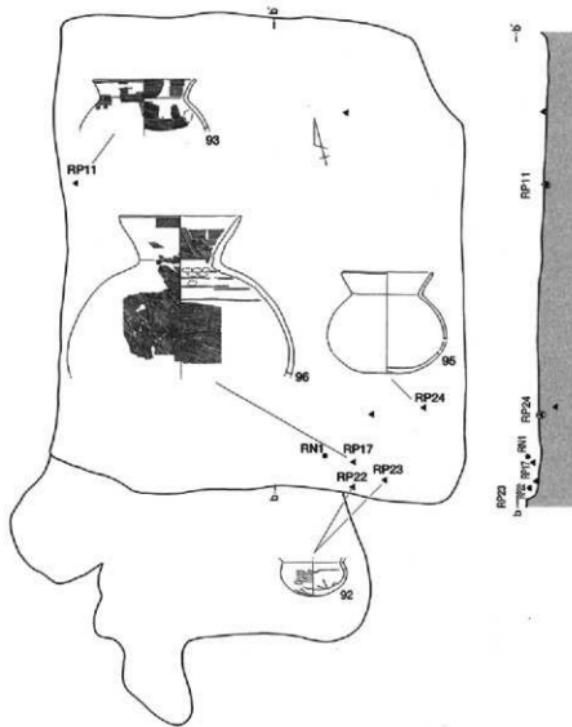
3次S T 5 住居跡

3次S T 6住居跡 (第16図) 調査区の南区に位置する、18~19・13~14グリッドで検出された。ここは、発掘区の東側にあたるところであり、付近には古墳時代前期の住居跡であるS T 15がある。北側にはS T 7竪穴住居跡があり、この住居跡により、北側の一部が切られている。検出された竪穴住居跡の規模については次のようなになる。平面形は方形を呈する、長軸は約4.0m、短軸は約3.7mであり、他の古墳時代前期の竪穴住居跡に比較して非常に小さい。検出面からの深さは約15cmである。覆土の様子は炭化材が存在し、焼失家屋である。炭化材について残の良い部分5点を採集し樹種分析を実施したところ、全てがクリ材であった(巻末付図参照)。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面には数個のピットが存在する。主柱穴を

3次S T 6 住居跡



第10図 3次ST 2 (1) 住居跡



ST2 a-a' b-b'

1 10YR2/2 黒褐色砂質土 粗砂・礫多量混入。

EP1 c-c' 1 10YR2/1 黒色粘質土 10YR5/6明黄褐色粗砂・礫多量混入。上部に大きな石混入。

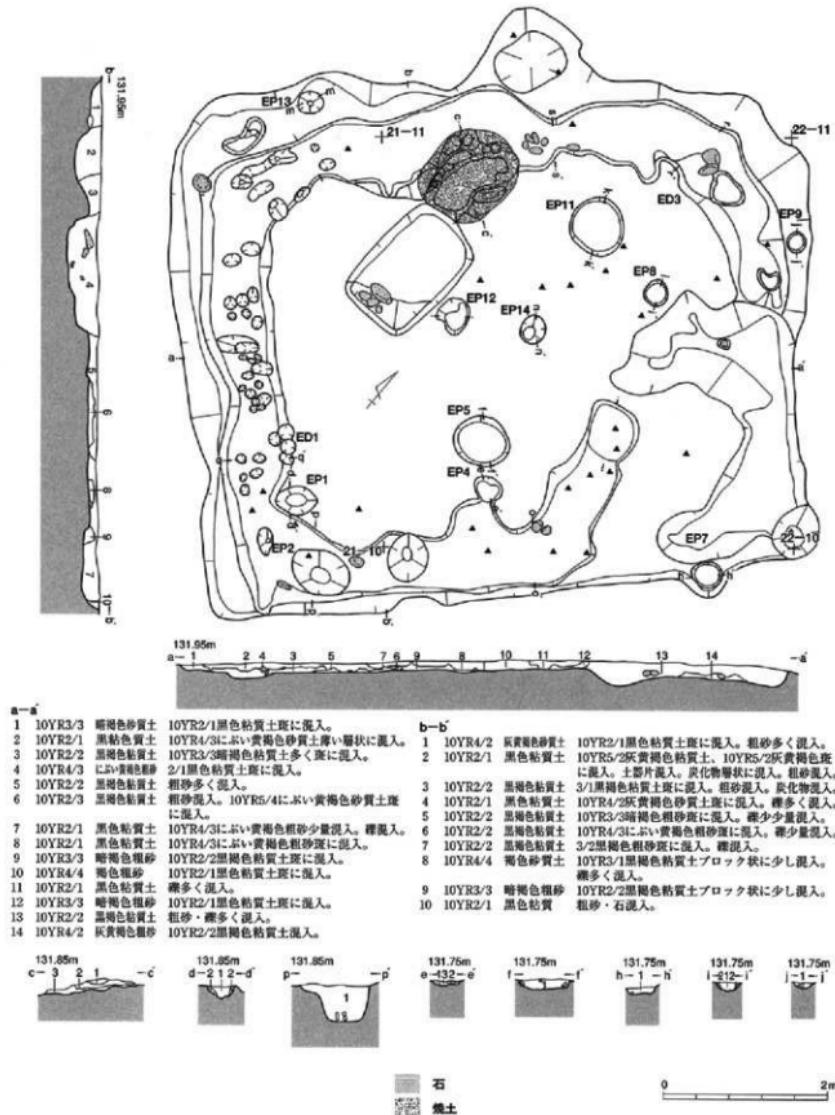
EP2 d-d' 1 10YR2/1 黑色粘質土 10YR5/6黄褐色粗砂均一に混入。上部に礫混入。
2 10YR2/2 黒色粘粗砂

EP3 e-e' 1 10YR2/1 黒色粘質土 10YR4/4褐粗砂多く混入。10YR5/4にびい黄褐色ブロック状に一部大きく混入。礫多く混入。

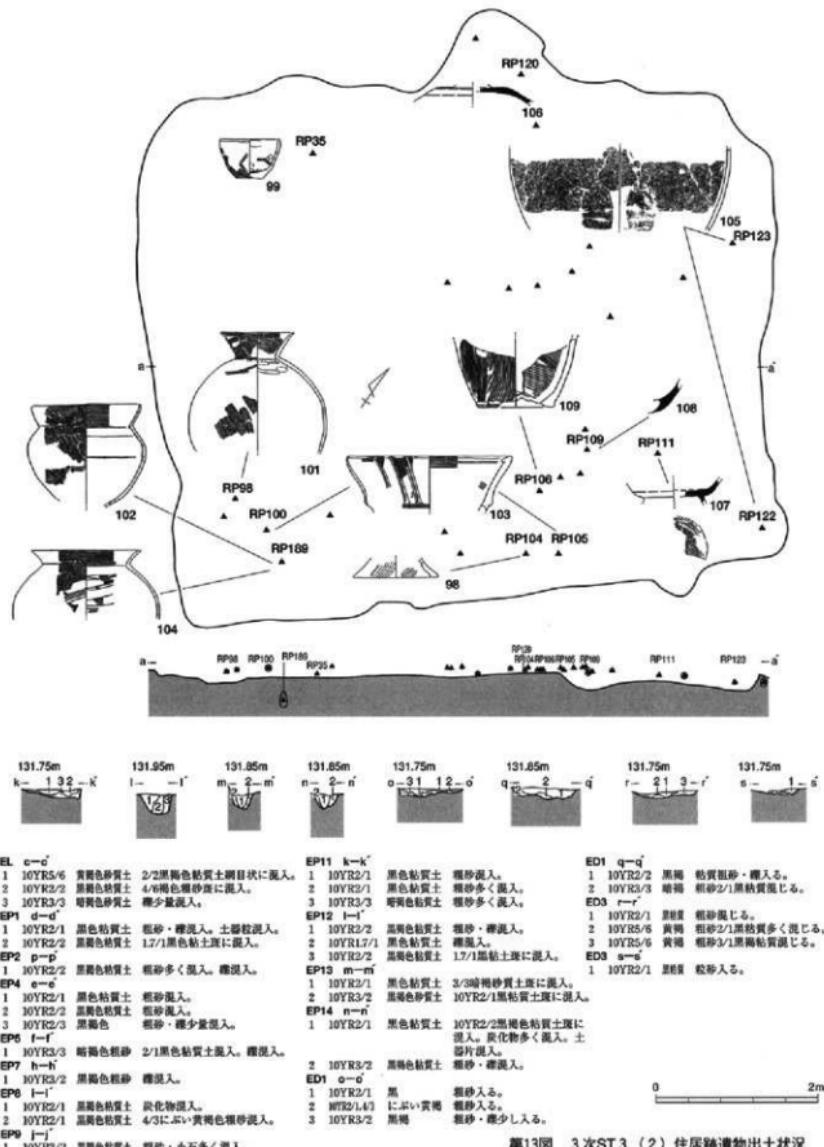
EP4 f-f' 1 10YR2/1 黒色粘質土 5/6黄褐色粗砂均一に混入。礫混入。
2 10YR2/2 黑褐色粘質土 4/6褐色粗砂多く混入。礫少々混入。

0 2m

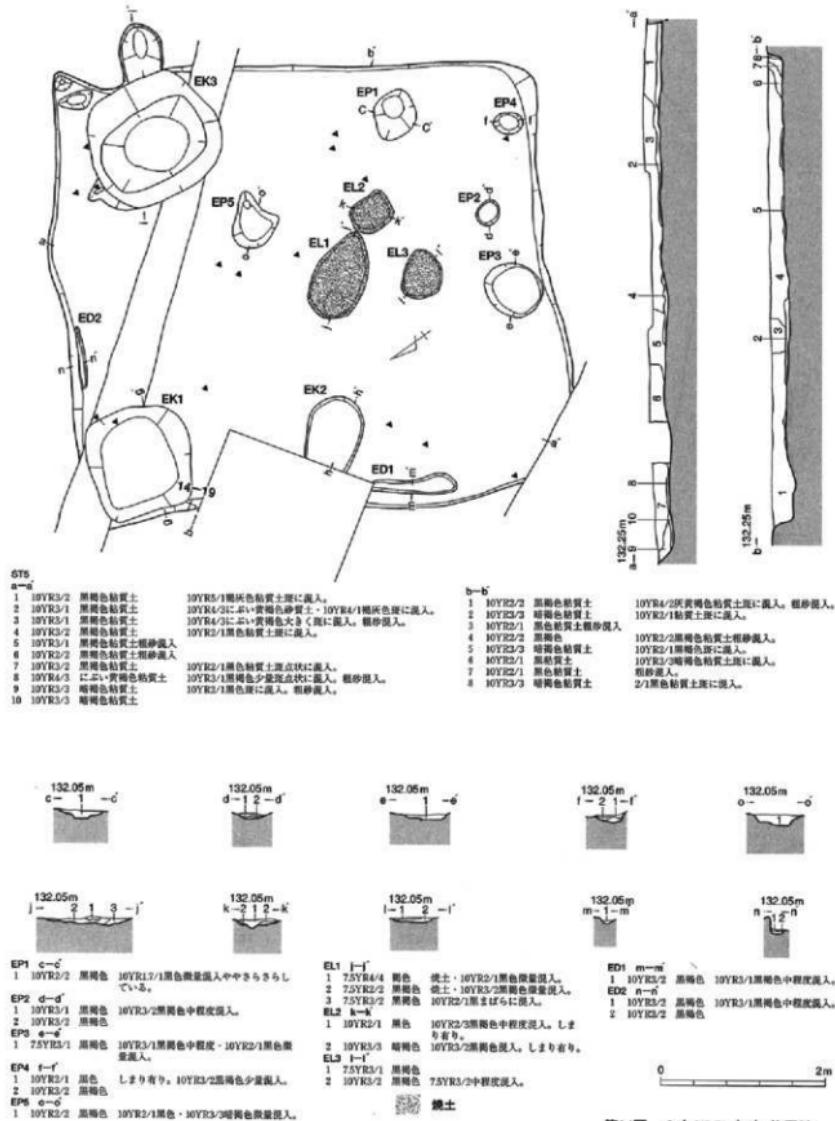
第11図 3次ST2 (2) 住居跡遺物出土状況



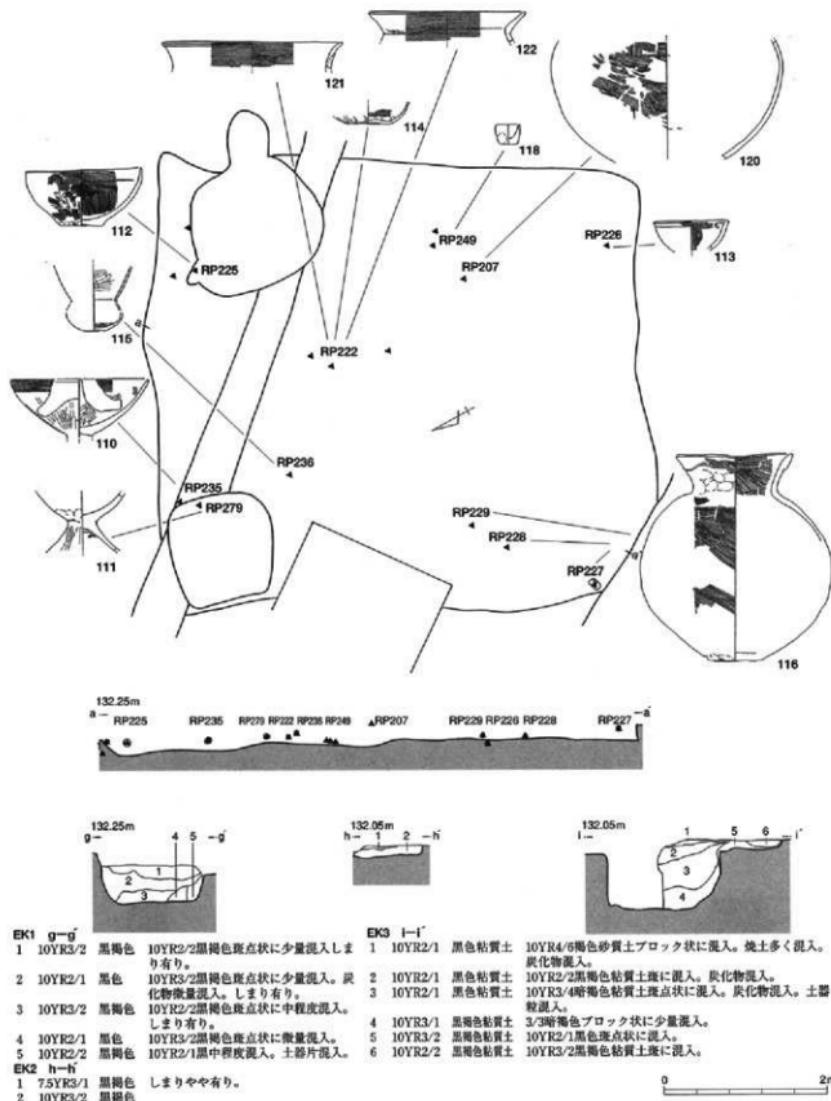
第12図 3次ST3 (1) 住居跡



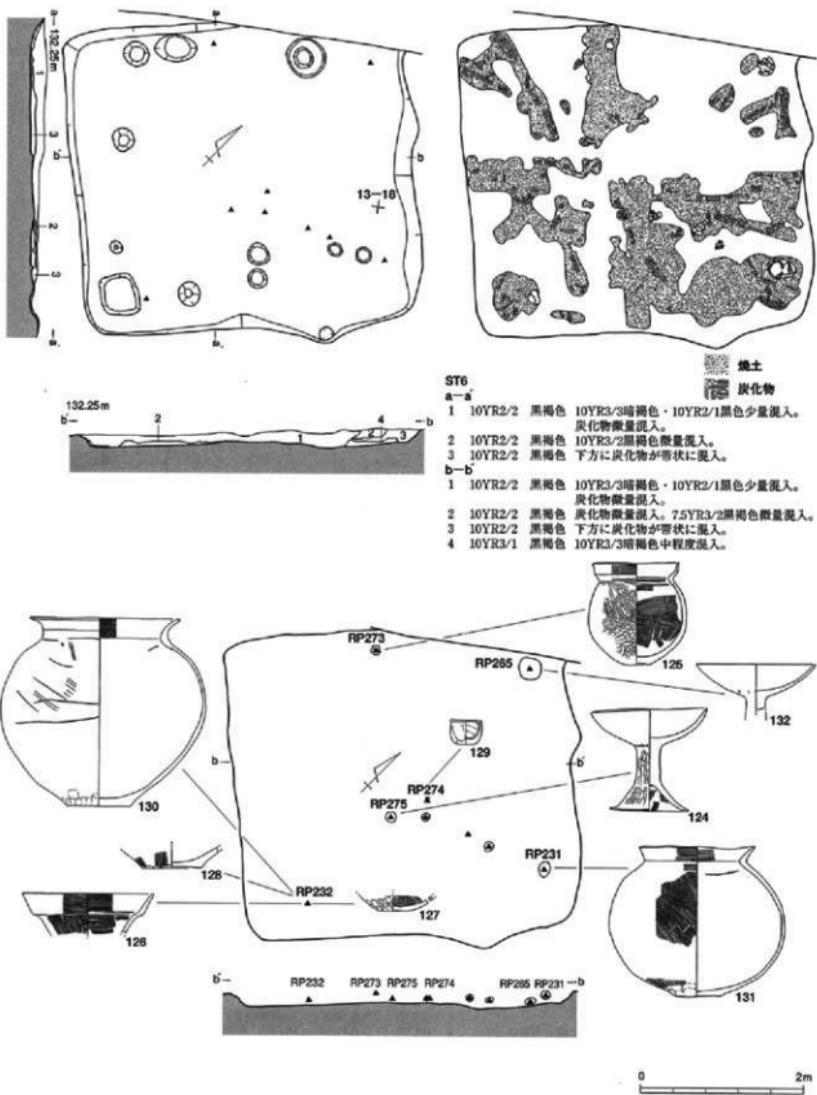
第13図 3次ST3(2)住居跡遺物出土状況



第14図 3次ST5 (1) 住居跡



第15図 3次ST 5 (2) 住居跡遺物出土状況



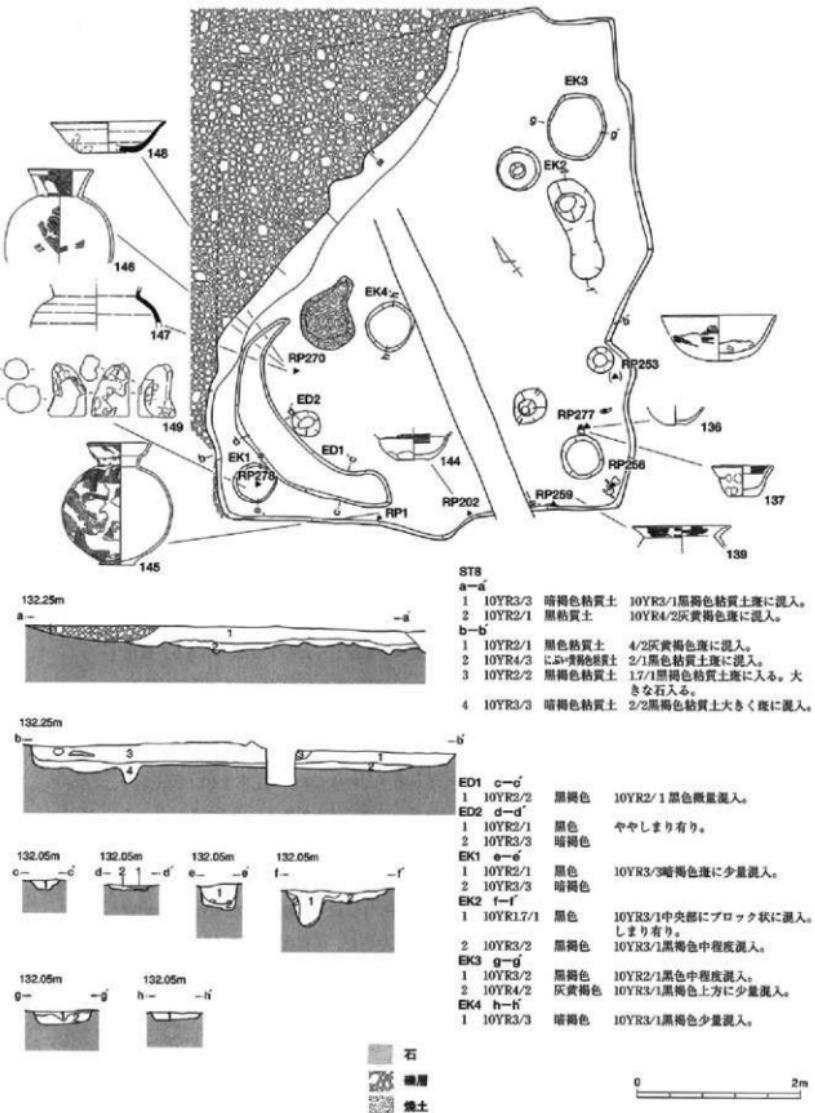
構成するものは認められなかった。床面には、数個の土坑が存在するが、これらの性格としてはやや浅いながらも貯蔵穴と考えられる。出土遺物としては高杯・壺・壺の各器種がある(第70図)。この住居跡の理化学的年代測定の結果は、AMS法で $1,770 \pm 35$ であった(付録参照)。この年代は3世紀の前半に当り、考古遺物の年代観よりは古く算定されている。S T 6 壁穴住居跡は焼失家屋であり、炭化した柱の上には、赤色化した土が被っていたことから、土屋根であったと思われる。

3次S T 8住居跡(第17図) 調査区の南区に位置する、18~19・15~16グリッドで検出された。ここは、発掘区の東側にあたるところであり、付近には奈良時代の壁穴住居跡であるS T 7があり、一部をS T 7によって切られていた。このためか、遺物には奈良・平安時代のものが一部混在する。また、北側は河川に依っても擾乱されている。検出された壁穴住居跡の規模については次のような。平面形は方形を呈する、長軸は約6.1m、短軸は約5.3m、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面には数個のビットが存在する。このうちの3個は、主柱穴を構成するものと考えられる。これ以外のビットは不明である。床面には壁際に寄って焼土が存在するが、この性格は地床炉と考えられる。E K 1は貯蔵穴と考えられる。ここからは、山形県内では類例に乏しい大型器台が出土した。大型器台の類例としては、山形県内では山形市の山形西高遺跡から2個組で出土しているものがあるに過ぎない。この他の出土遺物としては壺・壺・壺の各器種がある(第71図)。

3次S T 10住居跡(第18・19・20図) 調査区の南区に位置する、20~22・16~17グリッドで検出された。ここは、発掘区のやや下がったところにあたるところであり、一段低い部分である。付近には古墳時代前期の遺構群は少なく中世の遺構が集中して存在する部分である。検出された壁穴住居跡の規模については次のような。平面形は正方形を呈する、長軸は約6.2m、短軸は約6.1mであり、ほとんど正方形である。検出面からの深さは約15cm~20cmである。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面にはたくさんのビットが存在し、底面はハチの巣状を呈している。このうちE P 7、E P 10、E K 3、E K 11は、主柱穴を構成するものと考えられる。E K 3の中には石が落とし込まれていた。これ以外のビットの性格は不明である。床面には、いくつかの土坑が存在するが、これらの性格としては貯蔵穴などが考えられる。このうち、E K 2、E K 1は貯蔵穴と考えられる。このうちE K 2は壁穴住居跡のコーナー付近に設けられ、中からは倒立状態壺が検出され、その周囲には4個のづくね土器を取り囲むようにして置かれていた。床面は平らであるが、壁穴住居跡の東側の辺と西側の辺には、溝が延びている。溝の底面は凹凸が激しく、いくつかの小ビットが連続するような構成をとっている。これら的小ビットの性格は不明であるが、家屋の壁の構築物の可能性も考えられる。また、床面には小児頭大の石が2個据えられていた。本壁穴住居跡は焼失家屋であり、柱材樹種の分析はコナラ属クヌギ節とカエデ属であった。またAMS法による年代測定では $1850 \text{年} \pm 30 \text{年}$ と算定され、2世紀代の年代であった。これは考古遺物の年代と齟齬をきたしている(付録参照)。出土遺物としては、壺・づくね土器の各器種が

3次S T 8
住居跡

3次S T 10
住居跡



第17図 3次ST 8 住居跡遺物出土状況



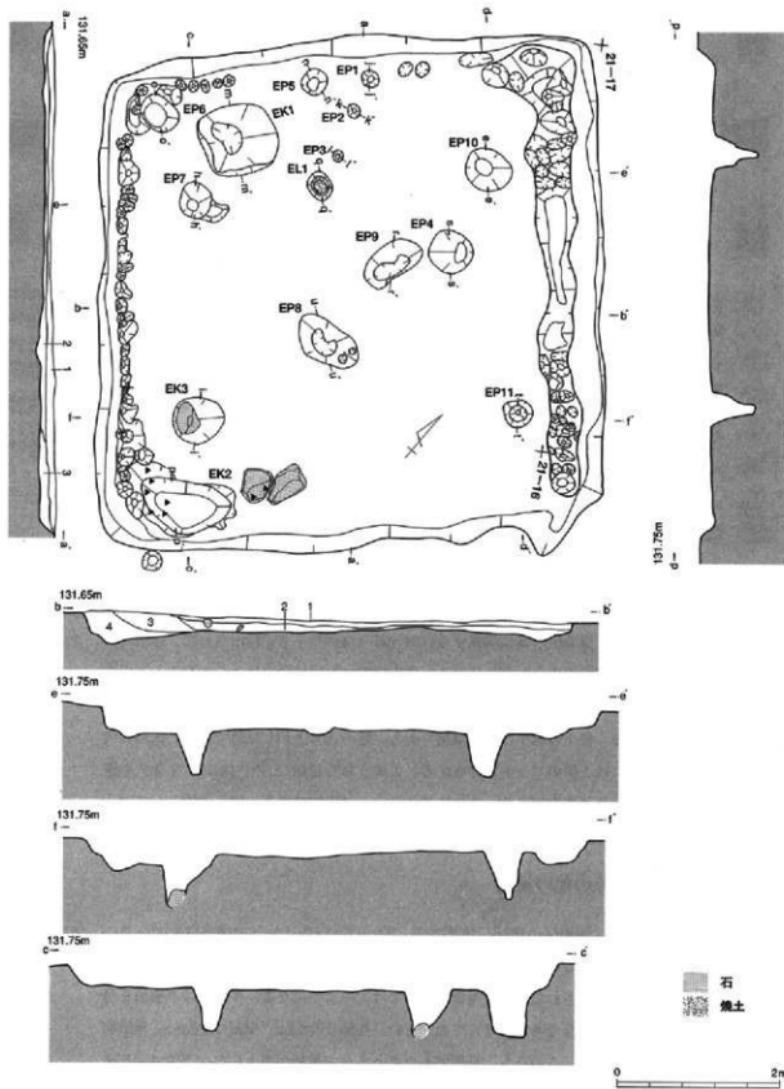
第18図 3次ST10(1)住居跡

ある（第72図）。

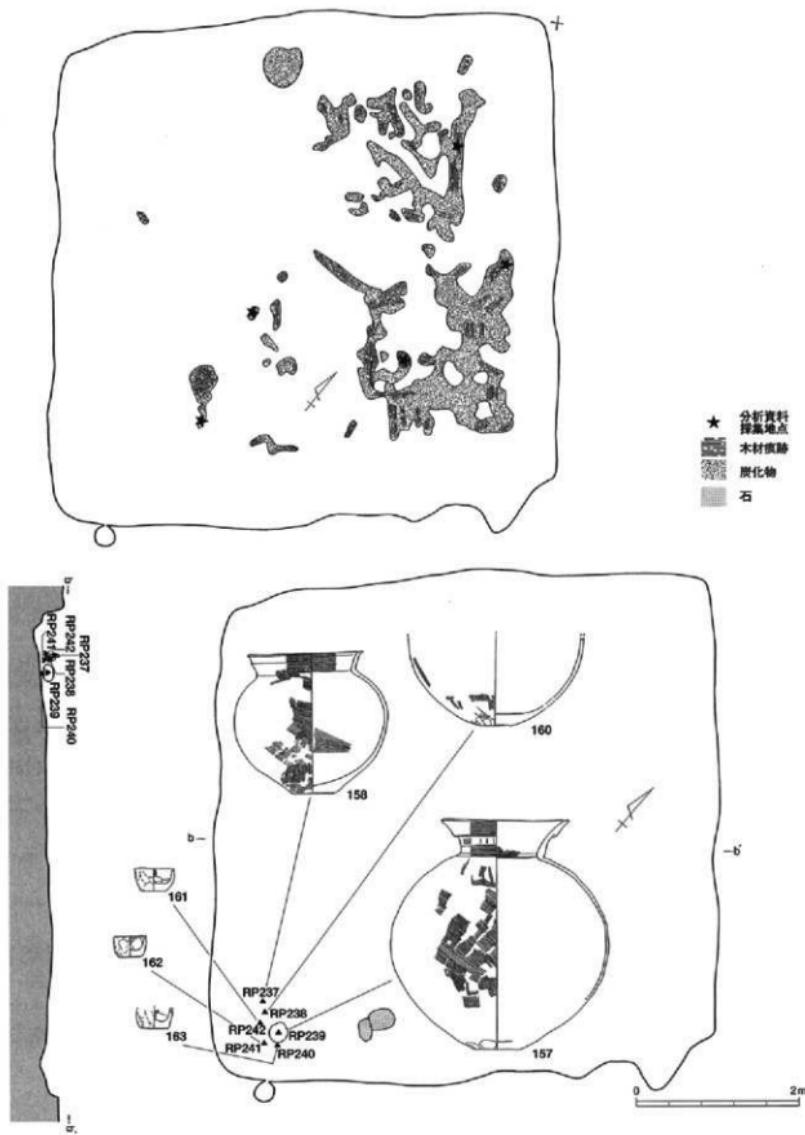
2次S T14(第21図) 調査区の区に位置する、24~25-14グリッドで検出された。検出されたのは堅穴住居跡の一部であろうと考えられる。残存規模については次のような。平面形はおそらく方形あるいは長方形を呈する、残存長軸は約5.5m、残存短軸は約2.6m、検出面からの深さは約5cmである。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは急であり、床面の残存は良くない。床面には3個のビットが存在する。このうちE K182とE P184は、主柱穴を構成するものと考えられる可能性がある。これ以外のビットは不明である。出土遺物としては小型壺、甕の各器種がある(第79図)。

・古墳時代前期のその他の遺構

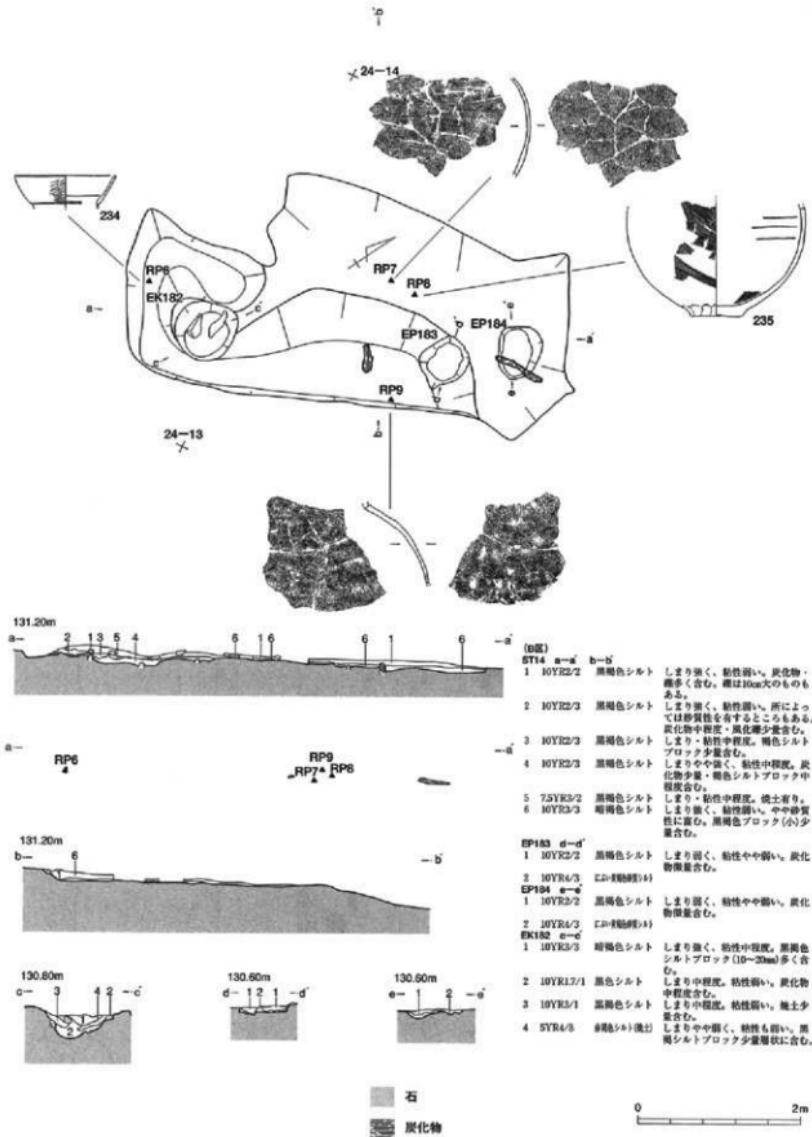
3次S X14(第22図) 調査区の南区に位置する、22-12~13グリッドで検出された。ここは、発掘区の南にあたるところであり、やや低くなっている。付近には古墳時代前期の住居跡であるS T 3がある。検出された遺構の規模については次のような。平面形は不整形を呈する。いくつかの土坑の集合であると考えておきたい。長軸は約6.3m、短軸は約2.0m、検出面からの深さは約20cmである。このうち、東側隅からまとまって遺物が出土した。遺物はすり鉢状に掘られた土坑の中に納められていた。同型同大の小型の土坑が隣接して存在するが、この二つの土坑とその周辺から遺物が多く出土している。とくに右側の土坑からは出土量が多い。



第19図 3次ST10(2)住居跡

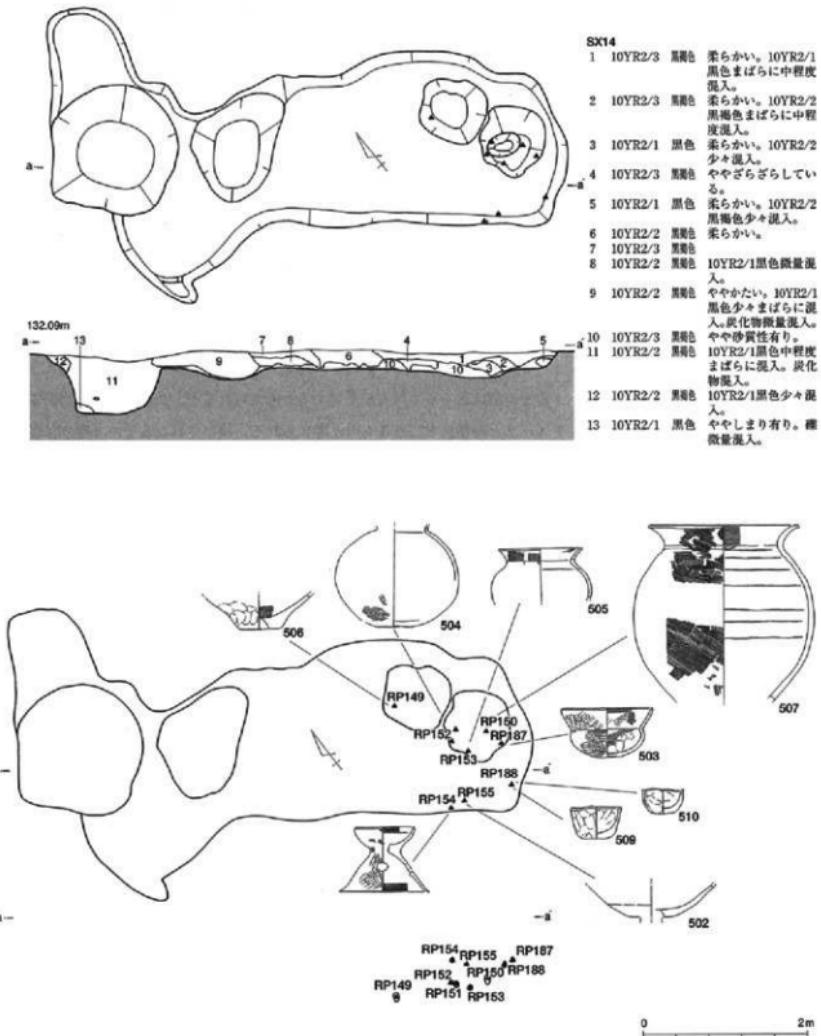


第20図 3次ST10(3)住居跡遺物出土状況



第21図 2次ST14住居跡遺物出土状況

+



第22図 3次SX14遺物出土状況

覆土の様子は自然堆積であると考えられる。出土遺物としては壺、甕、小型壺、器台、高坏、てづくね土器の各器種がある（第102図）。遺物は以上の土坑の周辺からのみ出土し、その他の部分からは出土してはいない。図の右側には、円形を呈する直径1.5mのやや深い土坑が存在するが、遺物はなかった。

2 古墳時代中期の遺構

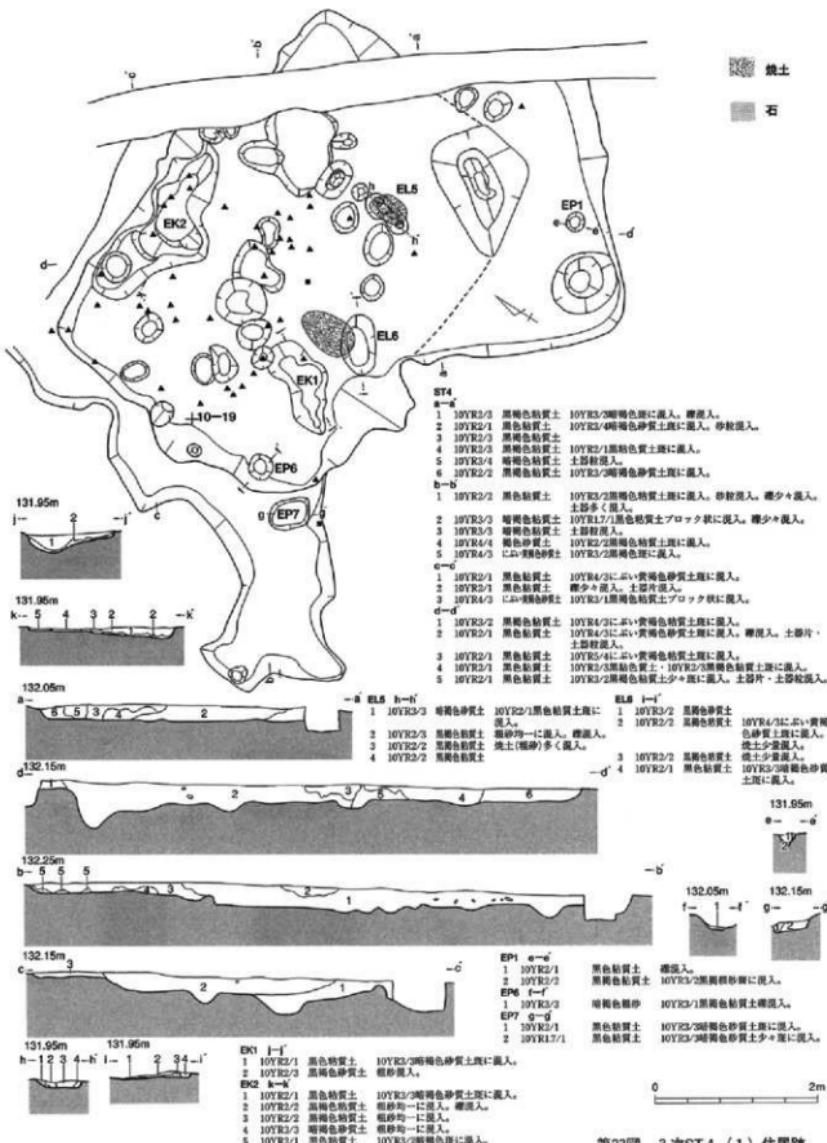
・古墳時代中期の住居跡

3次 S T 4 住居跡

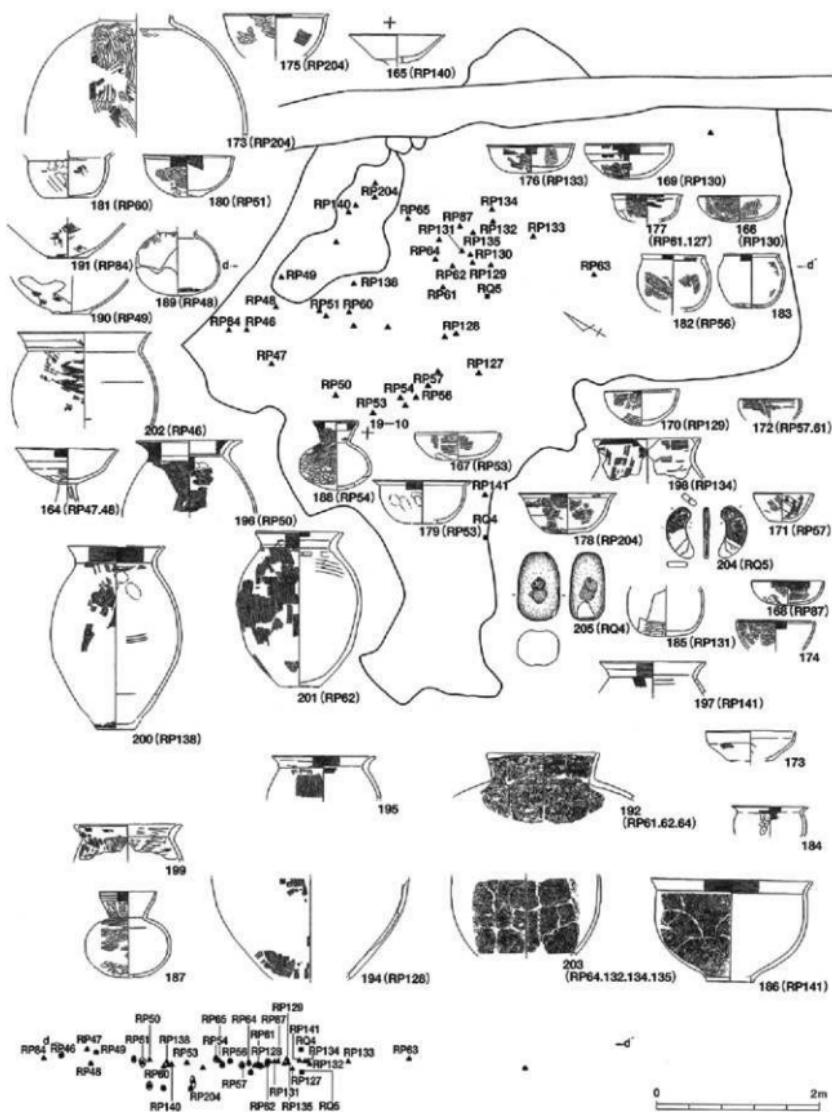
3次 S T 4住居跡（第23・24図） 調査区の南区に位置する、19～21-9～11グリッドで検出された。ここは、発掘区のほぼ中央の平坦面にあたるところであり、付近には古墳時代前期の竪穴住居跡と平安時代の竪穴住居跡がある。古墳時代中期の竪穴住居跡または関連時期の遺構はこの遺構だけである。ここで検出された竪穴住居跡は切り合が認められ、それぞれをS T 4-1、4-2とした。S T 4-2がS T 4-1を切っており、S T 4-2が新しい。遺物のほとんどはS T 4-2からの出土である。検出された竪穴住居跡の規模については次のような。S T 4-1の平面形はおそらく長方形を呈すると考えられるが、長軸短軸戸も不明である。おそらくS T 4-2と同型同大になるものと考えられる。検出されたS T-2竪穴住居跡の規模については次のような。平面形は長方形を呈する、長軸は約5.5m、短軸は約3.7m、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子はおそらく人為堆積であり、埋め戻されたものであろう。壁の立ち上がりは急であり、床面は凹凸があるが、全体的に平坦である。床面には数個のピットが存在する。このうち図の上方東南の土坑は貯蔵穴であると考えられる。主柱穴を構成するものと考えられるピットは不明であった。床面には、E K 2などの土坑が存在するが、これらの性格としては貯蔵穴と考えられる。特にE K 2の内部には甕の破片が納められていた、床面には、2カ所の地床炉が認められ、掘り込んだ土坑の中にも焼土が堆積していた。

石製模造品

出土遺物としては、甕・壺・壷・高坏・小型壺・石製模造品の各器種がある（第73～76図）。遺物の出土状況としては、S T 4-2竪穴住居跡の北側に集中して存在していた。床面から土とともに密集してい堆積している状況であり、遺物を避けながら発掘調査を実施していくのは、困難であるほどであった。炭化物や焼土とともに混じっている部分もあった。また、出土した遺物は、完形品は少なく、ほとんどが破損品であった。中には、復元したところほとんど完形になったものもあったので、完形品も含まれるのだろうが、注目すべき傾向である。また、一点のみであるが石製模造品が出土した、床面付近からの出土であった。山形県内では、こうした石製模造品の出土は少ない。



第23図 3次ST4 (1) 住居跡



第24図 3次ST4(2)住居跡遺物出土状況

3 奈良・平安時代の遺構

・奈良・平安時代の住居跡

3次S T 7住居跡 (第25・26図) 調査区の南区に位置する、18~19-14~15グリッドで検出された。ここは、発掘区の一番高い部分にあたるところであり、付近には古墳時代前期の住居跡が集中している。検出された竪穴住居跡の規模については次のようになる。平面形は略方形を呈する、長軸は約6.8m、短軸は約6.6m、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面には数個のピットが存在する。このうちの数個は、主柱穴を構成するものと考えられるが柱穴を構成する全部を確認することはできなかった。これ以外のピットの性格は不明である。床面には、数条の溝が存在するが、これらの性格も不明である。西側と南側の壁に沿って溝が巡る。底面は一定しない。出土遺物としては須恵器壺、土師器壺・壺・壺の各器種がある(第72図)。一部古墳時代前期の遺物が混入する。

3次S T 7
住居跡

3次S T 12住居跡 (第27・28図) 調査区の南区に位置する、18~19-22~23グリッドで検出された。ここは、発掘区のやや低いところにあたり、付近には平安時代の竪穴住居跡と竪跡がある。検出された竪穴住居跡の規模については次のようになる。平面形は長方形を呈する、これに煙道が取り付いている。長軸は約4.8m、短軸は約3.5m、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは緩やかであり、床面は平坦である。床面には1個の大きな土坑が存在する。この土坑はおそらく張り床の下に存在したものであろうと考えられる。ピットは数個検出されたが、主柱穴を構成すると考えられるものは検出することができなかった。煙道は北東方向を向き、長さ1.5m、巾は30cmであった。竪穴住居跡の短辺の中央よりやや寄った側に設置されている。煙道の中央部付近から、須恵器壺の破片が一点出土している。カマドの袖は粘土で整形され中には石が存在した。また、カマドの構造部には支脚とおぼしき細長い石が置かれていた。出土遺物としては土師器の壺・壺・壺、須恵器の壺、壺の各器種がある(第78・79図)。遺物は、竪穴住居跡の東南の部分から大量に検出された。レベル的にも、ほとんど水平を呈している。こうしたことから一括性が高いものと考えられる。特にここから出土した須恵器壺や土師器壺などの遺物は、従来山形盆地周辺では類例が少ない時期のものであり注目されることになった。また、竪穴住居跡の西側の隅には、住居の壁を拡張したような膨らみが設けられており、ここには土器粘土とおもわれる粘土塊があった。粘土塊は2個存在し、それぞれの大きさは直径約20cmほどであった。こうしたことから、土器の製作跡の可能性も考えられたことから、ロクロピット等の存在を探したが、見いだすことはできなかった。

3次S T 12
住居跡

2次S T 6・9・80住居跡 (第29・30図) 調査区の西側に位置する、13~14-13~14グリッドで検出された。ここは、発掘区のA区にあたるところであり、付近には古墳時代前期の竪穴住居跡が隣接してあるものの、平安時代の竪穴住居跡は周囲には存在せず、独立的である。S

2次S T 6・
9・80住居跡

T 6、ST 9、ST 80の関係は次のようなになる。ST 6をST 9が切り、さらにST 9をST 80が切っているものと考えられる。これらの関係は次のようなになる。ST 6は、ST 9、ST 80と軸線を共通させないために古く、これに対してST 9、ST 80は軸線を共通させるために時期差はあるものと考えられる。検出されたST 6規模については次のようなになる。平面形は長方形を呈する、長軸は不明、短軸は約3.5m、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子は自然堆積であろうと考えられる。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面には数個のピットが存在する。このうち方形に組み上がるピットは、主柱穴を構成するものと考えられる。出土遺物はほとんど無い。なお、ST 6住居跡の北西部付近から、炭化材が出土している。次にST 9の規模については次のようなになる。平面形は恐らく長方形を呈すると考えられる。長軸は不明、短軸は約3.2m、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは急であり、床面は凹凸がある。床面には数個のピットが存在する。主柱穴を構成するものは不明と考えられる。出土遺物としては東側の壁際から、須恵器壺が出土している(第71図)。ST 80の規模については次のようなになる。平面形は恐らく長方形を呈する、長軸は不明、短軸は約3m前後であると考えられる、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは緩やかであり、床面は凹凸がある。床面には数個のピットが存在する。このうちの中央部付近にある大ぶりな土坑は貯藏穴と考えられる。出土遺物としては、北東側の壁の近くから須恵器壺の破片が出土した(第71図)。ST 80堅穴住居跡の北東の壁際には、焼土の塊があった、当初カマドを構成するものとも考えられていたが、煙道がはっきりせず、地床炉の可能性も捨て切れない。遺構は用水堰によって切られ、搅乱を受けている。

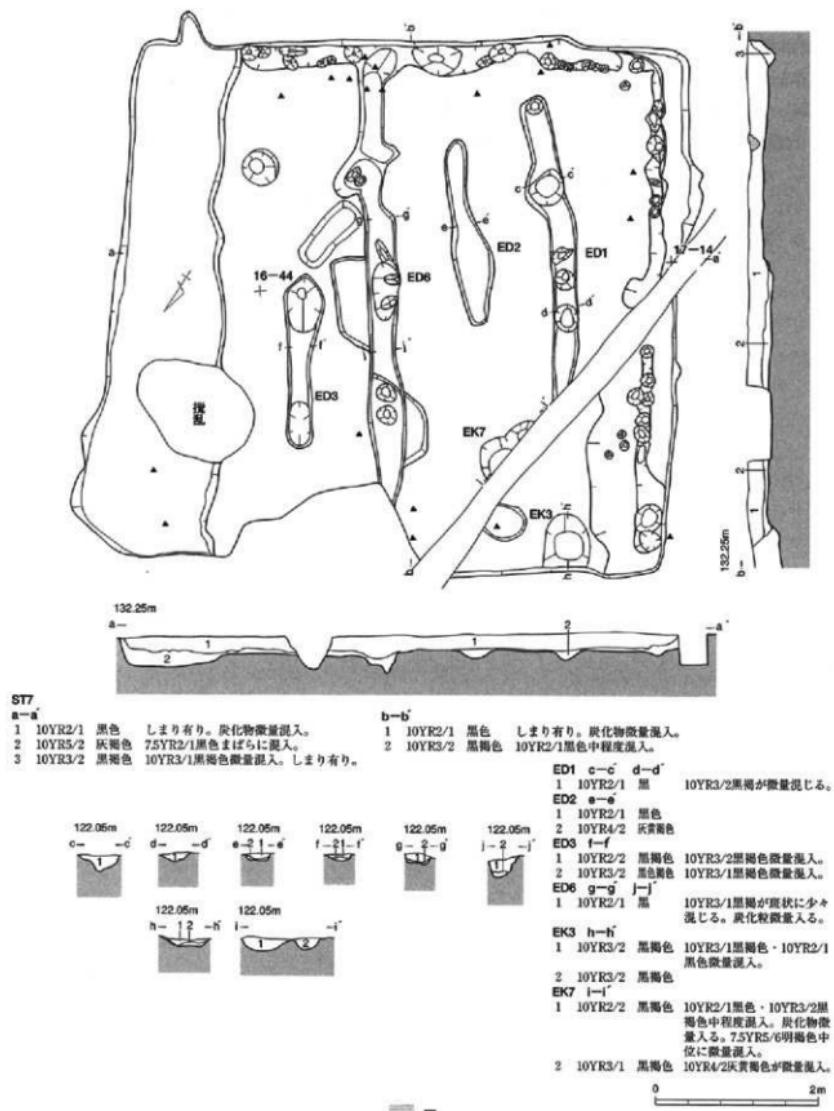
2次ST 125
住居跡

2次ST 125住居跡(第31図) 調査区のD区に位置する、25-38~39グリッドで検出された。ここは、発掘区の北東地区にあたるところであり、付近には奈良・平安時代の堅穴住居跡が集中してある。検出された堅穴住居跡の規模については次のようなになる。平面形はほぼ正方形を呈する、長軸、短軸とも約3.8mである、検出面からの深さは約25cmであり、他の堅穴住居跡と比較してやや深い。覆土の様子は一層である。壁の立ち上がりはやや緩やかであり、床面は平坦である。床面にはEP 203とEP 204の2個のピットが存在する。このふたつのピットは、検出された場所からして、主柱穴を構成するものと考えられる。しかしながら、掘り込みは浅い。これ以外のピットは明瞭ではなかった。床面には5個の石が置かれていた。最大のものは50cmほどもある。これらの性格は不明である。カマドは東側に検出された、壁の中央よりやや北側に寄って設けられている。煙道は不明であり、あまり長く延びないものであろうか。出土遺物としては須恵器壺の破片が床面から壁の立ち上がりにかけての場所から出土している(第66図)。

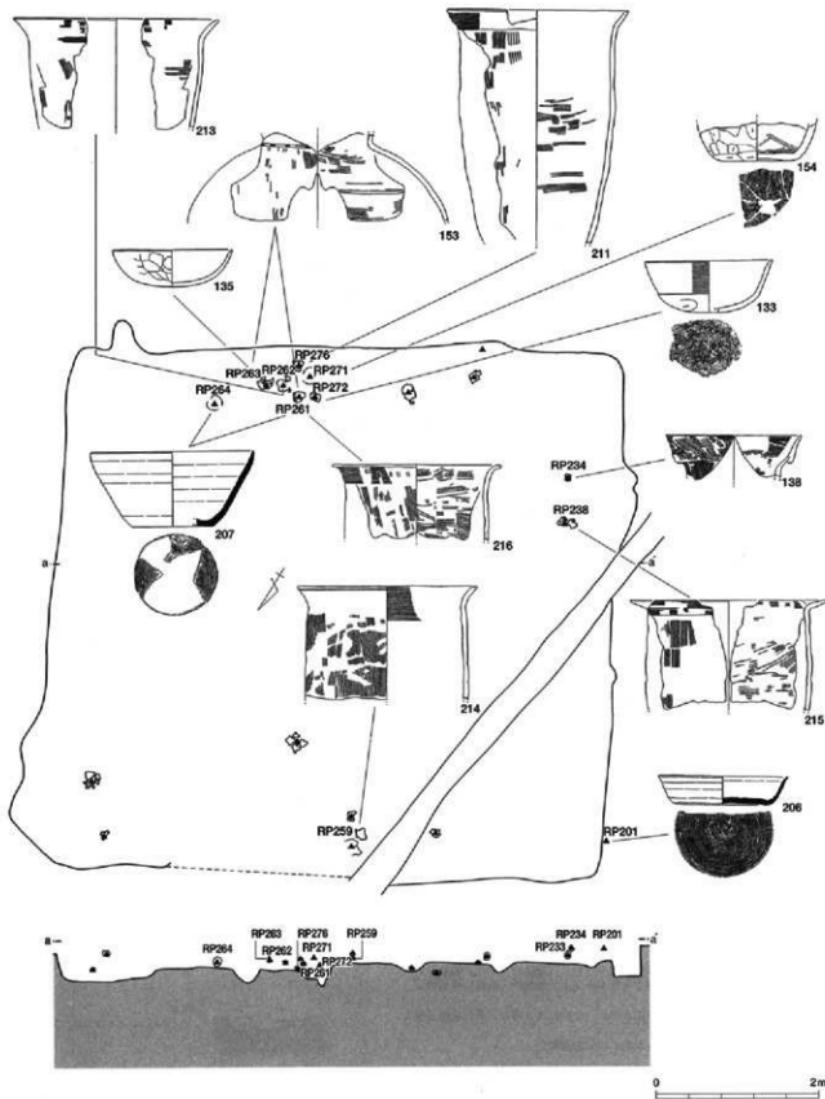
2次ST 130
住居跡

2次ST 130住居跡(第32図) 調査区のD区に位置する、25-39~40グリッドで検出された、カマドを持つ堅穴住居跡である。ここは、発掘区の北東にあたるところであり、付近には奈良・平安時代の堅穴住居跡が集中してある。検出された堅穴住居跡の規模については次のようなになる。平面形は長方形を呈する、全体的な形状は北東の一部が調査区外にあるため不明な部

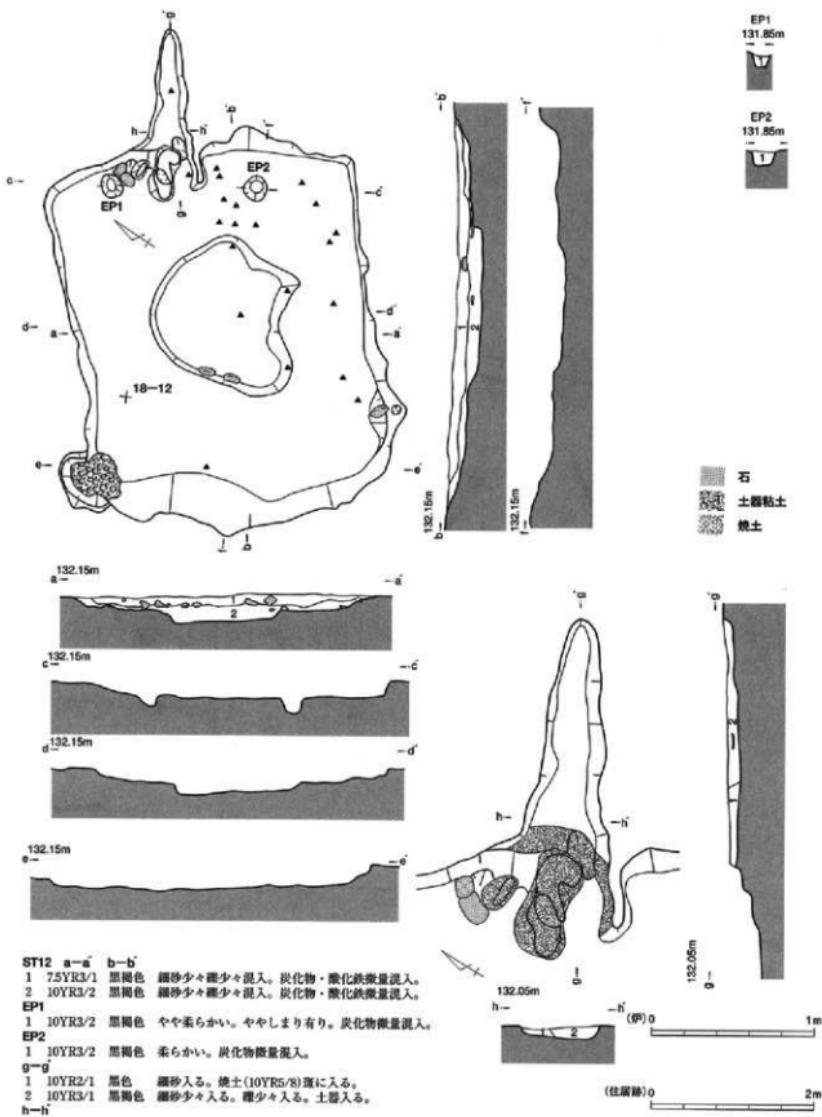
分がある。長軸は約4.7m、短軸は約4.2m、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは急であり、床面はやや凹凸がある。床面には3個のピットが存在するが、主柱穴を構成するピットについては不明である。これ以外のピットは見られなかった。床面には、土坑は存在しない。カマドは竪穴住居跡の長辺の中央より東側に寄った側に設置されている。煙道の長さは50cm、巾は30cm。カマドから煙道への移行部の中央部付近から、鉢の破片が一点出土している。カマドの袖は粘土で整形され中には石が存在した。周囲からは、長胴甕が4点出土した。出土遺物としては土師器壺、長胴甕、壺、鉢などの各器種がある（第80・81図）。

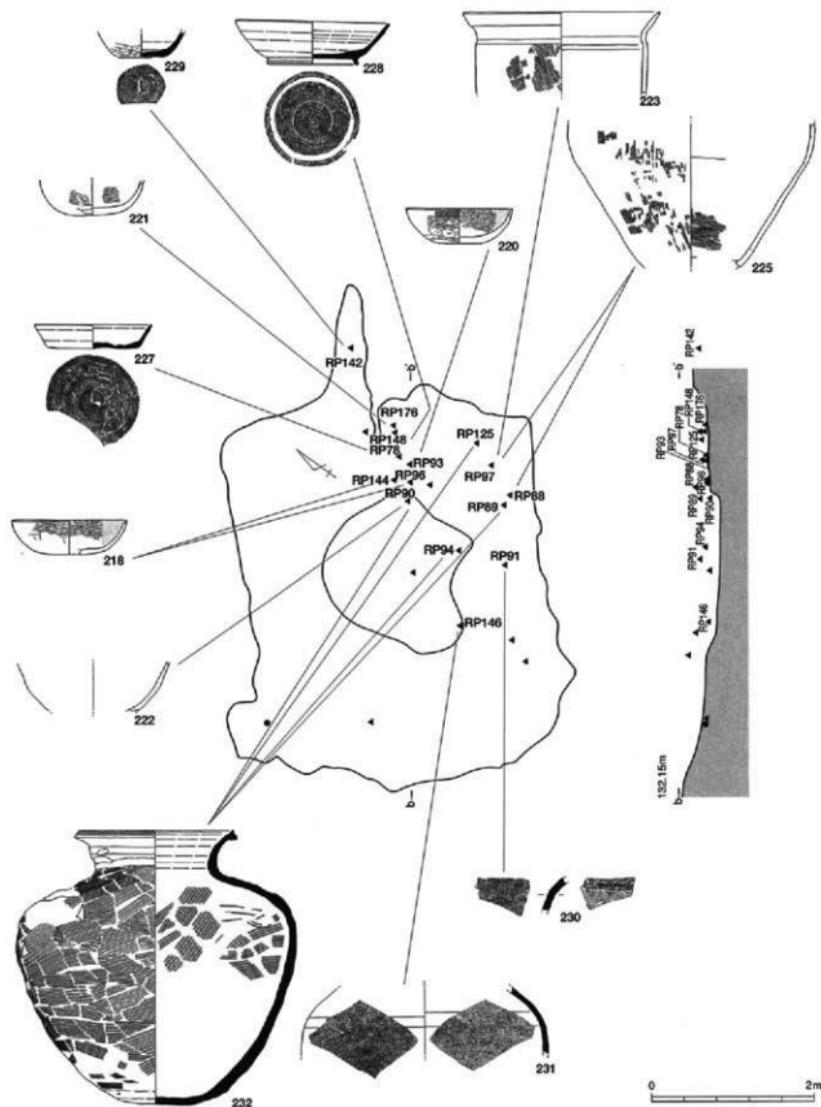


第25図 3次ST7 (1) 住居跡



第26図 3次ST7(2)住居跡遺物出土状況





第28図 3次ST12(2)住居跡遺物出土状況

- 2次 S T 131
住居跡** 2次 S T 131住居跡（第33図） 調査区のD区に位置する、24~25~40~41グリッドで検出された。ここは、発掘区の東北部にあたるところであり、付近には奈良・平安時代の竪穴住居跡が密集している。検出された竪穴住居跡の規模については次のようになる。平面形はほぼ長方形を呈する、長軸約3.5m、短軸約3.2m、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子は1層である。壁の立ち上がりは緩やかであり、床面は平坦である。床面には4個のピットが存在する。主柱穴を構成するものと考えられる柱穴は検出することができなかった。床面には、土坑が存在するが、これらの性格としては貯蔵穴と考えられる。カマドは竪穴住居跡の短辺の中央より東側に寄った側に設置されている。煙道の長さは約35cm、巾は約30cm、と非常に短い煙道を構成している。煙道の中央部付近から、カマドの支脚として利用されたかのように、長胴壺の体部下半の破片が一点出土している。カマドの袖は粘土で整形され中には石が存在した。カマドの周囲からは土師器長胴壺、須恵器坏、壺が出土した。出土遺物としては土師器長胴壺、須恵器坏、蓋がある（第82図）。
- 2次 S T 132
住居跡** 2次 S T 132住居跡（第34図） 調査区のD区に位置する、24~42~43グリッドで検出された、カマドを持つ竪穴住居跡である。ここは、発掘区の東北部にあたるところであり、付近には奈良・平安時代の竪穴住居跡が密集している。検出された竪穴住居跡の規模については次のようになる。平面形は長方形を呈する、長軸は約4.4m、短軸は約4.2m、検出面からの深さは約30cmを測り、この遺跡のほかの竪穴住居跡と比較した場合深い。覆土の様子は水平の堆積が見られることから自然堆積であると考えられる。壁の立ち上がりは緩やかであり、床面は平坦である。床面には6個のピットが存在する。このうちE P 195、E P 197、E P 196、とカマド右袖近くのピットは、やや壁際に寄り過ぎているかのように見えるが主柱穴を構成するものと考えられようか。これ以外のピットは不明である。カマド E L 148は竪穴住居跡の長辺の中央より南側に寄った側に設置されている。煙道の長さは1.0m、巾は最大で50cm、煙道の中央部付近から、須恵器坏の破片が一点と、土師器長胴壺の破片が出土している。カマドの袖は粘土で整形され、右側の袖中には石が存在した。カマドの周囲からは須恵器坏、土師器小型壺、長胴壺が出土した。出土遺物としては須恵器坏、土師器小型壺、長胴壺の各器種がある（第82、83図）。
- 2次 S T 133
・135住居跡** 2次 S T 133・135住居跡（第35・36図） 調査区のD区に位置する、23~24~43~44グリッドで検出された。ここは、発掘区の東北部にあたるところであり、付近には平安時代の竪穴住居跡集中している。検出された2棟の竪穴住居跡は、S T 133がS T 135を切っているため、S T 135→S T 133という変遷を呈するものと考えられる。検出されたS T 133竪穴住居跡の規模については次のようになる。平面形は長方形を呈する、長軸は約4.5m、短軸は約4.0m、検出面からの深さは約30cmであり深い。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面には2個のピットが存在する。主柱穴を構成するピットは判然としない。これ以外のピットは貯蔵穴と考えられる。カマドは竪穴住居跡の短辺の中央より北側に寄った側に設置されている。煙道の長さは50cm、巾は30cmであり非常に短い。煙道の中央部付近から、須恵器坏の破片が一点出土している。カマドの袖は粘土で整形され中には石が存在した。カマドの周囲からは須恵器壺、坏、土師器・長胴壺が出土した。出土遺物の大半がこのカ

マドの周辺から出土している。出土遺物としては須恵器壺・坏、土師器長胴壺の各器種がある（第84～86図）。出土遺物は多く器種もまた多い。次により古い竪穴住居跡である、S T135竪穴住居跡について述べる。平面形は、S T133竪穴住居跡と同様長方形を呈するものと考えられる。長軸は約4.5m、残存する短軸は約2.2mであり、大半が失われている。検出面からの深さは約30cmである。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面には1個のピットが存在する。主柱穴を構成するものかどうかは、不明であると考えられる。カマドはおそらく、S T133と同様に竪穴住居跡の短辺の中央より東側に寄った側に設置されていたものと考えられる。出土遺物としては須恵器壺・蓋、土師器、長胴壺の各器種がある（第87図）。S T133、S T135の何れの竪穴住居跡にも床面に石が存在した。また、S T133のカマドの焚口には須恵器壺と、土師器長胴壺がまとめて検出された。

2次 S T198住居跡（第37図） 調査区のC区に位置する、15～16～30～31グリッドで検出された。検出された竪穴住居跡の規模については次のようになる。平面形は長方形を呈する、長軸は約4.7m、短軸は約4.2m、検出面からの深さは約40cmであり、深い。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面には数個のピットが存在する。主柱穴を構成するものは不明である。カマドは竪穴住居跡の短辺の中央より東側に寄った側に設置されている。煙道の長さは約1.0m、巾は最大で約50cm。カマドの袖は粘土で整形されていた。床面、覆土あるいはカマドの周囲からは何も出土しなかった。

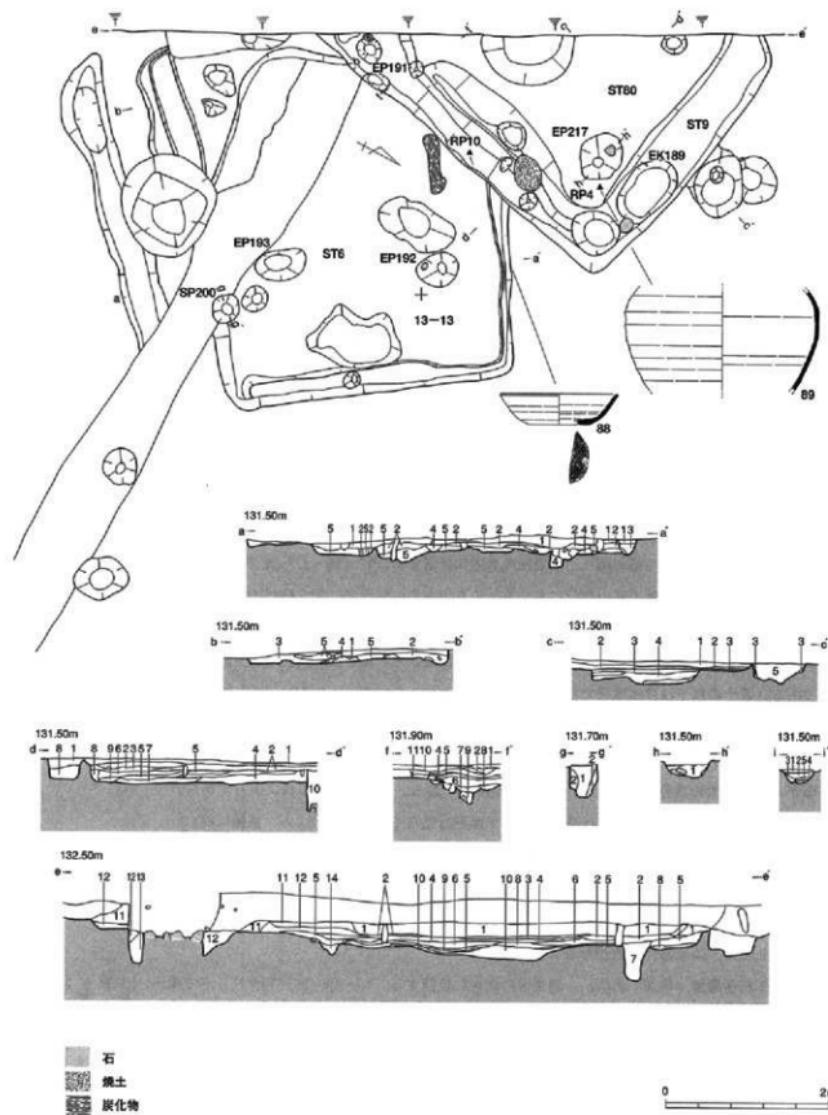
2次 S T198
住居跡

3次 S T14・15住居跡（第38図） 調査区の北区に位置する、17～18～27～29グリッドで検出された。ここは、発掘区の高い部分にあたるところであり、付近には平安時代の竪穴住居跡が集中して存在する。検出された竪穴住居跡の規模については次のようになる。S T14平面形は長方形を呈する、長軸は約4.2m、短軸は約3.3m、検出面からの深さは約10cmであり浅い掘り方である。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面には数個のピットが存在する。主柱穴を構成するものと考えられるものは不明である。カマドは検出されなかった。地床炉もまた検出されなかった。床面、覆土いずれからも遺物は出土しなかった。中央の直径1.3mほどの穴は後世の擾乱である。S T15はS T14によって切られている。S T15の方が古い竪穴住居跡である。平面形は恐らく長方形を呈する、長軸は約4.2m、短軸は約3.7m、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子は自然堆積である。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面には数個のピットが存在する。主柱穴を構成するものと考えられるものはなかった。カマドは検出されなかった。煙道も検出されなかった。出土遺物としては、須恵器壺と蓋がある（第88図）。

3次 S T14・15
住居跡

3次 S T16住居跡（第39・40図） 調査区の北区に位置する、18～19～29～30グリッドで検出された。ここは、発掘区の北区では高い部分にあたるところであり、付近には平安時代の竪穴住居跡が集中している。検出された竪穴住居跡の規模については次のようになる。平面形は多少の不整形を呈するが、正方形を呈すると捕らえておきたい。長軸短軸とも約4.4mであり、遺構の検出面からの深さは約30cm前後である。覆土の様子は自然堆積であると考えられる。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面には10個前後のピットが存在する。このうち

3次 S T16
住居跡



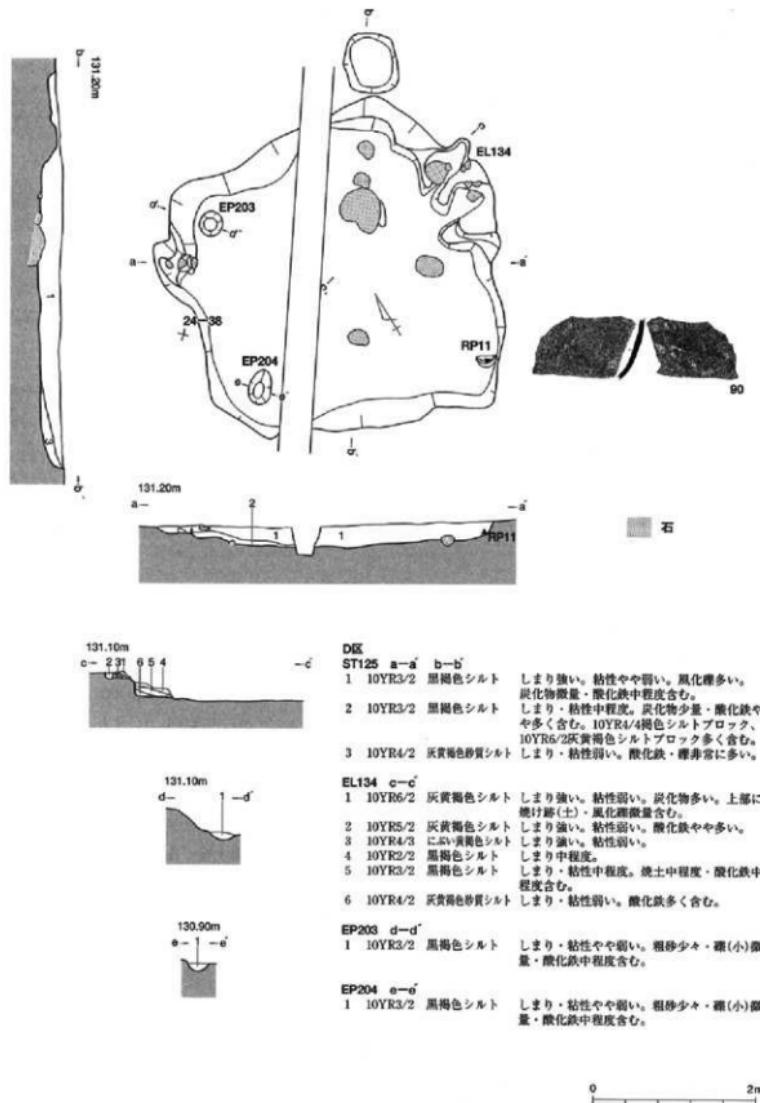
第29図 2次ST 6 + 9 + 80 (1) 住居跡遺物出土状況

第30図 2次ST6・9・80(2)住居跡

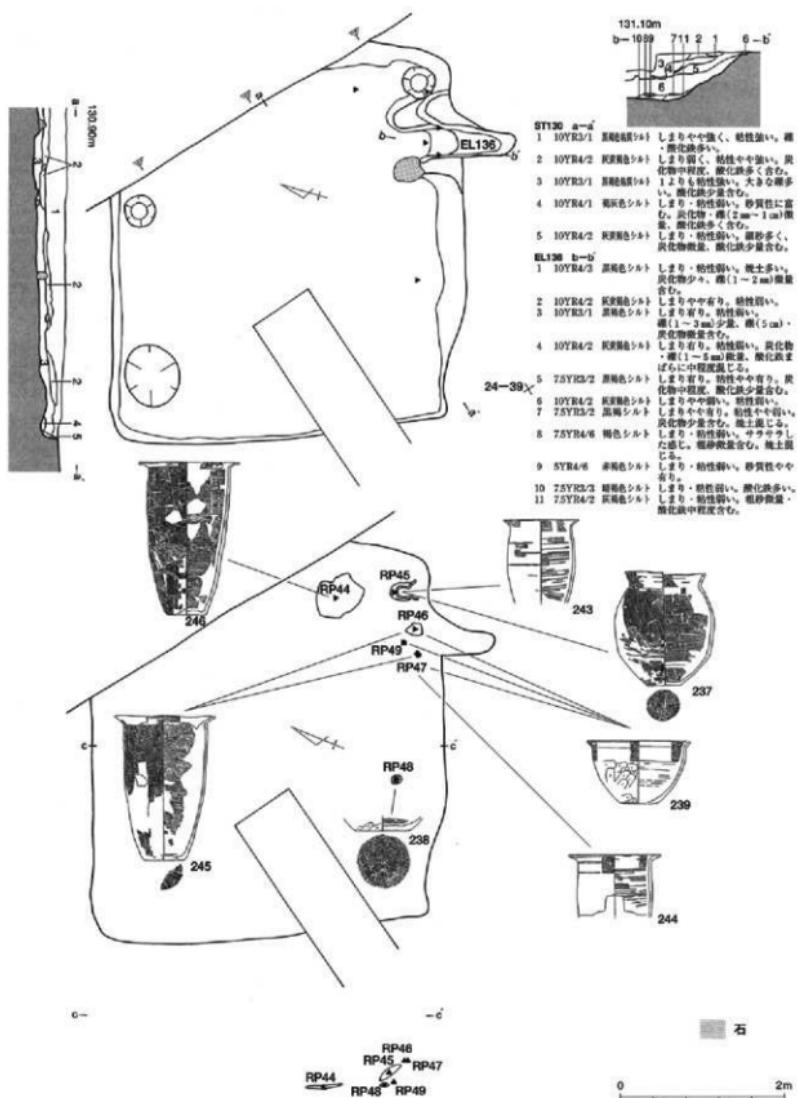
壁際に存在するものは、主柱穴を構成するものと考えられるか。これ以外のピットは不明である。床面には、E K 1、E K 2 の2つの土坑が存在する。E K 2 は深く、E K 1 は浅い。これらの土坑の性格としては貯蔵穴などが想定できると考えられる。カマドは堅穴住居跡の南側長辺の中央より東側に寄った側に設置されている。カマドの櫛道の長さは約70cm、巾は約30cmとやや短い。カマドの左右の袖は粘土で整形され中には、補強材としての石が存在した。また、カマドの構造部には支脚とおぼしき土器が置かれていた。カマドの底面は良く焼けており、周囲には焼土層が広がっていた。このカマドの周囲、右袖の近くにあるピットからは、土師器長胴壺の破片が出土した。遺物は床面に沿って分布している傾向があるが、覆土中からも遺物は出土している。出土遺物としては須恵器小壺蓋・坏、土師器長胴壺、内黒土器の各器種がある。これは、他の住居跡の遺物の出土と較べると多い（第88-89図）。この堅穴住居跡は、後世の擾乱を受けている。住居跡のほぼ南北にわたって、巾50cmほどの暗渠が通っていた。この住居跡の東側には、E U 1 としている、合口の理設土器が存在した。本住居跡との関係は不明である。

3次S T17住居跡（第41図） 調査区の北区に位置する、18~19~30グリッドで検出された。付近には平安時代の堅穴住居跡が集中してある。検出された堅穴住居跡の規模については次のようにになる。平面形は略方形を呈する、主軸は約3.3m、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子は2層である。壁の立ち上がりはなだらかであり、床面は平坦である。床面に数個のピットが存在する。主柱穴を構成するものと考えられるものは判然としない。壁際に東側にやや浅い掘り込みが壁にそって延びていた。この底面には浅いすり鉢状の凹みがいくつか見える

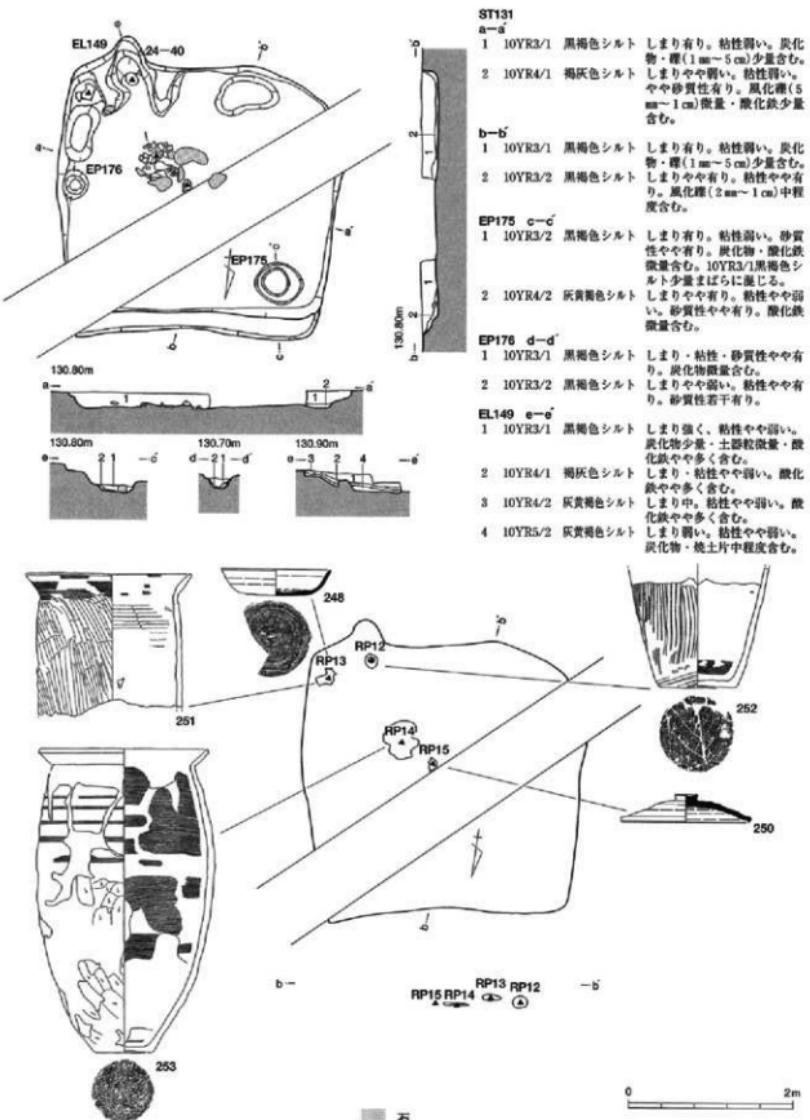
3 次 S T 17
住 居 路

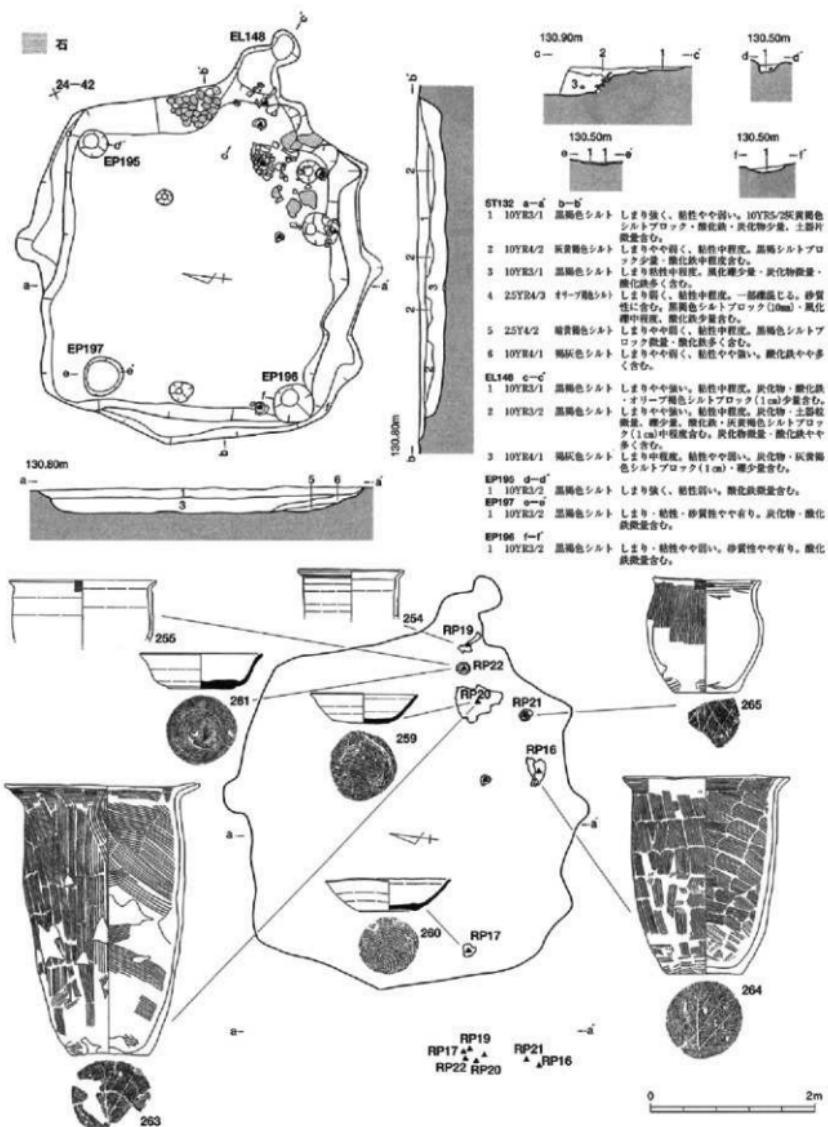


第31図 2次ST125住居跡遺物出土状況

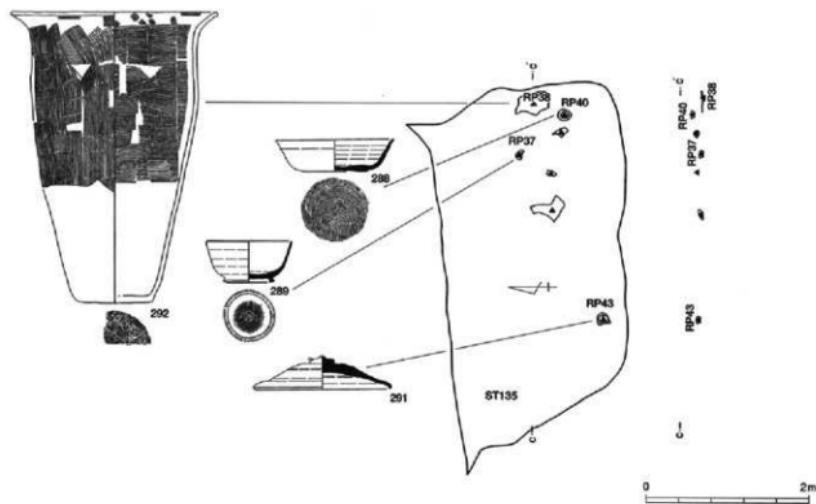
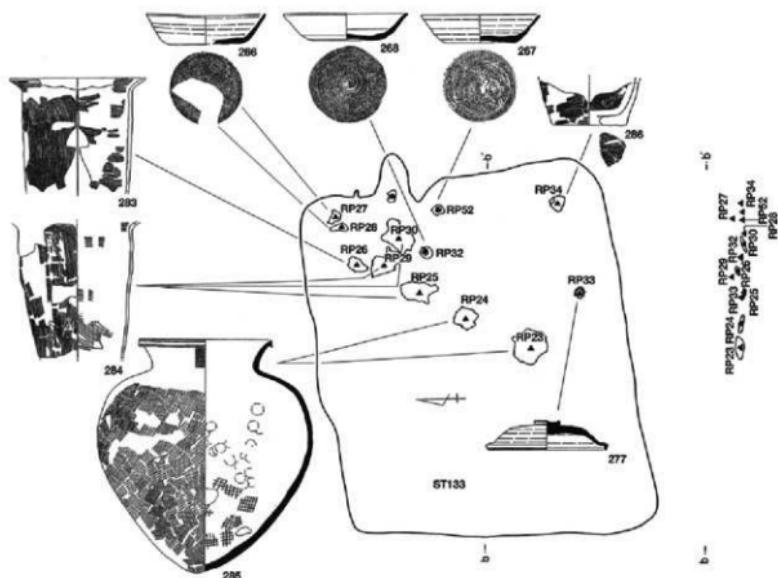


第32圖 2次ST130住居跡遺物出土狀況





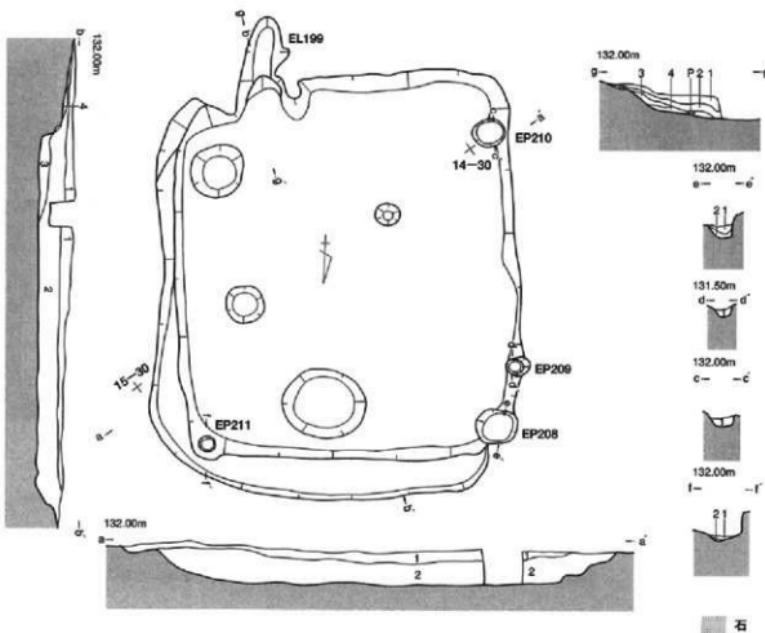
第34図 2次ST132住居跡遺物出土状況



第35圖 2次ST133・135(1)住居跡遺物出土狀況



第36図 2次ST133・135(2)住居跡



石

ST199 a-a' b-b'

- 1 10YR2/1 黒褐色シルト
2 10YR2/1 黒褐色シルト
3 10YR2/1 黒褐色シルト
4 10YR5/2 灰褐色シルト
- しまり強く粘性やや弱い。風化塵(小～中)少量含む。炭化物・酸化鉄微量含む。
しまり有り。粘性やや弱い。風化塵(小)少量含む。炭化物・酸化鉄微量含む。
しまりも色が明るい。しまりやや弱い。粘性やや弱い。風化塵(小)微量含む。炭化物・酸化鉄微量含む。
しまり・粘性弱い。細砂多い。10YR3/1黒褐色シルト若干混入。風化塵(小)微量含む。炭化物・酸化鉄微量含む。

EL199 g-g'

- 1 10YR3/2 黒褐色シルト
2 10YR4/2 灰褐色シルト
3 7SYR2/2 黒褐色シルト
4 7SYR2/1 黑褐色シルト
- しまり強。羅やや多。酸化鉄・炭化物少。
しまりやや強。粘性やや弱。黑褐色シルトブロック少量。
しまり前く、粘性弱い。焼土一部残る。
しまり弱。粘強。燒土ブロック含む。

EP209 e-e'

- 1 10YR3/1 黒褐色シルト
2 10YR3/1 黑褐色シルト
- 粘性有り。酸化鉄微量含む。
粘性弱い。炭化物微量含む。

EP210 d-d'

- 1 10YR3/2 黑褐色シルト
- 粘性有り。砂質性に富む。酸化鉄微量含む。

EP210 c-c'

- 1 EP209と同じ
- 炭化物微量含む。

EP211 f-f'

- 1 10YR5/2 灰褐色砂質シルト
2 10YR5/1 灰褐色砂質シルト
- 粘性弱い。酸化鉄中程度含む。
粘性弱い。酸化鉄微量含む。



第37図 2次ST199住居跡

ことができた。床面には、EK 1 の土坑が存在する。出土遺物としては須恵器壺、土師器長胴甕・小型甕、黒色土器の各器種がある（第91図）。カマドは竪穴住居跡の壁際中央より東側に寄った側に設置されている。カマドの煙道の長さは約30cm、巾は約30cmと、他の住居跡に較べると小さい規模である。煙道部付近からの遺物の出土はなかった。カマドの袖は通常は粘土で整形され中には石が存在する事例が多いが、ここには明確に袖を見出すことはできなかった。このカマドの周囲、右手の袖の後ろ辺りからは、遺物が集中して出土した。また、カマドの底面は良く焼けており、周囲には若干の焼土層が広がっていた。この住居跡は西側の壁際から、床面の中央部にかけて、細長い搅乱があった。

3次S T18住居跡（第42図） 調査区の南区に位置する、19~20-13~15グリッドで検出された。ここは、発掘区のやや小高い部分にあるところであり、付近には古墳時代前期と中期の竪穴住居跡がある。この地域では、平安時代の竪穴住居跡はこのS T18以外には検出されなかつた。平面形は略方形を呈する、主軸は約4.0m、検出面からの深さは約30cmである。覆土の様子は一層である。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面には数個のビットが存在する。このうち主柱穴を構成するものと考えられるビットは判然としなかつた。床面には、EK 4 の土坑が存在するが、これらの性格としては貯蔵穴と考えられる。出土遺物としては須恵器壺、土師器長胴甕、壺の各器種がある（第92図）。カマドと考えられる遺構は竪穴住居跡の南側長辺の中央よりやや、東側に寄った側に設置されている。しかしながらカマドの煙道の長さ、巾とも確定することはできなかつた。ほとんど煙道が外まで延びないのかもしれない。類例としては、S T17があげられようか。焼土はカマドの中心部周辺を中心として、多量に見られた。煙道と思われる部分の中央部の付近から、須恵器壺の破片が一点出土している。カマドの袖は粘土で整形され中には石が存在したと思われるが、抜き取り穴が残されるのみであった。このカマドの周囲からは土師器長胴甕が出土した。壁に沿って溝が巡らされていた。

3次S T18 住居跡

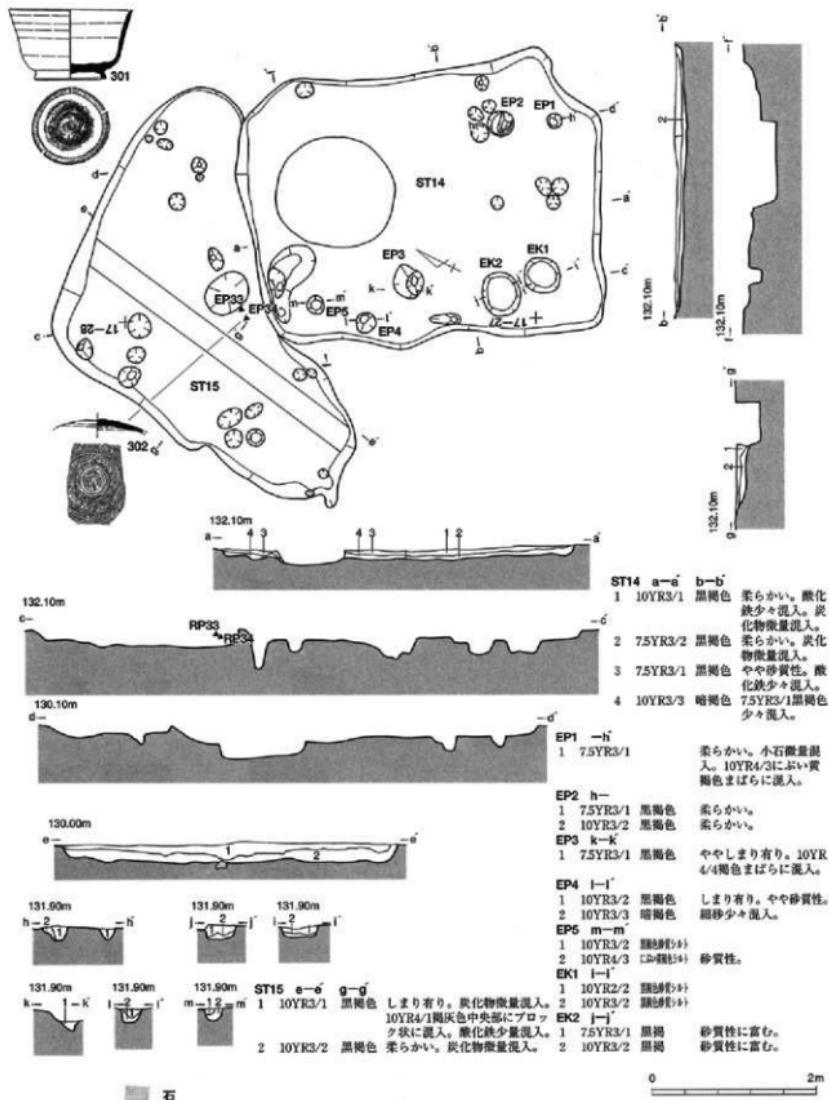
3次S T19住居跡（第43・44図） 調査区の南区に位置する、17~19-20~21グリッドで検出された。ここは、発掘区のやや高い部分にあるところであり、付近には奈良時代の竪穴住居跡と、荻原遺跡からはただ一つまとめて検出された跡がある。検出された竪穴住居跡の規模については次のようになる。平面形は略長方形を呈する、長軸は約5.3m、短軸は約4.8m、検出面からの深さは約60cmであり深い。覆土の様子は4層である。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面には一個の細い小さいビットが存在する。このビットは不明確ながらも掘り方は深くしっかりしていたため、主柱穴を構成するものと考えられる。これ以外のビットは不明である。床面には土坑が存在しなかつた。出土遺物としては、多量の遺物が出土しているこの出土量は今回の荻原遺跡の調査の中でも最大級である。出土遺物には須恵器・甕・壺・壺・高台付壺、土師器・長胴甕・小型甕・壺などの器種がある（第93・94・95・96・97・98図）。遺物の出土状況を、第43図と第44図から検討することができる。遺物は床面にまとまっているグループと、覆土上部にまとまっているグループの2つにほぼ分けることができる。大半は覆土上部に存在する傾向が強かった。カマドは竪穴住居跡の南側長辺の中央より東側に寄った側に設置されている。カマドの煙道の長さは約30cm、巾は約30cmと、他の住居跡に

3次S T19 住居跡

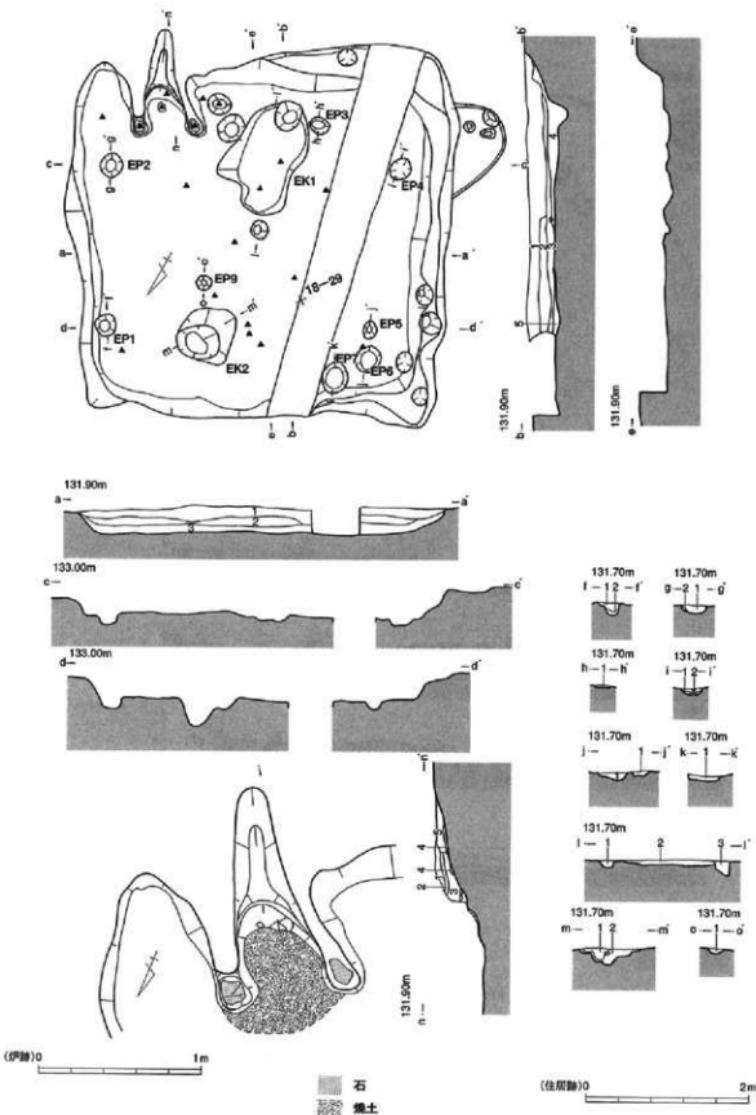
較べると小さく短いのであるが、ST17やST18の様に短い事例も存在するため、こうしたグループに達なるものであろう。煙道の中からは何も出土しなかった。カマドの袖は粘土で整形され中には、両袖とも石が存在した。このカマドの周囲、右側の袖口付近から須恵器壊などがややまとまって出土している。また、カマドの底面は焼けており、周囲には薄くではあるが、焼土層が広がっていた。

3次ST20 住居跡

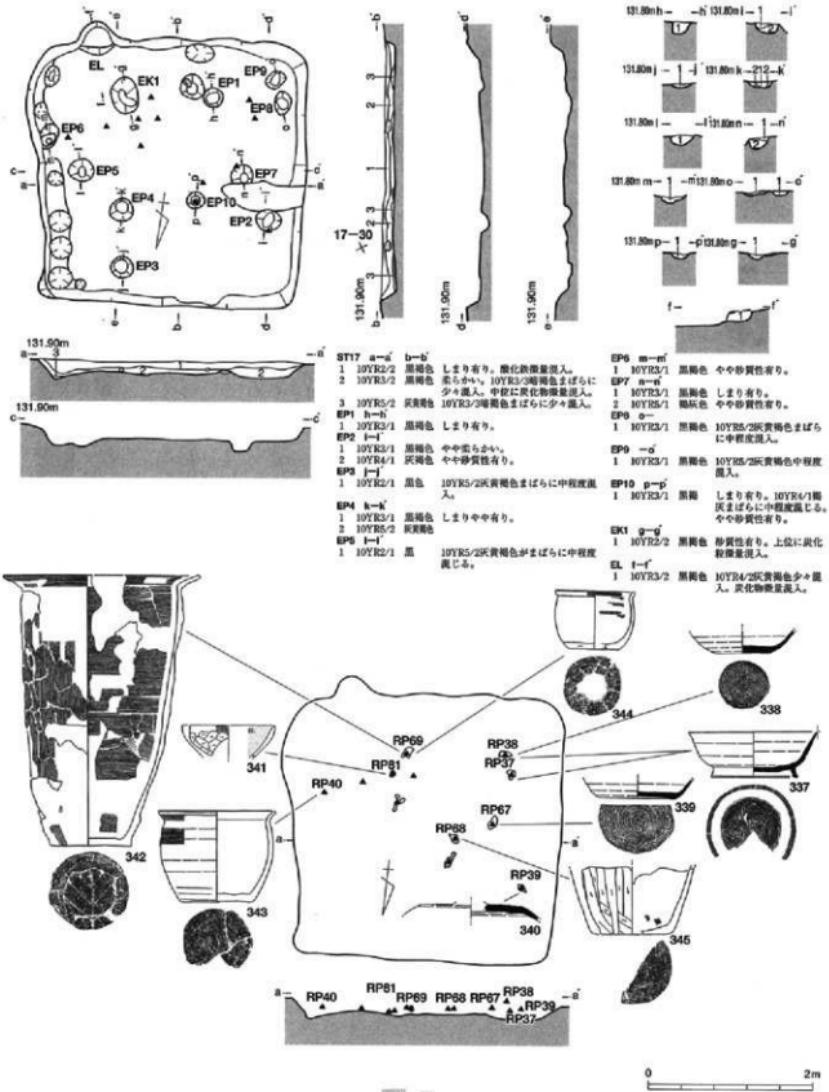
3次ST20住居跡（第45図） 調査区の北区に位置する、16~17~32~33グリッドで検出された。ここは、発掘区の小高い部分にあるところであり、付近には平安時代の竪穴住居跡がある。検出された竪穴住居跡の規模については次のようにある。平面形は長方形を呈する、長軸は約4.7m、短軸は約4.2m、検出面からの深さは約30cmであり深い。覆土の様子は2層である。壁の立ち上がりは緩やかであり、床面は平坦である。床面には数個のピットが存在する。このうち主柱穴を構成するものと考えられるものは明確には検出できなかった。床面には、東側壁に沿って細長い土坑が存在するが、これらの性格としては貯蔵穴と考えられる。出土遺物としては須恵器壊、土器等小型壺の各器種がある（第99図）。カマドは竪穴住居跡の南側短辺の中央より、東側に寄った側に設置されている。カマドの煙道の長さは約10cmほどであり、ほとんど明確に見いだすことはできなかった。巾は約30cmと、他の住居跡に較べると短い。煙道の中央部付近から、須恵器壊の破片が一点出土している。カマドの袖は粘土で整形され中には石が存在したものであろう。袖の近くには抜き取り痕と思われる凹みがある。カマドの構造部には支脚とおぼしきものはなかった。このカマドの周囲から遺物の出土はなかった。また、カマドの底面は良く焼けており、周囲には焼土層が広がっていた。



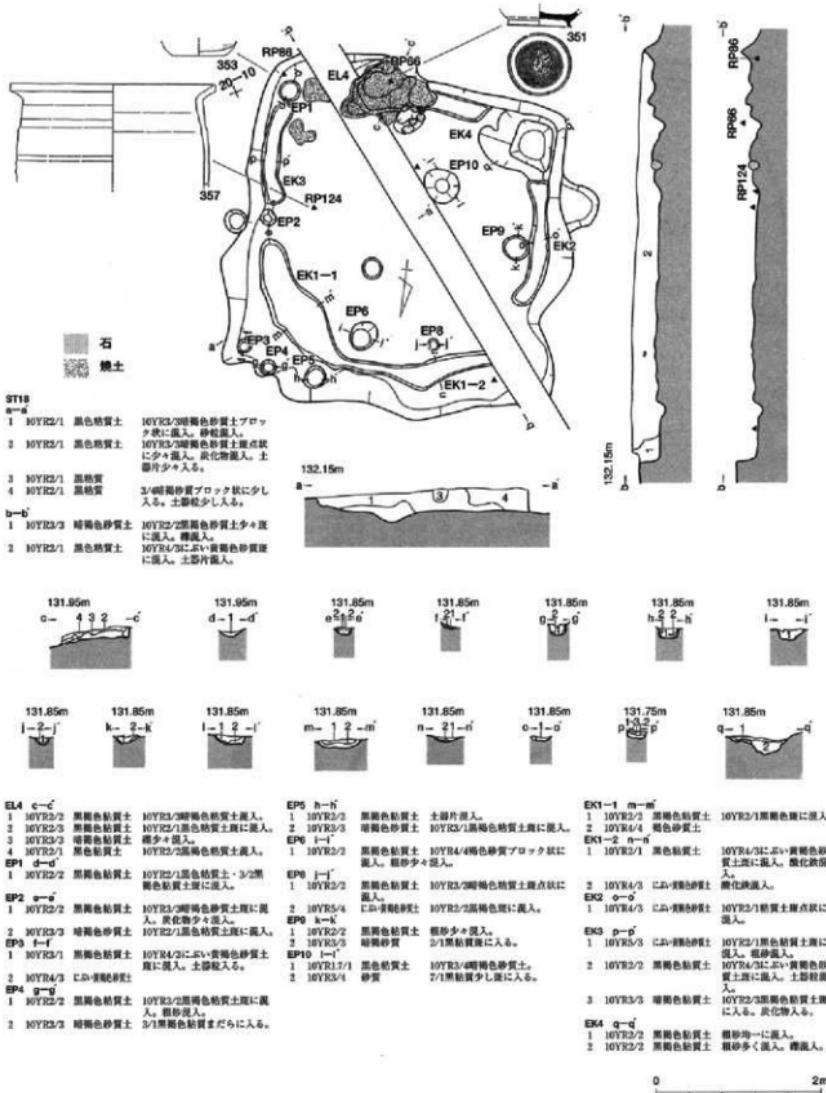
第38図 3次ST14・15住居跡遺物出土状況



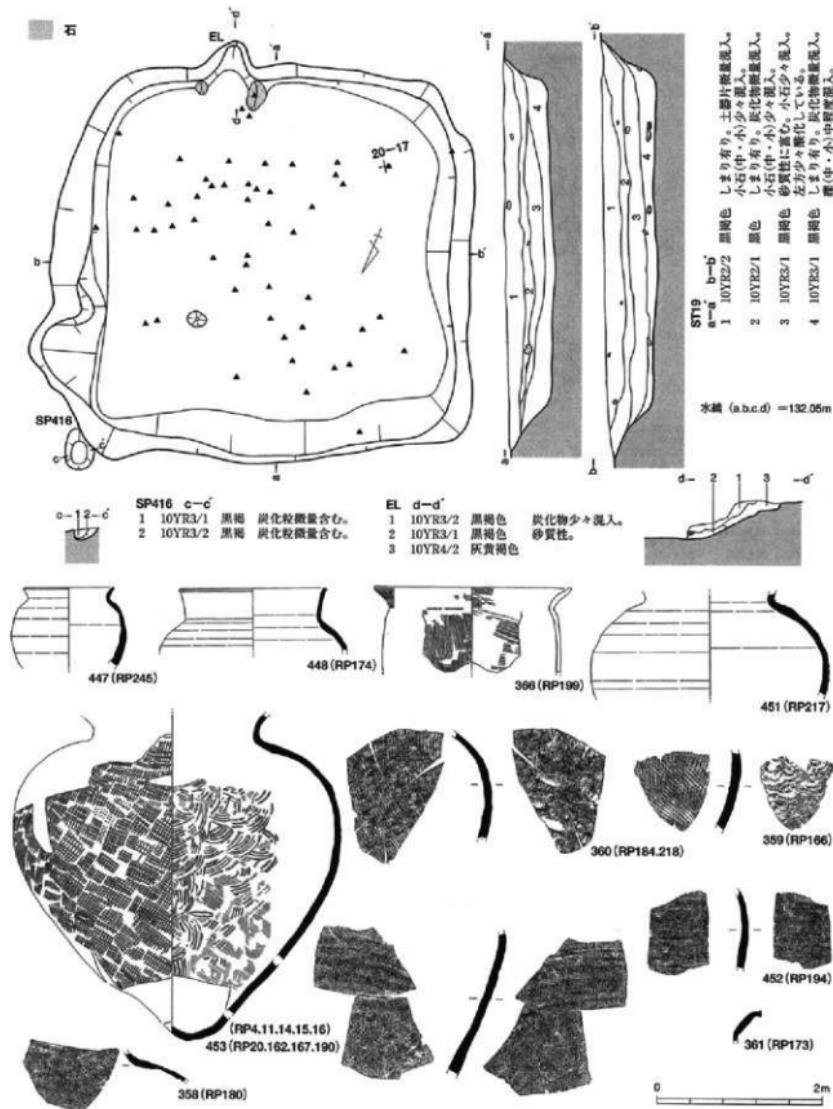
第39図 3次ST16（1）住居跡



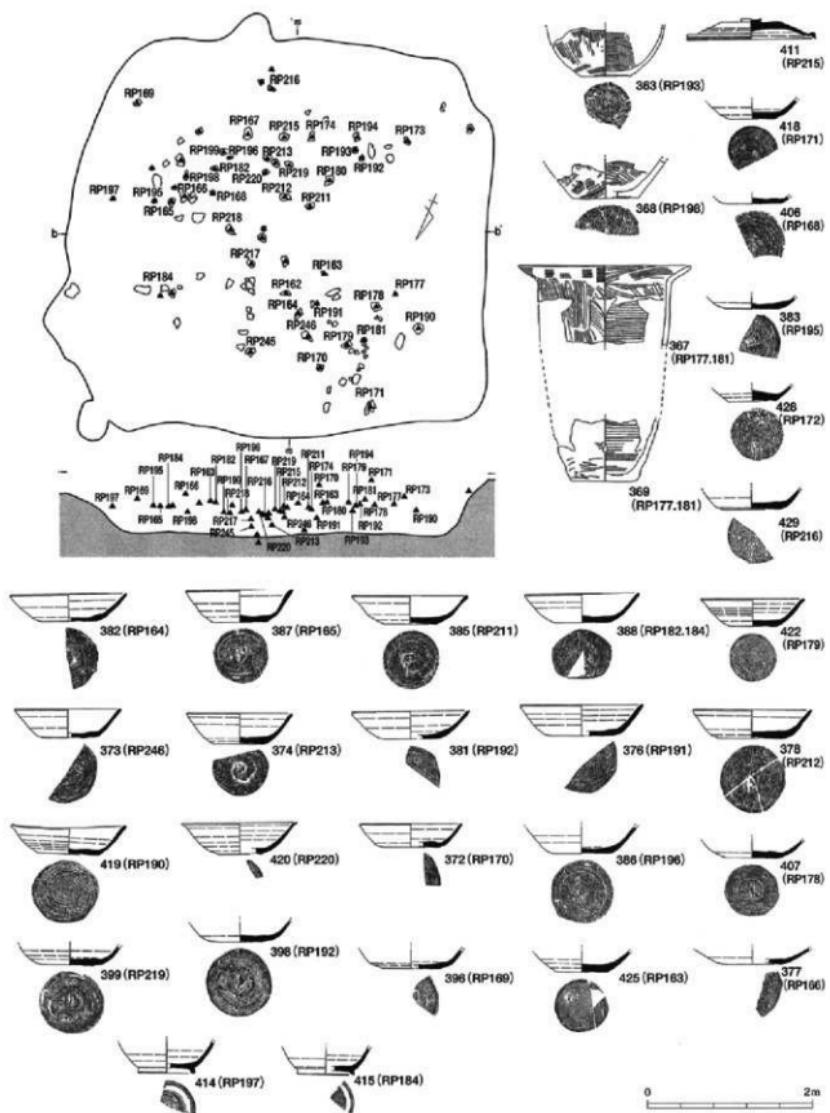
第41図 3次ST17住居跡遺物出土状況



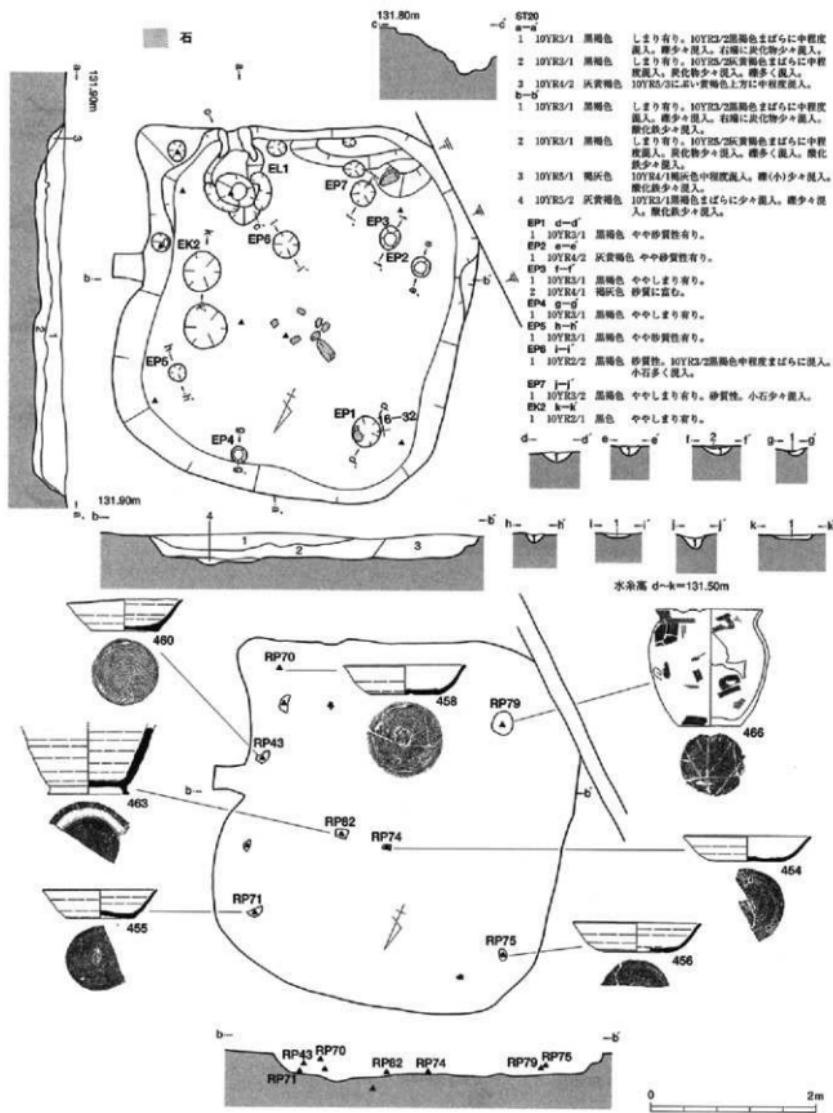
第42図 3次ST18住居跡遺物出土状況



第43図 3次ST19（1）住居跡遺物出土状況



第44圖 3次ST19(2)住居跡遺物出土狀況



第45図 3次ST20住居跡遺物出土状況

3次S T 21住居跡（第46・47図） 調査区の中央部に位置する、17~19-26~27グリッドで検出された。ここは、発掘区の小高い部分にあたるところであり、付近には平安時代の住居跡がある。検出された竪穴住居跡の規模については次のようになる。平面形は略方形を呈する、主軸は約4.6m、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子は2層である。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面には数個のピットが存在する。このうち主柱穴を構成するものと考えられるピットは不明である。床面には土坑は見いだせなかった。出土遺物としては須恵器・壺・坏・高台付坏・蓋、土師器長胴壺、坏などの各器種がある（第100図）。なお、ここから出土した壺は、S T 19からの破片と接合したものであり、遺構の密接した関係を想定させている。カマドは竪穴住居跡のどこに設置されているか不明である。

3次 S T 21 住居跡

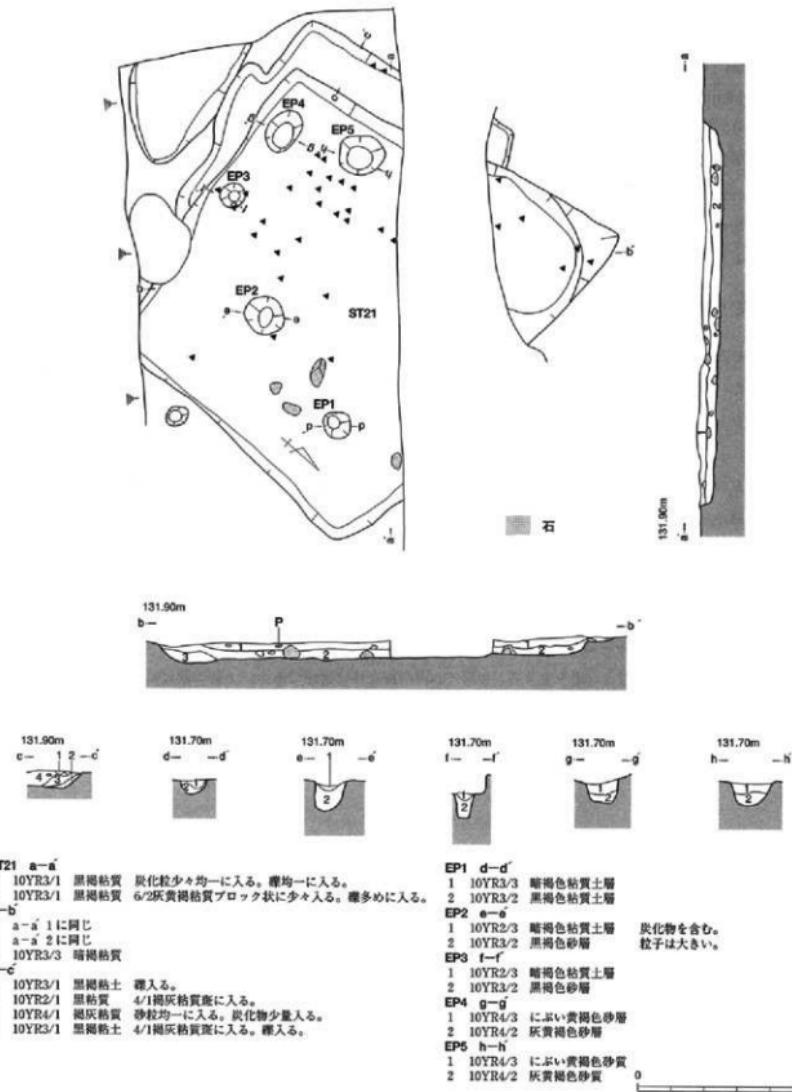
・奈良・平安時代の掘立柱建物跡

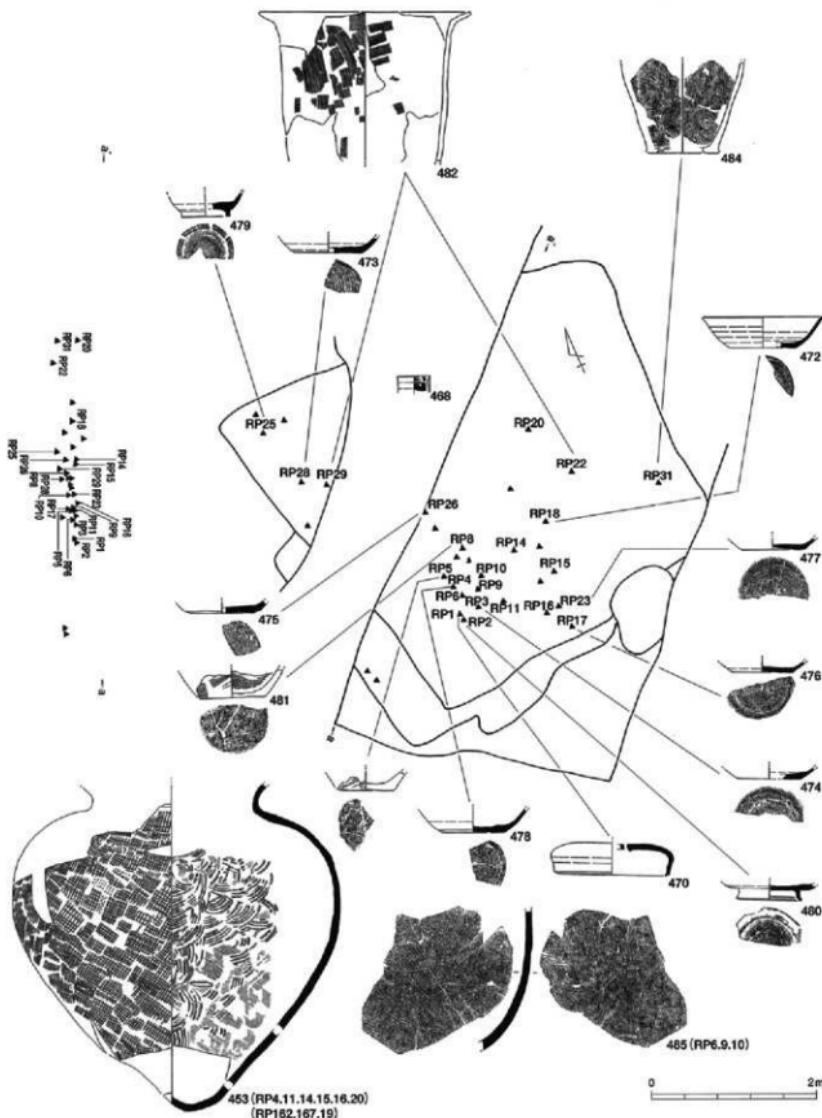
2次S B 20掘立柱建物跡（第48図） 調査区の南区に位置する、24~25-7~8グリッドで検出された。ここは、発掘区の低くなっている部分にあたるところであり、付近には目立った遺構は存在しない。検出された掘立柱建物跡の規模については次のようになる。平面形は方形を呈する、1間×1間の掘立柱建物跡である。長軸は約4.0m、短軸は約3.7m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約35cmであり、中央には柱痕跡を残していた。覆土の様子は、中央に柱を据え、周囲から埋め込んだような状態である。出土遺物としては、何も出土しておらず、不明である。

2次 S B 20 掘立柱建物跡

2次S B 30掘立柱建物跡（第49図） 調査区の南区に位置する、24~25-16~18グリッドで検出された。付近には溝が存在する。検出された掘立柱建物跡の規模については次のようになる。平面形は長方形を呈するものと考えられるが、北東部分は調査区外であるため不明である。全体プランの平面形は方形を呈する、2間×3間の掘立柱建物跡である。1間の間尺は2.1m、3.7m、2.7m、であり、それぞれが組み合わされている。全体プランの長軸は約8.5m、短軸は約5.3m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約20cmであり、中央には柱痕跡を残していない。出土遺物としては、何も出土しておらず、不明である。

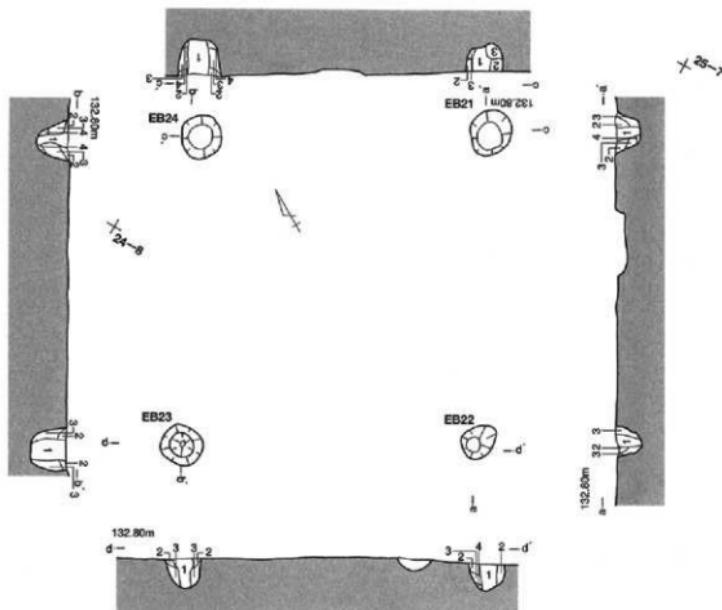
2次 S B 30 掘立柱建物跡





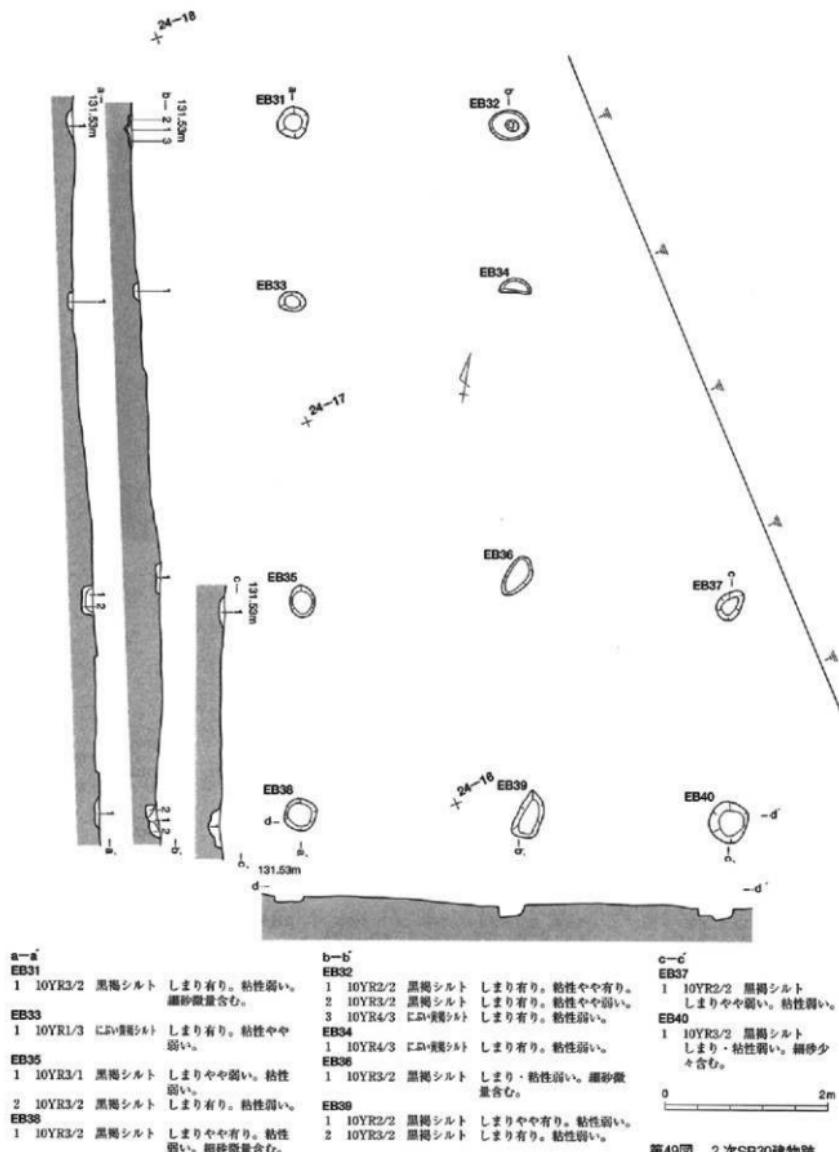
第47図 3次ST21(2) 住居跡遺物出土状況

- 2次 S B 50
掘立柱建物跡** 2次 S B 50掘立柱建物跡（第50図） 調査区の南区に位置する、24～25～24～26グリッドで検出された。付近には目立った遺構が存在しない。検出された掘立柱建物跡の規模については次のようになる。平面形は長方形を呈するものと考えられるが、南西部分は一段低くなっているため不明である。全体プランの平面形は恐らく長方形を呈する、4間×2間の掘立柱建物跡である。1間の間尺は2.1m、2.5m、1.4mであり、それぞれが組み合わされている。全体プランの長軸は約8.5m、短軸は約5.3m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約15cmであり、浅い。中央には柱痕跡を残していない。出土遺物としては、何も出土しておらず、不明である。
- 2次 S B 70・75
掘立柱建物跡** 2次 S B 70・75掘立柱建物跡（第51図） 調査区の南区に位置する、24～25～12～13グリッドで検出された。付近にはやや離れて、西側に古墳時代前期の堅穴住居跡群が存在する。S B 70掘立柱建物跡とS B 75掘立柱建物跡の2棟が検出された。それぞれは、平面プランも同じ方形を呈し、その規模も同一規模の掘立柱建物跡であるため、おそらく建て替えが行われたものであろうと思われる。ただし、建て替えの順序については、E B 70をE B 75が切っているため、E B 75→E B 70と変遷をするものと考えられる。検出されたS B 70、S B 80掘立柱建物跡の規模については次のようになる。いずれも平面形は方形を呈するものと考えられるが、一部を欠いている。南西部分は砂利の堆積が大きく、いずれかの時点で河川の影響を被って、遺構の一部を失った可能性が高い。このため全体の正確な様相は一段低くなっているため、不明であると言わざるを得ない。全体プランの平面形は方形を呈する、1間×1間の掘立柱建物跡である。1間の間尺は2.6mであり、それぞれが組み合わされている。検出面からの柱の掘り込みの深さは約10～15cmであり、浅い。中央には柱痕跡を残していないものが多い。唯一柱の痕跡を残しているものが、E B 77である。これによれば、直径40cmほどの掘り方の中央に直径15cmほどの柱を据え、周囲から埋め固めたことがわかる。出土遺物としては、何も出土しておらず、不明である。なお、同様の遺構としてS B 20掘立柱建物跡がある。

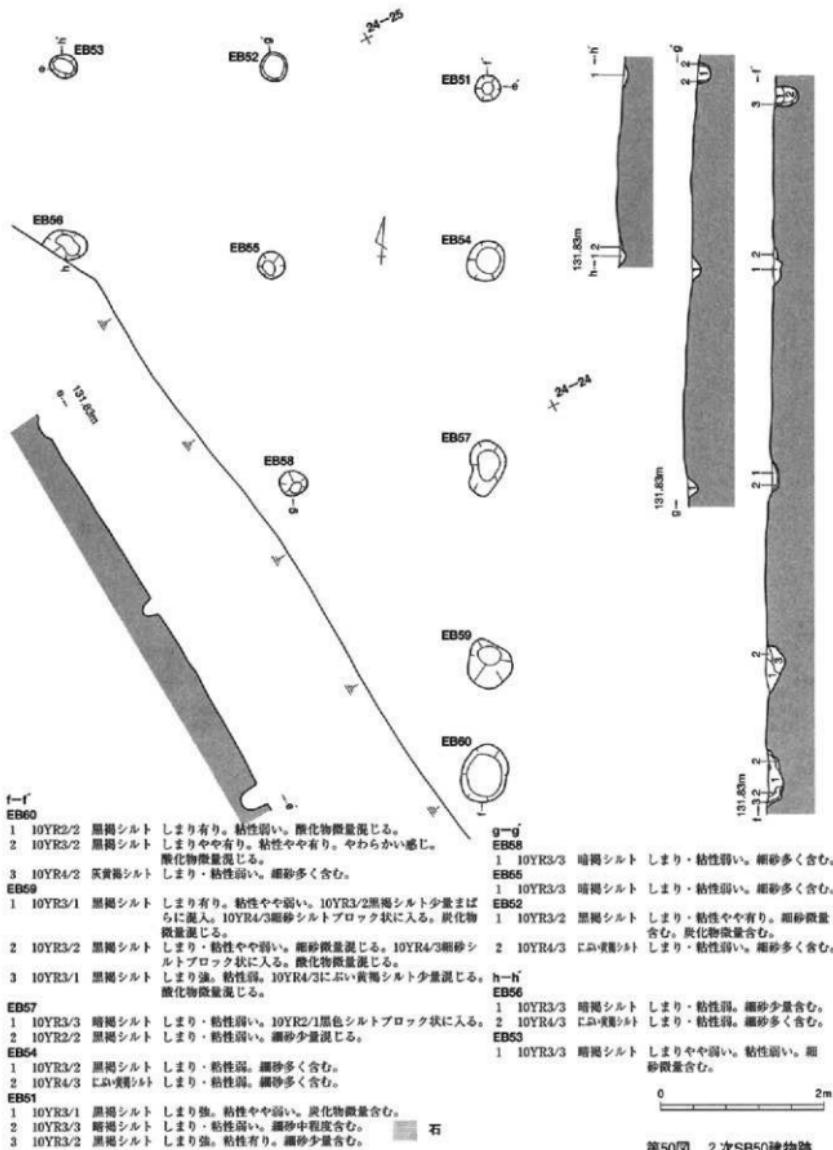


- | a-a'
EB22 | c-c'
EB21 |
|---|--|
| 1 10YR2/1 黒褐色シルト
2 10YR2/2 黑褐色シルト
3 10YR2/1 黑シルト
4 10YR4/1 にぶい黄褐色シルト | a-a' EB21と同じ。
EB24
b-b' EB24と同じ。 |
| 1 10YR2/1 黒シルト
2 10YR3/1 黒褐色シルト
3 10YR3/2 黑褐色シルト
4 10YR3/1 黑褐色シルト | c-c' EB21
a-a' EB21と同じ。
EB24
b-b' EB23と同じ。
EB22
a-a' EB22と同じ。 |
| b-b'
EB24 | d-d'
EB23 |
| 1 10YR3/1 黒褐色シルト
2 10YR2/1 黑シルト
3 10YR3/1 黑褐色シルト
4 10YR3/1 黑褐色シルト | b-b' EB23と同じ。
EB22
a-a' EB22と同じ。 |
| EB23 | |
| 1 10YR3/1 黑褐色シルト
2 10YR3/2 黑褐色シルト
3 10YR2/1 黑シルト | 1 10YR3/2 黑褐色シルト
2 10YR3/1 黑褐色シルト
3 10YR2/1 黑褐色シルト |
| 1 10YR3/1 黑褐色シルト
2 10YR3/2 黑褐色シルト
3 10YR2/1 黑シルト | 1 10YR3/2 黑褐色シルト
2 10YR3/1 黑褐色シルト
3 10YR2/1 黑褐色シルト |
- 土壤描述：
- 1 10YR2/1 黒褐色シルト しまり強。粘性やや強。黒褐色(3/2)シルトブロック(大)少量含む。
 - 2 10YR2/2 黑褐色シルト しまり中。粘性やや強。暗褐色シルトブロック(小)微量含む。
 - 3 10YR3/2 黑褐色シルト しまり中。粘性中。暗褐色シルトブロック斑状に混じる。
 - 4 10YR4/1 にぶい黄褐色シルト しまりやや弱。粘性弱。黒褐色ブロック斑状に混じる。
 - 1 10YR3/1 黑褐色シルト しまり強。粘性やや有り。10YR3/2斑状に少量混じる。細微量。
 - 2 10YR2/1 黑シルト しまり・粘性弱。10YR3/2黑褐色シルト斑状に少量混じる。
 - 3 10YR3/1 黑褐色シルト しまり強。粘性弱。10YR3/2黑褐色シルト斑状に中程度混じる。
 - 4 10YR3/1 黑褐色シルト しまり強。粘性やや弱。10YR3/2黑褐色シルト少量含む。
 - 1 10YR3/2 黑褐色シルト しまり強。粘性やや弱。10YR3/2黑褐色シルト斑状に少量混じる。炭化物微量含む。
 - 2 10YR3/1 黑褐色シルト しまり強。粘性弱。10YR3/2黑褐色シルト斑状に中程度混じる。
 - 3 10YR2/1 黑シルト しまり有り。粘性やや弱。10YR3/2黑褐色シルト少量混じる。

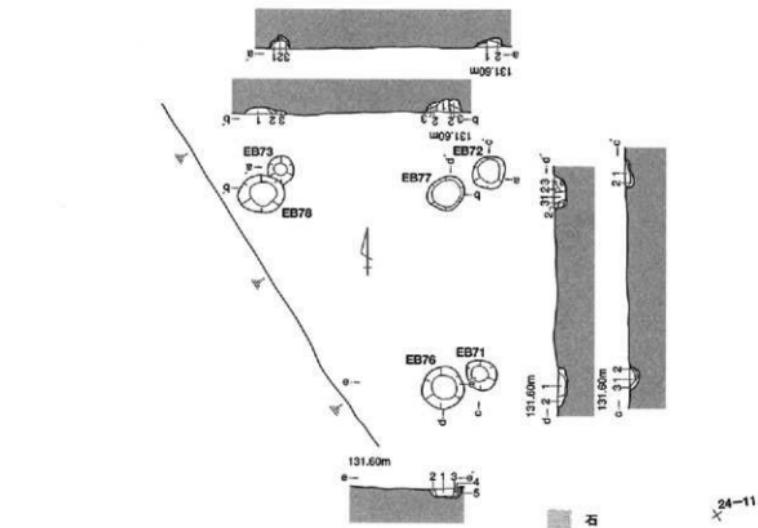
第48図 2次SB20遺跡



第49図 2次SB30建物跡



第50図 2次SB50建物跡



a-a'
EB72
1 10YR2/2 黒褐色シルト 細砂少々混じる。しまり・粘性弱い。
2 10YR2/3 黒褐色細砂シルト しまり・粘性弱い。

EB73
1 10YR2/3 黒褐色細砂シルト しまり・粘性弱い。
2 10YR2/3 黑褐色細砂シルト しまり・粘性弱い。やや変い感じ。
3 10YR2/3 黑褐色細砂シルト しまり・粘性弱い。やや黒い感じ。

b-b'
EB77
1 10YR2/2 黑褐色シルト しまりやや有り。粘性弱い。
2 10YR2/3 黑褐色シルト しまりやや有り。粘性弱い。
EB78
1 10YR2/1 黑褐色シルト しまり有り。粘性やや弱い。
2 10YR2/3 黑褐色シルト しまり・粘性弱い。
3 10YR2/2 黑褐色シルト しまりやや弱い。粘性弱い。

c-c'
EB71
1 10YR3/1 黑褐色シルト しまり・粘性弱い。
2 10YR2/2 黑褐色シルト 細砂少々混じる。しまり・粘性弱い。
3 10YR2/3 黑褐色細砂シルト しまり・粘性弱い。

EB72
1 10YR2/2 黑褐色シルト 細砂少々混じる。しまり・粘性弱い。
2 10YR2/3 黑褐色細砂シルト しまり・粘性弱い。

d-d'
EB76
1 10YR3/1 黑褐色シルト しまりやや弱。粘性弱い。
2 10YR2/2 黑褐色シルト しまりやや弱。粘性弱い。
EB77
1 10YR2/2 黑褐色シルト しまりやや有り。粘性弱い。
2 10YR3/1 黑褐色シルト 1に同じだが、黒っぽさがややおとる。
3 10YR3/1 黑褐色シルト しまりやや有り。粘性弱い。

e-e'
EB76
1 10YR3/1 黑褐色シルト しまりやや弱。粘性弱い。10YR3/2黒褐色シルトまばらに混入。
2 10YR2/2 黑褐色シルト しまりやや弱い。粘性弱い。
3 10YR2/3 黑褐色シルト しまり・粘性弱い。10YR3/1まばらに混入。
4 10YR3/1 黑褐色シルト しまり強。粘性やや弱い。
5 10YR2/2 黑褐色シルト しまりやや弱い。粘性弱い。

第51図 2次SB70・75建物跡

・奈良・平安時代のその他の遺構

3次 S X 18 (第52図) 調査区の南区に位置する、17~19~20~21グリッドで検出された。検出された遺構の規模については次のような。平面形は略方形を呈する。西側は調査区外にかかり不明である、さらに北側は一段低くなっている。このため全体の形を窺うことはできない。現存の長軸は約5.3m、短軸は約4.1m、検出面からの深さは約40cmである。覆土の様子は3層である。壁の立ち上がりは急であり、床面は凹凸が見受けられる。床面にピットは存在しない。出土遺物としては須恵器壺・壺、土師器長胴壺・小型壺・の各器種がある（第103図）。

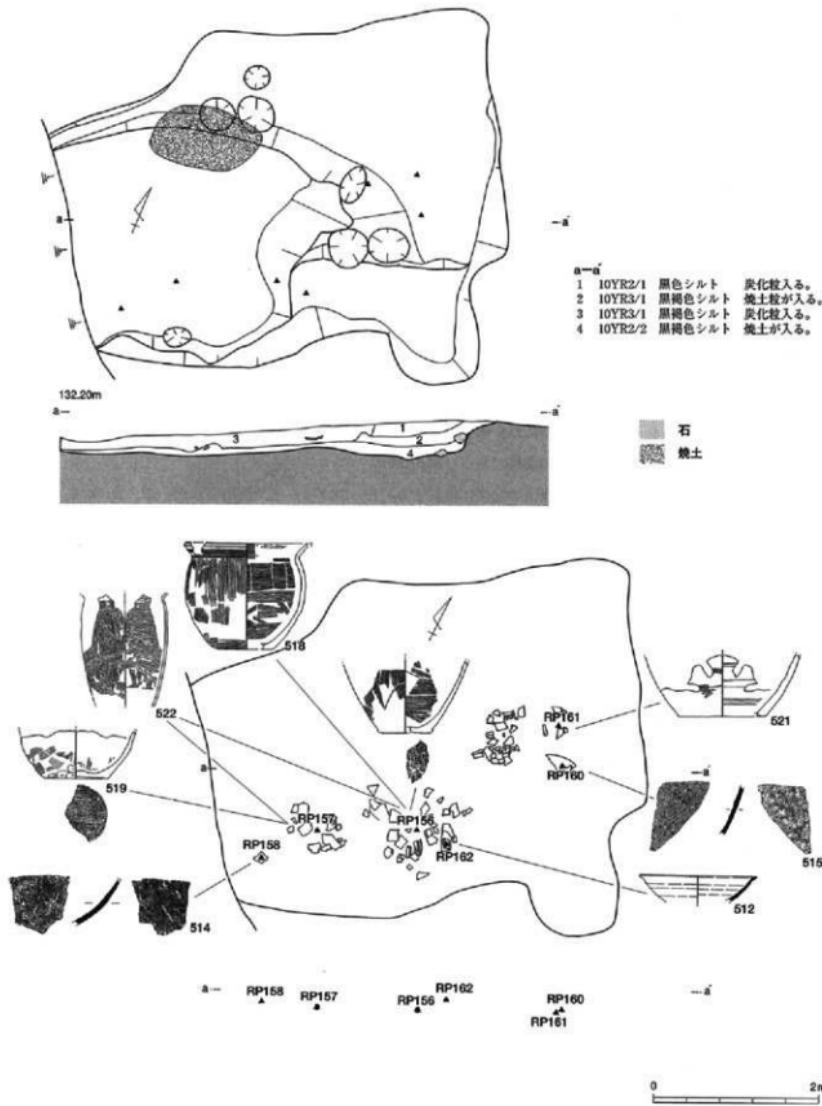
3次 S X 26 (第53図) 調査区の北区に位置する、19~20~29~30グリッドで検出された。ここは、発掘区の高台部分にあるところであり、付近には平安時代の堅穴住居跡がある。検出された遺構の規模については次のような。平面形は不整形を呈する。いくつかの遺構が絡み合って存在しているものであると考えられるが、全体の形を窺うことはできない。現存の長軸は約6.0m、短軸は約4.5m、検出面からの深さは約20cmである。覆土の様子は3層である。壁の立ち上がりは緩やかであり、床面は凹凸が激しく見受けられる。床面に明確なピットは存在しない。出土遺物としては須恵器蓋の器種がある（第103図）。

3次 E U 1 埋設土器 (第54図) 調査区の北区に位置する、19~31グリッドで検出された。ここは、発掘区のやや小高い部分にあるところであり、付近には奈良・平安時代の堅穴住居跡である、S T 16堅穴住居跡、さらには性格不明遺構であるS X 20がある。検出された遺構の規模については次のような。掘り方の平面形は楕円形を呈する、長軸は約1.4m、短軸は約50cm、検出面からの深さは約20~30cmである。掘り方は割合とギリギリに掘ってある。壁の立ち上がりは緩やかに埋設土器の形に沿っている。床面は器形に合わせて窪んでいる。

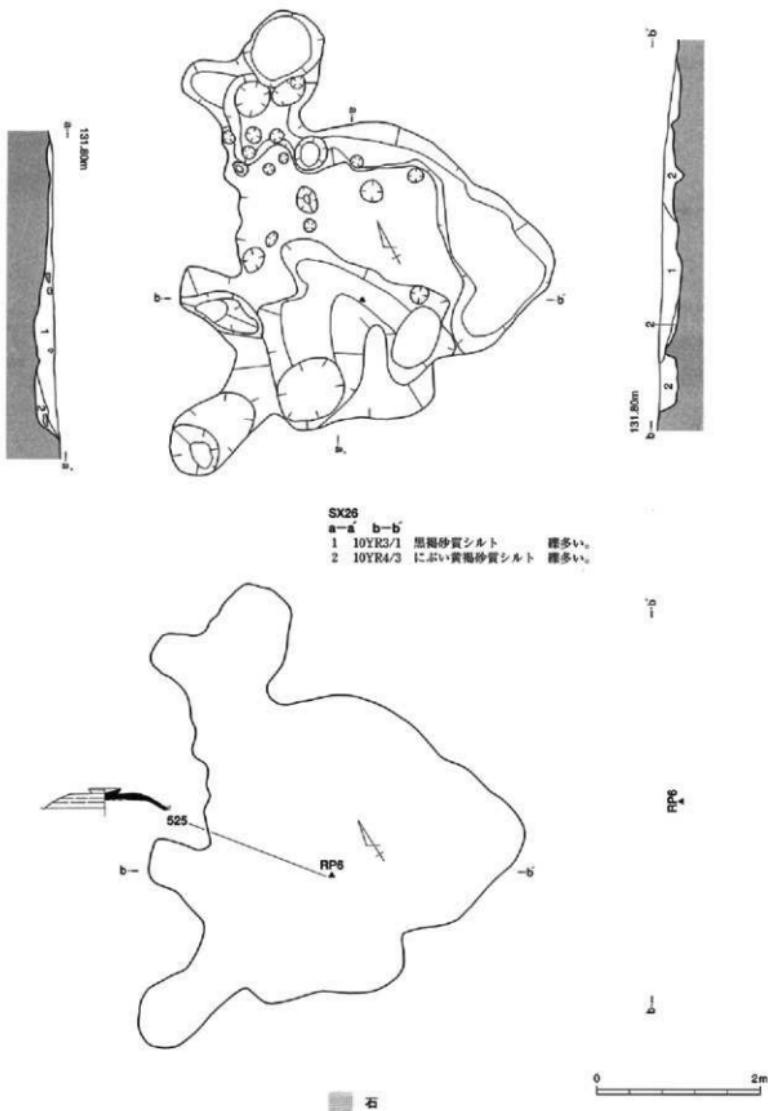
こうした埋設土器は本遺跡の調査区からは1例のみの出土であった。埋設された土器は、長胴壺が2つと、その内部には土師器壺が正位の状態で埋設されていた。土師器壺の内部には目立った遺物はなかった。土師器長胴壺はR P 44とR P 45である（第54図）。このふたつの長胴壺が、口縁を合わせて埋設されていた。出土したときには、R P 44は器体の半分ほどが失われていた。これは、バックホーによる、調査区の粗掘り段階のことであると思われる。この中に、底部糸切りの土師器壺が存在していた。一方R P 45は、完形で存在していた。ふたつの土師器長胴壺の口縁部は、密着していた。周囲に存在する、S T 16堅穴住居跡、さらには性格不明遺構であるS X 20との関係は不明である。

**3次 E U 1
埋設土器**

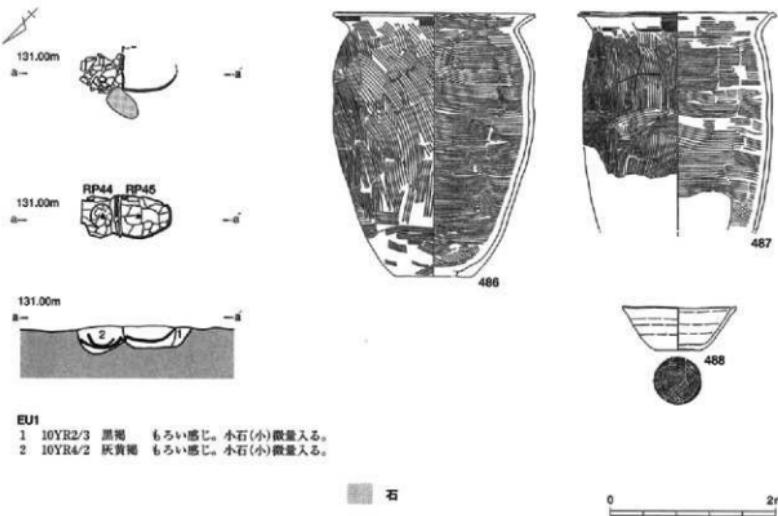
**底部糸切りの
土師器壺**



第52図 3次SX18遺物出土状況



第53図 3次SX26遺物出土状況



第54図 3次EU1埋設土器遺物出土状況

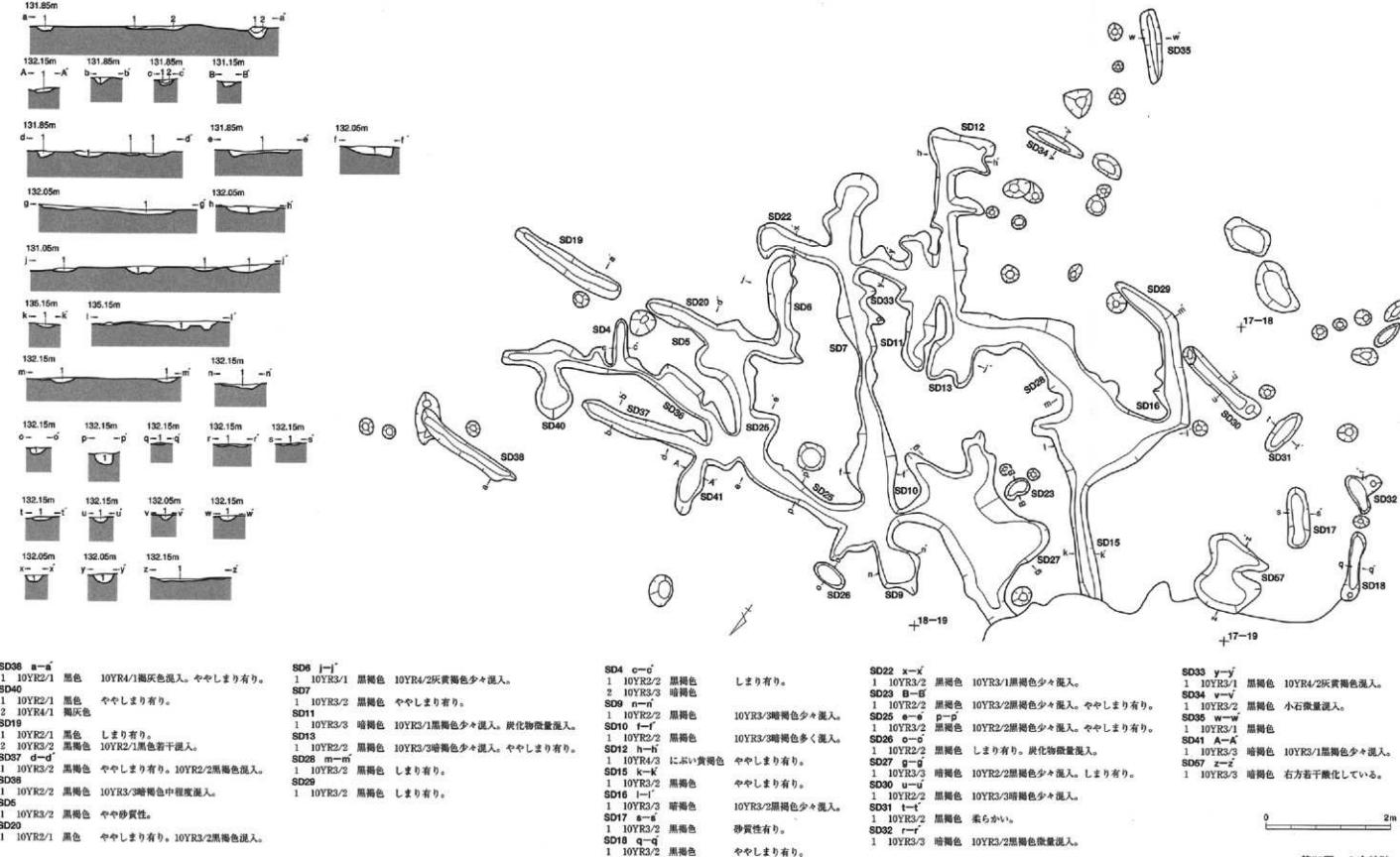
・奈良・平安時代の歯跡

3 次歯跡 3次歯跡（第55図） 調査区の南区に位置する、17~19-18~20グリッドで検出された。歯跡と考えられる細長い溝が連続して検出されたため、この場所は畑の可能性がある。この場所は、発掘区の小高い場所にあたり、北側には最大巾約10m、同じく南側には最大巾約15mを測る標層がある。この標層は河川の痕跡と考えられる。こうした観察からすれば、二つの小河川の間に挟まれた場所に遷地しているところであるととらえられる。付近にはST19堅穴住居跡がある。なお、歯跡の小河川のうち北側のものは、ST19堅穴住居跡を迂回しているような状況が観察出来る。歯跡はこの、北側と南側の小河川に挟まれた位置にあり、さらには、小河川を飛び越えて、その外側に分布することはないことから。当初から、小河川に挟まれた場所に位置していたとも考えられる。とすれば、北側の小河川はST19堅穴住居跡を迂回しているような状況が見受けられるため、ST19堅穴住居跡とこの小河川とは同時期に存在した可能性があり、歯跡とも併存する可能性がある。

検出された歯跡の規模については次のようになる。巾は大体が約20~30cm内外であり、底面は丸く掘られている。覆土は一層であることが多い。軸方向ははっきりしないものの、およそ

4 方向 4方向が確認できる。それぞれをA歯跡、B歯跡、C歯跡、D歯跡とする。

A歯跡 A歯跡はグリッドの北軸に対して、西へ10°の傾きをもって平行して並まれている遺構である。SD39・SD40・SD44・SD41・SD21・SD7・SD14・SD13・SD15・SD29・



第55図 3次試験

S D55・S D17・S D31・S K70・S D18、などが含まれる。歯の間は2.0mから3.0mであり、間にはそれよりも短い約50cmほどの溝も見ることができる。

B歯跡はグリッドの北軸に対して、西へ72°の傾きをもって平行して営まれている遺構である。S D39・S D19・S D37・S D20・S D13・S D34・S D57などが含まれる。歯の間は2.0mから3.0mであり、間にはそれよりも短い約50cmほどの溝も見ることができる。歯跡はグリッドの北軸に対して、西へ20°の傾きをもって平行して営まれている遺構である。歯の間は2.0mから3.0mであり、間にはそれよりも短い約50cmほどの溝も見ることができる。

C歯跡はグリッドの北軸に対して、西へ102°の傾きをもって平行して営まれている遺構である。S D40・S D27・S D28・S D13・S D24・S D12などが含まれる。歯の間は2.0mから3.0mであり、間にはそれよりも短い約50cmほどの溝も見ることができる。

D歯跡はグリッドの北軸に対して、西へ52°の傾きをもって平行して営まれている遺構である。S D37・S D36・S D29・S D30などが含まれる。歯の間は2.0mから3.0mであり、間にはそれよりも短い約50cmほどの溝も見ることができる。これらの歯跡は、恐らく50cm前後の間隔で営まれていたものであろうか。

B 歯 跡

C 歯 跡

D 歯 跡

4 中世の遺構

・中世の方形堅穴状遺構

3次SK1・10土坑（第56図） 調査区の南区に位置する、18~19-9グリッドで検出された。ここは、発掘区のやや小高い部分にあたるところであり、付近には中世の遺構がある。検出された遺構はSK1・SK10の2つの土坑が検出された。

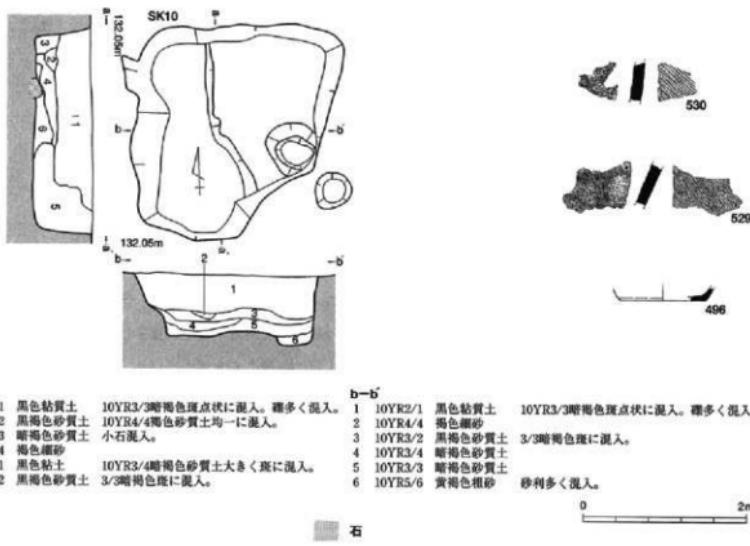
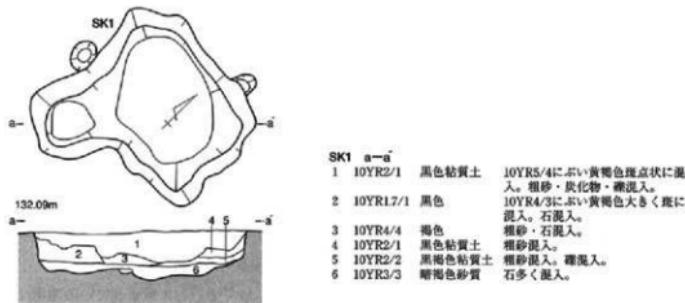
3次SK1・10
土 坑

検出されたSK1土坑の規模については次のようになる。平面形は方形を呈するが本来は南側に取り付く小土坑が存在するものであろうと考えられる、この小土坑を除いたものの規模は、長軸は約2.2m、短軸は約1.7m、検出面からの深さは約55cmである。覆土の様子は4層である。壁の立ち上がりは急であり、床面は中央がすり鉢状に凹んでいる。出土遺物としては何も検出されなかった。周囲には土坑の壁面に沿って、すり鉢状の凹みが存在する。これは、上部構造に関係して営まれるものであろうか。

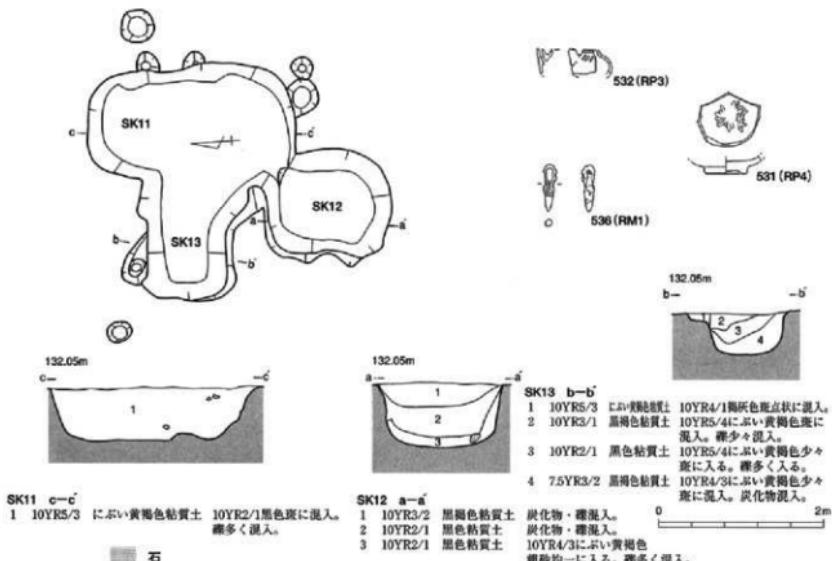
検出されたSK10土坑の規模については次のようになる。平面形は方形を呈する。土坑の規模は、長軸は約2.5m、短軸は約2.5m、検出面からの深さは約70cmである。覆土の様子は6層である。壁の立ち上がりは急であり、床面は土坑の西側が土坑の東側よりも凹んでいる。出土遺物としては土坑の覆土中より、中世須恵系陶器大甕の破片が2つと、ヘラ切り調整を持つ須恵器の坏底部が検出された。この土坑においても、SK1土坑と同様に、周囲には土坑の壁面に沿って、土坑の内側と外側に、すり鉢状の凹みが存在する。これは、上部構造に関係して営まれるものであろうか。

3次SK11・12・13土坑（第57図） 調査区の南区に位置する、18~19-7~8グリッドで検出された。ここは、発掘区の一番と南側にあたるところであり、付近には無数の小ビット群が

3次SK11・
12・13土坑



第56図 3次SK1・10土坑遺物出土状況

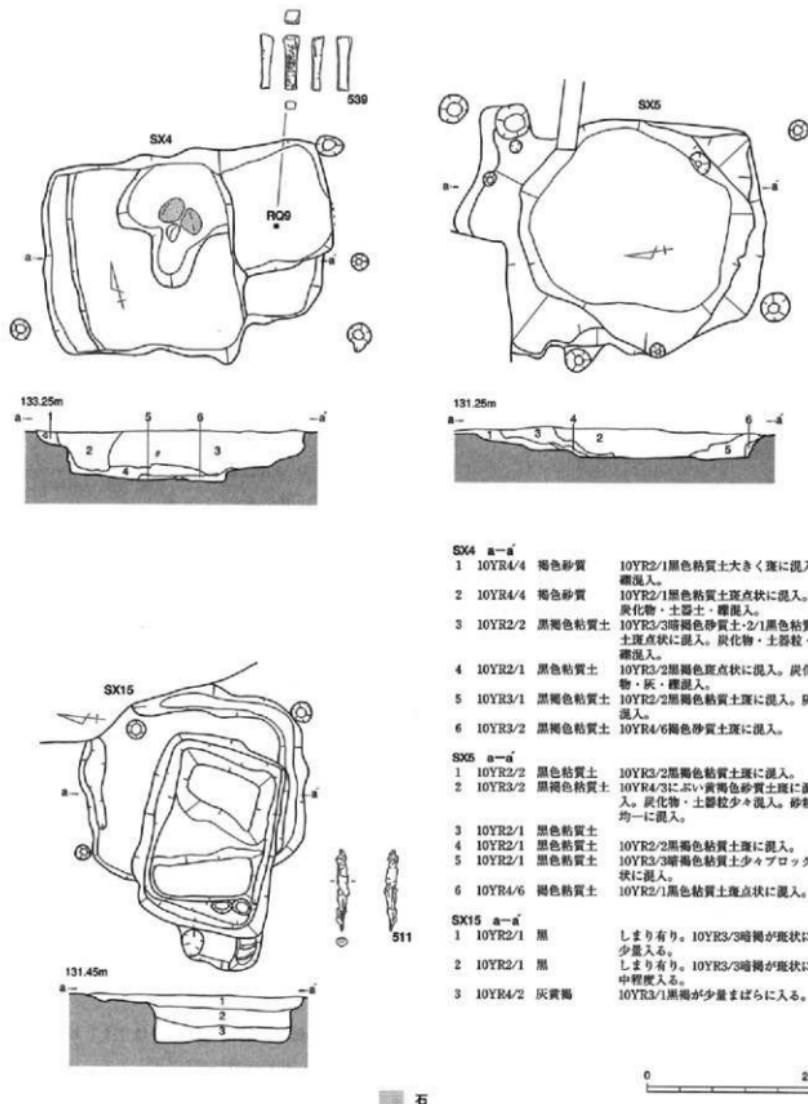


第57図 3次SK11・12・13土坑遺物出土状況

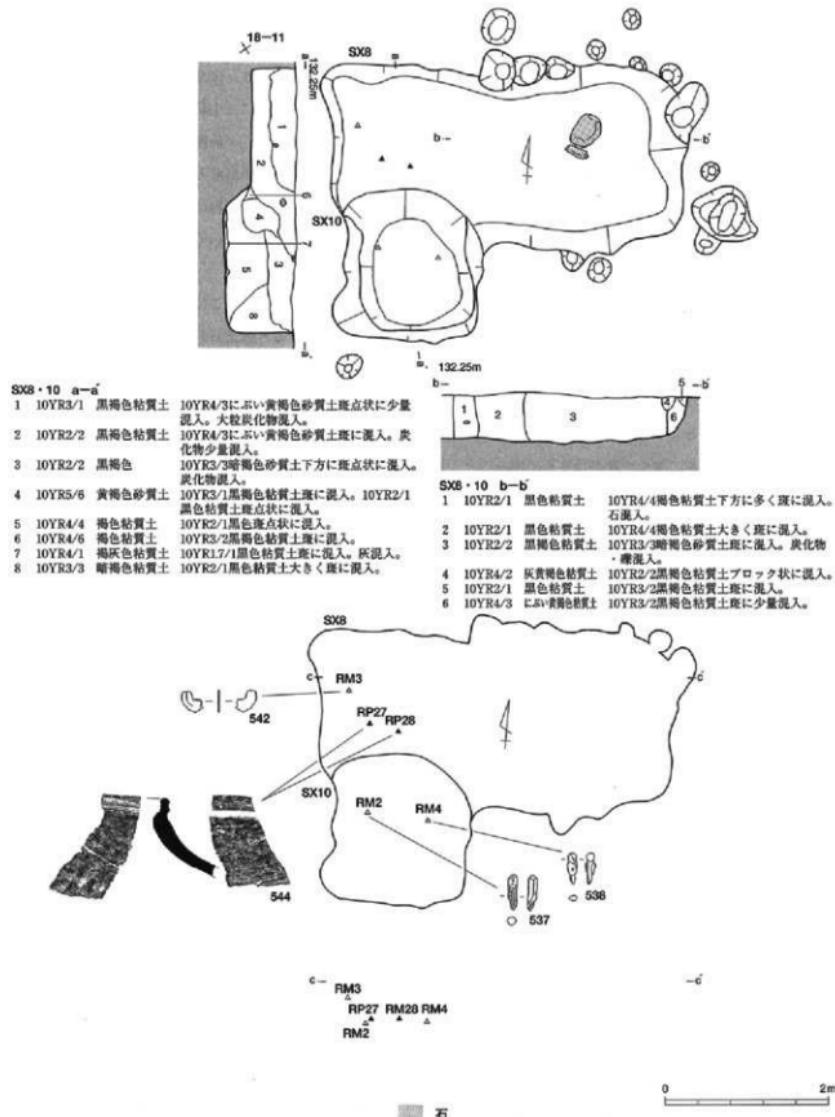
検出された。これらの小ピット群は、遺構の構成を探るために、配列を検討し、掘立柱建物跡として遺構を検討しようとしたが、配列に規則性を窺うことはできなかった。検出された土坑のそれぞれの規模については次のような。なお、この土坑はSK11、SK12、SK13の3基の土坑から成り立っている。切り合いを検討すると、遺構は大きくSK11、SK12土坑と、SK13土坑とに分けることができる。SK11とSK12土坑は併存し、SK13土坑はこの後に營まれているものととらえたい。

SK11土坑の平面形は長方形を呈する、長軸は約2.5m、短軸は約1.3m、検出面からの深さは約70cmである。覆土の様子は一層である。覆土は地山のブロックが混在するような土層であり、一気に埋め戻されたものであることがわかる。壁の立ち上がりは急であり、床面は礫層であるが、比較的の平坦である。床面にはピットが存在しない。注目すべきことに、土坑の周辺に小ピットが数個、壁に沿ったように存在する。これらは上部構造を支える柱の痕跡と考えることもできる。こうした構造は他の土坑とも共通する。このSK11土坑からは、見込みにスタンプのある青磁蓮弁文碗、古瀬戸水滴、鉄釘が出土している。

SK12土坑の平面形は長方形を呈する、長軸は約1.5m、短軸は約1.0m、検出面からの深さは約50cmである。覆土の様子は3層である。壁の立ち上がりは急であり、床面は礫層であるが、比較的の平坦である。床面にはピットが存在しない。ここでも注目すべきことに、土坑の周辺に小ピットが数個、壁に沿ったように存在する。これらは上部構造を支える柱の痕跡と考えること



第56図 3次SX4・5・15遺物出土状況



第59図 3次SX8-10遺物出土状況

ともできる。SK 14に關係する出入り口の可能性も存在する。出土遺物は存在しない。

S K 3 SK 3 の平面形は長方形を呈する、長軸は約1.5m、短軸は約1.3m、検出面からの深さは約80cmである。覆土の様子は3層である。壁の立ち上がりは急であり、床面は輝層であるが、比較的平坦である。床面にはビットが存在しない。注目すべきことに、土坑の周辺に小ビットが数個、壁に沿ったように存在する。これらは崩れてしまつておらず、平面図には十分反映できないが、西側壁の二つの凹みがそれにあたる。上部構造を支える柱の痕跡と考えることもできる。こうした構造は他の土坑とも共通する。このSK 13土坑からは、遺物は出土していない。

3 次 S X 4・5・15 (第58図) 調査区の南区に位置する場所からいくつかの、正確不明遺構が検出されている。それぞれについて次のようにある。

S X 4 S X 4 正確不明遺構は22~23-16~17グリッドで検出された。ここは、発掘区の地山がやや低くなる部分にあたるところであり、付近には中世に属すると考えられる小ビットが無数にある。これらは併走しており、当初は塚を構成する柱列ではないかと考えたが、そのいずれもが浅く、塚を構成する柱列ではないと考える。検出された遺構の規模については次のようにある。平面形は方形を呈する、長軸は約4.5m、短軸は約2.5m、検出面からの深さは約60mである。覆土の様子は底面の20cmほどが数層に別れ、それ以降の覆土は一層である。これは底面が埋まっていた後に、一気に人為堆積で埋め戻された状態を想定することができる。壁の立ち上がりはしっかりと急であり、床面は平坦である。床面には主柱穴を構成するものと考えられるビットなどは存在しない。底面には、一段深い部分が北東側に存在する。この中には人頭大の礫が3つ入っていた。ここでも注目すべきことに、土坑の周辺に小ビットが4個、壁に沿ったようにとやや離れたところに存在する。全体的に見れば、S X 4 遺構を方形に取り囲むように存在している状態を観察することができる。これらは上部構造を支える柱の痕跡と考えることもできる。また、他の遺構と同様に、東側には底面よりもやや浅くなる部分が取り付く格好になっている。これは、中央の方形部分に対しての出入り口の可能性も存在する。出土遺物は方形部分に取り付く東側の一段高い部分から磁石が一点のみ出土している。他の遺物は存在しない。

S X 5 S X 5 正確不明遺構は18~19-11~12グリッドで検出された。ここは、発掘区の地山が高くなる部分にあたるところであり、付近には、古墳時代と奈良平安時代に属する竪穴住居跡がある。検出された遺構の規模については次のようにある。平面形は不整円形を呈する、半径は約3.1m、検出面からの深さは約30cmであり、他の土坑に較べて浅い。覆土の様子は数層に別れ、中央部の覆土は一層である。これは側面崩落しながら埋まっていた後に、一気に人為堆積で埋め戻された状態を想定することができる。壁の立ち上がりは緩い、床面は平坦である。床面には主柱穴を構成するものと考えられるビットなどは存在しない。ここでも注目すべきことに、土坑の周辺に小ビットが5個、壁に沿ったようにとやや離れたところに存在する。全体的に見れば、S X 4 遺構を梯形に取り囲むように存在している状態を観察することができる。これらは上部構造を支える柱の痕跡と考えることもできる。出土遺物は存在しない。

S X 1 5 S X 15 正確不明遺構は22~23-16~17グリッドで検出された。ここは、発掘区の地山がやや

低くなる部分にあたるところであり、付近には中世に属すると考えられる小ビットが無数にある。平面形は方形を呈する、長軸は約2.2m、短軸は約1.8m、検出面からの深さは約60cmである。覆土の様子は3層になる。壁の立ち上がりはしっかりとして急であり、床面は平坦である。床面には主柱穴を構成するものと考えられるビットなどは存在しない。底面には、一段深い部分が長軸に沿って両側に存在する。西側隅には2つの小ビットがある。ここでも注目すべきことに、土坑の周辺に小ビットが3個、やや離れたところに存在する。これらは上部構造を支える柱の痕跡と考えることもできる。また、他の遺構と同様に、西側には底面よりもやや浅くなる部分が取り付く格好になっている。これは、中央の方形部分に対しての出入り口の可能性も存在する。こうした場合には西側隅には2つの小ビットは、梯子の受けとして想定が可能かと思われる。出土遺物は方形部分から釘が一点のみ出土している。他の遺物は存在しない。

3次S X 8・10（第59図） 調査区の南区に位置する、18~19-11グリッドで検出された。ここは、発掘区のやや高い部分にあたるところであり、付近には古墳時代の堅穴住居跡がある。S X 8とS X 10は切り合っているが、断面図の観察によればS X 10をS X 8が切っていることになる。最初方形のS X 10遺構が存在し、その後長方形のS X 8遺構が營まれたものと考えられる。

検出されたS X 10の規模については次のようになる。平面形は方形を呈する、主軸は約1.8m、検出面からの深さは約90cmである。覆土の様子は数層にわかれれるが、一気に埋め戻された様子が観察できる。壁の立ち上がりは急であり、床面は平坦である。床面にはビットが存在しない。主柱穴を構成するものと考えられるものもない。

S X 8の規模については次のようになる。平面形は方形を呈する、長軸は約4.4m、短軸は約2.3m、検出面からの深さは約60cmである。覆土の様子は継に数層になることから、一気に埋め戻された状態が観察できる。壁の立ち上がりはしっかりとして急であり、床面は平坦である。床面には主柱穴を構成するものと考えられるビットなどは存在しない。底面には、2個の石が存在する。土坑の周辺に小ビットが壁上面に沿って連続して並ぶ、またやや離れたところに数個のビットが存在する。これらは上部構造を支える柱の痕跡と考えることもできる。他の遺構と同様に、S X 10を出入り口と見ることもできようが、S X 8の床よりも深い床を持つことからすれば出入り口の存在は不明と言わざるを得ない。ただし、S X 8の土層断面を観察すると、S X 10に向かって斜めの落ち込みも見ることができるため、これが出入り口の可能性もある。出土遺物はS X 10から釘が2本、方形部分であるS X 8から壺器系中世陶器破片が一点、古鏡が一点のみ出土している。他の遺物は存在しない。

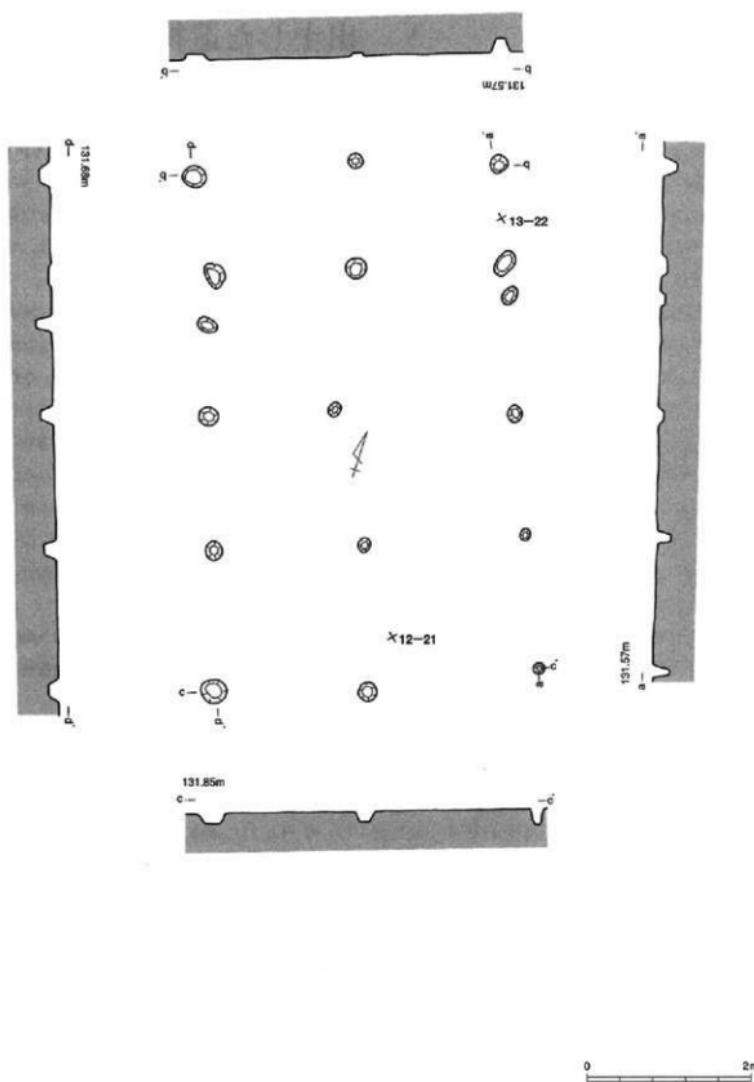
3次S X 8・10

S X 1 0

S X 8

・中世の掘立柱建物跡

3次SB1
建物跡 3次SB1建物跡（第60図） 調査区の南区に位置する、21～22-11～14グリッドで検出された。付近にはSX4の中世の遺構がある。検出された掘立柱建物跡の規模については次のような。全体プランの平面形は恐らく長方形を呈する、5間×2間の掘立柱建物跡である。1間の間尺は1.8m、1.2m、0.6mであり、それぞれが組み合わされている。全体プランの長軸は約6.3m、短軸は約3.8m、検出面からの柱の掘り込みの深さは約15cmであり、浅い。出土遺物としては、何も出土しておらず、不明である。



第60図 3次SB 1 建物跡

V 出土した遺物

萩原遺跡から検出された遺物について、次に述べることとする。萩原遺跡からは、古墳時代前期、中期、奈良・平安時代、中世の各時期の遺構が検出され、これに伴って遺物も出土した。

ここで図化した遺物は、古墳時代前期、古墳時代中期、奈良・平安時代、中世、さらには近世の遺物である。本来は資料の提示は完形に近い資料が望ましいが、本遺跡では破片資料も多かったため、破片資料であっても全形をうかがい知ることが出来る資料については、できるだけ図化することに務めた。

古墳時代前期の遺物は住居跡に伴って出土することが大半であった。一部には土坑からの出土も含まれてはいる。古墳時代中期の遺物は2棟のみ検出された、住居跡から出土した一括性の高い資料である。ほとんどの遺物は1棟から折り重なったように出土している。奈良・平安時代の遺物は、これも住居跡に伴って出土した。一部には廻跡とした、溝跡から出土したものもある。時期的には8世紀の半ば前後から9世紀の半ばまでの遺物がほとんどである。住居跡にともなった遺物は一括性がたかいものと思われる。中世の遺物は土坑や擾乱された部分からの出土が多かった。中には国産の須恵器系中世陶器、壺器系中世陶器、瀬戸焼などが含まれ、景德鎮系の輸入磁器がこれに加わる。時期的には12世紀後半から、14世紀代にわたるものと思われるが、遺構の造営時期の中心はほぼ鎌倉時代とおさえておきたい。さらには近世の遺物である、擂鉢や陶器、肥前磁器などが存在する。

また、第61図～第105図までの挿図に示した各遺物に添えてある番号は、第9図～第60図の遺構毎に示した遺物の図に添えてある番号と一致するので、出土状態や遺物の詳細な検討をする際には参照されたい。

遺構外出土遺物 遺構外出土遺物（第61～65図） 遺構以外から出土した遺物は次のものがある。縄文時代に属する遺物としては、両側辺に加工痕を持つ石器（82）。古墳時代前期に所属する遺物としては、器台（1）、高杯（2～6）、小型壺（7）、壺（10、11）、壺または甕（8、9、12～23）。古代に属する遺物としては、須恵器壺（25～49、54）、須恵器甕（50～53）、双耳壺（55）、土師器内黒壺（56～58）、土師器高台付壺（59）、須恵器甕（60～64）、須恵器捏鉢（65）、円面鏡（66）、須恵器横瓶（67）、須恵器鍋（69）、土師器小型壺または長胴甕（70、71）、灰釉陶器（72）。中世に属する遺物としては、壺器系中世陶器（68、73、74）、須恵器系中世陶器（75）、青磁箇蓋弁文甕（76）、瀬戸灰釉瓶（77）、染付皿（81）。近世に属する遺物としては、瓦器（24）、焼台（79）、近世磁器碗（80）、擂鉢（78）。がある。

次に特徴的な遺物について、述べていきたい。1は土師器器台である、縦位の調整が施され、破片で不明ではあるが、3単位の貫通孔を持つ。9は土師器壺の破片であると考えられる。口縁部から頸部にかけて屈曲する段を有し、下端には連続した刻みが施されている。24は瓦器で

ある可能性がある。須恵器坏は、高台を持つものと持たないものがある、それぞれに底部切り離しが所謂糸切のものと、ヘラ切のものとがある。30はヘラ切の底部を持つ坏であるが、漆の塗膜が観察され、漆容器あるいは漆パレットとして再利用されている。59は土師器坏であるが、低平であり、小型化し高台を持つ、時期的に新しい要素を持つ。65の捏鉢は、本遺跡からの出土は一点のみであった、66の円面鏡は本遺跡からは数点が出土しているが、脚部ばかりの出土であり、海の部分の出土は見られない。特殊なものとして、72の灰釉陶器がある。おそらく中型の壺の破片であり、器壁は薄く、灰釉が施されている。中世陶器は、瓷器系と須恵器系の陶器がそれぞれ出土している。また、76の竜泉窯系鑄蓮弁文青磁碗、あるいは時期は下がるが16世紀代の染付皿などの、中国から輸入された磁器類がある。79は、近世陶器の焼台であるが、焼台が集落遺跡に持ち込まれるということは、焼台が融着したまま陶器とともに遺跡に搬入されてきたことになり、焼台を外すなどの製品化への作業の工程が、集落遺跡において行われていた可能性を指摘出来る。また焼台が集落遺跡に出土するという事態は、本遺跡以外でも見いだすことが出来る。こうした焼台はおそらく近世在地窯の発展に伴うものであろうと考えられ、本地域で近世在地窯の操業が本格化するのは、18世紀以降のことであるため、本遺跡の出土焼台もこの時期に伴うものであろう。

・古墳時代の住居跡出土遺物

2次S T 1住居跡出土遺物（第66・9図） 出土遺物としては高坏、壺などの各器種がある（第66図）。古墳時代に属するものとしては、器台（85）、高坏（86）、壺（83）、壺（84）がある。出土位置は、住居跡内部の溝跡などからであり、一括出土の状況は知ることはできない。83は単純口縁で、綫やかに外反し、比較的長く伸びている。頸部との繋ぎ目に一條の沈線が通っている。84は比較的薄手であり、口縁部が「く」の字状に屈曲する。おそらく球胴形の体部を持つものである。

2次S T 1
住居跡出土遺物

3次S T 2住居跡出土遺物（第67・10・11図） 出土遺物としては壺、壺、小型壺などの各器種がある（第67図）。出土位置は、竪穴住居跡の東南隅にある土坑からであり、集中しており、一括性が高いものと思われる。古墳時代に属する遺物としては、小型壺（92、95）、壺（93、96）、壺（94）。中世に属する遺物としては、須恵器系中世陶器（97）がある。

3次S T 2
住居跡出土遺物

3次S T 3住居跡出土遺物（第67・68・12・13図） 出土遺物としては古墳時代前期の壺・壺・壺などが存在する、一部には須恵器坏がある（第67・68図）。須恵器の坏の時代は、明らかに古代であり時期的に差がある。出土遺物の様相から、本竪穴住居跡は古墳時代前期である。古墳時代に属する遺物としては、器台あるいは高坏（98）、壺（100～105）、壺（109）、鉢（99）。古代に属する遺物としては、須恵器坏（107、108）、須恵器壺（106）がある。

3次S T 3
住居跡出土遺物

3次S T 5住居跡出土遺物（第69・14・15図） 遺物は床面に接している傾向が強く、床面直上から出土するものが多かった。出土遺物としては壺・壺・壺・小型壺・てづくね土器などの各器種がある。赤彩された高坏が注目される（第69図）。古墳時代に属する遺物としては、高坏（110、111、113）、小型壺（115）、壺（112、114）、壺（116、120）、壺（117、119、121～123）、

3次S T 5
住居跡出土遺物

手づくね土器（118）がある。110には朱彩が施されている。

**3 次 S T 6
住居跡出土遺物** 3次S T 6住居跡出土遺物（第70・16図）出土遺物としては、いずれも古墳時代のものである。高坏・壺・壺などの各器種がある（第70図）。この住居跡の理化学的年代測定の結果は、AMS法で 1770 ± 35 であった。3世紀を示すこの年代は考古遺物の年代観よりは古く算定されている。古墳時代に属する遺物としては、器台（124）、壺（125～128）、壺（130、131）、手づくね土器（129）がある。132～139は擾乱されていたため、本来的にこの住居跡からの出土かどうかは不明である。

**3 次 S T 8
住居跡出土遺物** 3次S T 8住居跡出土遺物（第71・17図）出土遺物としては壺・壺・壺などの各器種がある（第71図）。古墳時代に属する遺物としては、器台（140～143）、小型鉢（144）壺（145、146、150）、大型器台（149）。古代に属する遺物としては、須恵器壺（148）、須恵器壺（147）がある。ここからは、山形県内では類例に乏しい大型器台出土した。大型器台の類例としては、山形県内では山形市の山形西高遺跡（図105の548、549）から2個組で出土しているものがあるに過ぎない。本住居跡のから出土した大型器台は、被熱しており、かつバラバラな状態で出土した。

須恵器壺や須恵器壺は、擾乱により混入したものと思われる。

**3 次 S T 10
住居跡出土遺物** 3次S T 10住居跡出土遺物（第72・18・19・20図）出土遺物としては、壺・手づくね土器などの各器種がある（第72図）。古墳時代に属する遺物としては、壺（157、160）、壺（158、159）、手づくね土器（161～163）。がある。いづれもまとめて出土し、157の周辺に取り囲むように、161～163が置かれていた。本竪穴住居跡は焼失家屋であり、柱材樹種の分析はコナラ属クヌギ節とカエデ属であった。またAMS法による年代測定では1850年±30年と算定され、2世紀代の年代であった。これは考古遺物の年代観と齟齬をきたしている（付図参照）。

**2 次 S T 14
出土 遺 物** 2次S T 14出土遺物（第79・21図）出土遺物としては小型壺、壺などの各器種がある（第79図）。古墳時代に属する遺物としては、壺（236）、壺（235）、小型壺（234）。古代に属する遺物としては、須恵器壺（233）がある。

・古墳時代前期のその他の遺構

**3 次 S X 14
出 土 遺 物** 3次S X 14出土遺物（第102・22図）出土遺物としては壺、壺、小型壺、器台、高坏、手づくね土器などの各器種がある（第102図）。古墳時代に属する遺物としては、器台（500）、高坏（502）、小型壺（501、503）、壺（504）、壺（505～508）、手づくね土器（509、510）がある。500にも朱彩が施されていた。

1 古墳時代中期の遺構

・古墳時代中期の住居跡

**3 次 S T 4
住居跡出土遺物** 3次S T 4住居跡出土遺物（第73～76・23・24図）出土遺物としては、壺・壺・壺・高坏・小型壺・石製模造品などの各器種がある（第73～76図）。古墳時代に属する遺物としては、高坏（164、165）、壺（166～181）、小型壺（182～185）、鉢（186）、壺（195～203）小型壺（187～

189)、壺 (190~194)、石製模造品 (204)、凹石 (205) がある。遺物の出土状況としては、S T 4 - 2 穹穴住居跡の北側に集中して存在していた。床面から土とともに密集してい堆積している状況であり、遺物を避けながら発掘調査を実施していくのは困難であるほどであった。炭化物や焼土とともに混じっている部分もあった。また、出土した遺物は、完形品は少なく、ほとんどが破損品であった。164には使用によると考えられる黒色部分も存在した。出土遺物中には、復原したところほとんど完形になったものもあったので、完形品も含まれるのだろうが、注目すべき傾向である。また、一点のみであるが勾玉形の石製模造品が出土した、床面付近からの出土であった。山形県内では、こうした住居跡からの石製模造品の出土は少ない。こうしたセットは、従来山形県内の遺跡では類例に乏しかったが、事例の蓄積となった。また、188は小型壺として分類したものであるが、ほぼ完形で出土した。内部から外部へと刺突により、穿孔がなされている。205は縄文時代の凹み石であり、搅乱により混入した遺物であると考えられる。また、この時期の住居跡は本事例が一棟のみであり、調査区には類例を探すことはできなかった。これは、この時期の住居跡のありかたとも関係することなのであろう。

2 奈良・平安時代の遺構

・奈良・平安時代の住居跡

3次S T 7
住居跡出土遺物

3次S T 7 住居跡出土遺物（第72・77・25・26図） 出土遺物としては須恵器壺・土師器壺・壺・壺などの各器種がある（第72・77図）。一部古墳時代前期の遺物が混入する。古墳時代に属する遺物としては、壺（153）、鉢（154）、壺または壺（155、156）があるが、これらは混入したものであろうと考えられる。古代に属する遺物としては、須恵器壺（206）、須恵器鉢（207）、須恵器長頸瓶（208）、須恵器円面鏡（209、210）、土師器壺（211～216）がある。206の須恵器壺は底径が大きく、ヘラ切り離しであり、口径は低く口径は大きい。207の須恵器鉢は、底径が大きく、ヘラ切り離しであり、口径は大きい。本遺跡に類例は少ない。注目すべき遺物として、須恵器円面鏡がある。209は縦位の沈線が施され、いくつかの単位の窓を持つ円面鏡であろうと推定される。210は底部付近のみの遺存であるがこれまた、縦位の沈線が施され、いくつかの単位の窓を持つ円面鏡であろうと推定される。209・210とも別個体であろうと考えられる。土師器長胴壺も注目される。

3次S T 12
住居跡出土遺物

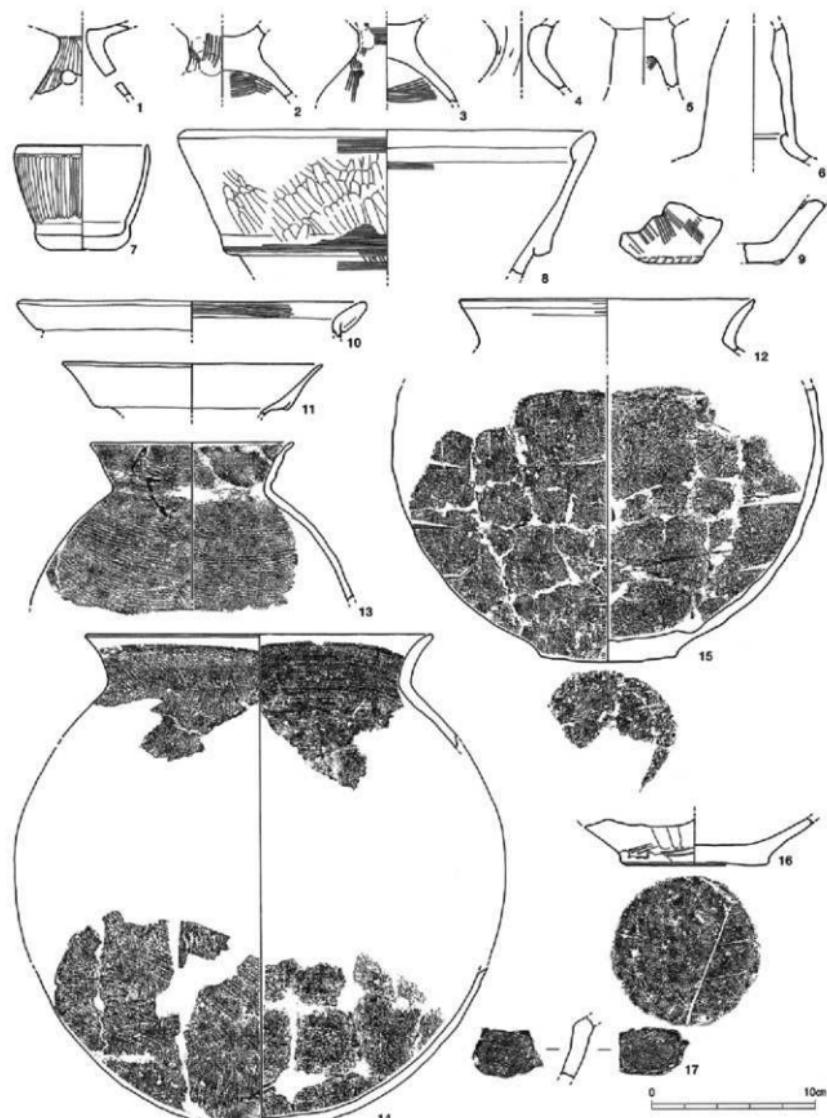
3次S T 12 住居跡出土遺物（第78・79・27・28図） 出土遺物としては土師器の壺・壺・壺、須恵器の壺、壺などの各器種がある（第78・79図）。遺物は、竪穴住居跡の東南の部分から大量に検出された。ここはカマドの右側手前的位置に当る。出土位置は、レベル的にも、ほとんど水平を呈している。こうしたことから活性が高いものと考えられる。古代に属する遺物としては、須恵器壺（227～229）、須恵器壺（230～232）、土師器壺（217～221、226）、土師器壺（222、225）、土師器壺（223、224）がある。227、228の須恵器壺は底径が大きく、ヘラ切り離しであり、口径は低く口径は大きい。特に228の須恵器壺は、高台を持ち、なおかつ丁寧な仕上げを施している。229の須恵器壺は上記のものと比較すると、やや小ぶりであり、底部周辺の調整は、ヘラケズリの跡が明瞭に残る。土師器壺類は、219は底部から体部に移行する辺に段を持ち、内部は黒色処理されている。218、219は底部から体部に移行する辺の段を持たない壺であり、内部は黒色処理されている。217は黒色処理されていない。225は大型の土師器壺である。特にここから出土した須恵器壺や土師器壺などの遺物は、従来山形盆地周辺では類例が少ない時期のものであり注目される。

2次S T 6・
9・80住居跡
出土 遺 物

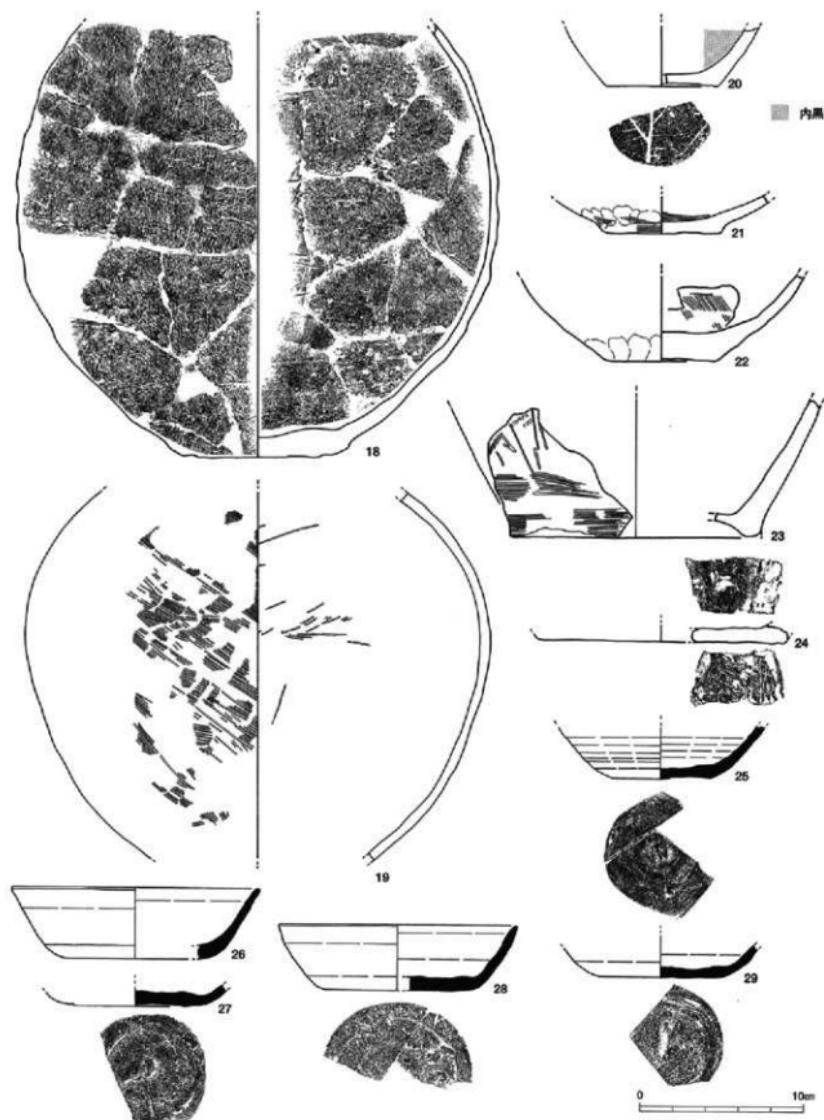
2次S T 6・9・80 住居跡出土遺物（第66・71・29・30図） S T 6 は北東側の壁の近くから須恵器壺の破片が出土した（第66図、第71図）。古墳時代に属する遺物は土師器壺（152）、古代に属する遺物としては、須恵器壺（87、151）、がある。S T 9 は須恵器壺（88）、S T 80 は須恵器壺（89）、土師器壺（91）がある。

2次S T 125
住居跡出土遺物

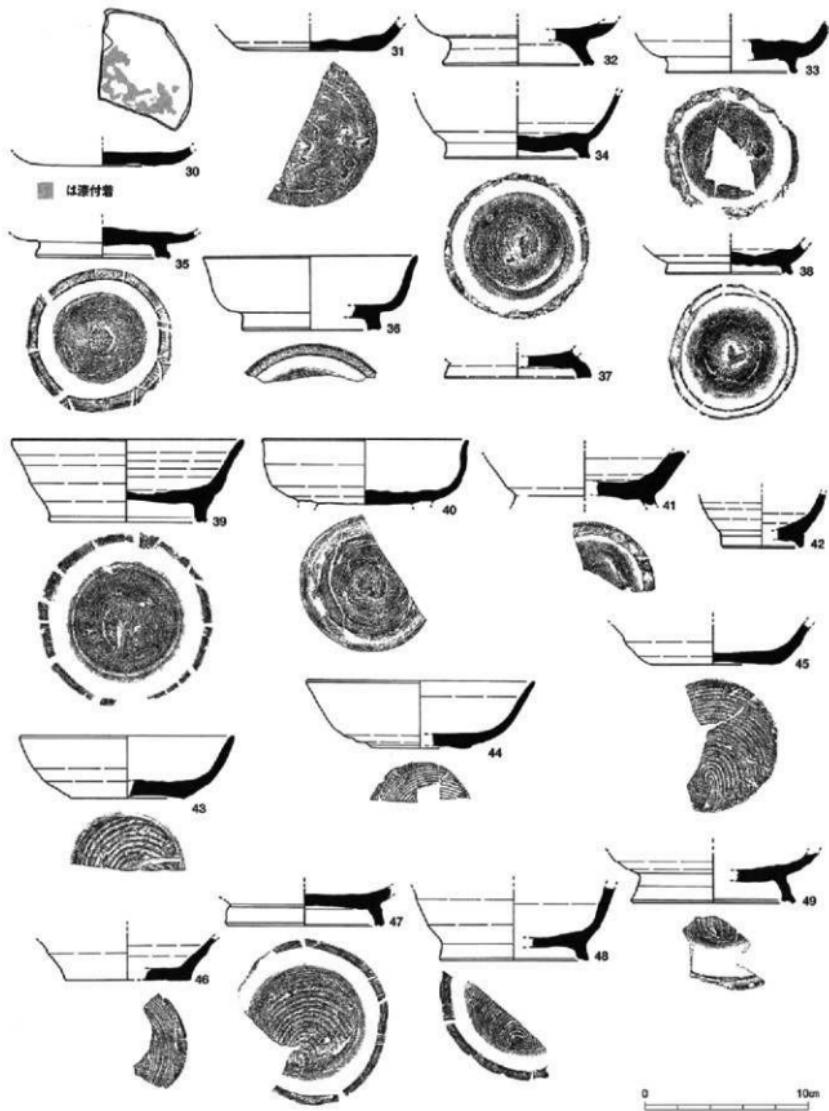
2次S T 125 住居跡出土遺物（第66・31図） 出土遺物としては須恵器壺の破片が床面から壁の立ち上がりにかけての場所から出土している（第66図）。古代に属する遺物としては、須恵器壺（90）がある。



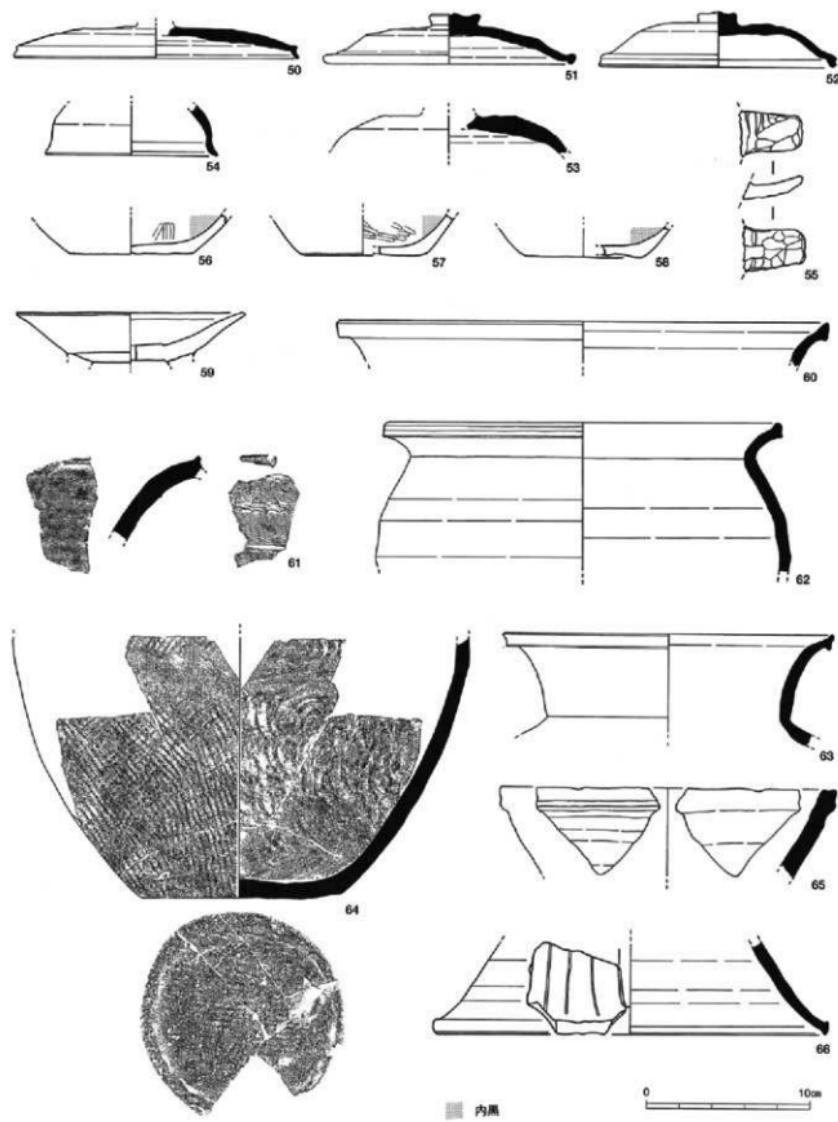
第61図 遺構外出土遺物（1）



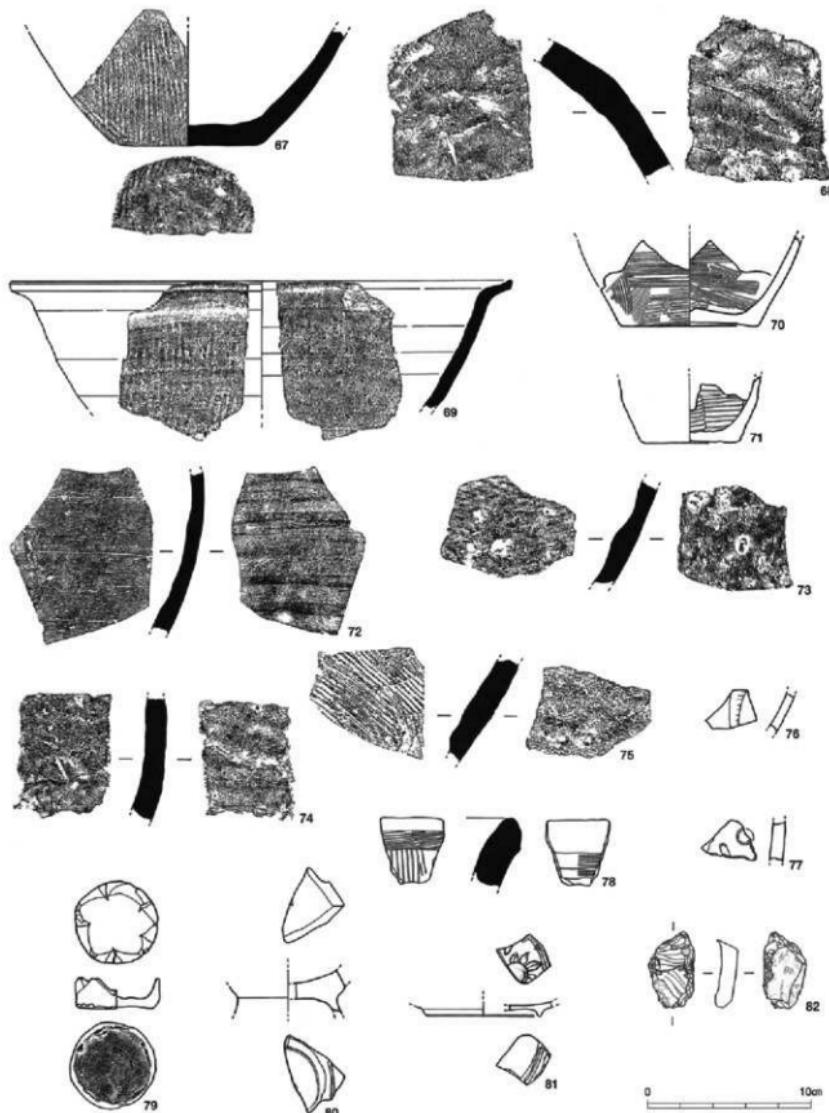
第62図 遺構外出土遺物（2）



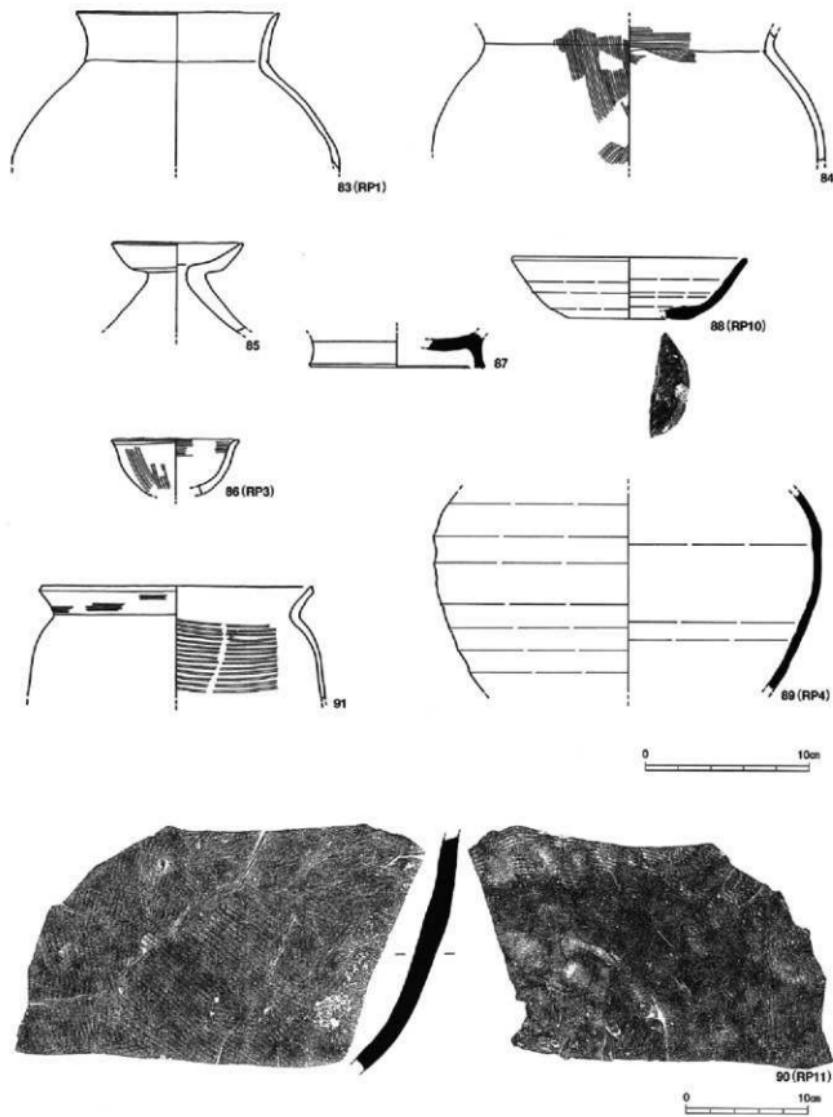
第63図 遺構外出土遺物（3）



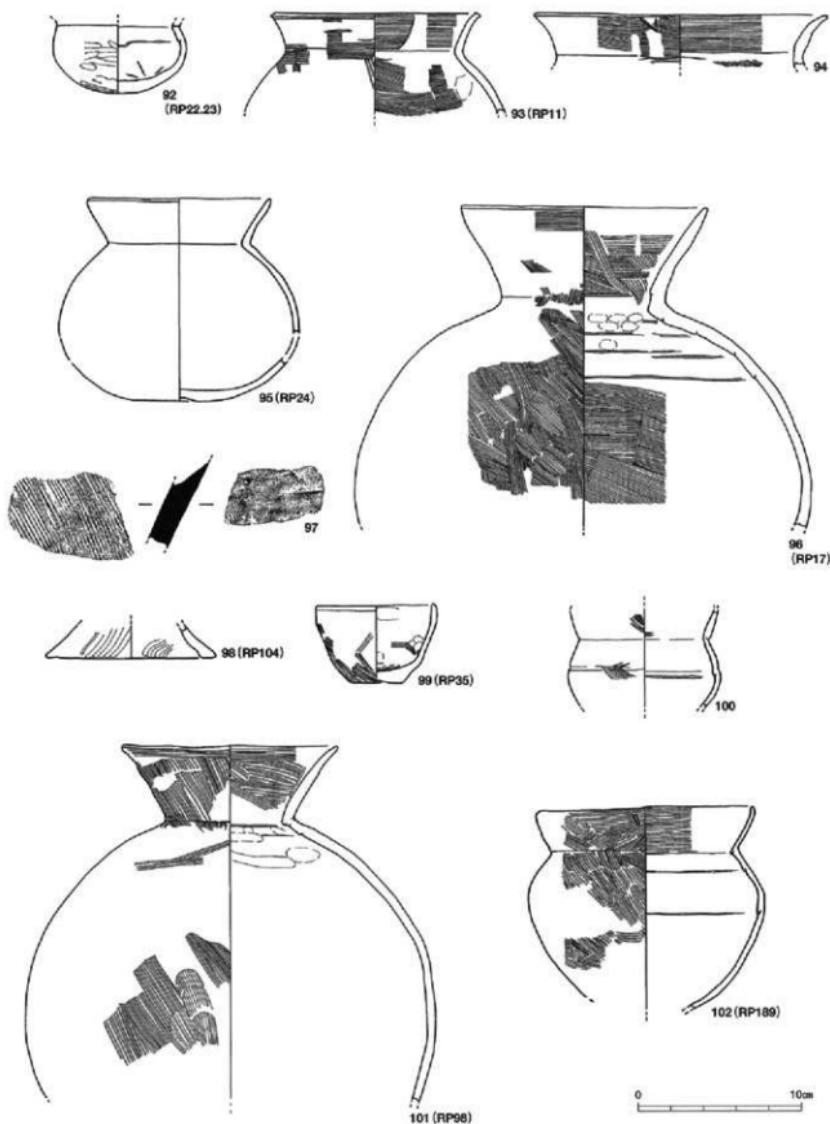
第64図 遺構外出土遺物（4）



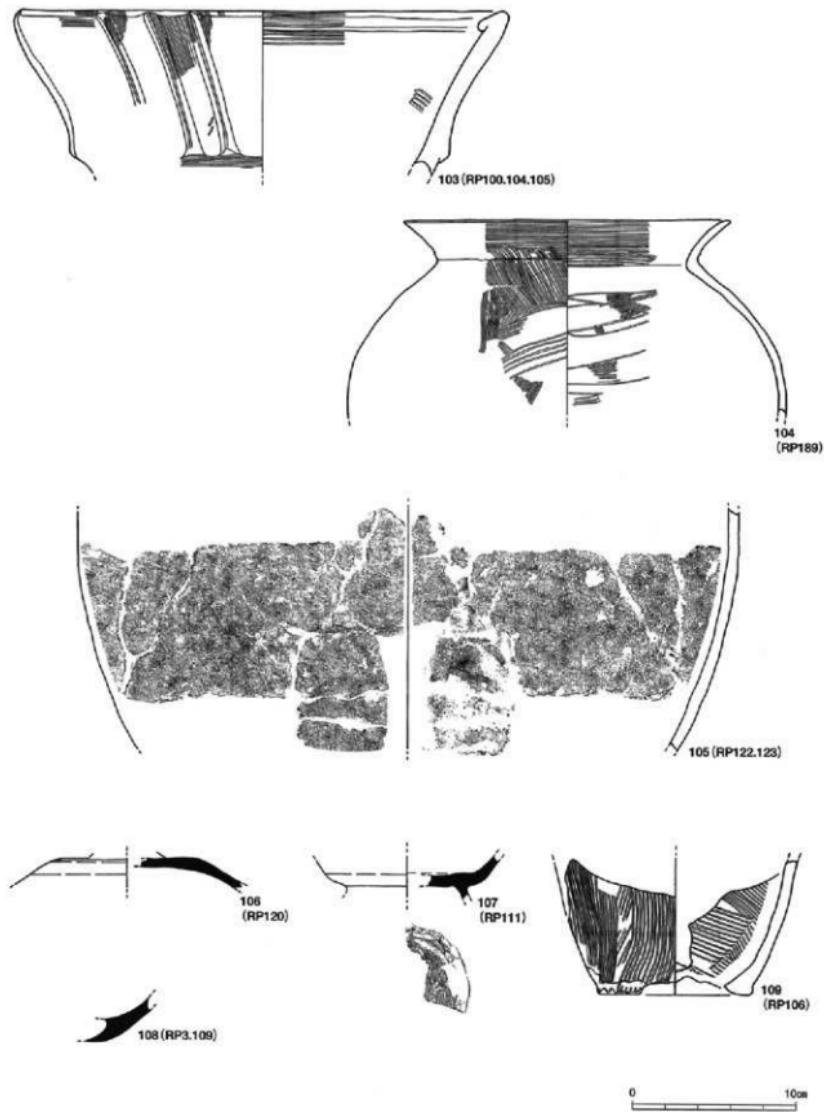
第65図 遺構外出土遺物（5）



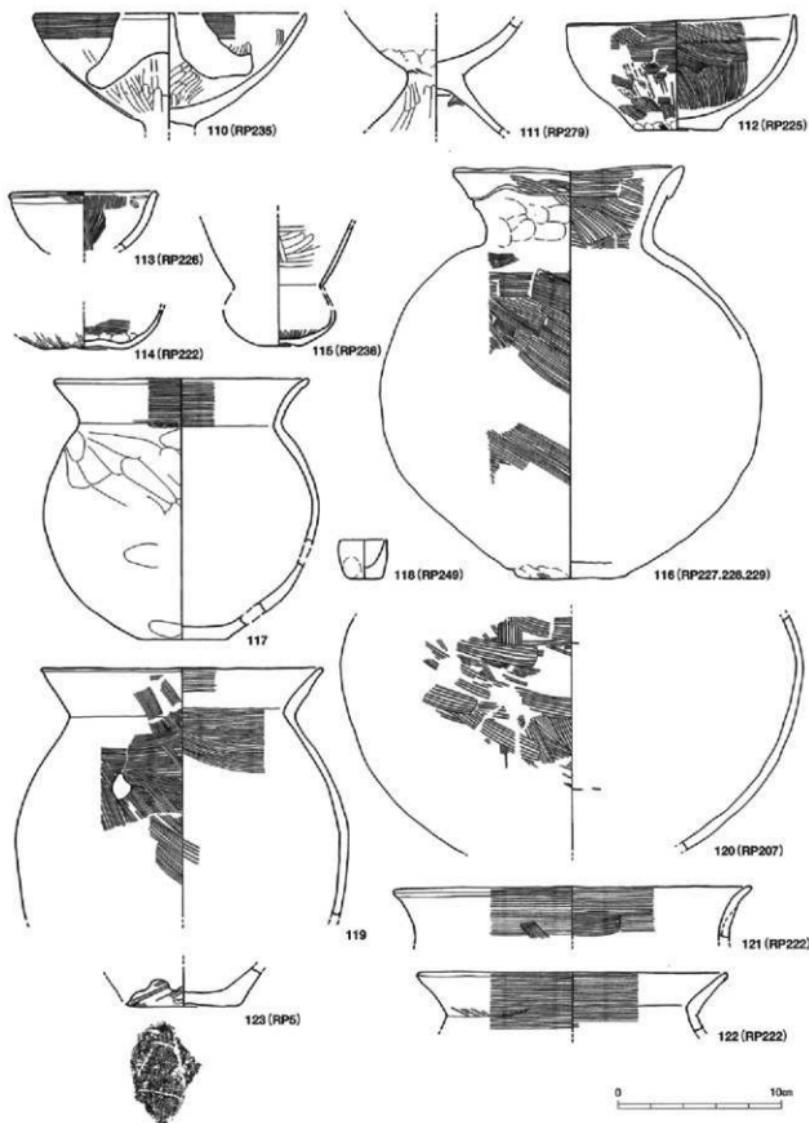
第66図 2次ST1 (83~86)・6 (87)・9 (88)・80 (89、91)・125 (90) 出土遺物



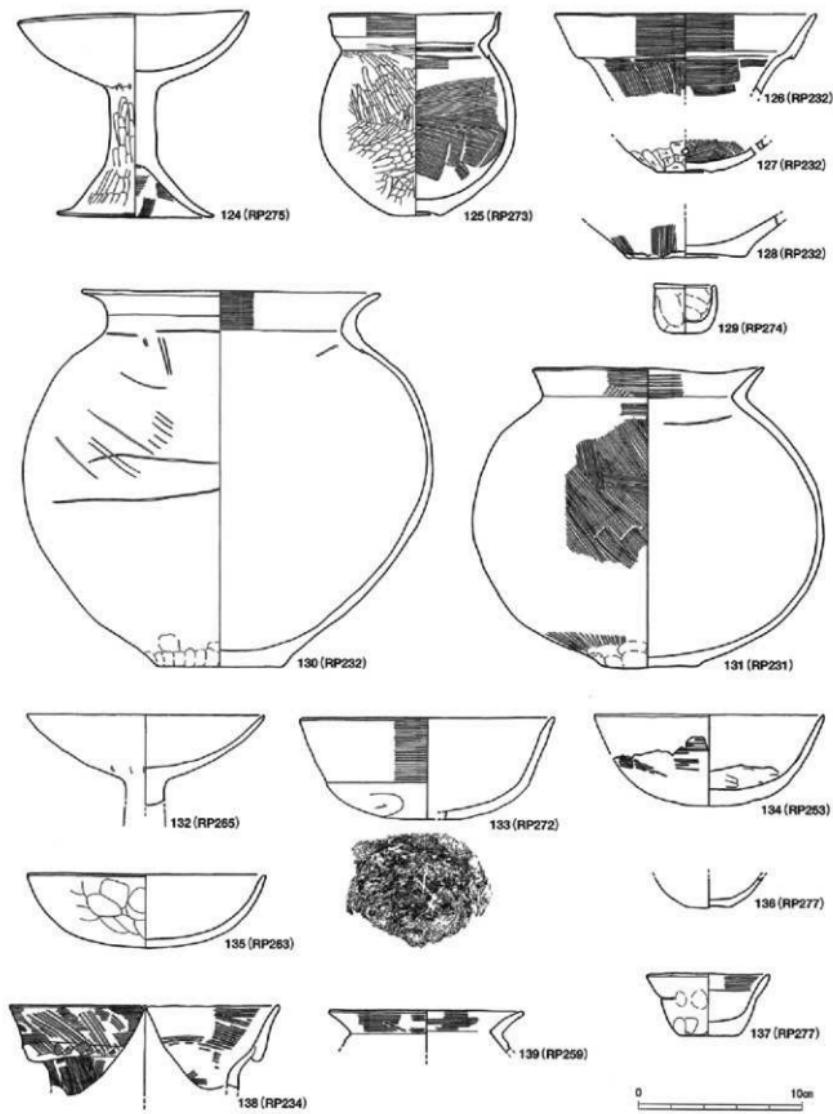
第67図 3次ST2 (92~97)・3 (98~102) (1) 出土遺物



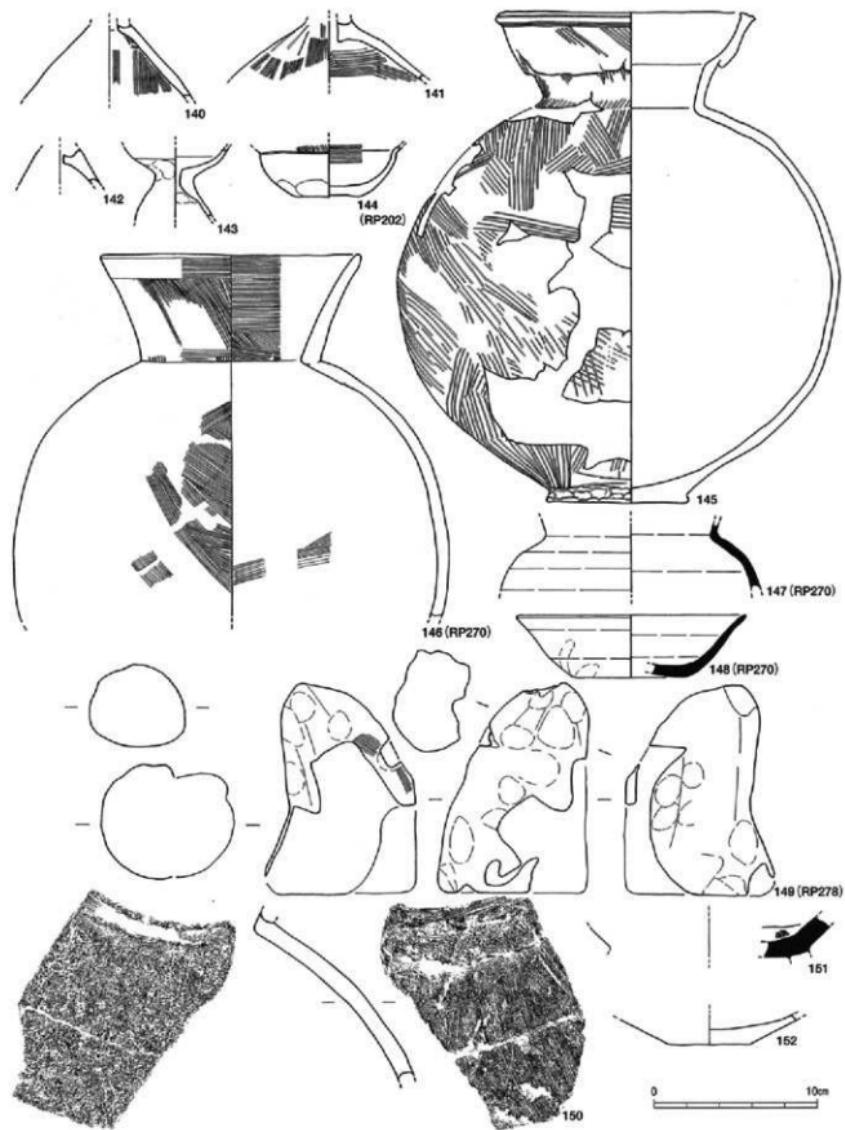
第68図 3次ST 3 (103~109) (2) 出土遺物



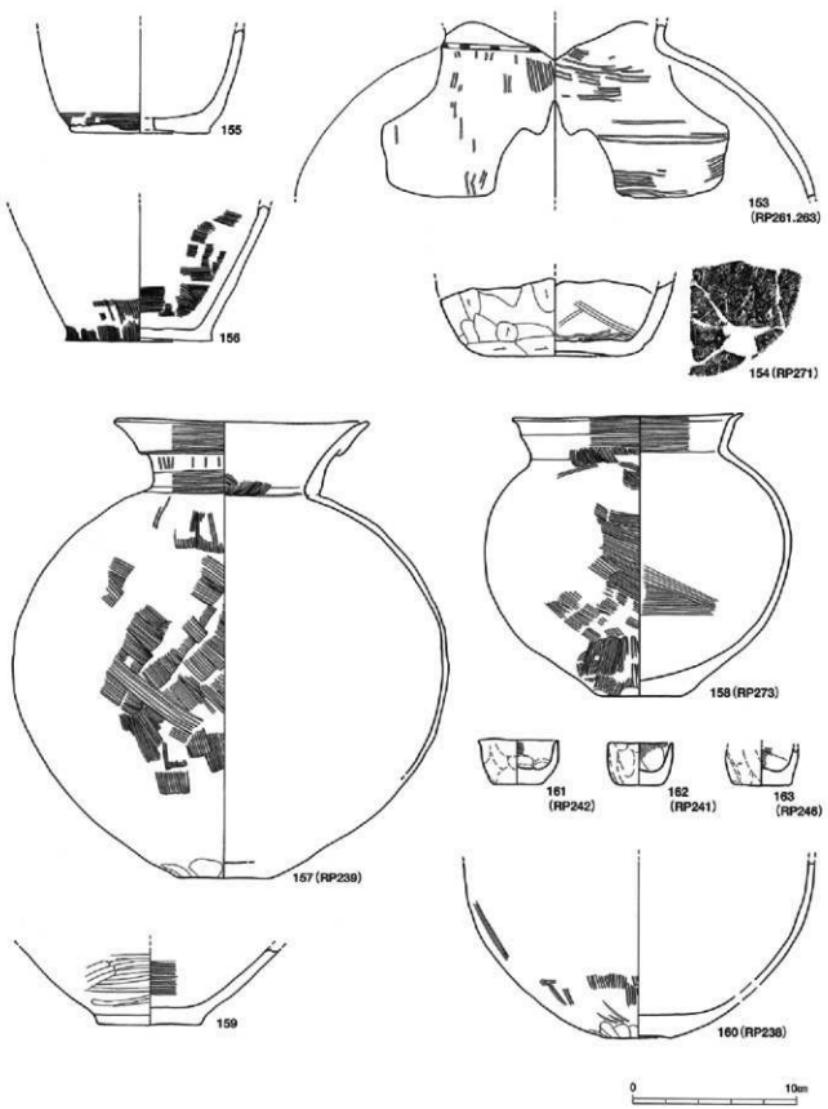
第69図 3次ST 5出土遺物



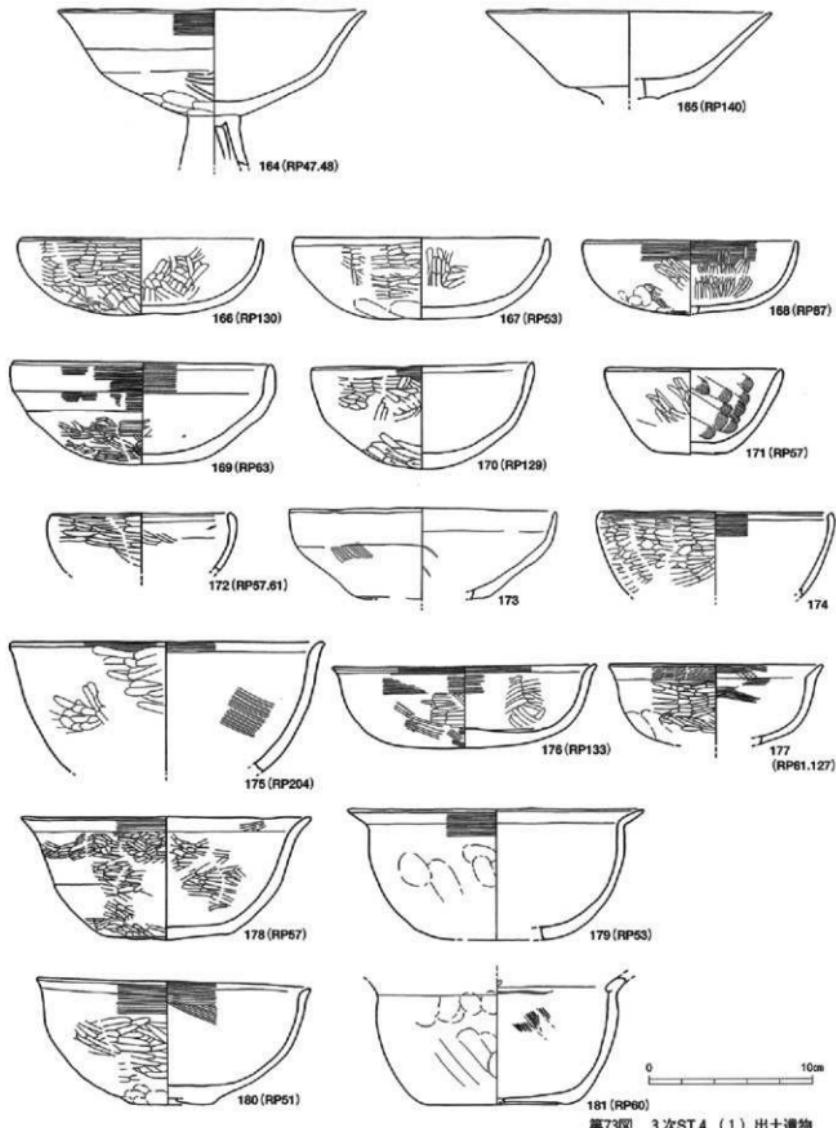
第70図 3次ST 6出土遺物 (ST 6 124~139)



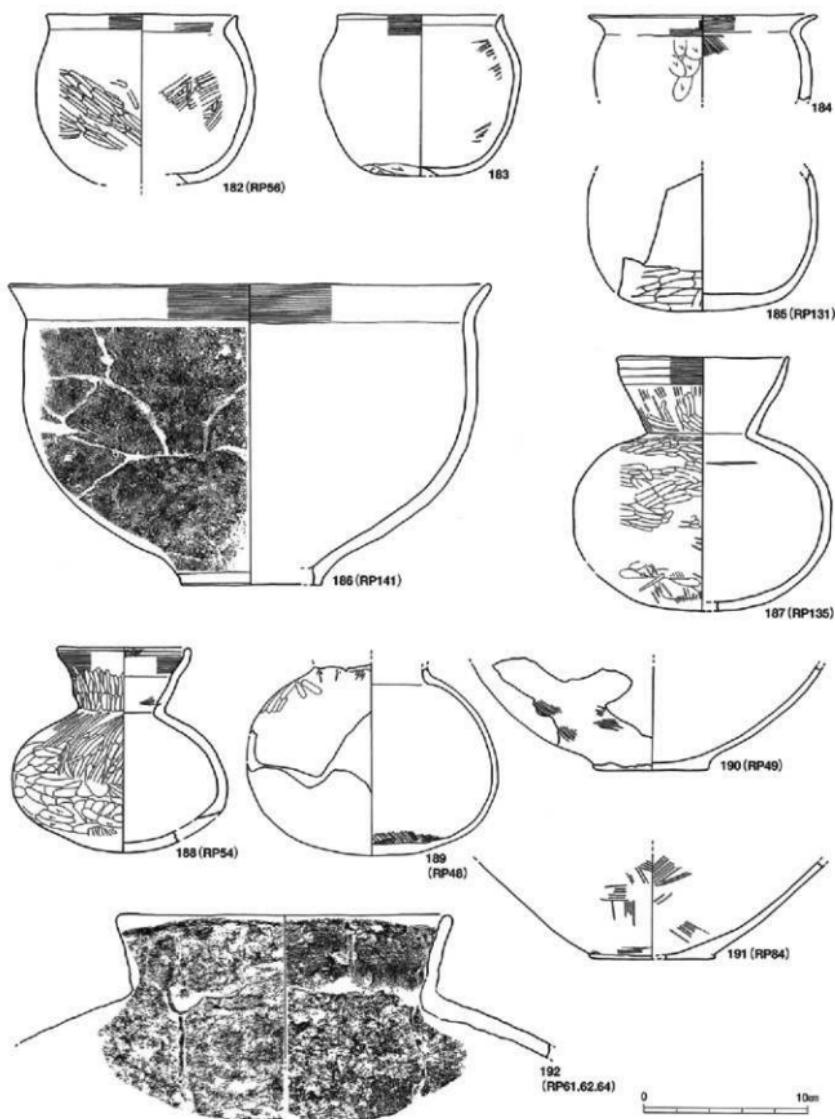
第71図 3次ST 8・2次ST 6出土遺物 (ST 8 140~150、ST 6 151~152)



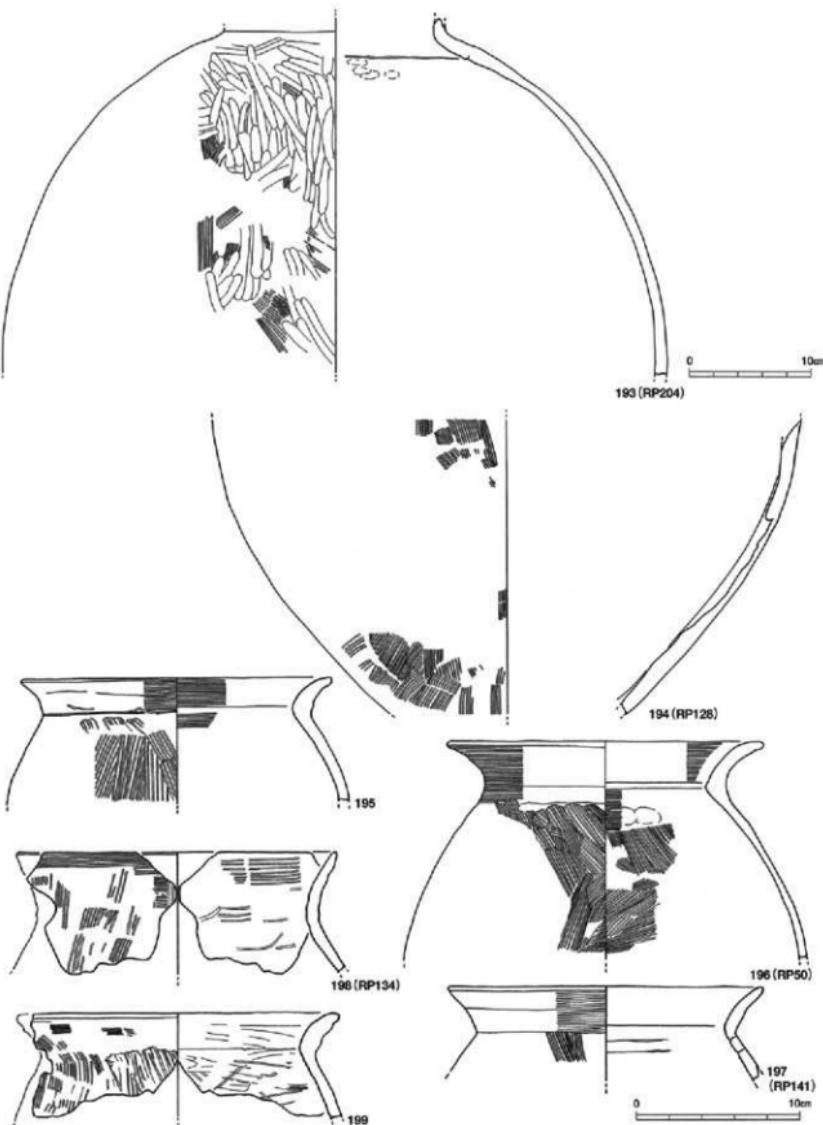
第72図 3次ST 7・10出土遺物 (ST 7 153~156、ST10 157~163)



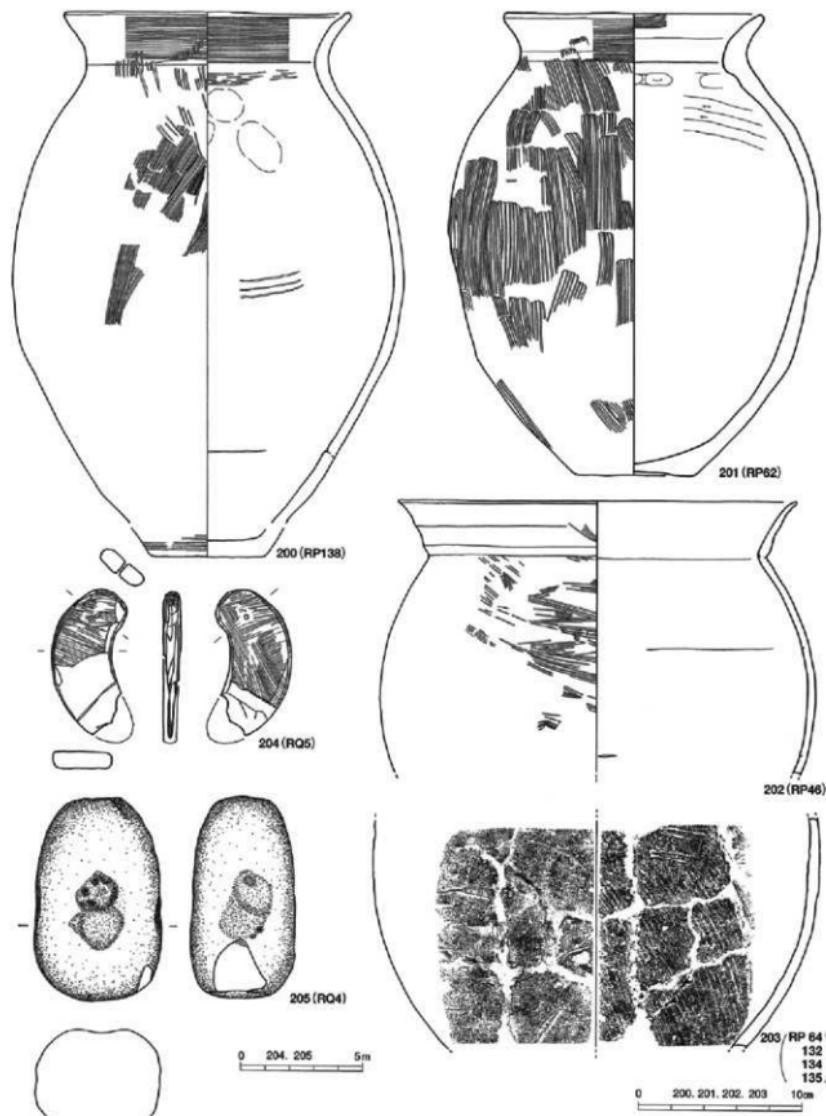
第73図 3次ST 4 (1) 出土遺物



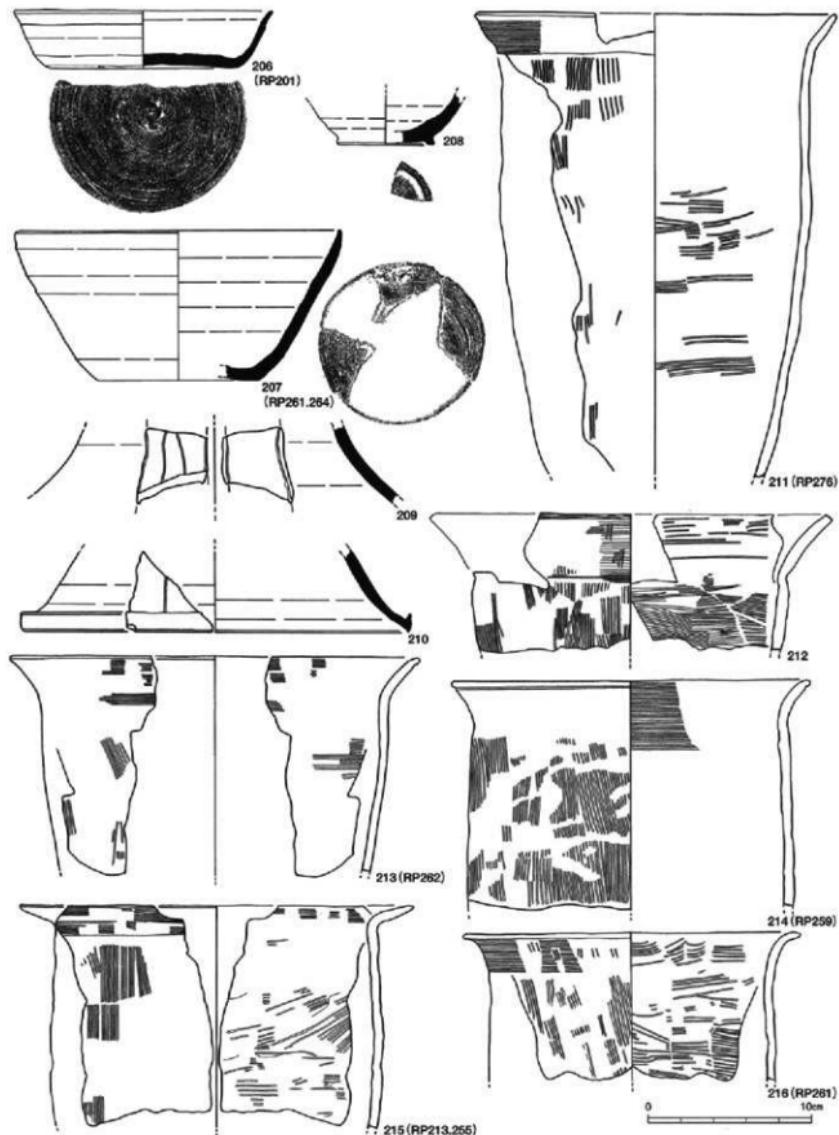
第74図 3次ST4(2)出土遺物



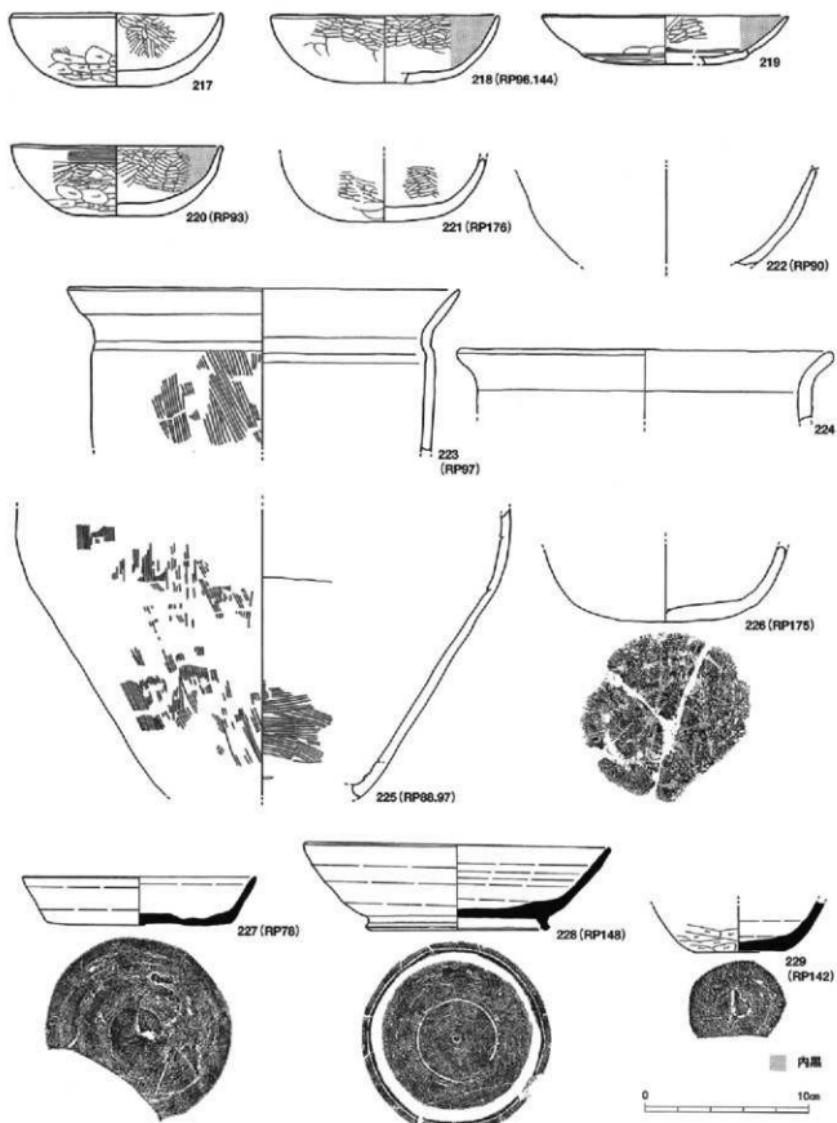
第75図 3次ST 4 (3) 出土遺物



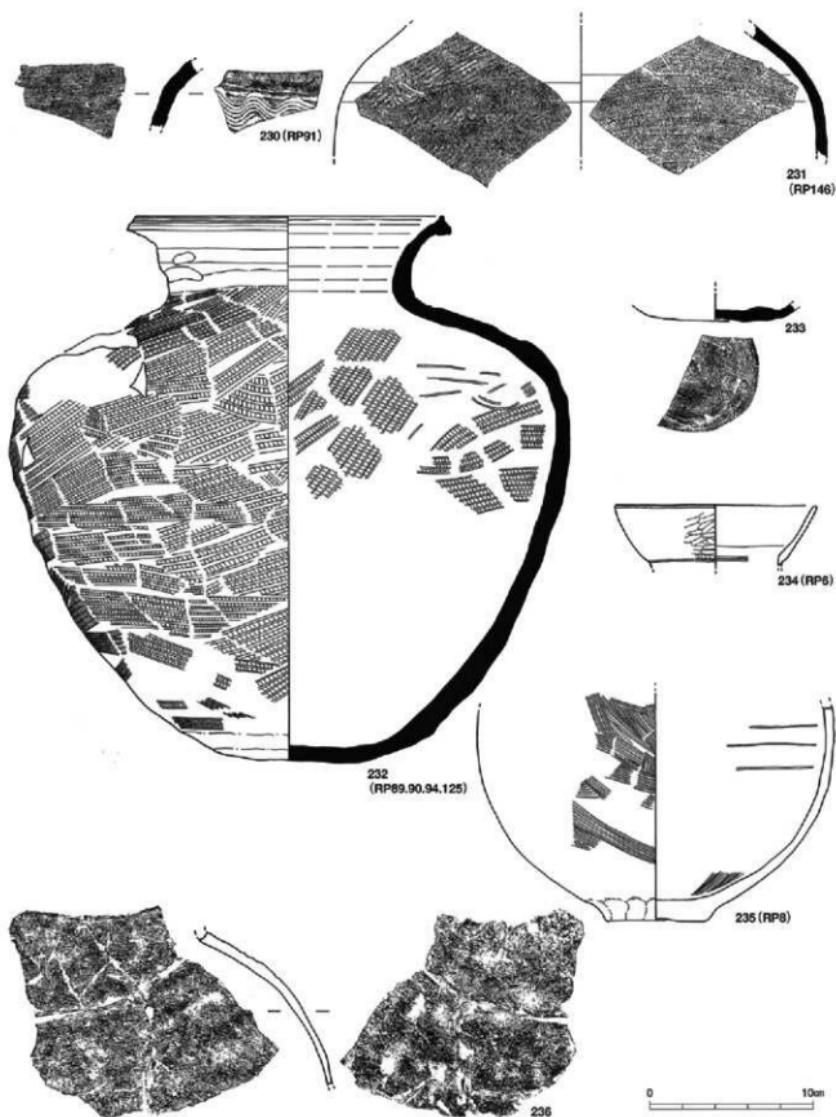
第76図 3次ST 4 (4) 出土遺物



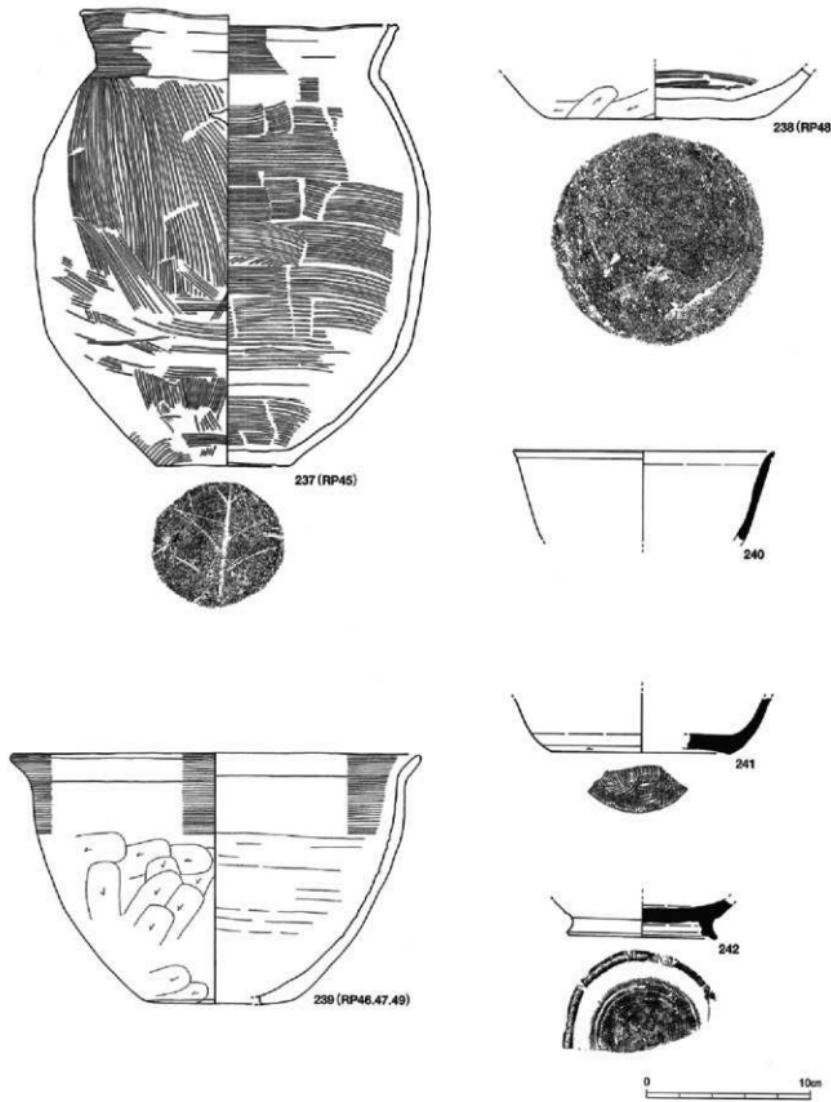
第77図 3次ST7出土遺物



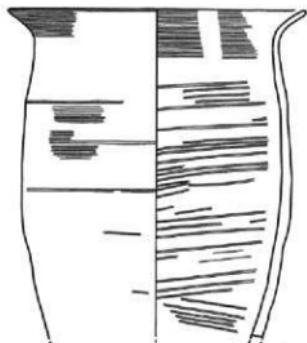
第78図 3次ST12（1）出土遺物



第79図 3次ST12(2)・2次ST14出土遺物(ST12(2) 230~232、ST14 233~236)



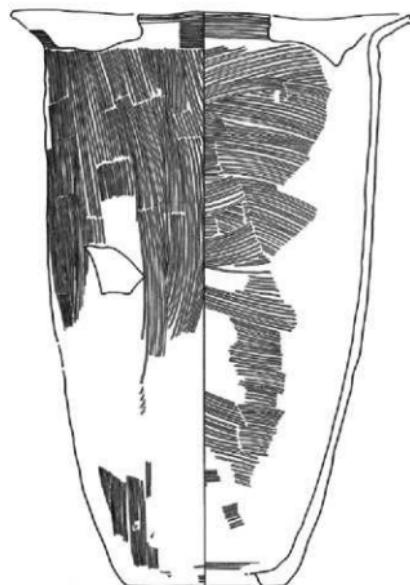
第80図 2次ST130(1)出土遺物



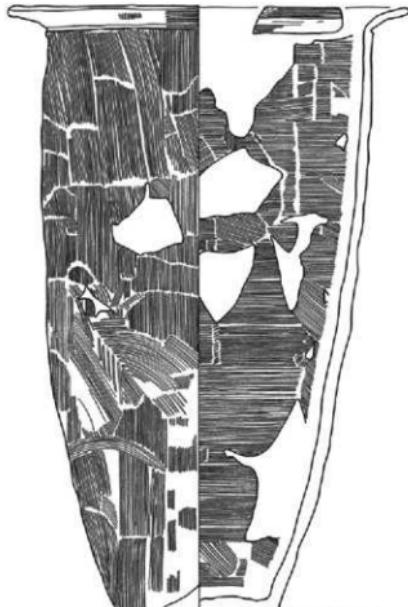
243 (RP45.46.47)



244 (RP47)



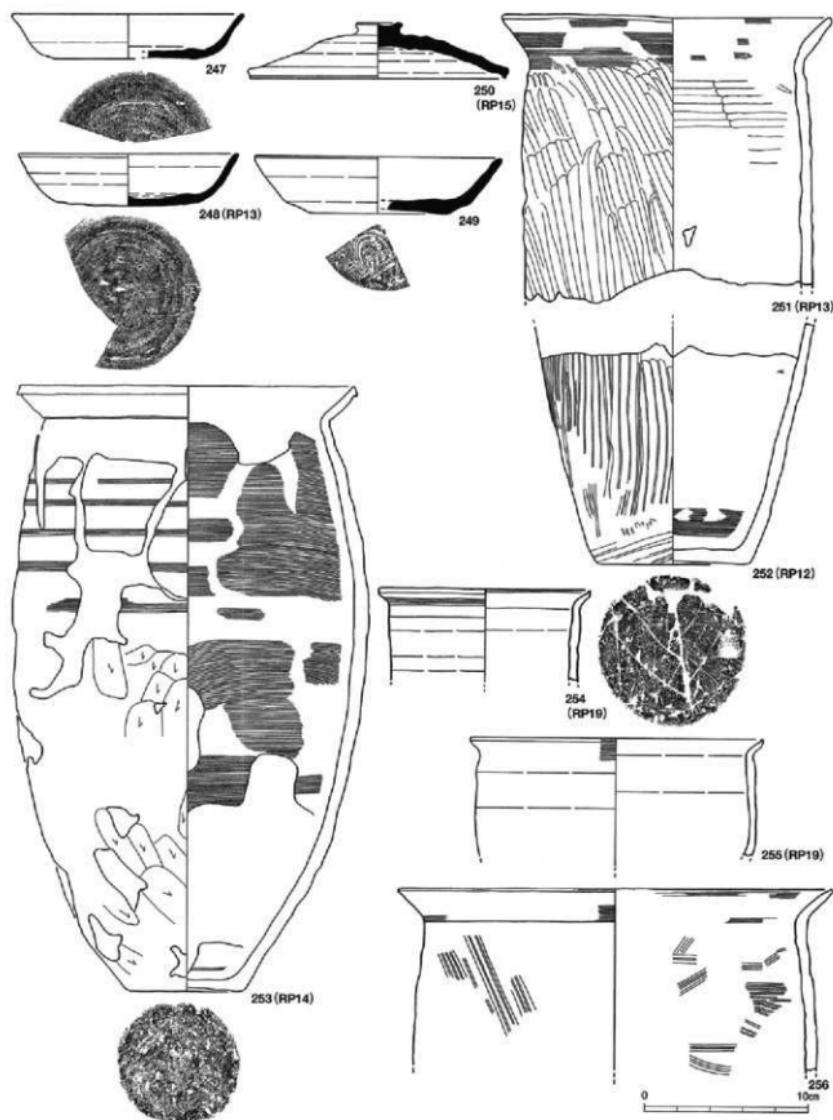
245 (RP46.47)



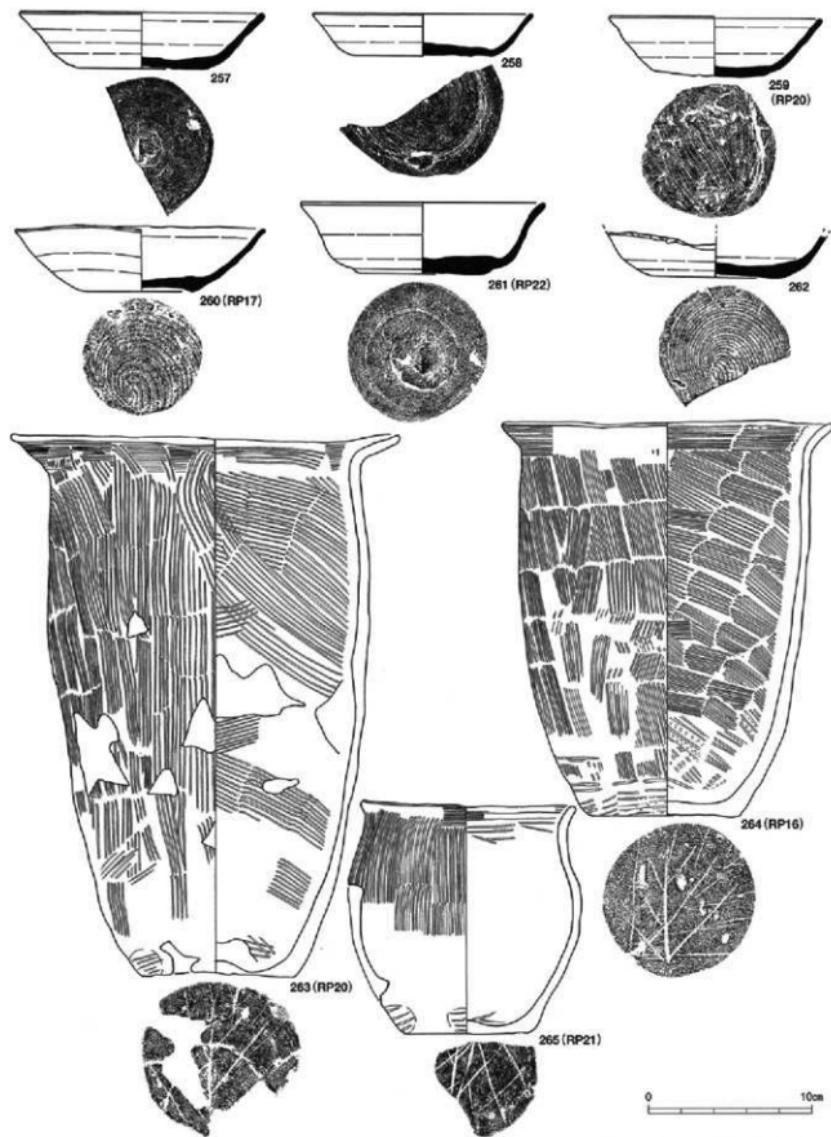
246 (RP44.130)



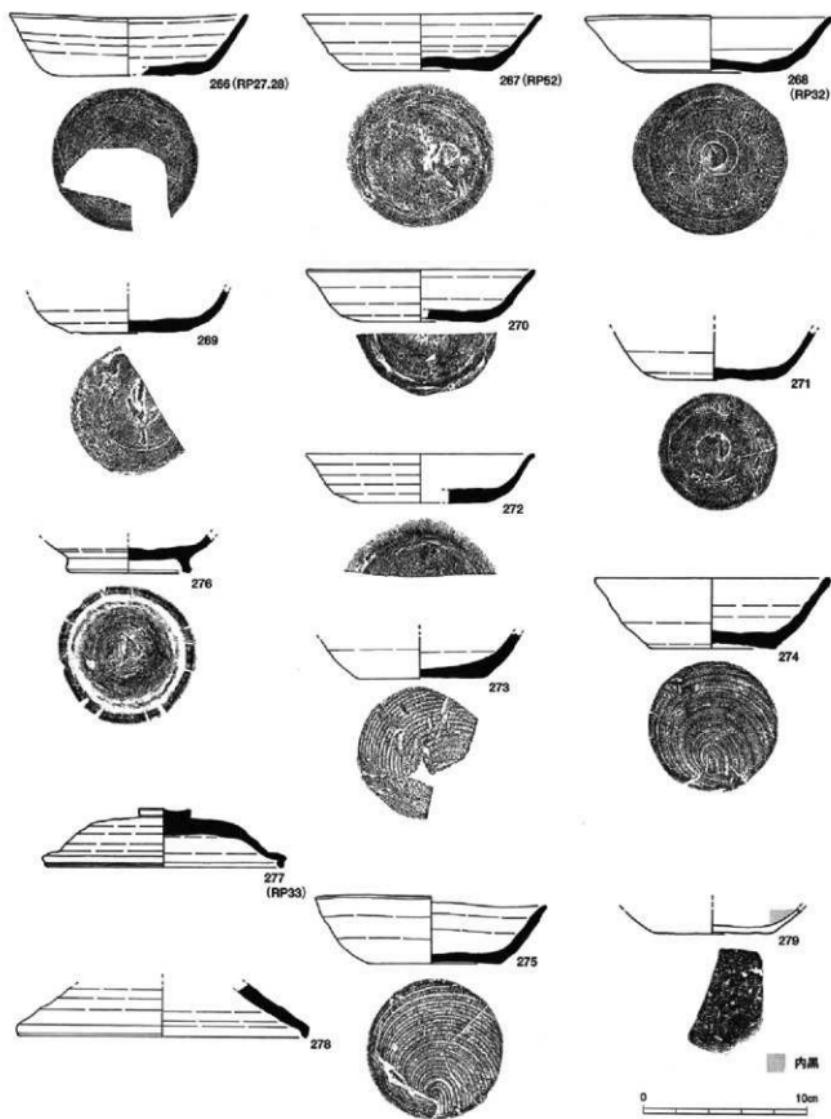
第81図 2次ST130(2)出土遺物



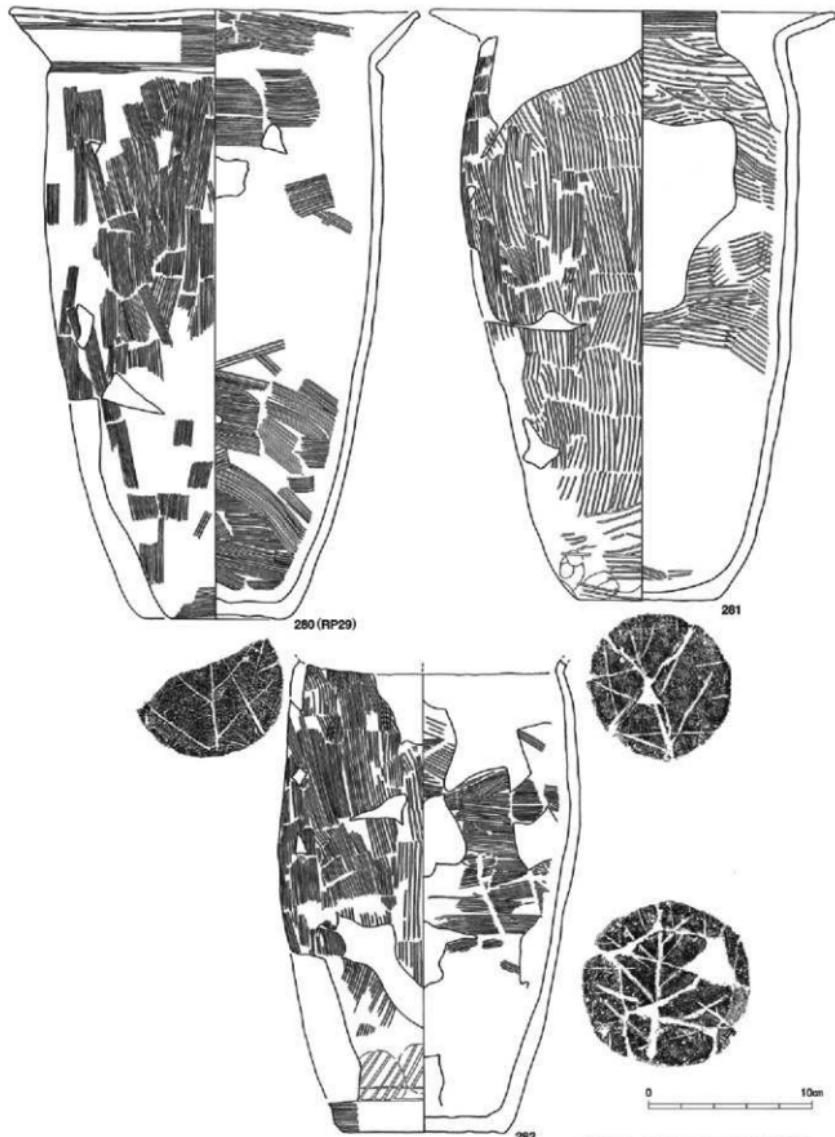
第82図 2次ST131・132(1)出土遺物(ST131 247~253、ST132 254~256)



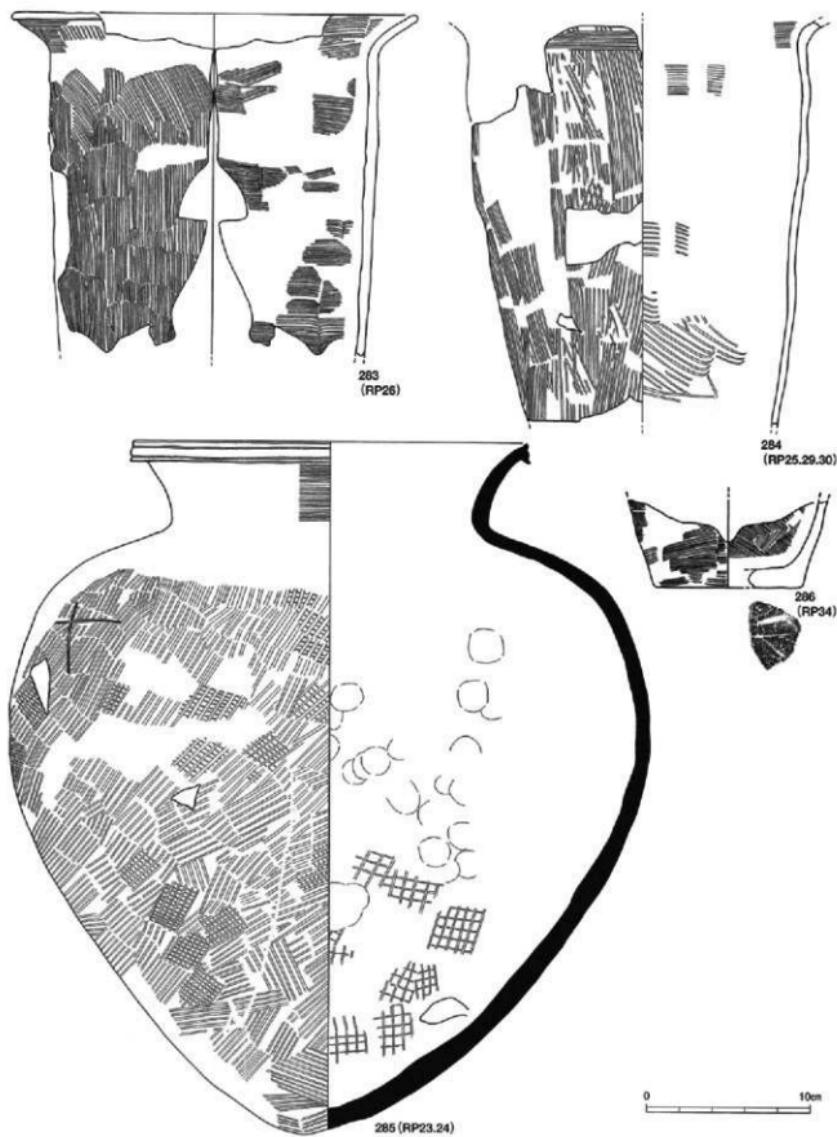
第83図 2次ST132(2)出土遺物



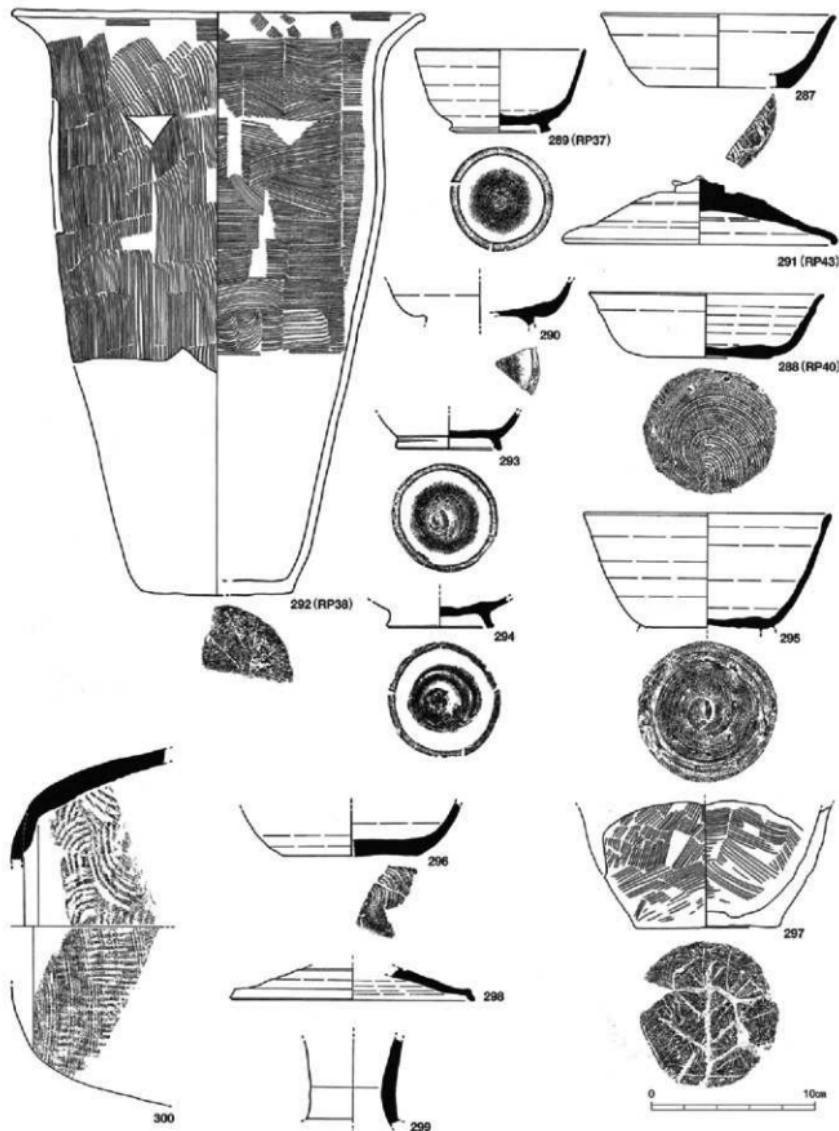
第84図 2次ST133(1)出土遺物



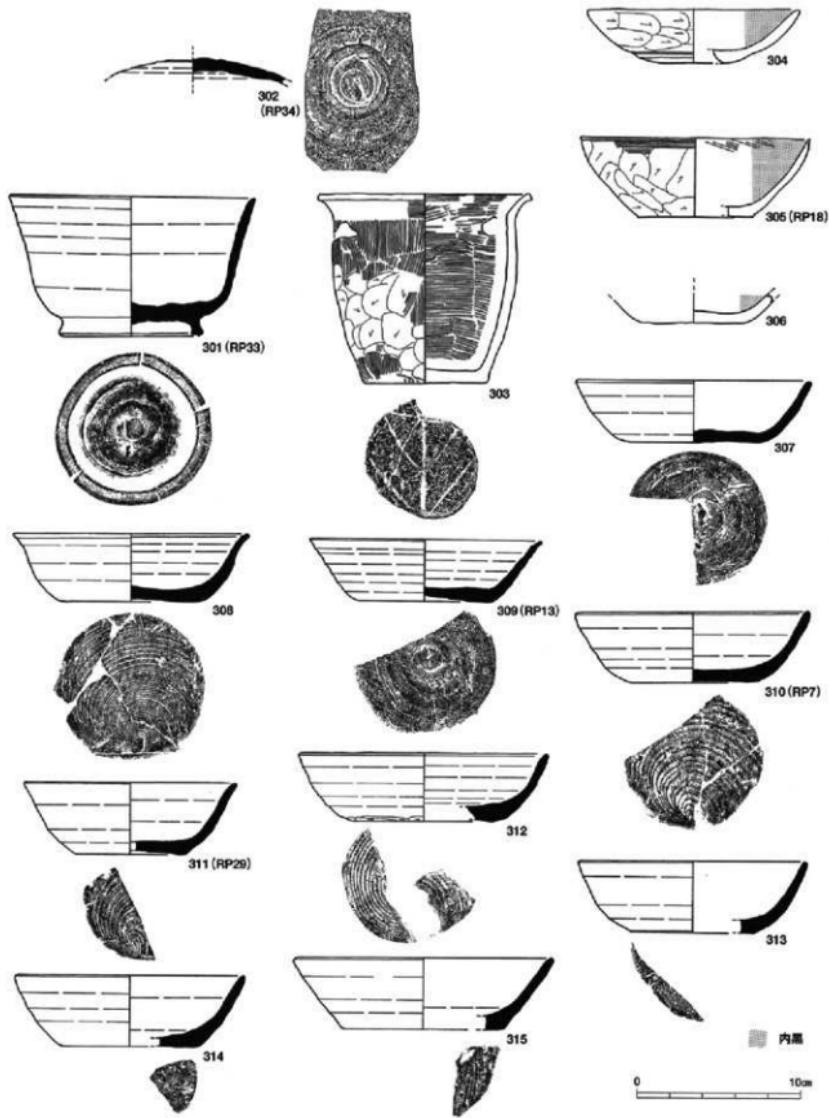
第85図 2次ST133(2)出土遺物



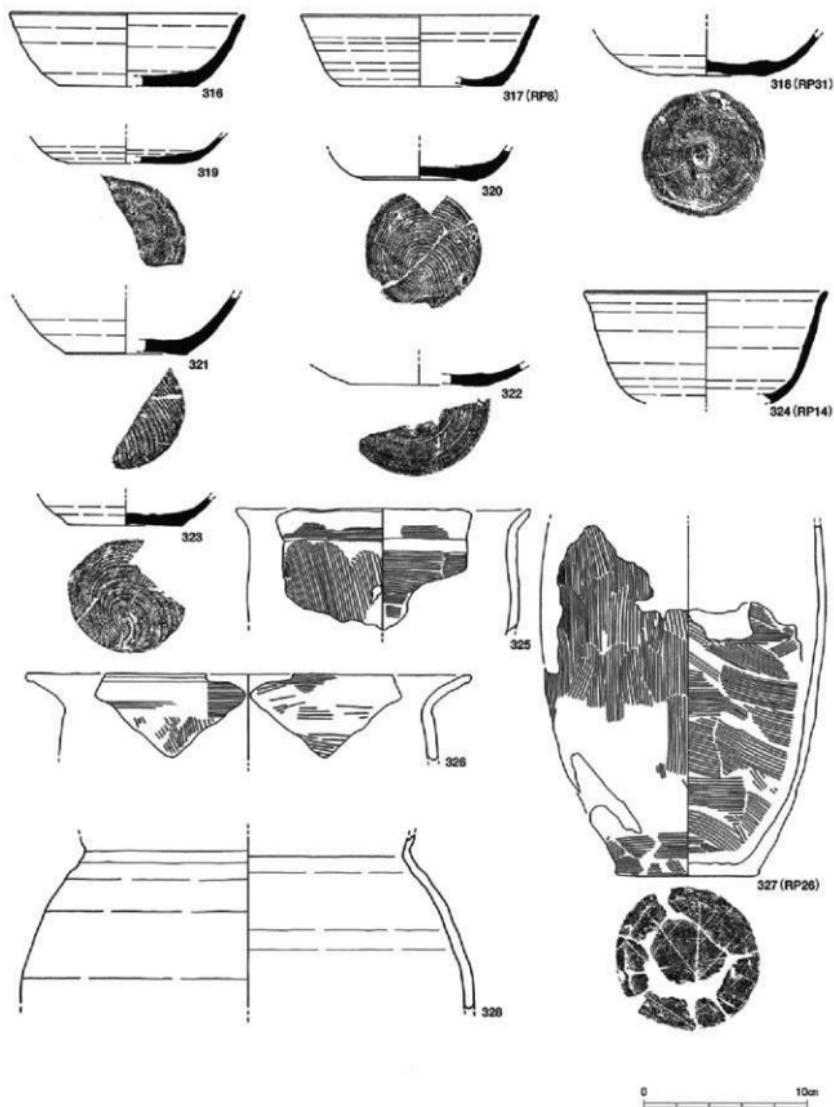
第86図 2次ST133(3)出土遺物



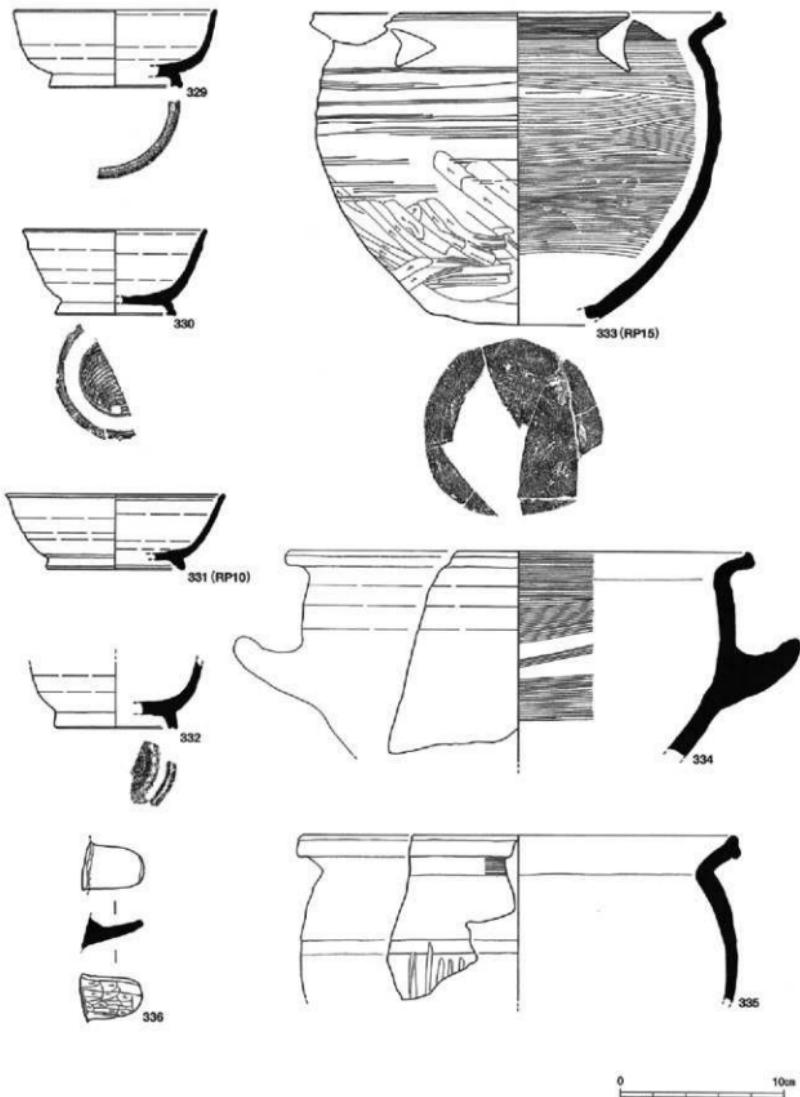
第87図 2次ST135・198・SX178出土遺物 (ST135 287~292、ST198 293~297、SX178 298~300)



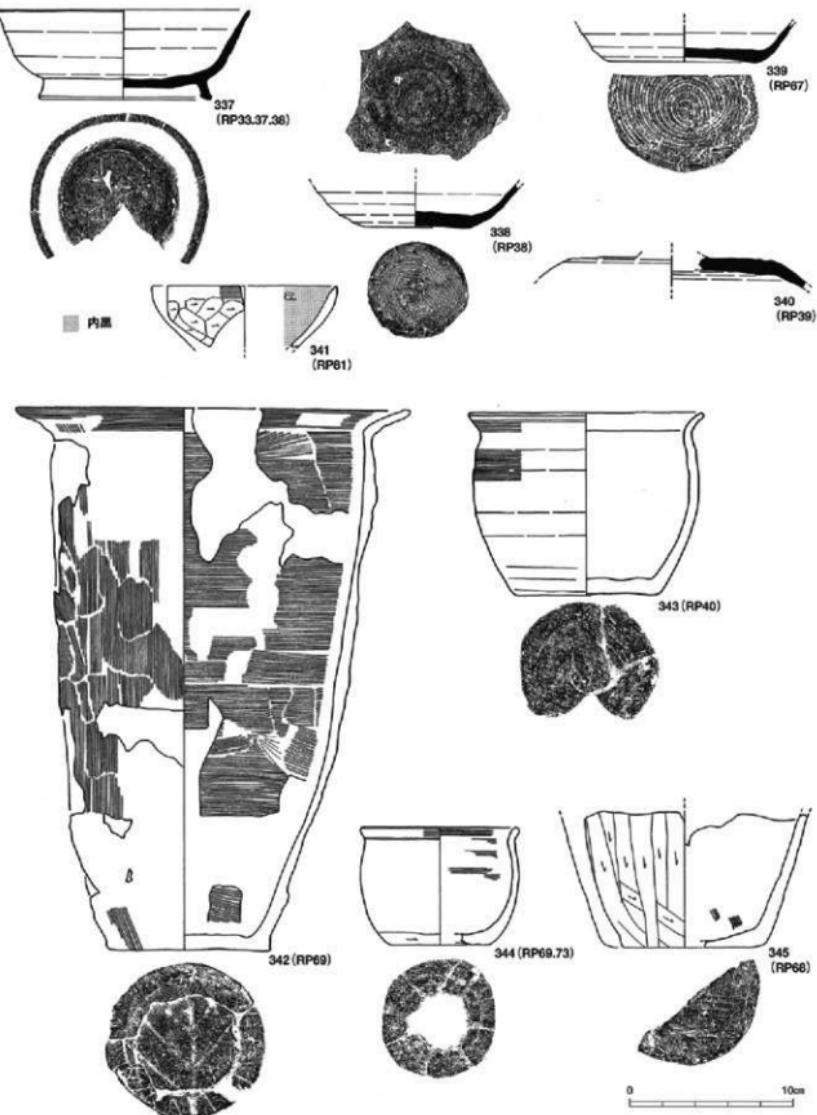
第88図 3次ST15・16(1)出土遺物 (ST15 301~303、ST16(1) 304~315)



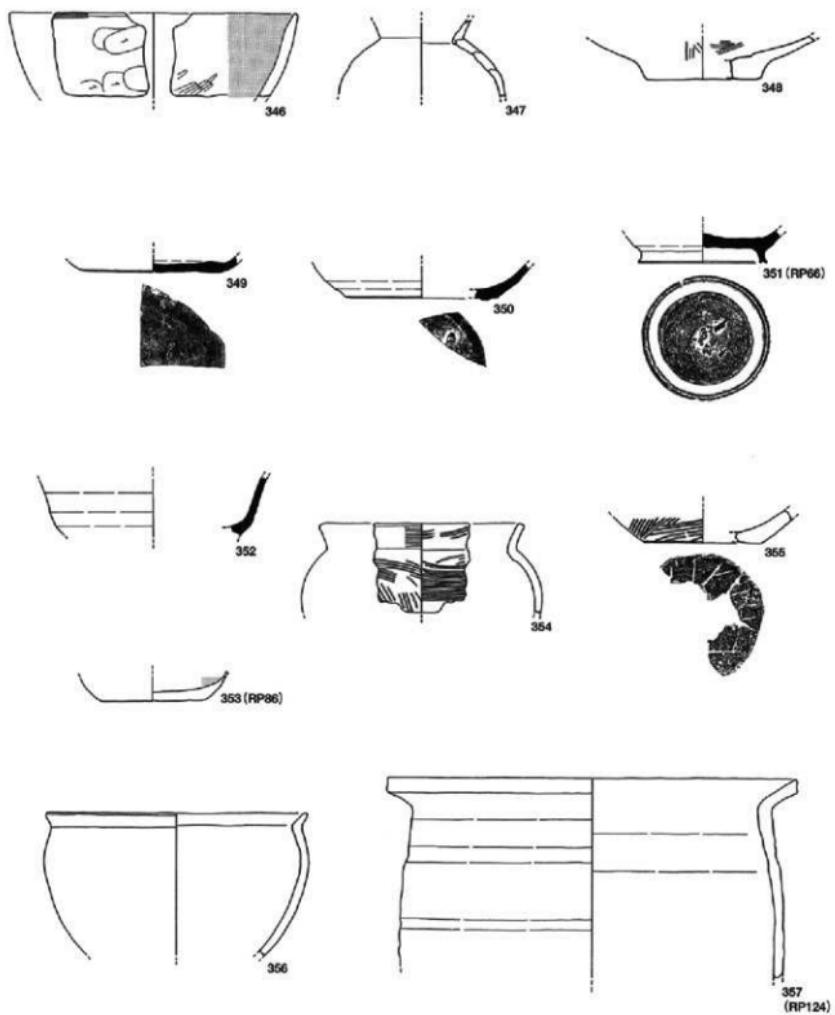
第89図 3次ST16(2)出土遺物



第90図 3次ST16（3）出土遺物



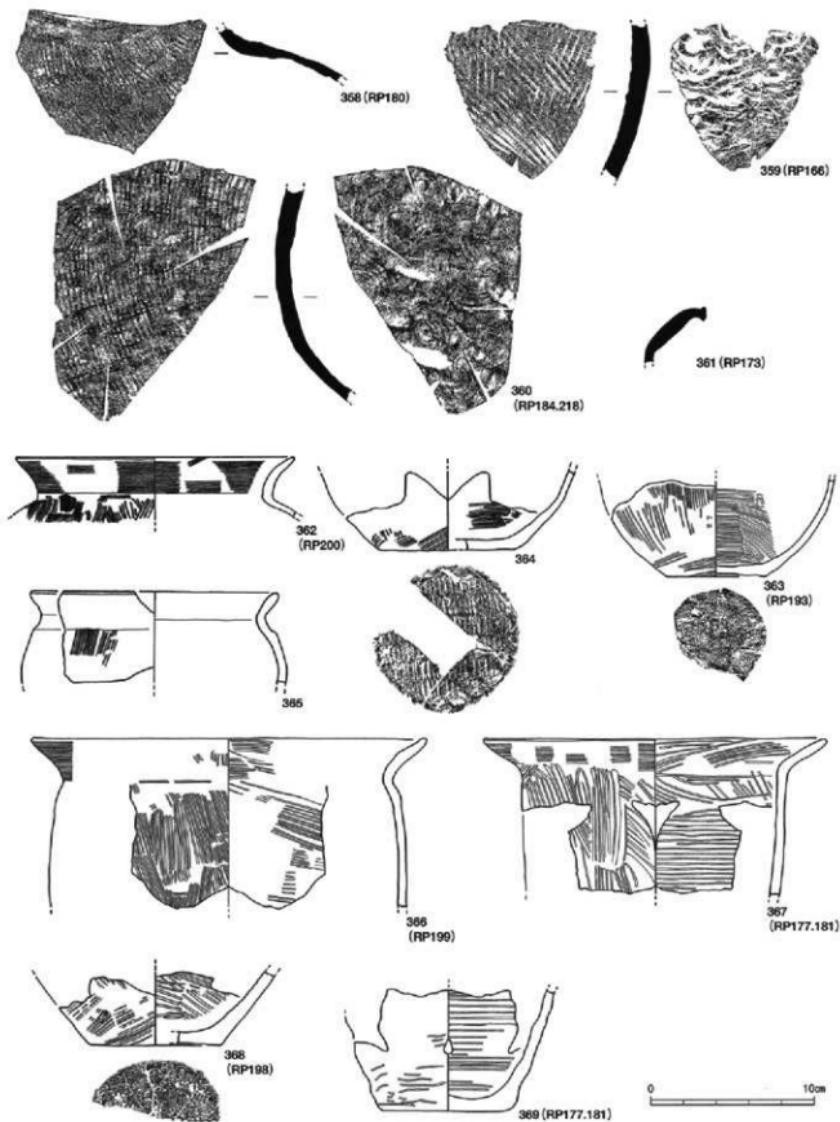
第91図 3次ST17出土遺物



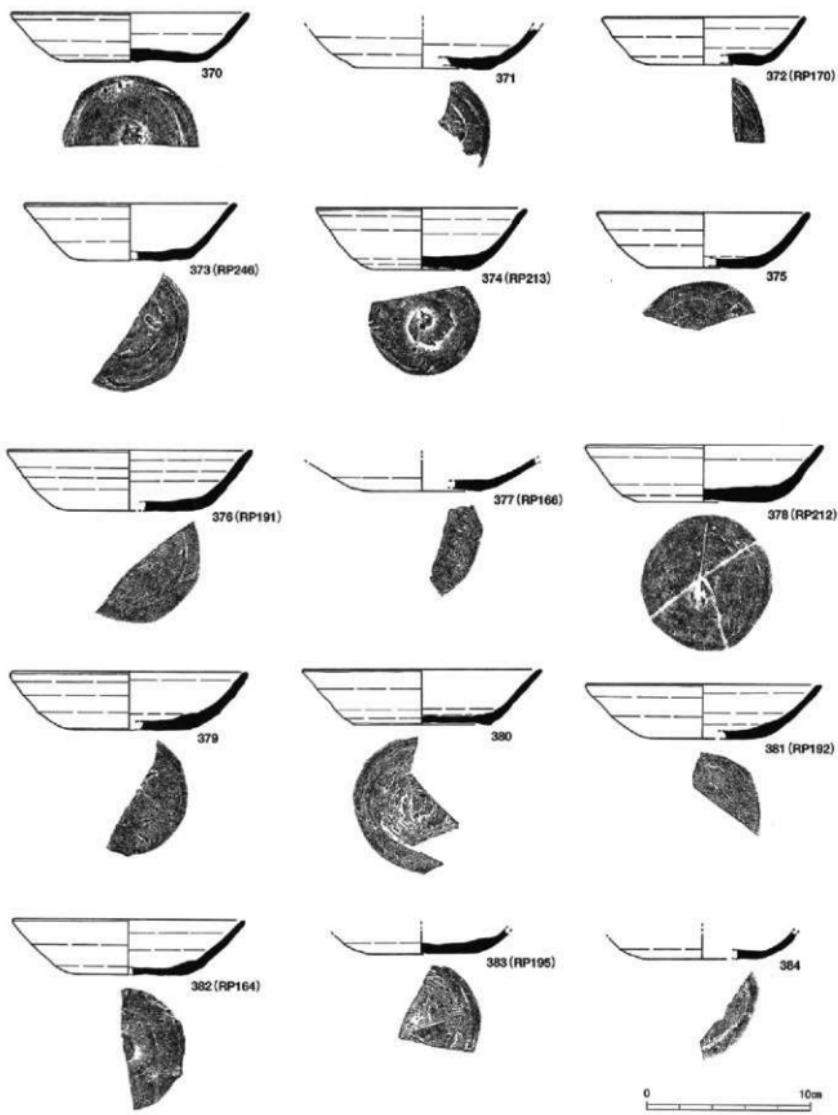
■ 内面

0 10cm

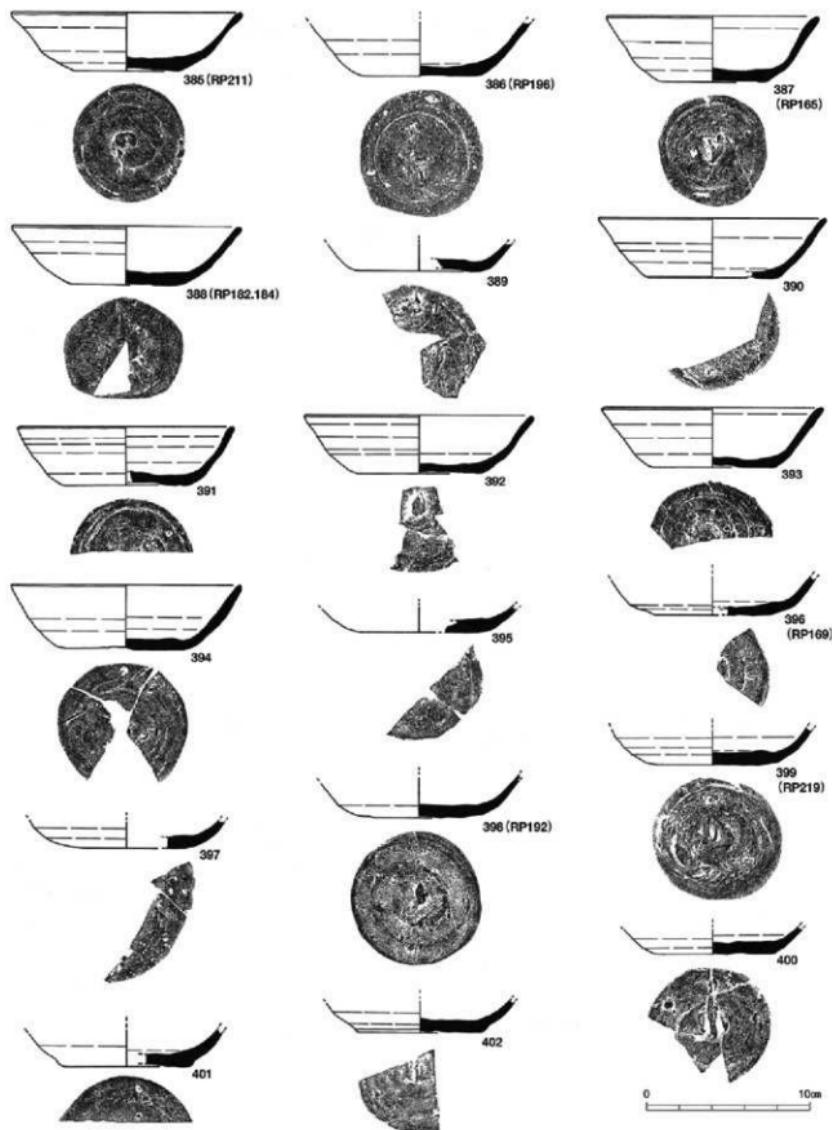
第92図 3次ST18出土遺物



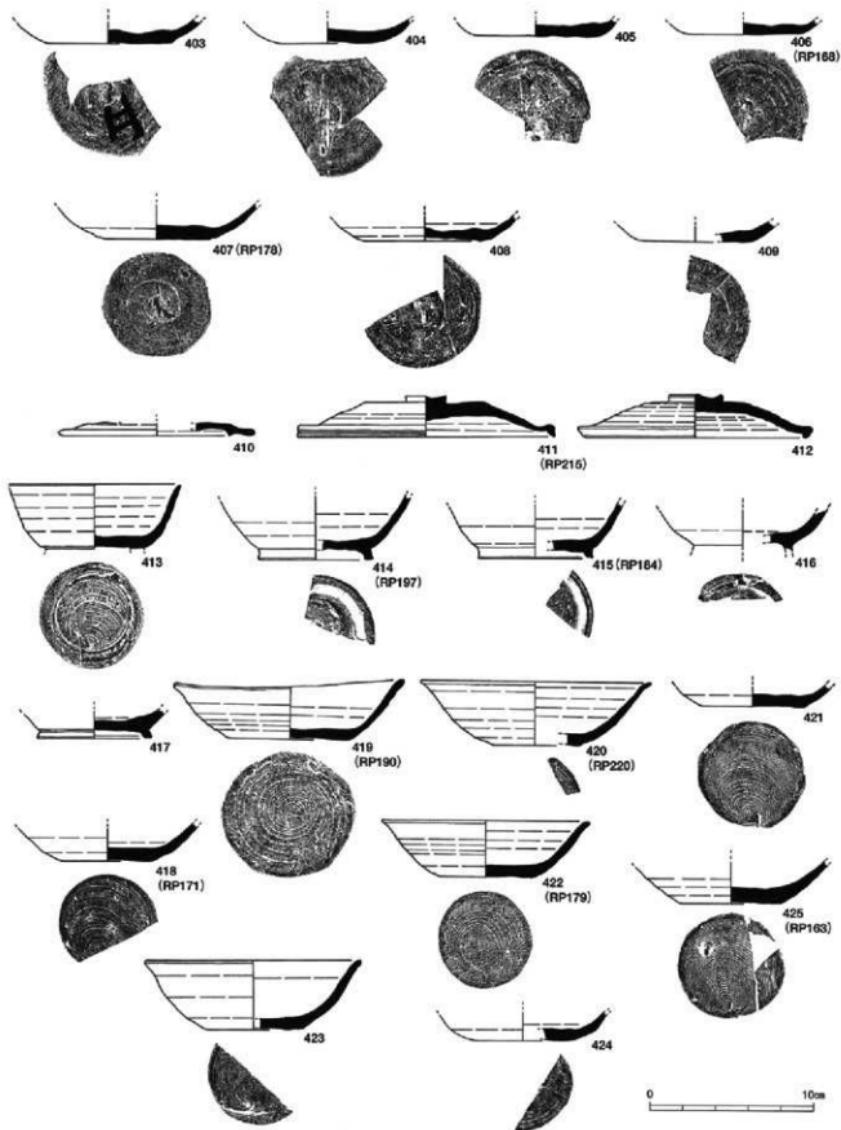
第93図 3次STI9(1)出土遺物



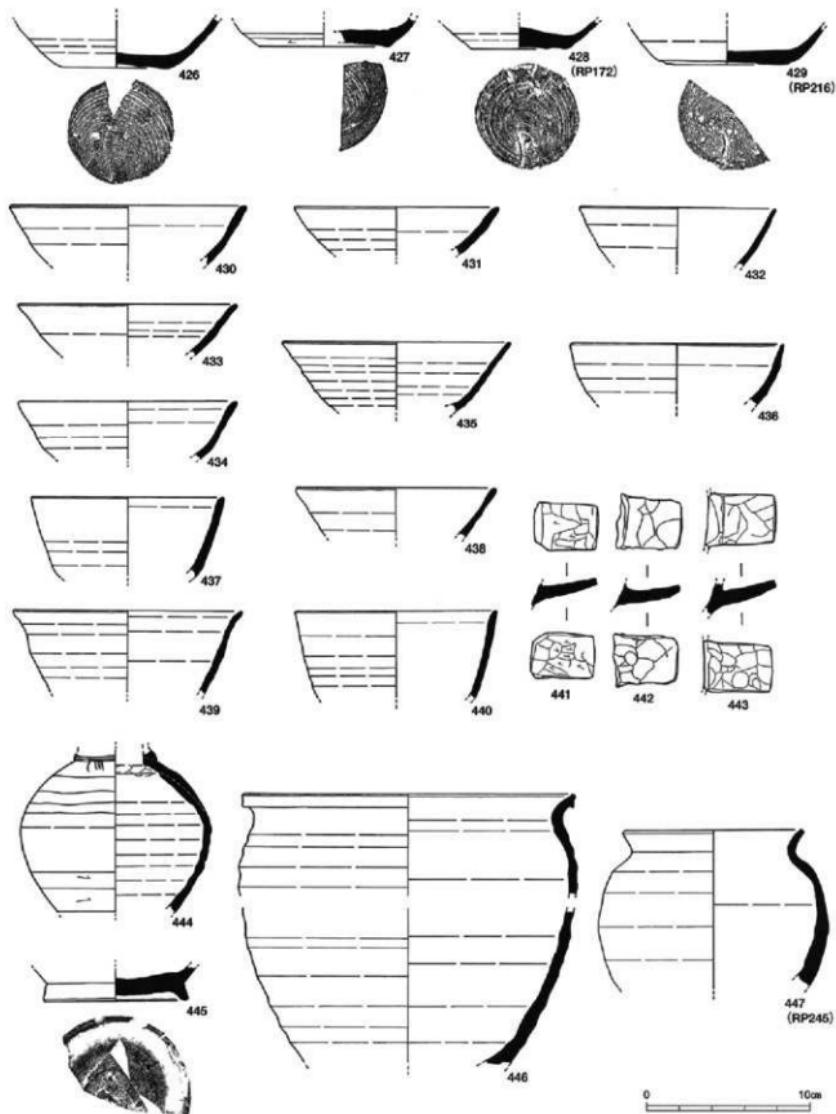
第94図 3次ST19(2)出土遺物



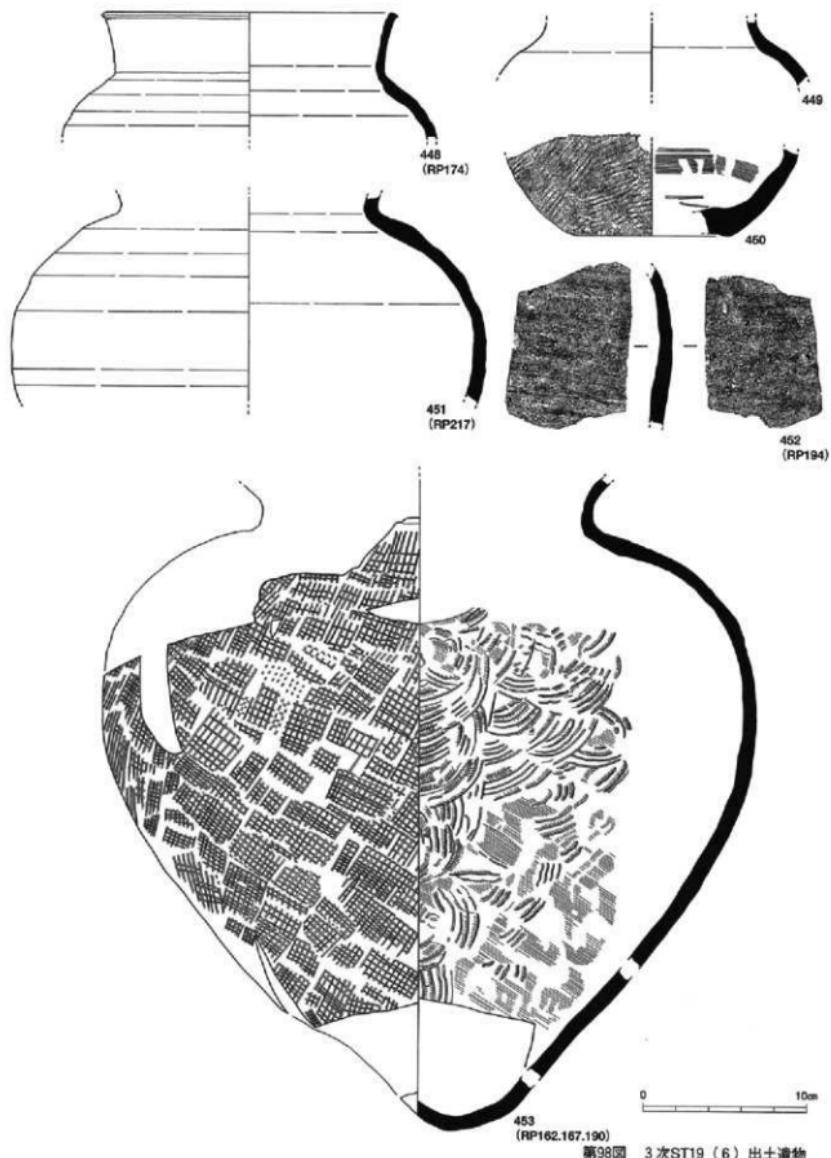
第95図 3次ST19(3) 出土遺物



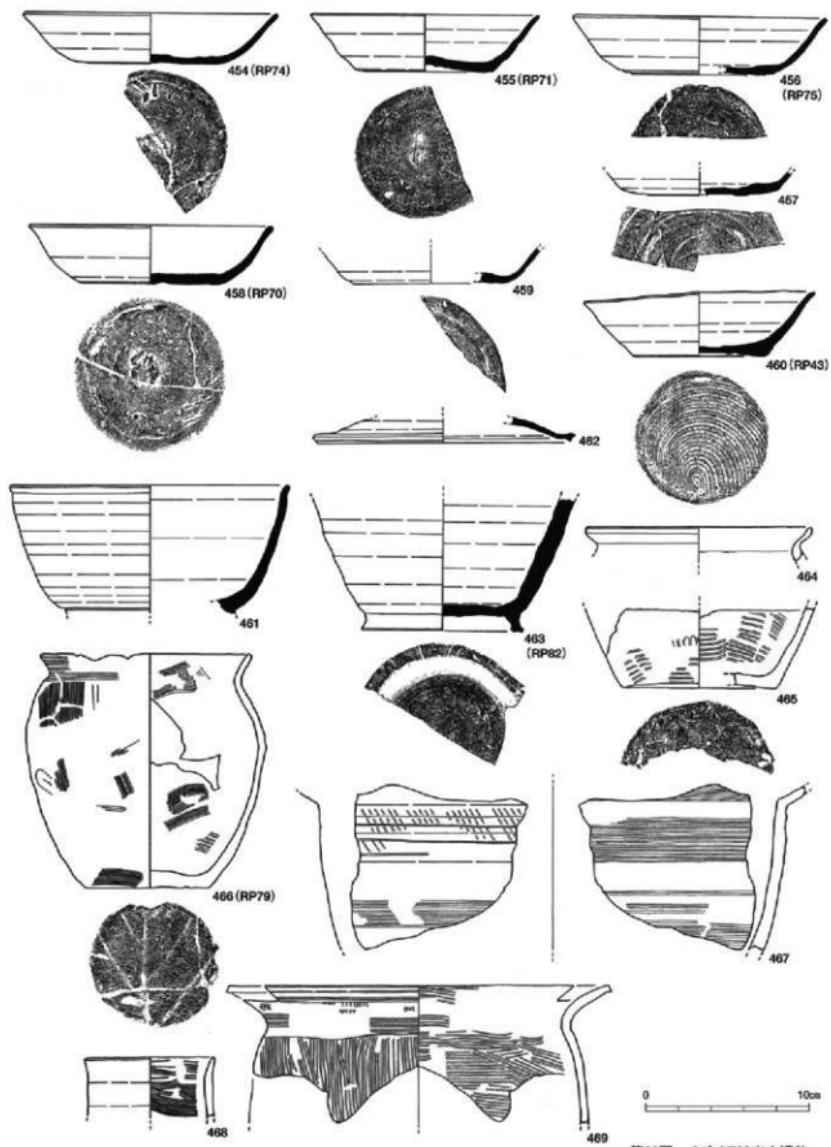
第96図 3次ST19(4)出土遺物



第97図 3次ST19 (5) 出土遺物

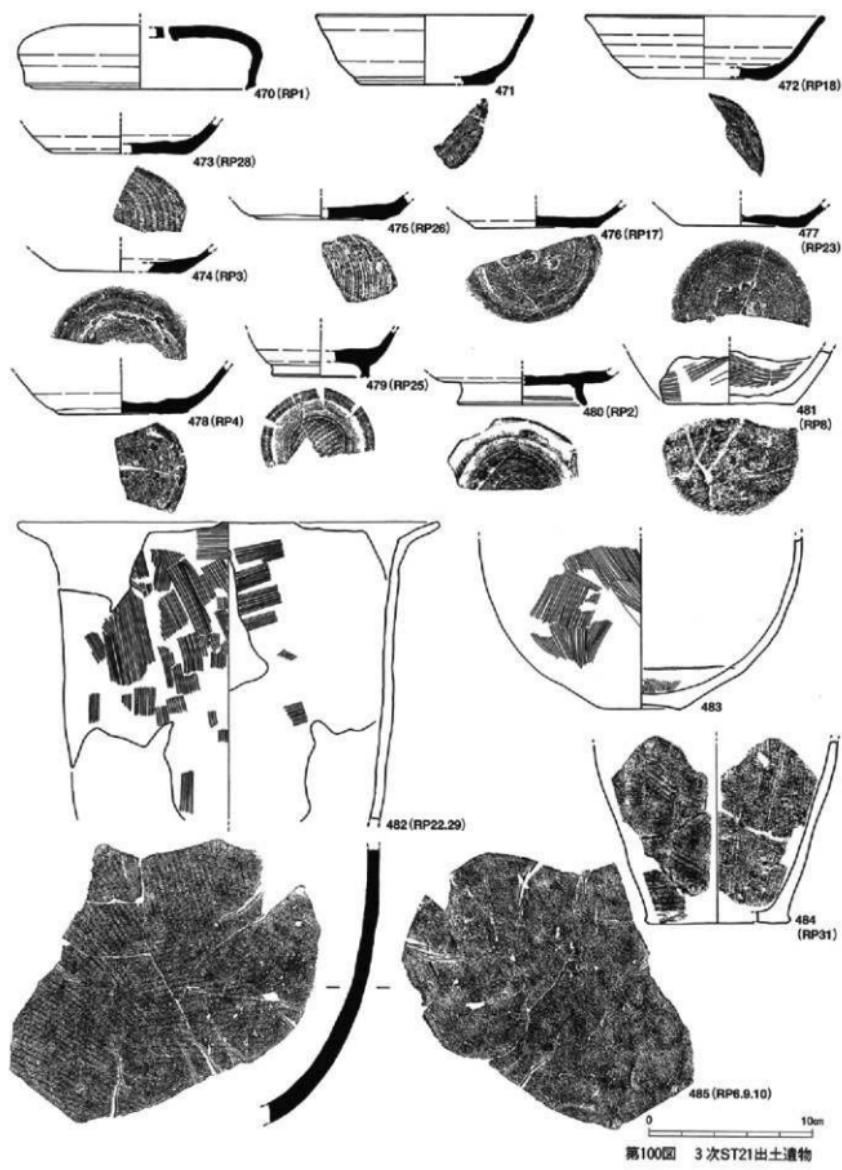


第98図 3次ST19(6)出土遺物

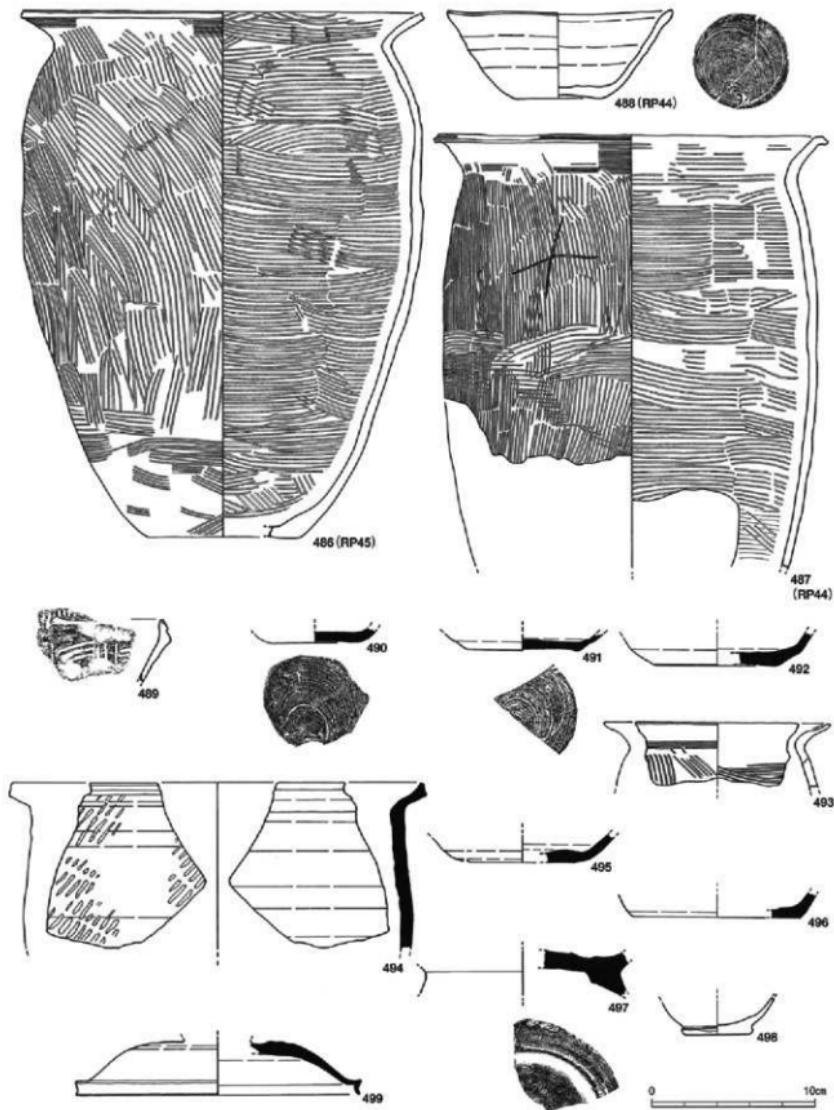


第99図 3次ST20出土遺物

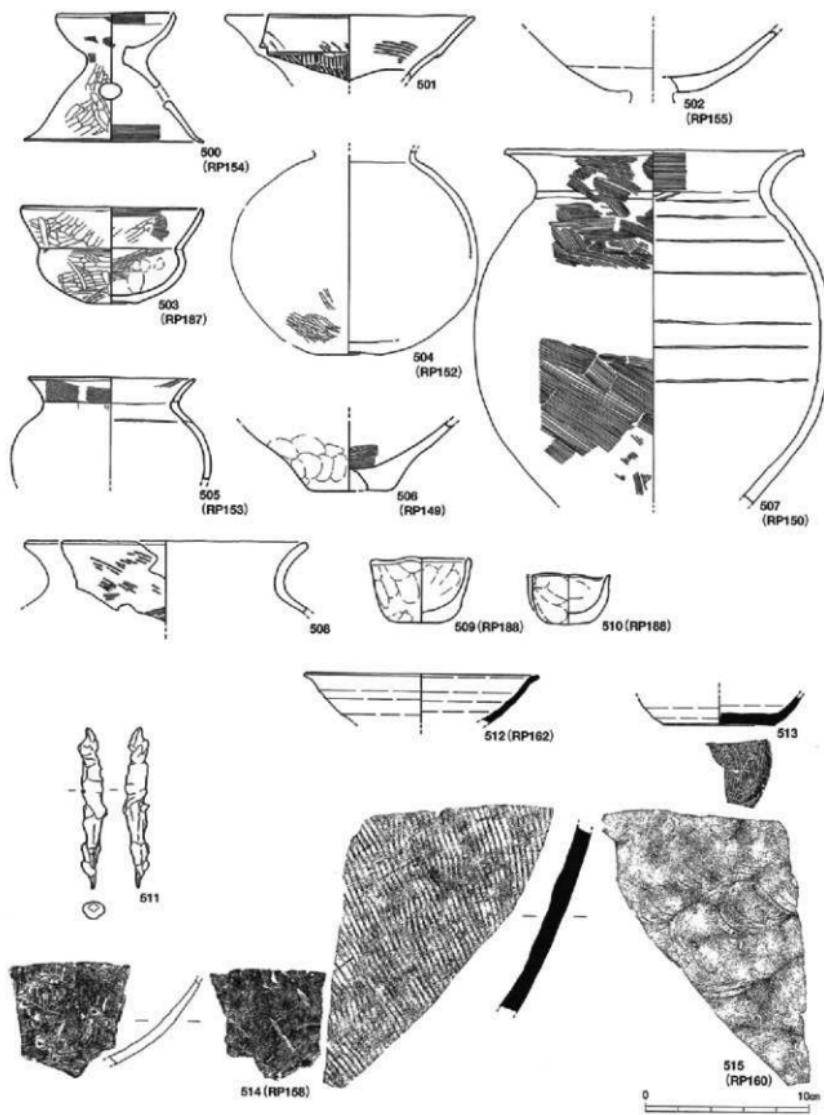
V 出土した遺物



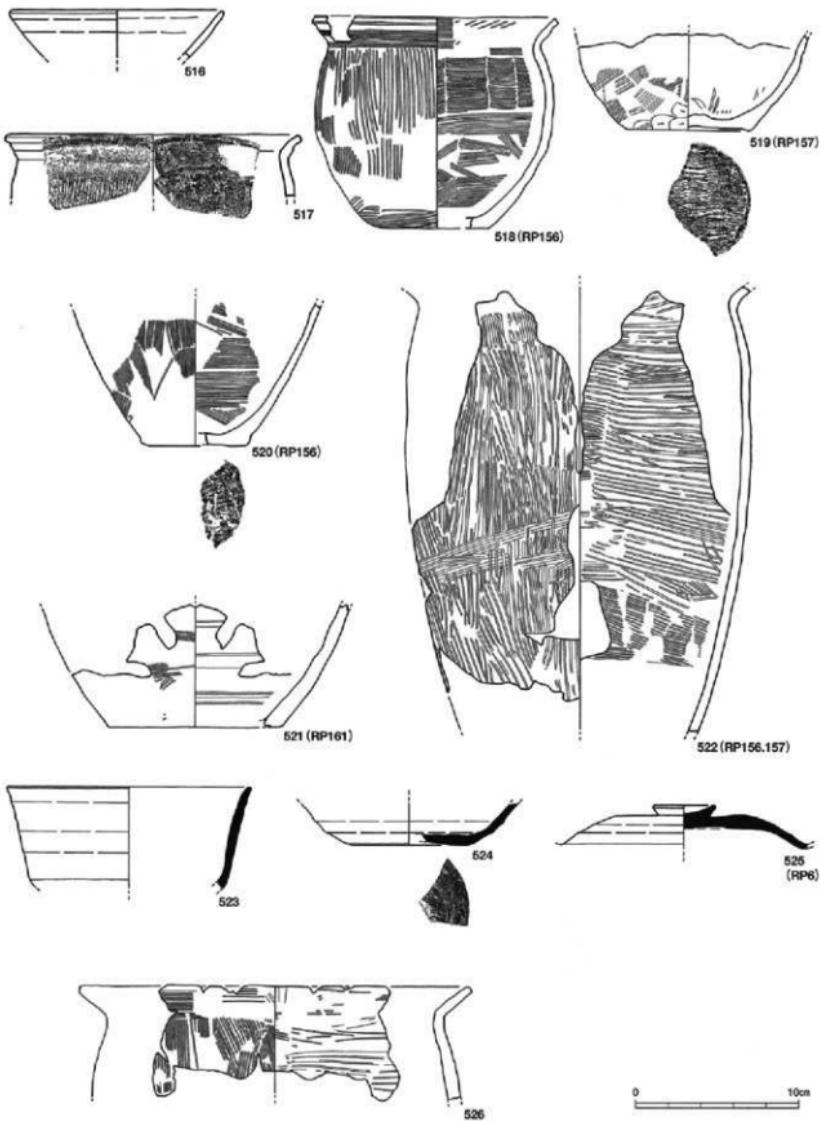
第100図 3次ST21出土遺物



第101図 3次EU 1・SD・SK 1出土遺物 (EU 1 486~488、SD 489~498、SK 1 499)



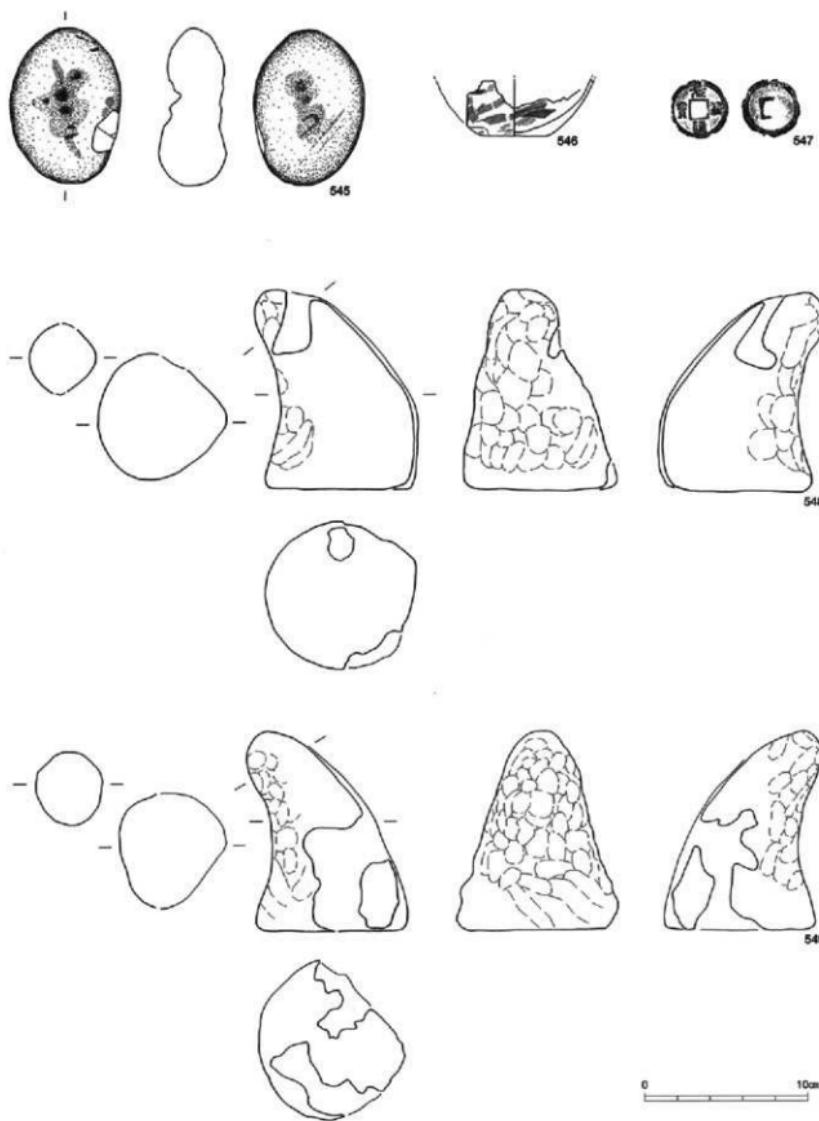
第102図 3次SX14・18(1)出土遺物 (SX14 500~510、SX18 511~515)



第103図 3次SX18(2)・26出土遺物 (SX18 516~522、SX26 523~526)



第104図 3次SK2 (527、528)・SX4 (533、539)・SX5 (540)・SX6 (534、535)・SK10 (529、530)
・SX10 (537、538、542、544)・SK12 (531、532、536、541)・SX13 (543) 出土遺物



第105図 3次SX31・その他のSX・西高参1・2出土遺物 (SX31 545、その他のSX 546~547、西高参1・2 548~549)

- 2 次 S T 130 住居跡出土遺物** 2次S T 130住居跡出土遺物（第80・81・32図） カマドから煙道への移行部の中央部付近から、鉢の破片が一点出土している。カマドの袖は粘土で整形され中には石が存在した。周囲からは、長胴壺が4点出土した。出土遺物としては土師器壺、長胴壺、壺、鉢などの各器種がある（第80・81図）。古代に属する遺物としては、須恵器壺（240～242）、土師器壺（237、238）、土師器鉢（239）土師器長胴壺（243～246）がある。
- 2 次 S T 131 住居跡** 2次S T 131住居跡（第82・33図） カマドの周囲から土師器長胴壺、須恵器壺、蓋などが出土した（第82図）。古代に属する遺物としては、須恵器壺（247～249）、須恵器蓋（250）、土師器長頸瓶（251～253）がある。須恵器壺の底部の調整は、糸切とヘラ切りの両者が存在する。249の糸切壺は、底部から立ち上がる部位に面取りが行われている。
- 2 次 S T 132 住居跡** 2次S T 132住居跡（第82・83・34図） 煙道の中央部付近から、須恵器壺の破片が一点、カマドの周囲から須恵器壺、土師器小型壺、長胴壺が出土した。出土遺物としては須恵器壺、土師器小型壺、長胴壺の各器種がある（第82、83図）。古代に属する遺物としては、須恵器壺（257～262）、土師器小型壺（254、265）または土師器長胴壺（255、256、263、264）がある。須恵器壺の底部の調整は、糸切とヘラ切りの両者が存在する。259の壺は底部が、乱雑な手持ちのヘラケズリで調整されている。
- 2 次 S T 133 住居跡** 2次S T 133住居跡（第84・85・86・35・36図） カマドの周囲から、須恵器壺・壺、土師器長胴壺の各器種が出土している（第84～86図）。出土遺物としては須恵器壺・壺、土師器・長胴壺の各器種がある。古代に属する遺物としては、須恵器壺（266～276）、須恵器蓋（277、278）、土師器内黒壺（279）、須恵器壺（285）、土師器長胴壺（280～284）、土師器小型壺（286）がある。
- 2 次 S T 135 住居跡** 2次S T 135住居跡（第87・35・36図） 出土遺物としては、須恵器壺（287～290）、須恵器蓋（291）、土師器長胴壺（292）がある。
- 2 次 S T 198 住居跡** 2次S T 198住居跡（第87・37図） 出土遺物としては、須恵器壺（293～296）、土師器長胴壺（297）がある。
- 3 次 S T 15 住居跡** 3次S T 15住居跡（第88・38図） 出土遺物としては、須恵器壺と蓋などがある。古代に属する遺物としては、須恵器壺（301）、須恵器蓋（302）、土師器小型壺（303）がある。
- 3 次 S T 16 住居跡** 3次S T 16住居跡（第88・89・90・39・40図） 出土遺物としては須恵器小型壺・壺、土師器長胴壺、内黒土器などの各器種がある、これは、他の住居跡の遺物の出土と較べると多い。古代に属する遺物としては、須恵器壺（307～324、329～332）、須恵器鉢（333、335）、須恵器双耳壺（336）、須恵器取手付鉢（334）土師器内黒壺（304～306）、土師器長胴壺（326、327）、土師器小型壺（325）、土師器壺（328）がある。304土師器内黒壺は、底部から体部にかかるあたりに段を有している。須恵器壺の底部切り離しは、糸切とヘラ切の両者が存在するが、口径底径、さらには器高ともにはば同じである。
- 3 次 S T 17 住居跡** 3次S T 17住居跡（第91・41図） 出土遺物としては須恵器壺、土師器長胴壺・小型壺、黒色土器などの各器種がある（第91図）。古代に属する遺物としては、須恵器壺（337～339）、須恵器蓋（340）、土師器内黒壺（341）、土師器小型壺（343、344）、土師器長胴壺（342、345）があ

る。341の底部の形状は判然としない。

3次S T 18住居跡（第92・42図） 出土遺物としては須恵器壺、土師器長胴甕、壺などの各器種がある（第92図）。カマドの周囲から土師器長胴甕が出土した。古墳時代に属する遺物としては、小型甕（347）、壺（348）、土師器内黒壺（346）、と恐らく土師器鉢（356）。古代に属する遺物としては、須恵器壺（349～352）、土師器内黒壺（353）、土師器小型甕（354）、土師器甕（355）土師器長胴甕（357）がある。353の底部の形状は判然としない。

3次S T 18
住居跡

3次S T 19住居跡（第93～98・43・44図） 出土遺物としては、多量の遺物が出土しているこの出土量は今回の萩原遺跡の調査の中でも最大級である。出土遺物には須恵器・壺・甕・壺・高台付壺、土師器・長胴甕・小型甕・壺などの器種がある（第93～98図）。古墳時代に属する遺物としては、壺（362）。古代に属する遺物としては、須恵器壺（370～409、413～440）、須恵器蓋（410～412）、須恵器双耳壺（441～443）、須恵器長頸瓶（444、445）、須恵器甕（358～361、446、453）、須恵器甕（447～451）、土師器小型甕（363～365）、土師器長胴甕（366～369）、灰釉陶器（452）がある。古墳時代の遺物は混入であると考えられる。須恵器壺の底部の切り離しは、糸切とヘラ切りの二つの技法があるが、両者の法量を比較すると、底径・口径・器高ともほとんど同じであり、明確な差は見いだせないよう思える。

3次S T 19
住居跡

3次S T 20住居跡（第99・45図） 出土遺物としては須恵器壺、土師器小型甕の各器種がある（第99図）。煙道の中央部付近から、須恵器壺の破片などが出土している。古代に属する遺物としては、須恵器壺（454～461）、須恵器蓋（462）、須恵器長頸瓶（463）、土師器小型甕（464～466、468）、土師器甕（467、469）がある。454、456、458などの須恵器壺は底径が大きく、口径も大きく、器高は低い。468は小型の甕であるが、製塩土器の可能性を指摘するむきもある。

3次S T 20
住居跡

3次S T 21住居跡（第100・46・47図） 出土遺物としては須恵器・甕・壺・高台付壺・蓋、土師器長胴甕、壺などの各器種がある（第100図）。古墳時代に属する遺物としては、甕（483）が見いだせるが、混入であろう。古代に属する遺物としては、須恵器壺（471～480）、須恵器蓋（470）、須恵器甕（485）、土師器長胴甕（481、482、484）がある。ここで見いだされた須恵器蓋は、深い身を持ち頂部付近に貫通孔を有する。おそらく摘みを頂部に持つものと推定することができ、香炉の可能性もあるうか。

3次S T 21
住居跡

・奈良・平安時代のその他の遺構

2次S X 178（第87図） 須恵器蓋（298）、須恵器長頸瓶（299）、須恵器横瓶（300）がある。

2次S X 178

3次SK 1（第101・56図） 古代に属する遺物として須恵器蓋（499）がある。

3次SK 1

3次S X 18（第102・103・52図） 出土遺物としては須恵器壺・甕、土師器甕、土師器長胴甕・小型甕などの各器種がある（第102・103図）。古代に属する遺物として、土師器甕（514）、須恵器壺（512、513）、須恵器甕（515）、土師器壺（516）、土師器小型甕（517、518、519）、長胴甕（520～522）がある。中世～近世に属する遺物として鉄釘（511）がある。

3次S X 18

3次S X 26（第103・53図） 出土遺物としては須恵器蓋などの器種がある（第103図）。古代に

3次S X 26

属する遺物としては、須恵器坏 (523、524)、須恵器蓋 (525)、土師器長胴壺 (526) がある。

3 次 E U 1 埋設土器 (第101・54図) 古代に属する遺物として土師器坏 (488)、土師器長胴壺 (486、487) がある。487の内部には、底部糸切り488の土師器坏が正位で存在していた。486はほぼ完形で依存し、487は重機の掘削により底部付近と胴部にかけてのあたりが失われていた。土師器坏は底部糸切であり、底径は小さく、器高は高く、底部から口縁部にかけては強く外反する。糸切の土師器坏は本遺跡ではほとんど出土事例はなかった。このセットが出土した時には、ふたつの土師器長胴壺の口縁部は密着していた。周囲には、ほぼ同時期と考えられる S T 16 穴住居跡、さらには性格不明遺構である S X 20 があるが、これらとの関係は不明である。

3 中世の遺構

・中世の方形堅穴状遺構

3 次 S K 2 土坑出土遺物 (第104図) 中世に属する遺物として、須恵器系中世陶器 (527、528) がある。これらは、内面にはアテ痕を持ち、外面には平行線の工具による叩きを持つ。527は下位に斜めに走行する叩きを持ち、その上方には下位の叩きよりもやや口縁部に平行に近い叩きを持っている。恐らくこの口縁部に平行に近い叩きの部分は、壺の頭部から口縁部に移行する辺の部位であろうと考えられ、全体として装飾的な効果を發揮しているものと考えることが出来よう。こうした効果を持たせた壺の類例としては、大曾根地区の仁多沢山から出土した経筒外容器の須恵器系陶器がある。両者の関係が注目される。12から13世紀の遺物であろうと考えられる。

3 次 S K 10 土坑出土遺物 (第104・56図) 土坑の覆土中より、中世に属する遺物として須恵器系中世陶器 (529、530) がある。529の外面の叩きと、530の叩きとを比較すると、529の叩きの方が細かい。12から13世紀の遺物であろうと考えられる。

3 次 S K 12 土坑出土遺物 (第104、57図) この S K 12 土坑からは、見込みにスタンプのある青磁蓮弁文碗 (531)、古瀬戸戸口滴 (532)、鉄釘 (536) などが出土している。竜泉窯系青磁蓮弁文碗は内面にスタンプで模様が押捺される。意匠は恐らく草花文であろうと考えられる。底部付近ばかりの遺存ではあるが、底部周辺からの部分を触ってみると、やや凸凹を感じられ、鏡蓮弁文の痕跡とであろうと考えられる。外底高台内部は無釉となっている。532は、古瀬戸中期段階の水滴である。小ぶりな蓋に、注口がついている。口縁部から体部にかかるあたりには、連続した三日月型の押捺が見られ、加筋であろうと考えられる。13~14世紀の遺物であろうと考えられる。複数と考えられる須恵器坏 (541) がある。

3 次 S X 4 出土遺物 (第104図) 須恵器坏底部 (533)、砥石 (539) が出土している。須恵器坏底部は混入であろうと考えられる。539の砥石は長さ約 5 cm、巾が中央部で約 1 cm、木口で約 1.5 cm である。色調は緑色を呈する。本来の形状がもっとも良く残されているのは、木口部分であるため、使用以前の流通段階では約 1.5 cm の面が形成されていたものであろうと考えられる。調整段階の線条痕が良く残っている部分と、線条痕が残っていない部分がある。上端は本来の

木口面が残されているものと思われるが、下端は上端の木口面よりも少し小さいため、本来の木口面ではない可能性がある。この場合には、長さはもう少し長くなることが考えられる。材質的には中砥か荒砥であると考えられる。時期的には中世であろうと考えられるが、特定は出来ない。ただし、遺構の形態や特徴が、SK10やSK12と類似するため、こうした近似性からすれば、12~13世紀の所産であると見ることもできよう。

3次S X 5 (第104図) 土製のメンコ (540) が出土している。メンコは人物の顔が描かれている。整形方法は、型押しであり、メンコというよりも、人形の顔として作製され、人形の本体から顔だけが剥落したものである可能性もある。近世江戸時代の所産であると考えられる。

3次S X 6 (第104図) 古墳時代の坏 (534)、小型壺 (535) が出土している。534の坏は脚部のみが遺存している。中実棒状の脚部破片である。萩原遺跡で中実棒状の脚を持つ坏は類例が少ないのである。小型壺は外観がケズリによって整形されている。古墳時代前期の所産であろうと考えられる。

3次S X 10 (第104・59図) 钉 (537、538)、古銭 (542)、中世窯器系陶器 (544) が出土している。古銭の銭鉢は、遺存が全体の半分以下であるため不明である。中世窯器系陶器は口縁部は受け口となり、頸部から強く外転する。全体的な器形を想定してみると、恐らく平底の底部を持ち、体部から肩にかけては緩やかに外反し、肩から頸部にかけては強く内側に倒れる器形を想定することができる。全体の色調は赤茶色を呈し、これまた窯器系陶器の色調をまねている。窯器系陶器には、愛知県に所在する著名な中世陶器窯である常滑焼を代表として、北陸や東北地方にかけていくつかの窯が造営されたことが知られている。しかしながら、544の窯器系陶器が焼造された陶器窯は不明であると言わざるを得ない。こうした中世陶器は、山形盆地一円から出土するため、山形盆地の周辺に窯器系の中世陶器窯が存在する可能性が強いが、未発見である。13世紀代の所産であろう。

3次S X 13 (第104図) 古墳時代の土師器壺底部 (543) が出土している。

3次S X 31 (第105図) 繩文時代の凹石 (545) が出土している。凹み石は、本遺跡ではほとんど出土していない。両面に複数の凹みをそれぞれ有している。

S D (第101図) これらはほとんどが、鉗跡とした遺構から出土したものである。縄文土器 (489)、須恵器坏 (490~492、495、496)、須恵器壺 (494)、須恵器長頸瓶? (497)、土師器壺 (493)、土師器壺 (498) などがある。縄文土器はおそらく縄文時代後期の所産の可能性がある。

3次その他のS X (第105図) その他の性格不明遺構から、土師器底部 (546)、古銭、元祐通宝 (547) が出土している。

3次 S X 5

3次 S X 6

3次 S X 10

中世窯器

3次 S X 13

3次 S X 31

S D

3次その他のS X

VI まとめ

萩原遺跡の発掘調査は、日本道路公団の東北中央自動車道相馬・尾花沢線（上山～東根間）の建設工事事業に伴って、3次にわたって実施されたものである。調査の成果について、以下にまとめてみたい。

・主な調査の成果

- 複合遺跡**
1. 萩原遺跡は、山形市街の南西方約4km、山形盆地の南、山形市大字本沢地区に所在する本沢川右岸の自然堤防上の微高地に立地し、縄文時代から中世まで営まれた、複合遺跡であることがわかった。
 2. 遺跡は本沢川の段丘上や旧水路の氾濫によって形成された自然堤防上の微高地に発達し、周辺には多くの遺跡が集中して分布している立地環境にあることがわかった。
 3. 萩原遺跡の2次調査と3次調査で検出された遺構の種類は、堅穴住居跡・掘立柱建物跡・畝跡・埋設土器・堅穴状遺構・土坑・柱穴・性格不明土坑・その他の遺構・河川跡などである。時期的には、古墳時代から中世、一部には近世にまで及ぶことがわかった。
 4. 第2次調査では主な遺構として、古墳時代前期の堅穴住居跡2棟、平安時代の堅穴住居跡10棟、掘立柱建物跡5棟、溝跡、土坑数基確認され、古墳時代前期の土師器と平安時代の土師器と須恵器が出土した。
 5. 第3次調査では、古墳時代前期の堅穴住居跡8棟、平安時代の堅穴住居跡8棟、掘立柱建物跡棟、溝跡、畝跡、土坑数基確認され、さらには中世の遺構として、堅穴状遺構、土坑が確認された。中世に属する遺物としては、中世陶器、砥石、陶磁器、銭や釘などの金屬製品が出土した。
 6. 古墳時代前期の遺構は発掘区の西側に集中している。奈良・平安時代の古墳時代前期の遺構は、調査区のほぼ全域に分布している。この時期の掘立柱建物跡は、調査区の東側に集中して分布している。ここには埋設土器が存在し、さらには畝跡が存在していた。
 7. 中世の遺構は、調査区の西側に集中し、ほぼ古墳時代前期の遺構の分布と重複する。中世の遺構は、掘立柱建物跡と方形堅穴状遺構から構成されている。これらの遺構は、ほぼ軸線をそろえているため、何らかの立地に対する規制が存在したものであろうと考えられる。
 8. 全体的な、遺物と遺構の集中では、調査区のより西側と東側に遺構は密集している傾向があり、こうしたことの原因として、遺跡の調査区内部に幾筋か残された河道の存在が大きいものと考えられる。河道は幾度か移動を繰り返したものであろうと考えられる。こうした、河道の移動に伴って集落の立地もまた変更を求められたものであろうと考えられる。

表1 出土土師器編年表(案)

遺跡等 塗町	他の 編年	世紀	その他、特徴など (北陸等々…)	萩原	菖蒲江	元屋敷	馬洗場B	淡江 (公園)	今堀	板橋2	服部・ 藤治
5	庄内 旧	3					龍登堀? 河川跡	●			
6	庄内 新						河川跡				
7	布留 0						○				
8		4	彩色・赤く焼く 甕きれいに作る時期	ST2,3, 5,6,8,10 ○	○	加熱窯	○	S T711 ●		河川跡 ○	
9			甕製作の変わり目 (その後崩れる)				○	S T702 ●旧 → ○新	S T20	河川跡 ○	
10						高坏	○			○	
11							○				
12			甕輪に作る時期 頸済器出現			河川跡	○				
13			TK208	ST4-2 ●		河川跡	○	○			
14			TK47								
15											

○塗町編年に当たると思われる遺構・遺物

●編年指標となると思われる遺構・遺物

・主な遺構と遺物の時期について

- 漆町編年**
1. 墳時代の遺構遺物について、比較的住居跡毎にまとまりを見いだすことができたので、こうしたまとまりを手掛かりとしながら、遺構遺物について検討会を実施した。その結果が、表1として示した古墳時代前期の山形盆地における編年表である。この編年表（表1）は、北陸地方の編年觀を中心とした、漆町編年に見いだされる編年觀を参考としながら、萩原遺跡とその所在地の周辺である、山形盆地の同時代遺跡の土器群を編年的にまとめたものである。
 2. 萩原遺跡のS T 2、3、5、6、8、10などの住居跡から出土した土器群は、ほぼ漆町編年の8群に比定することができよう。4世紀初頭の位置するものと考えられる。ただし、一部新しい様相を示すものも存在するため、従統的検討を経なければならない。
 3. 萩原遺跡のS T 4-2住居跡から出土した遺物は、漆町編年の13群、5世紀の中頃に位置するものと考えられる。ただし、ここでは須恵器は伴出しなかった。
 4. 泰良・平安時代の遺構が検出され、これに伴って遺物も出土した。時期的には8世紀の半ば前後から9世紀の半ばまでの遺物がほとんどである。特に3次S T 12住居跡出土遺物 出土遺物としては土師器の壺・壺・壺、須恵器の壺、壺などの各器種が注目される。これらの須恵器壺、須恵器壺、土師器壺、土師器壺、土師器壺などは、須恵器壺は底径が大きく、ヘラ切り離してあり、器高は低く口徑は大きい。土師器壺類は底部から体部に移行する辺に段を持ち内部は黒色処理されている。特にここから出土した須恵器壺や土師器壺などの遺物は、從来山形盆地周辺では類例が少ない時期のものであり注目される。S T 12住居跡の時期は8世紀半ばよりも以前に遡る可能性がある。
 5. E U 1とした埋設土器も1基検出された 内部には、底部糸切りの土師器壺が正位で存在していた。ふたつの土師器長胴壺の口縁部は密着していた。これらは、從来葬送に関係するものであるとか、呪術に関係するものであるとかの考察がある。調査ではこうしたことに対する回答は見いだせなかった。時期的には9世紀前半と見ておきたい。
 6. 中世の遺物は土坑や搅乱された部分からの出土が多かった。中には国産の須恵器系中世陶器、瓷器系中世陶器、瀬戸焼などが含まれ、景德鎮系の輸入磁器がこれに加わる。中世陶器は、瓷器系と須恵器系の陶器がそれぞれ出土している。時期的には12世紀後半から、14世紀代にわたるものと思われる。遺構の造営時期の中心はほぼ鎌倉時代とおさえられる。
 7. 中世の瓷器系陶器が出土している。恐らく平底の底部を持ち、体部から肩にかけては緩やかに外反し、肩から頸部にかけては強く内側に倒れる器形を想定することができる。全体の色調は赤茶色を呈し、これまた瓷器系陶器の色調である。瓷器系陶器には、愛知県に所在する著名な中世陶器窯である常滑焼を代表として、北陸や東北地方にかけていくつかの窯が造営されたことが知られている。こうした中世陶器は、山形盆地一円から出土するため、山形盆地の周辺に、未発見の瓷器系の中世陶器窯が存在する可能性が強い。13世紀代半ば以降の所産であろう。
- 3次S T 12
住居跡出土遺物**

8. 中世の方形堅穴状遺構が検出されている。SK2、SK10土坑などは、方形を呈する遺構であり、13世紀の遺構であり、鎌倉時代であろうと考えられる。従来こうした遺構は東北地方では少数しか見いだされていなかった。萩原遺跡で見いだされたことによって、その面的な広がりが把握出来るようになった。しかしながら、都市鎌倉の方形堅穴遺構とは、様相を異にしている。こうした方形堅穴状遺構と、掘立柱建物跡が軸線を共通しながら存在することから、鎌倉時代のこの地域の建物様相は、方形堅穴状遺構と、掘立柱建物跡が併存して存在する場合のあることがわかった。
9. 近世の遺物である、擂鉢や陶器、肥前磁器なども出土した。注目すべきことに、近世陶器の生産地で使用される窯道具である焼台が出土している。焼台が集落遺跡に持ち込まれるということは、焼台が融着したまま陶器とともに遺跡に埋入されてきたことになり、焼台を外すなどの製品化への作業の工程が、集落遺跡において行われていた可能性を指摘出来る。近世の陶磁器流通の様相がわかった。

萩原遺跡の営まれている場所は、縄文時代以来連続として人々の居住していた場所であることがわかった。この場所をやや大きく眺めれば、古墳時代初頭の様相が興味深い。古墳時代存初頭に先行する、弥生時代終末の土器型式に「天王山式」がある。この土器群は山形盆地では、出土事例に恵まれず、不明な部分が多くあったが、近年盆地の低地部分である標高100mラインを調査することになって、低地からの出土事例が増えている。天童市の南側やこれに隣接する山形市北部には出土事例の蓄積が見られる。山形市の北部では、天王山式の住居跡の検出も知られるようになってきている。こうしたことからすれば、この山形盆地周辺には、すでに天王山式の時期には、人々の活動の痕跡が色濃く残っていることになる。萩原遺跡の南側に隣接する、石田遺跡からも、數片ではあるが天王山式の土器片が採集されている。萩原遺跡の周辺にも、こうした活動の痕跡を窺い知ることができる。こうした先行する活動があったればこそ、古墳時代初頭の萩原遺跡が成立するものであろう。山形盆地周辺は古墳時代に入るといきなり集落が増加するという感触を持つが、実態としては古墳時代に入っていきなり集落が増加するというよりも、その前段階からすでに遺跡は増加し始めており、こうした生産力の高まりこそが、古墳時代前期の遺跡を成立させる遠因となると見ることができよう。淡江遺跡で出土している器台などは、3世紀半ば頃、漆町編年約5~6群の特徴を有するが、こうした遺物の存在もまた、先述の弥生時代終末の地域的充実を暗示しているものとらえることができよう。また、この地域は、古墳時代前期の集落が営まれる日本海側の北限を形成している。無論拠点的にはこれよりも北側に遺物を見いだすことはできるのだが、面的に確認できるのはこの地域を北限としている。さらには、この山形盆地の当りがそれにあたる地域である。こうした地域性にどうやって古墳文化が流入してくるのか、萩原遺跡の調査によって研究の端緒が得られたと考えられよう。

写真図版



空撮第3次調査区全景（真上から）



空撮第3次調査区北区（真上から）



空撮第3次調査区南区（真上から）



空撮第2次調査区全景（真上から）



空撮第2次調査区全景（北から）



2次グリッド設定作業状況

2次遺構検出状況



2次遺構精査状況



2次遺構精査状況



2次産業医視察状況



2次遺構完掘状況



2次発掘調査説明会



2次発掘調査説明会



3次重機表土除去状況



3次面整理状況



3次遺構検出状況



3次北区平板実測状況



3次遺構精査状況



3次SX18実測状況



3次天童中部小学校児童遺跡見学



3次発掘調査説明会



2次A区空撮（真上から）



2次A区空撮（真上から）



2次B区空撮（真上から）



2次B区空撮（真上から）



2次B区空撮（真上から）



2次C区空撮（真上から）



2次D区空撮（真上から）



2次D区空撮（真上から）



北区北端空撮（真上から）



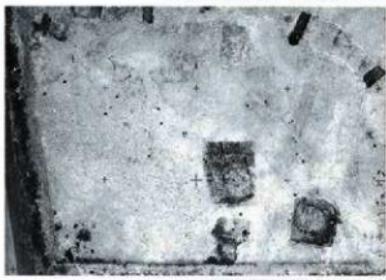
ST20住居跡付近空撮（真上から）



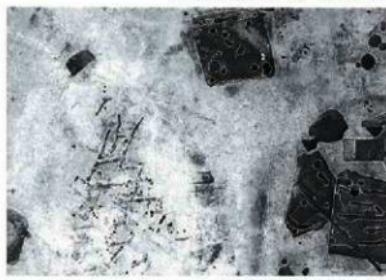
ST10住居跡付近空撮（真上から）



ST3住居跡付近空撮（真上から）



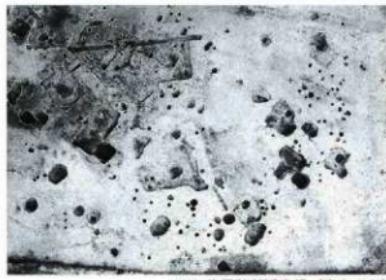
ST12住居跡付近空撮（真上から）



鐵跡付近空撮（真上から）



ST7住居跡付近空撮（真上から）



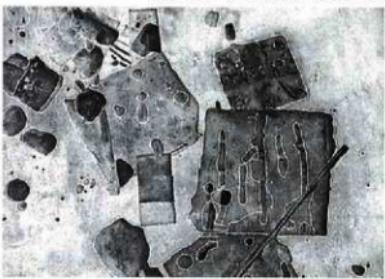
ST4住居跡付近空撮（真上から）



歴跡ST12・19SX18空撮（真上から）



ST14・15・16・17・20住居跡空撮（真上から）



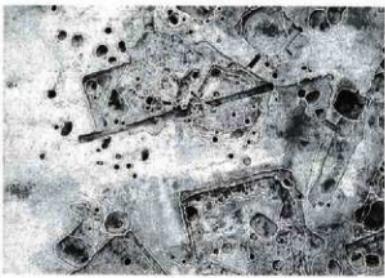
ST5・6・7・8住居跡空撮（真上から）



SX15付近空撮（真上から）



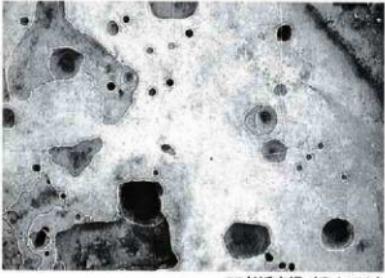
ST4・18住居跡付近空撮（真上から）



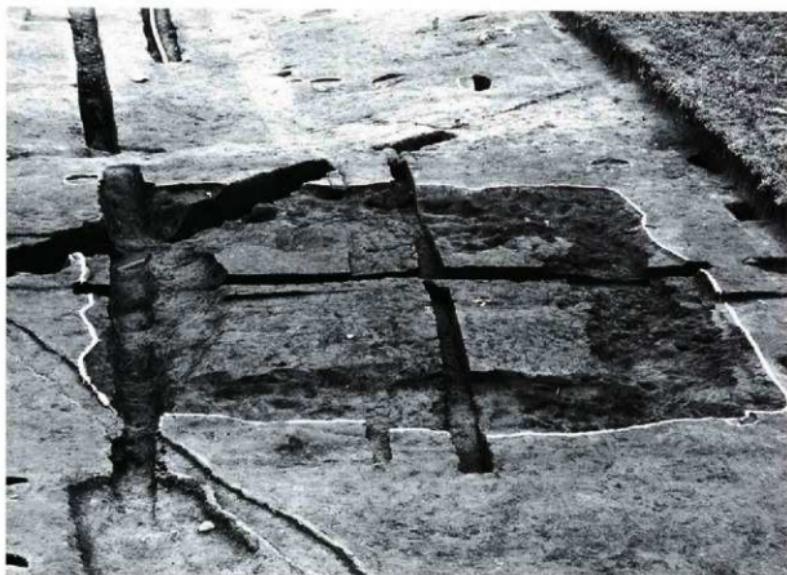
ST2・3付近空撮（真上から）



SK11・12・13付近空撮（真上から）



SB付近空撮（真上から）



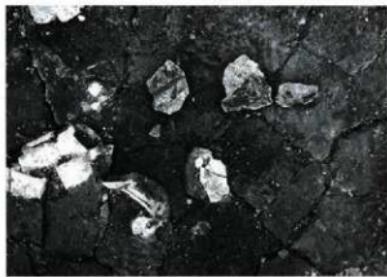
2次ST1住居跡完掘状況↑E



2次ST1住居跡南北断面↑W



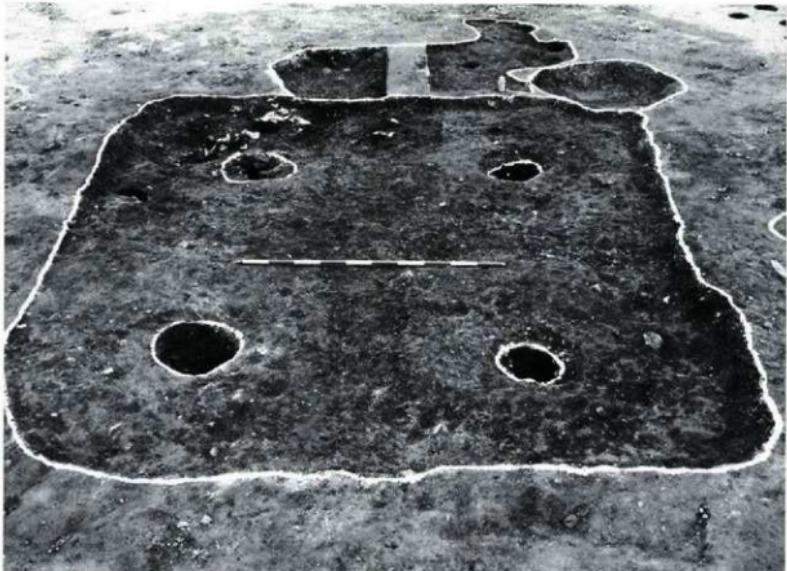
2次ST1住居跡EL1 カマド断面↑N



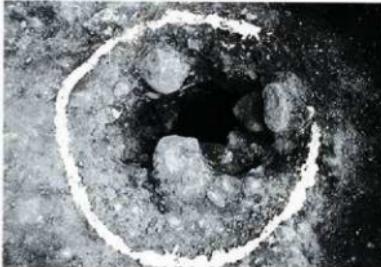
2次ST1住居跡炭化物出土状況↑N



2次ST1住居跡RP3出土状況↑N



ST 2 住居跡発掘状況↑N



ST 2 住居跡EP 1 ↑ N



ST 2 住居跡遺物出土状況↑N



ST 2 住居跡RP17・RN 1 出土状況↑W



ST 2 住居跡RP23出土状況↑E



ST 2 住居跡出土遺物出土状況↑N



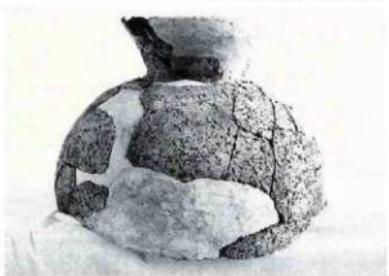
ST 2 住居跡出土遺物 (92)



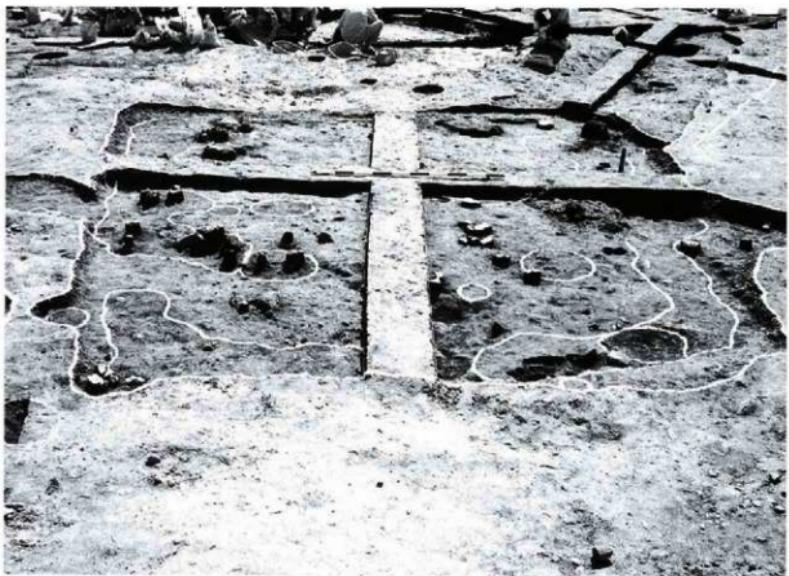
ST 2 住居跡出土遺物 (93)



ST 2 住居跡出土遺物 (95)



ST 2 住居跡出土遺物 (96)



2次ST 3 住居跡調査状況↑W



2次ST 3 住居跡周溝↑N



2次ST 3 住居跡カマド調査状況↑E



2次ST 3 住居跡RP99出土状況↑S



2次ST 3 住居跡RP118出土状況↑S



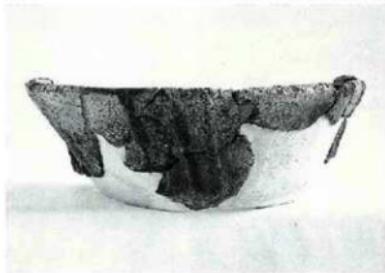
2次ST3住居跡出土遺物出土状況 (RP98・99・100) ↑ S



2次ST3住居跡出土遺物 (101)



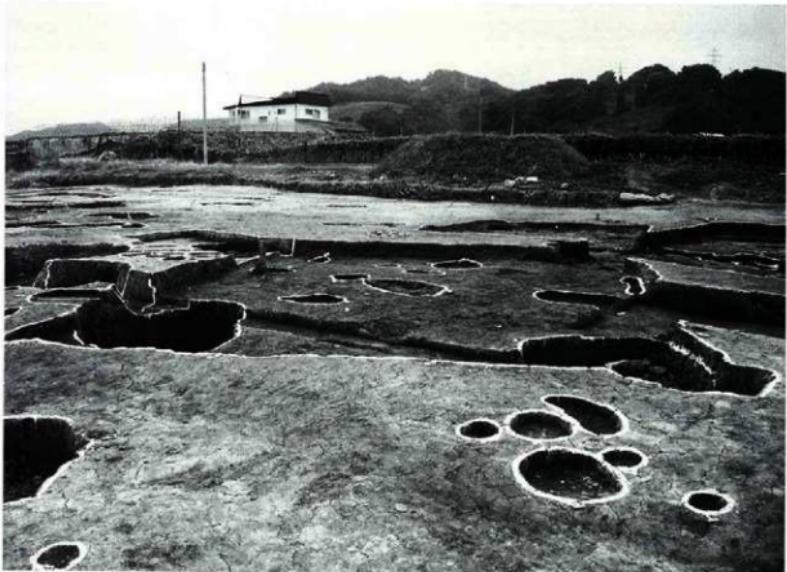
2次ST3住居跡出土遺物 (102)



2次ST3住居跡出土遺物 (103)



2次ST3住居跡出土遺物 (104)



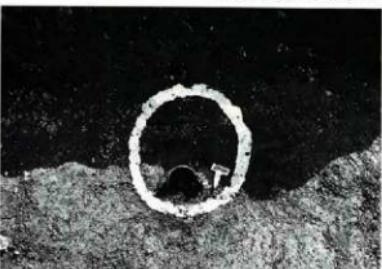
ST 5 住居跡実査状況 ↑ E



ST 5 住居跡調査状況 ↑ N



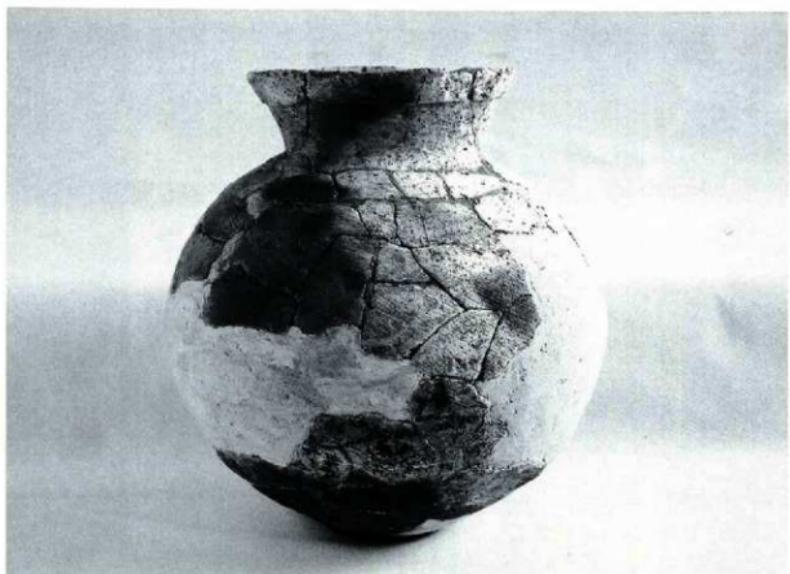
ST 5 住居跡EL10カマド調査状況 ↑ N



ST 5 住居跡EP 4 遺物出土状況 (RP226) ↑ E



ST 5 住居跡遺物出土状況 (RP224・225) ↑ E



ST 5 住居跡出土遺物 (116)



ST 5 住居跡出土遺物 (110)



ST 5 住居跡出土遺物 (110)



ST 5 住居跡出土遺物 (111)



ST 5 住居跡出土遺物 (112)



ST 5 住居跡出土遺物 (113)



ST 5 住居跡出土遺物 (114)



ST 5 住居跡出土遺物 (117)



ST 5 住居跡出土遺物 (118)



ST 5 住居跡出土遺物 (119)



ST 6 住居跡炭化材出土状況（真上から）



ST 6 住居跡完掘状況↑W



ST 6 住居跡調査状況↑W



ST 6 住居跡精査状況↑W



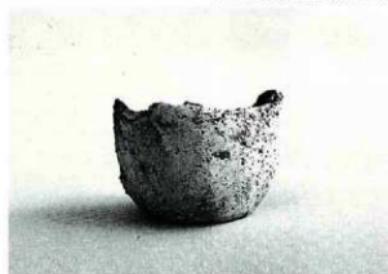
ST 6 住居跡周辺調査状況↑W



ST 6 住居跡出土遺物 (124)



ST 6 住居跡出土遺物 (125)



ST 6 住居跡出土遺物 (129)



ST 6 住居跡出土遺物 (130)



ST 6 住居跡出土遺物 (131)



ST 8 住居跡完掘状況 ↑ N



ST 8 住居跡検出状況 ↑ N



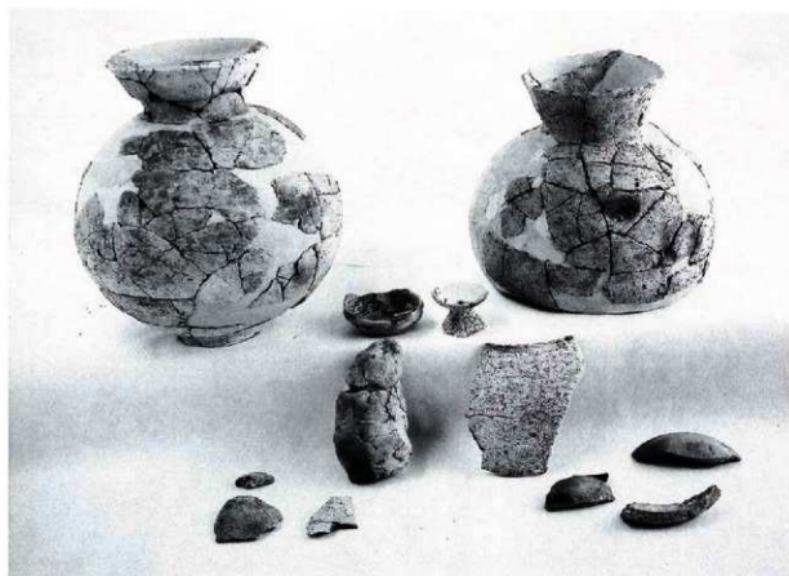
ST 8 住居跡調査状況 ↑ NW



ST 8 住居跡精査状況 ↑ N



ST 8 住居跡RP202出土状況 ↑ N



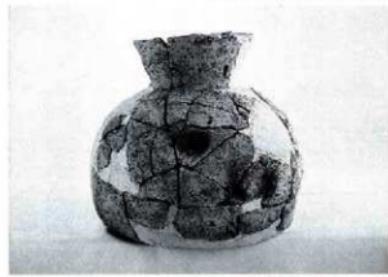
ST 8 住居跡出土遺物 集合



ST 8 住居跡出土遺物 (143)



ST 8 住居跡出土遺物 (145)



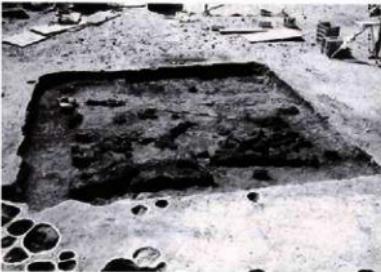
ST 8 住居跡出土遺物 (146)



ST 8 住居跡出土遺物 (149)



ST10住居跡完掘状況↑N



ST10住居跡炭化材出土状況↑E



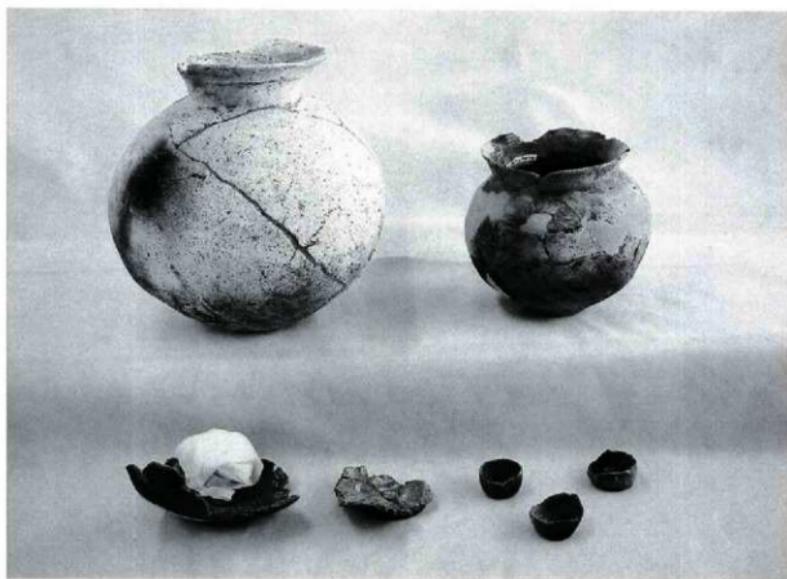
ST10住居跡壁溝詳細↑S



ST10住居跡遺物出土状況↑E



ST10住居跡遺物出土状況↑S



ST10住居跡出土遺物集合



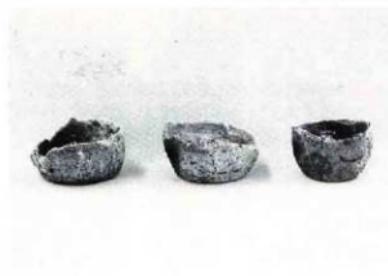
ST10住居跡出土遺物 (157)



ST10住居跡出土遺物 (158)



ST10住居跡出土遺物 (160)



ST10住居跡出土遺物 (161・162・163)



2次ST14住居跡発掘状況↑NW



2次ST14住居跡調査状況↑SW



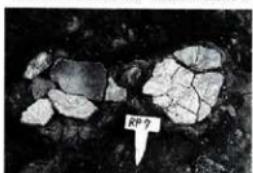
2次ST14住居跡炭化物・遺物検出状況↑S



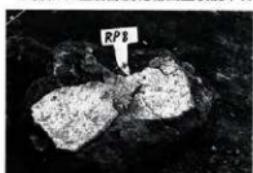
2次ST14住居跡炭化物出土状況↑W



2次ST14住居跡遺物出土状況(RP 6)↑W



2次ST14住居跡発掘状況(RP 7)↑W



2次ST14住居跡発掘状況(RP 8)↑W



2次ST14住居跡出土遺物集合



2次ST14住居跡出土遺物(234)



2次ST14住居跡出土遺物(235)



SX14性格不明遺構出土遺物集合



SX14性格不明遺構調査状況↑E



SX14性格不明遺構検出状況↑E



SX14性格不明遺構遺物出土状況↑E



SX14性格不明遺構出土遺物 (500)



SX14性格不明遺構出土遺物 (503)



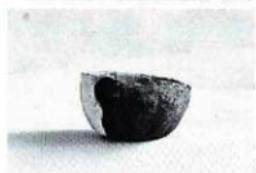
SX14性格不明遺構出土遺物 (504)



SX14性格不明遺構出土遺物 (505)



SX14性格不明遺構出土遺物 (507)



SX14性格不明遺構出土遺物 (510)



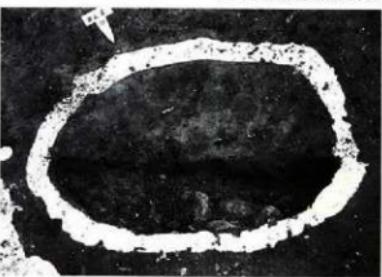
ST 4 住居跡実掘状況↑NE



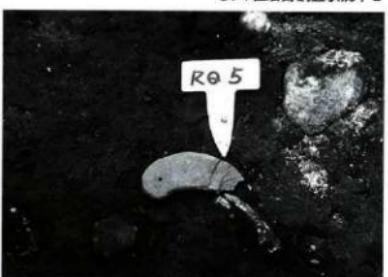
ST 4 住居跡精査状況↑W



ST 4 住居跡調査状況↑E



ST 4 住居跡EL 5 カマド土層断面



ST 4 住居跡遺物出土状況(RQ 5)↑S



ST 4 住居跡出土遺物集合



ST 4 住居跡出土遺物集合



ST 4 住居跡出土遺物集合



ST 4 住居跡出土遺物集合



ST 4 住居跡出土遺物 (RQ 5)



ST 4 住居跡遺物出土状況↑E (RP54・55・56)



ST 4 住居跡遺物出土状況 (RP47) ↑E



ST 4 住居跡遺物出土状況 (RP64・65) ↑N



ST 4 住居跡遺物出土状況↑S



ST 4 住居跡遺物出土状況 (RQ4) ↑N



ST 4 住居跡出土遺物 (164)



ST 4 住居跡遺物出土状況 (167)



ST 4 住居跡遺物出土状況 (168)



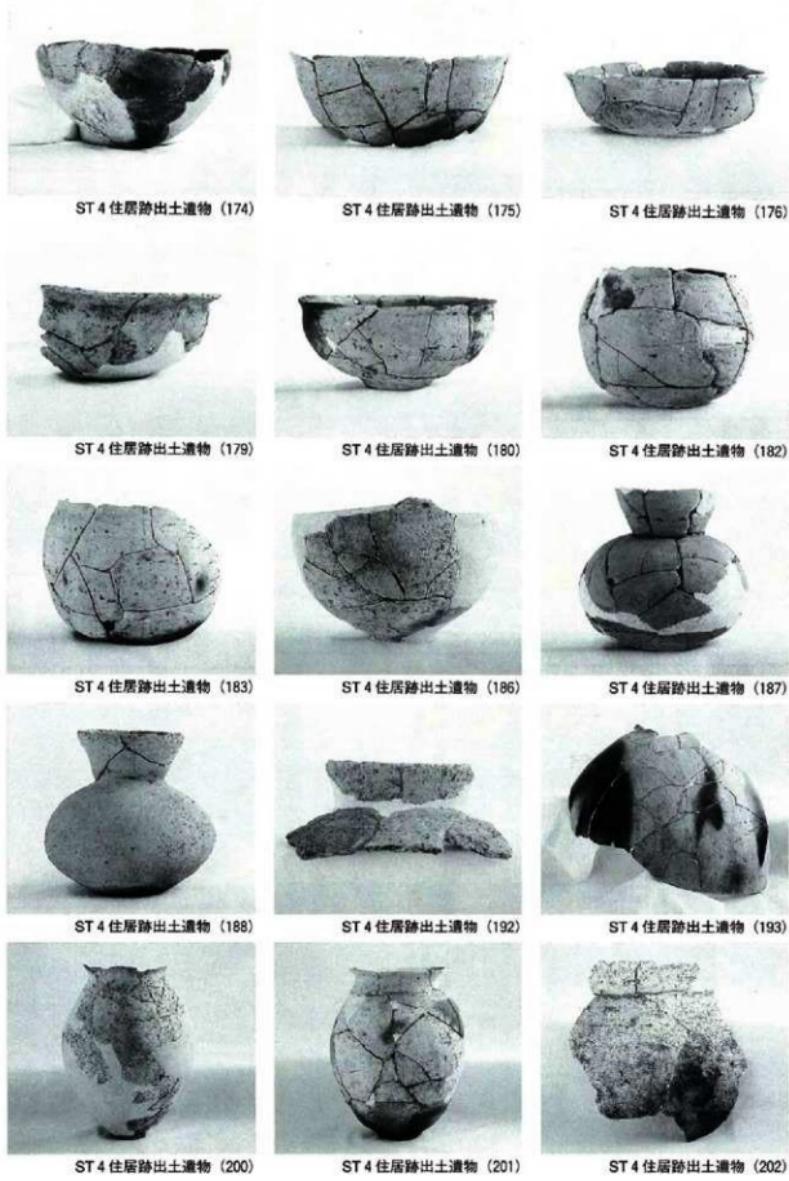
ST 4 住居跡遺物出土状況 (169)



ST 4 住居跡遺物出土状況 (170)



ST 4 住居跡遺物出土状況 (171)





ST 7 住居跡発掘状況 ↑ W



ST 7 住居跡検出状況 ↑ SW



ST 7 住居跡調査状況 ↑ W



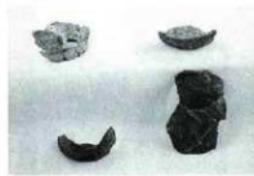
ST 7 住居跡遺構内溝詳細 ↑ SW



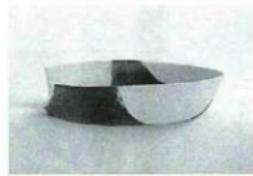
ST 7 住居跡遺物出土状況 (RP235) ↑ E



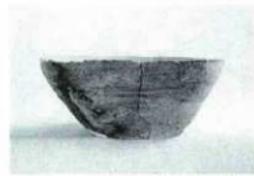
ST 7 住居跡出土遺物集合



ST 7 住居跡出土遺物集合



ST 7 住居跡出土遺物 (206)



ST 7 住居跡出土遺物 (207)



ST 7 住居跡出土遺物 (211)



ST 7 住居跡出土遺物 (212)



ST 7 住居跡出土遺物 (213)



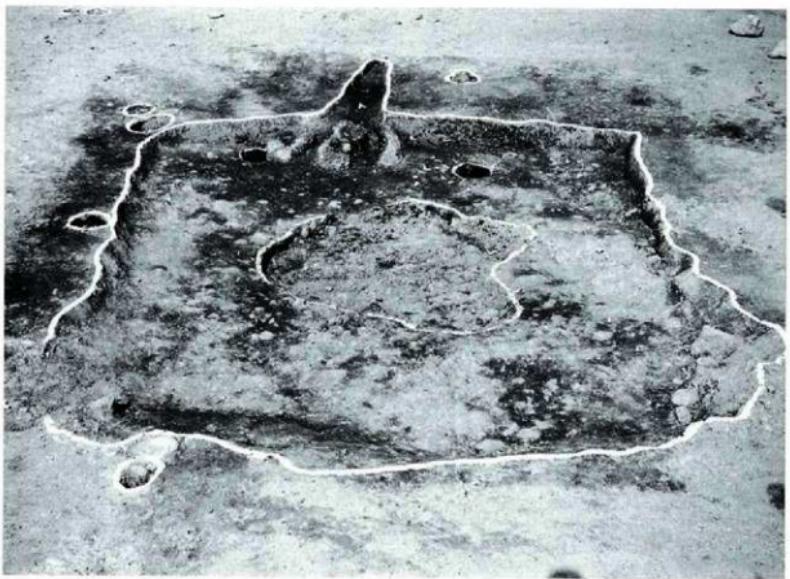
ST 7 住居跡出土遺物 (214)



ST 7 住居跡出土遺物 (215)



ST 7 住居跡出土遺物 (216)



ST12住居跡完掘状況 ↑ S



ST12住居跡調査状況 ↑ W



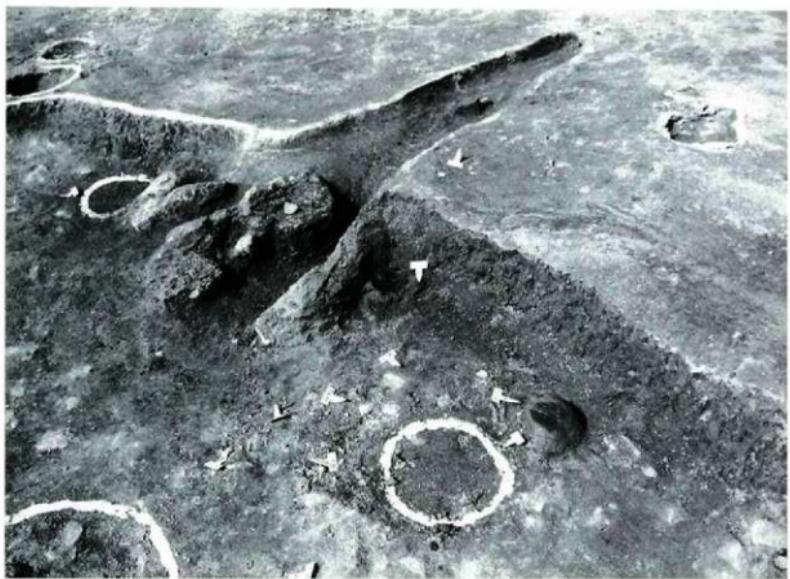
ST12住居跡遺物出土状況 ↑ W



ST12住居跡EL 3 カマド完掘状況 ↑ W



ST12住居跡粘土出土状況 (RN 3) ↑ S



ST12住居跡EL 3 カマド周辺遺物出土状況↑S



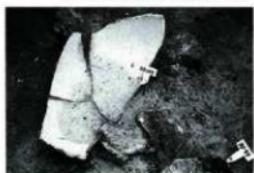
ST12住居跡遺物出土状況↑NW



ST12住居跡遺物出土状況(RP88 + 89)↑N



ST12住居跡遺物出土状況(RP97)↑N



ST12住居跡遺物出土状況(RP125)↑N



ST12住居跡遺物出土状況(RP148)↑W



ST12住居跡遺物出土状況(RP90)↑S



ST12住居跡遺物出土状況(RP126)↑W



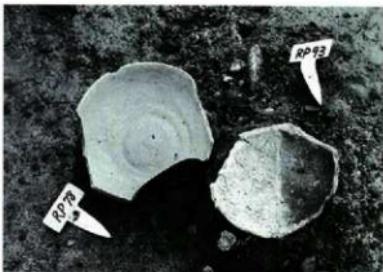
ST12住居跡遺物出土状況(RP144)↑N



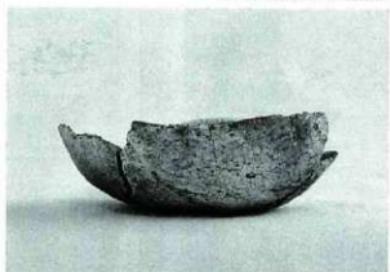
ST12住居跡遺物出土状況(RP175)↑S



ST12住居跡出土遺物集合



ST12住居跡遺物出土状況 (RP78・93) ↑ W



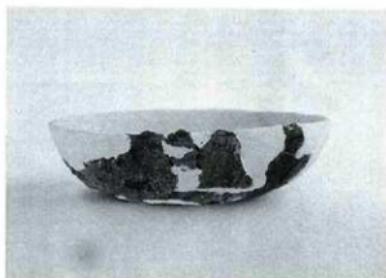
ST12住居跡出土遺物 (217)



ST12住居跡出土遺物 (218)



ST12住居跡出土遺物 (220)



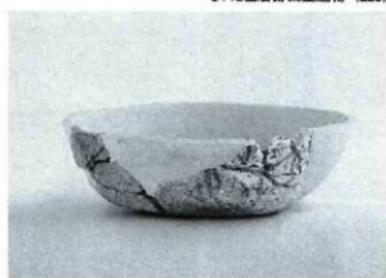
ST12住居跡出土遺物（221）



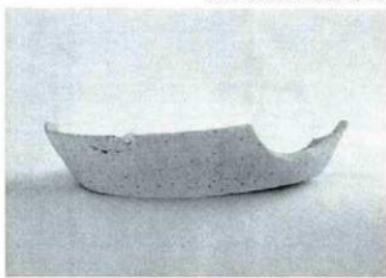
ST12住居跡出土遺物（223）



ST12住居跡出土遺物（225）



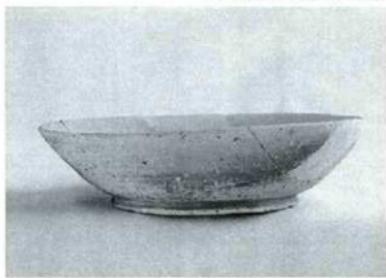
ST12住居跡出土遺物（226）



ST12住居跡出土遺物（227）



ST12住居跡出土遺物（229）



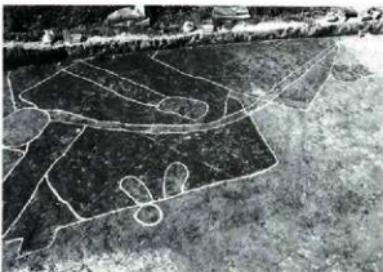
ST12住居跡出土遺物（228）



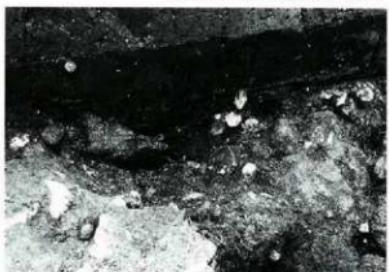
ST12住居跡出土遺物（232）



2次ST6・80住居跡完掘状況↑S



2次ST6・80住居跡検出状況↑W



2次ST6・80住居跡内カマド完掘状況↑W



2次ST6・80住居跡調査状況↑W



2次ST6・80住居跡遺物出土状況↑W



2次ST125住居跡完掘状況↑S



2次ST125住居跡EL134カマド断面↑W



2次ST125住居跡EL134カマド完掘↑S



2次ST125住居跡断面↑S



2次ST125住居跡遺物出土状況(RP11)↑N



2次ST130住居跡発掘状況↑N



2次ST130住居跡EL136カマド検出状況↑N



2次ST130住居跡EL136カマド断面↑N



2次ST130住居跡EL136カマド付近遺物出土状況↑N



2次ST130住居跡遺物出土状況(RP45)↑W



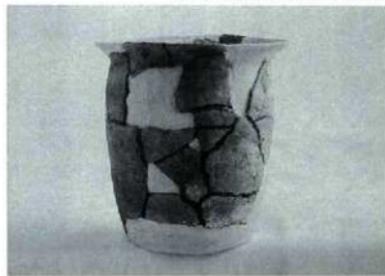
2次ST130住居跡出土遺物集合



2次ST130住居跡出土遺物 (237)



2次ST130住居跡出土遺物 (239)



2次ST130住居跡出土遺物 (243)



2次ST130住居跡出土遺物 (245)



2次ST131住居跡発掘状況 ↑ N



2次ST131住居跡断面 ↑ S



2次ST131住居跡EL149カマド断面 ↑ N



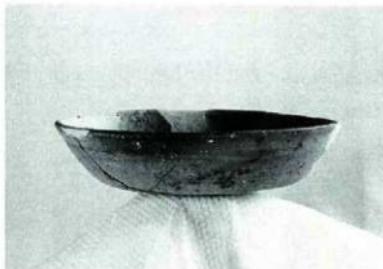
2次ST131住居跡EL149カマド発掘 ↑ NW



2次ST131住居跡遺物出土状況 (RP14・15) ↑ NW



2次ST131住居跡出土遺物集合



2次ST131住居跡出土遺物 (248)



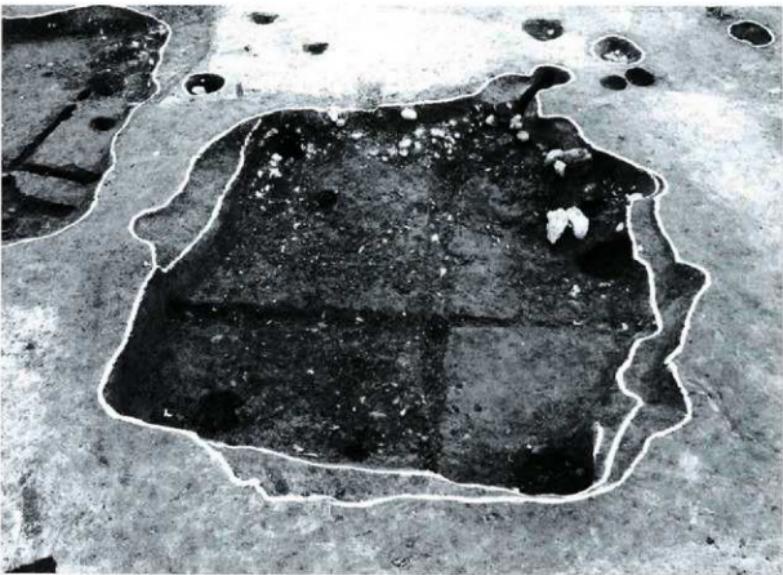
2次ST131住居跡出土遺物 (250)



2次ST131住居跡出土遺物 (252)



2次ST131住居跡出土遺物 (253)



2次ST132住居跡完掘状況↑W



2次ST132住居跡検出状況↑S



2次ST132住居跡調査状況↑W



2次ST132住居跡内カマド完掘状況↑W



2次ST132住居跡遺物出土状況↑W



2次ST132住居跡出土遺物集合



2次ST132住居跡出土遺物 (260)



2次ST132住居跡出土遺物 (261)



2次ST132住居跡出土遺物 (264)



2次ST132住居跡出土遺物 (265)



2次ST133・135住居跡周辺状況↑NW



2次ST133・135住居跡実掘↑W



2次ST133住居跡出土遺物集合



2次ST133住居跡出土遺物 (268)



2次ST133住居跡出土遺物 (275)



2次ST133住居跡出土遺物 (277)



2次ST133住居跡出土遺物 (280)



2次ST133住居跡出土遺物 (285)



2次ST135住居跡出土遺物集合



2次ST135住居跡出土遺物 (288)



2次ST135住居跡出土遺物 (291)



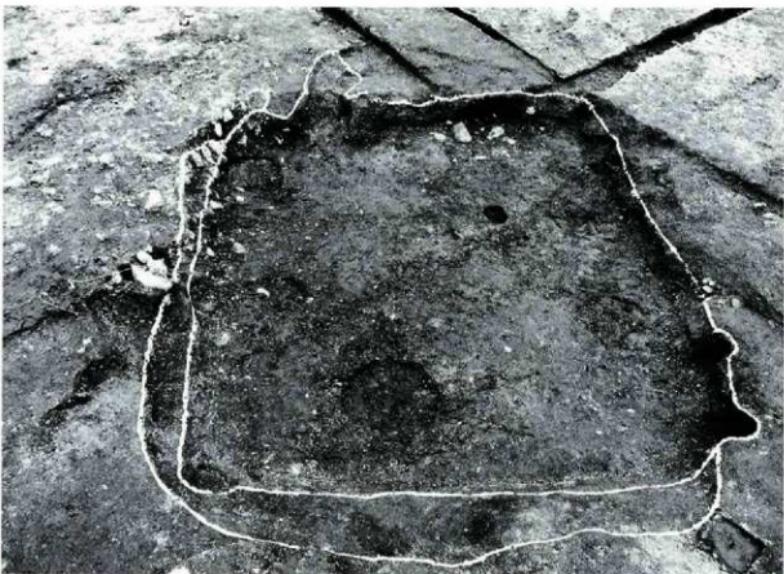
2次ST135住居跡出土遺物 (292)



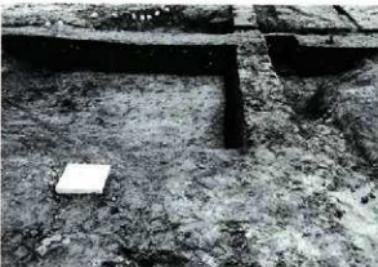
2次ST135住居跡出土遺物 (295)



2次ST135住居跡出土遺物 (300)



2次ST198住居跡完掘状況↑N



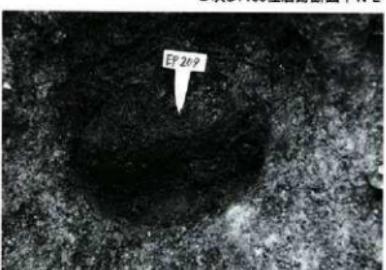
2次ST198住居跡断面↑W



2次ST198住居跡断面↑NE



2次ST198住居跡EL198カマド完掘状況↑N



2次ST198住居跡内EP209ピット断面↑E



ST14・15住居跡完掘状況↑W



ST14・15住居跡検出状況↑W



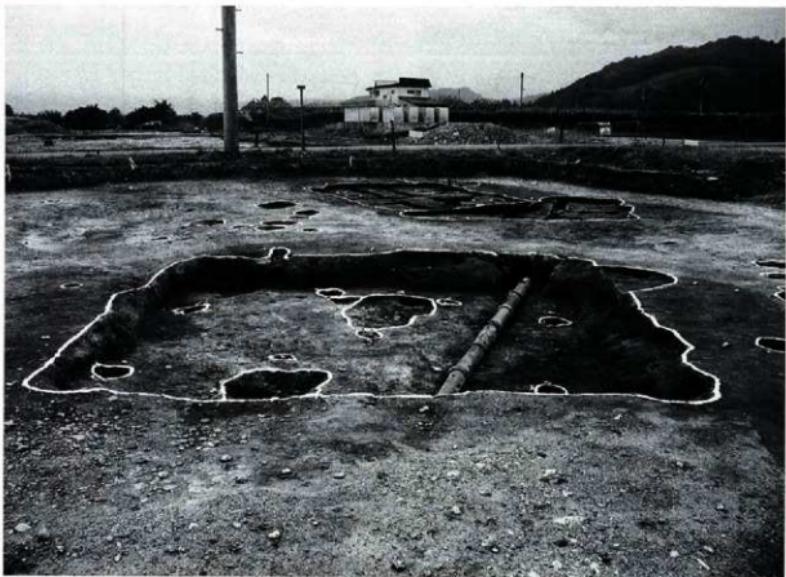
ST14・15住居跡調査状況↑NW



ST15住居跡出土遺物集合



ST15住居跡出土遺物（301）



ST16住居跡発掘状況↑NE



ST16住居跡調査状況↑N



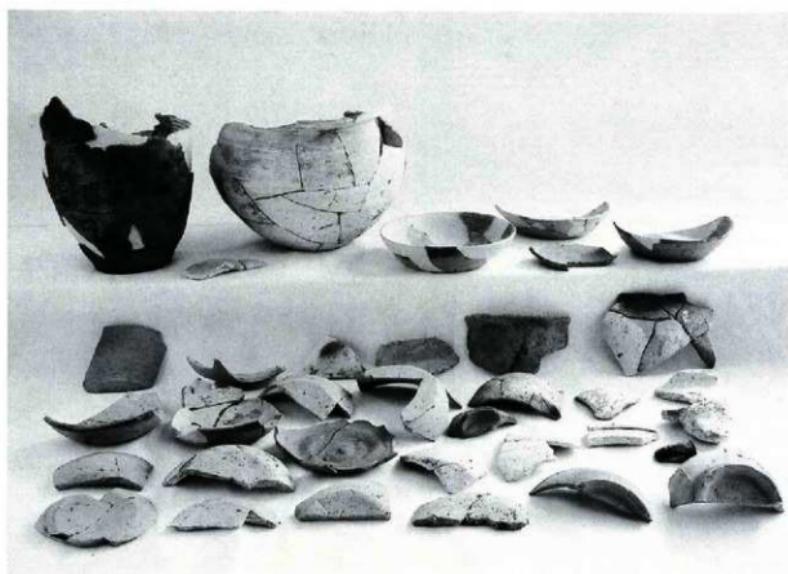
ST16住居跡内カマド調査状況↑N



ST16住居跡内カマド遺物出土状況(RP21)↑N



ST16住居跡遺物出土状況(RP10)↑S



ST16住居跡出土遺物集合



ST16住居跡出土遺物 (312)



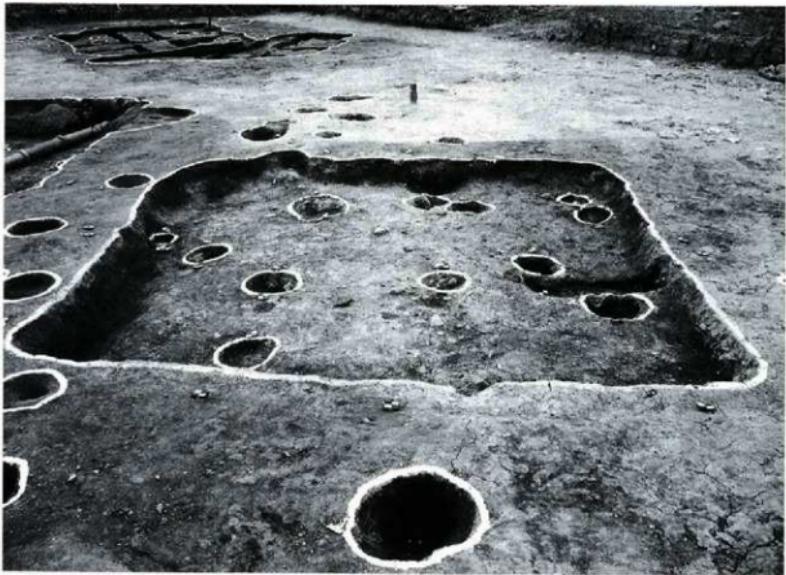
ST16住居跡出土遺物 (327)



ST16住居跡出土遺物 (330)



ST16住居跡出土遺物 (333)



ST17住居跡調査状況 ↑ S



ST17住居跡内カマド完掘状況 ↑ N



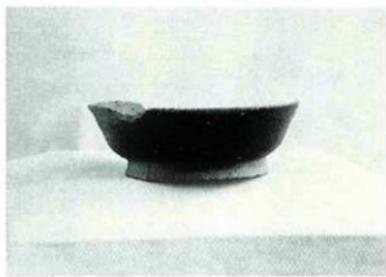
ST17住居跡遺物出土状況 (RP41) ↑ S



ST17住居跡遺物出土状況 (RP32) ↑ N



ST17住居跡出土遺物集合



ST17住居跡出土遺物（337）



ST17住居跡出土遺物（342）



ST17住居跡出土遺物（343）



ST17住居跡出土遺物（344）



ST18住居跡完掘状況↑NE



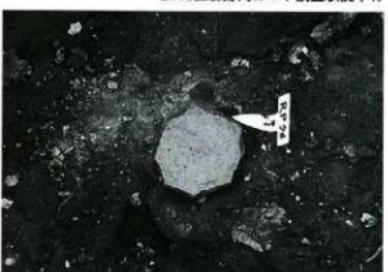
ST18住居跡調査状況↑S



ST18住居跡内カマド調査状況↑N



ST18住居跡調査状況↑W



ST18住居跡遺物出土状況↑E



ST18住居跡出土遺物集合



ST18住居跡出土遺物 (347・348)



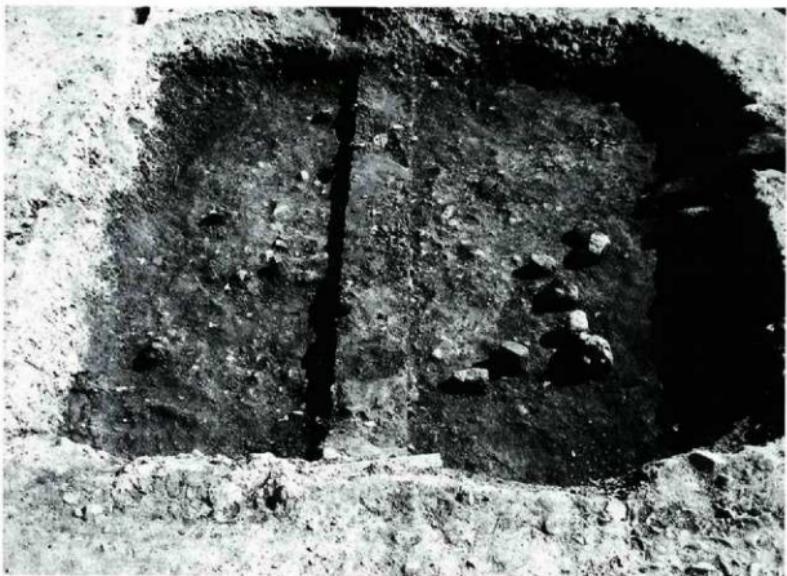
ST18住居跡出土遺物 (349・350・351・352)



ST18住居跡出土遺物 (246・353)



ST18住居跡出土遺物 (354・355・357)



ST19住居跡完掘状況↑W



ST19住居跡調査状況↑W



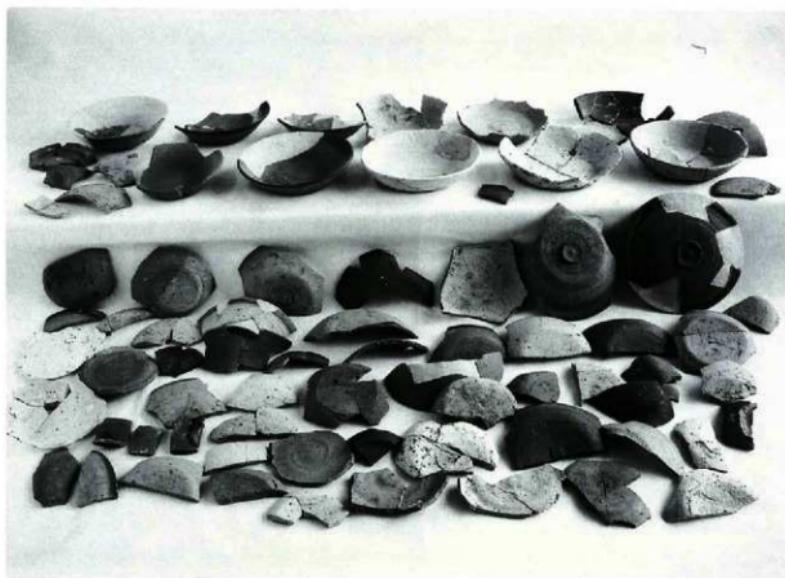
ST19住居跡内カマド完掘状況↑N



ST19住居跡遺物出土状況(RP181・179)↑W



ST19住居跡遺物出土状況(RP246)↑E



ST19住居跡出土遺物集合



ST19住居跡出土遺物（367）



ST19住居跡出土遺物（379）



ST19住居跡出土遺物（393）



ST19住居跡出土遺物（表）（410）



ST19住居跡出土遺物（裏）（410）



ST19住居跡出土遺物（411）



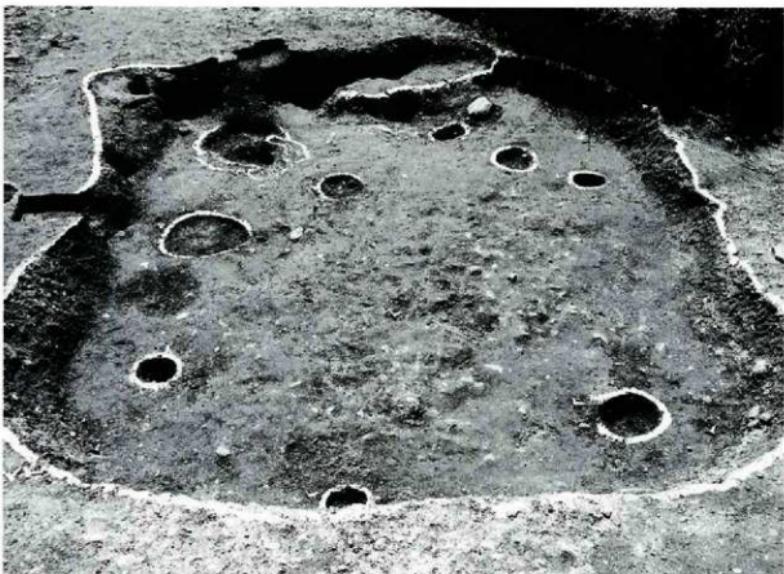
ST19住居跡出土遺物（423）



ST19住居跡出土遺物（444）



ST19住居跡出土遺物（451）



ST20住居跡完掘状況↑N



ST20住居跡調査状況↑SW



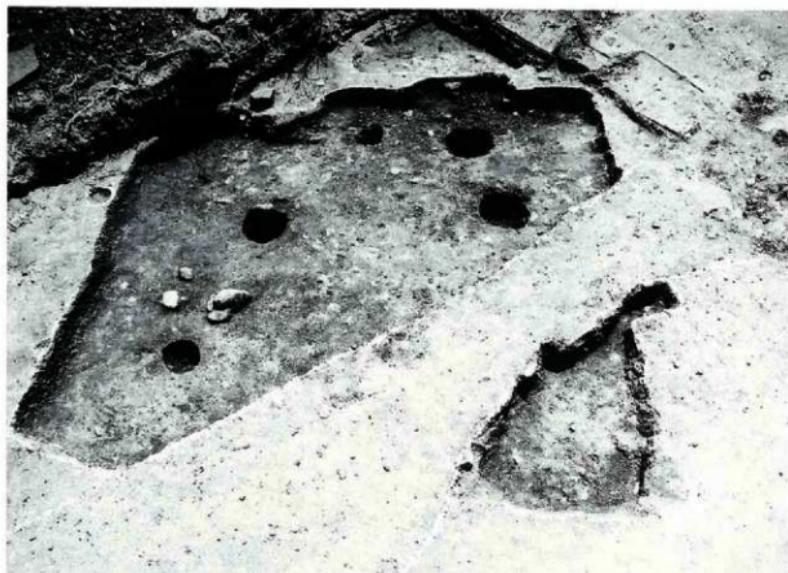
ST20住居跡EK1土壤完掘状況↑N



ST20住居跡遺物出土状況(RP43)↑W



ST20住居跡出土遺物集合



ST21住居跡完掘状況↑N



ST21住居跡検出状況↑E



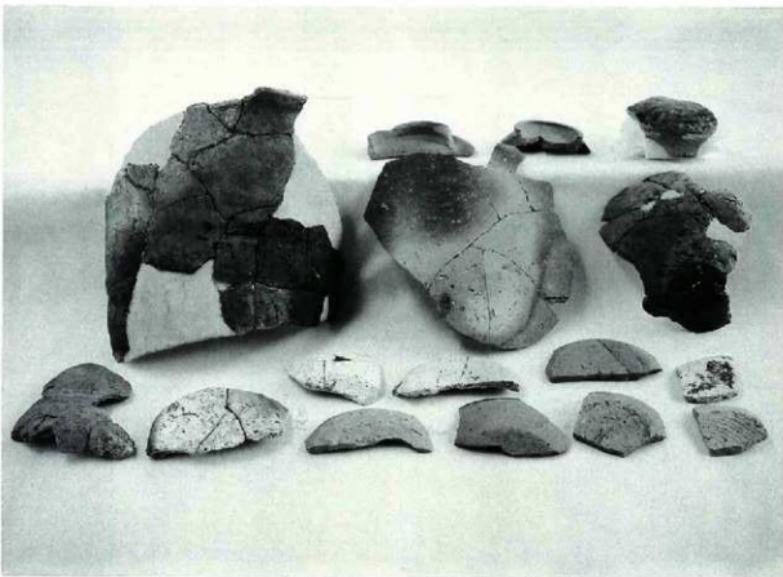
ST21住居跡遺物出土状況↑N



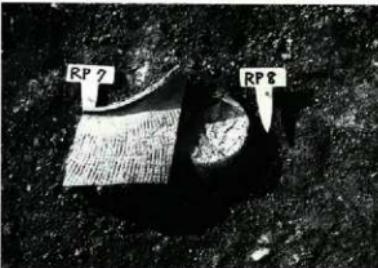
ST21住居跡遺物出土状況↑W



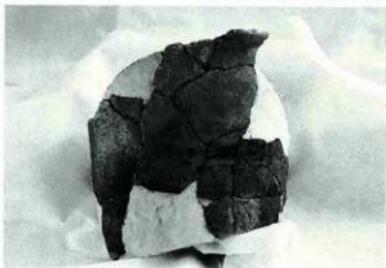
ST21住居跡遺物出土状況(RP16・17)↑N



ST21住居跡出土遺物集合



ST21住居跡出土遺物 (RP 7 + 8) ↑ S



ST21住居跡出土遺物 (482)



ST21住居跡出土遺物 (483)



ST21住居跡出土遺物 (485)



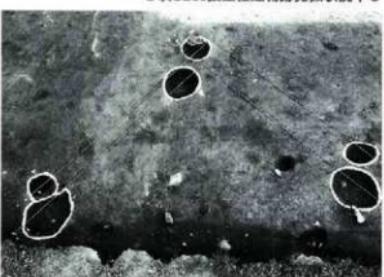
2次SB20振立柱建物跡完掘状況↑W



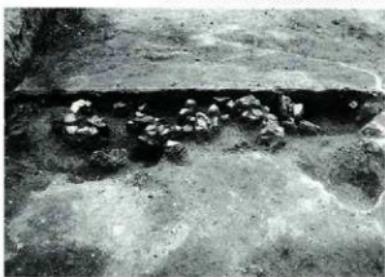
2次SB30振立柱建物跡完掘状況↑S



2次SB50振立柱建物跡完掘状況↑N



2次SB70・75振立柱建物跡完掘状況↑SW



SX18性格不明遺構調査状況↑S



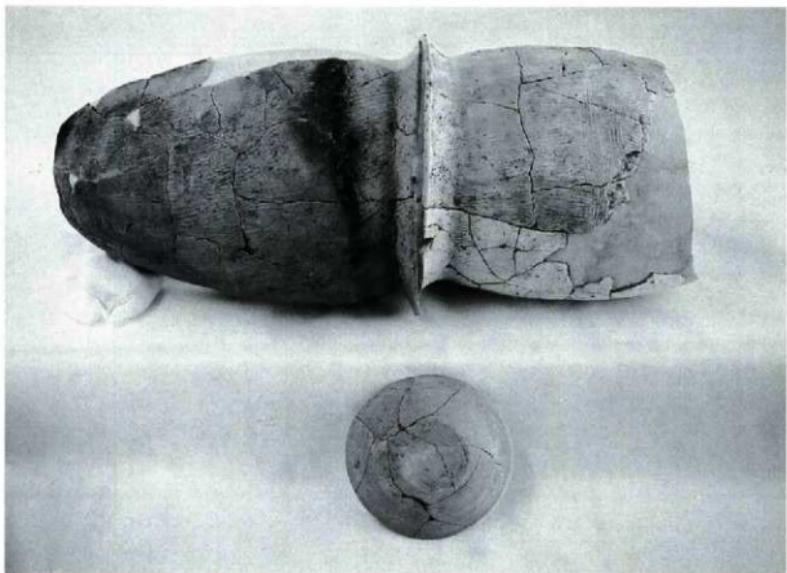
SX18性格不明遺構出土遺物(518)



SX18性格不明遺構出土遺物(522)



SX26性格不明遺構完掘状況↑N



EU 1 埋壺



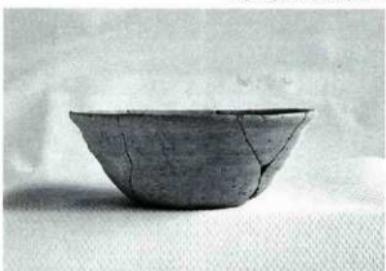
EU 1 埋壺調査状況 ↑W



EU 1 埋壺出土状況 ↑W



EU 1 埋壺出土状況 (487)



EU 1 埋壺出土状況 (488)



SK 1 土壤実掘状況 ↑W



SK 1 土壤断面



SK 10 土壤実掘状況 ↑N



SK 1 土壤断面 ↑W



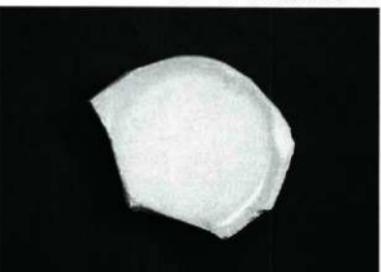
SK 2・10 土壤出土遺物 (527・528・529・530)



SK 11・12・13 土壤実掘状況 ↑S



SK 11・12・13 土壤出土遺物 (532)



SK 11・12・13 土壤出土遺物 (531)



SX 4 性格不明遺構完掘状況 ↑ S E



SX 4 性格不明遺構出土遺物 (539)



SX 5 性格不明遺構完掘状況 ↑ N



SX15 性格不明遺構完掘状況 ↑ S E



SX15 性格不明遺構完掘状況 ↑ E



SX 8 性格不明遺構完掘状況 ↑ S



SX 8 性格不明遺構出土遺物 (544)



SX10 性格不明遺構遺物出土状況 ↑ W



SB 1 挖立柱建物跡完掘状況



SB 1 挖立柱建物跡完掘状況 † S



SB 1 挖立柱建物跡完掘状況 † E



SB 1 挖立柱建物跡完掘状況 † N



SB 1 挖立柱建物跡完掘状況 † S E



歎跡完掘状況



歎跡検出状況↑S



歎跡調査状況↑N



歎跡調査状況↑N



遺構外遺物出土状況(RP1)↑E



遺構外遺物出土状況(RP1)↑E



遺構外遺物出土状況(RP2)↑W



煮物状遺物出土状況↑N

付 編

萩原遺跡の放射性炭素年代

山形秀樹（パレオ・ラボ）

萩原遺跡のST6とST10の各住居跡から出土した炭化物試料2点の放射性炭素年代をAMS法にて測定しました。測定によって得られた結果を表1に、その結果をもとに暦年代較正して得られた結果を表2に記載しました。

測定された試料の¹⁴C濃度について同位体分別の補正を行ない、その¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代値を算出しました。なお、年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用して¹⁴C年代値を算出しました。また、¹⁴C年代誤差は標準偏差 σ で算出しました。これは、同じ試料と条件で測定を100回くり返した時、測定結果が誤差範囲内に入る割合が68回であることを意味します。誤差を2倍（ 2σ ）にとると、誤差範囲内に入る割合が95回になり、誤差を3倍（ 3σ ）にとると、誤差範囲内に入る割合が99回になります。慣例として、¹⁴C年代誤差には 1σ の年代誤差を表示します。yrBPとは、AD1,950年から過去へ遡った年代値を意味します。

同位体分別効果の補正是、¹⁴C年代値の正確度を上げるために行ないます。表1の $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ 値は、標準値からのそれを千分率で示したものであり、試料炭素の¹³C/¹²C比(¹³C/¹²C)_{sample})を質量分析計で測定して求めました。PDB標準試料の¹³C/¹²C比(¹³C/¹²C)_{standard}=0.0112372を標準値として、 $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}} = [\{ (\text{13C}/\text{12C})_{\text{sample}} - (\text{13C}/\text{12C})_{\text{standard}} \} / (\text{13C}/\text{12C})_{\text{standard}}] \times 1000$ の計算式によって $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ 値を算出します。試料の $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ 値を-25.0‰に規格化することにより、測定された試料の $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ の値を用いて¹⁴C濃度を補正します。よって、表1に表示された¹⁴C年代値は、同位体分別効果による測定誤差を補正した年代値になります。

表1 放射性炭素年代測定結果

測定番号 (測定方法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	¹⁴ C年代値 (yrBP $\pm 1\sigma$)
P LD-816 (AMS)	炭化物 ST6 住居跡	-26.4	1,770 \pm 35
P LD-817 (AMS)	炭化物 ST10 住居跡	-28.2	1,850 \pm 30

暦年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730 \pm 40年）を較正し、より正確に真の年代を求めるために¹⁴C年代を暦年代に変換することです。具体的には、年代既知の樹木年輪の¹⁴C年代の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-T h年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて較正暦年代値を算出します。較正暦年代値の算出にRadiocarbon Calibration Program* CALIB rev. 4.3を使用しました。なお、交点年代値は、¹⁴C年代値に相当する較正曲線上の暦年代値であり、真の年代である可能性が最も高

いことを示します。 1σ 年代幅は、 ^{14}C 年代誤差 (1σ) に相当する較正曲線上の曆年代範囲であり、真の年代が、表 2 に表示されたすべての 1σ 年代幅のいずれかに入る確率が 68% であることを示します。 2σ 年代幅は、 ^{14}C 年代誤差の 2 倍 (2σ) に相当する較正曲線上の曆年代範囲であり、真の年代が、表 2 に表示された 2σ 年代幅に入る確率が 95% であることを示します。

^{14}C 濃度の変動のため、較正曲線はアコボコしています。そのため ^{14}C 年代値に相当する較正曲線上の曆年代値、または ^{14}C 年代誤差に相当する較正曲線上の曆年代範囲が複数ある場合があります。図 1 から S T 6 の場合、1,770yrBP は cal AD 255, 305, 315 のいずれかになります。つまり、AD 255, 305, 315 年の各木材年輪試料を ^{14}C 年代測定すると、それらの ^{14}C 年代値はどれもおよそ 1,770yrBP になることから、この 3 つの交点年代値はどれも等しく真の年代である可能性があります。また、 ^{14}C 年代誤差である ± 35 カラ、1,805yrBP と 1,735yrBP の間が ^{14}C 年代誤差範囲になります。1,805yrBP は cal AD 235 になります、1,735yrBP は cal AD 260, 280, 335 になりますから、cal AD 260–280 は 1σ 年代幅からはずれることになります。故に、 1σ 年代幅を 2 つ持つことになります。図 2 から S T 10 の場合、1,805yrBP は cal AD 135 になります。また、 ^{14}C 年代誤差である ± 30 カラ、1,880yrBP と 1,820yrBP の間が ^{14}C 年代誤差範囲になります。1,880yrBP は cal AD 95, 125 になります、1,820yrBP は cal AD 230 になりますから、cal AD 95–125 は 1σ 年代幅からはずれることになります。故に、 1σ 年代幅を 2 つ持つことになります。cal AD の cal とは、校正した曆年代を意味し、実際の曆年代との混同を防ぐためにつけます。

表 2 較正曆年代値

測定番号	交点年代値	1σ 年代幅	2σ 年代幅
P L D -816	cal AD 255 cal AD 305 cal AD 315	cal AD 235–260 cal AD 280–335	cal AD 135–360
P L D -817	cal AD 135	cal AD 95–95 cal AD 125–230	cal AD 80–240

表 2 の 2σ 年代幅より、S T 6 住居跡から出土した炭化物の年代は 2 世紀前半から 4 世紀後半と考えられ、S T 10 住居跡から出土した炭化物の年代は 1 世紀後半から 3 世紀中旬と考えられます。

引用文献

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代、p.3–20.
 Stuiver, M. and Reimer, P.J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.
 Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) Intcal98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000–0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041–1083.

図1 歷年代較正曲線 (ST6)

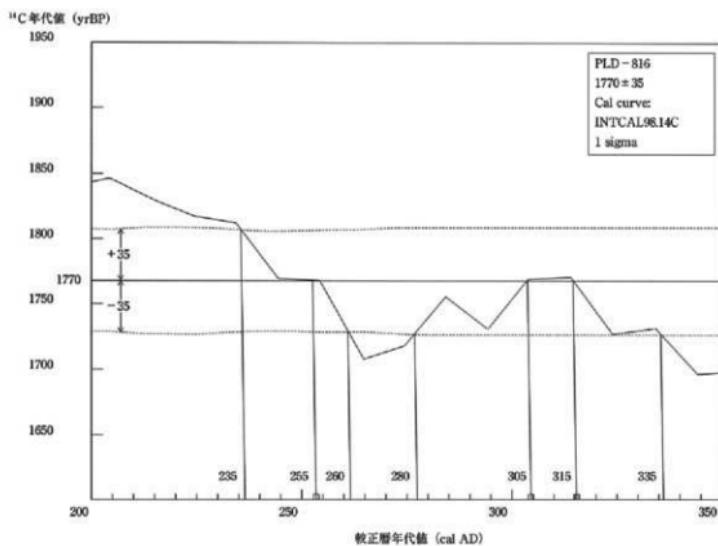
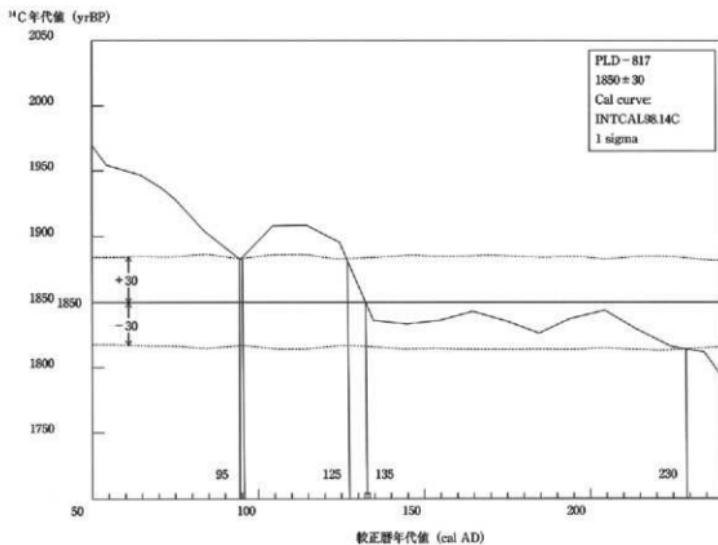


図2 歷年代較正曲線 (ST10)



敷物状遺物について

東北芸術工科大学 松井敏也

【はじめに】

山形県藤原遺跡出土の敷物状遺物の解析を試みたので報告する。

この遺物は肉眼観察から、炭化していると考えられた〔写真1〕。通常、樹木の場合は3方向（木口面、板目面、板目面）の薄片を採取することにより樹種の鑑定が可能である。しかし、この試料は炭化していることもあり、薄片の採取が困難であった。よって、木口面の観察には試料を樹脂包埋したのち行なった。また、板目方向に相当する組織の観察は電子顕微鏡により行なった。

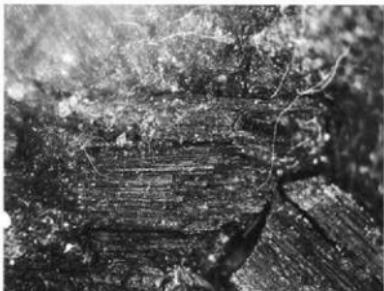


写真1 表面の顕微鏡観察

【結 果】

木口面の写真を写真2に、電子顕微鏡による写真を写真3に示す。

写真2より、木の導管らしき組織が観察できたが、このような配列を持つ樹種は考えられにくいことから樹木ではないと考えられた。しかし、試料自体が扁平に変形している恐れが形状から考えられ、断定は出来ない。板目面に相当する組織の電子顕微鏡写真より、樹木には存在する放射組織が観察できない。

以上のことから、本試料は草あるいはツル系の植物と思われる。

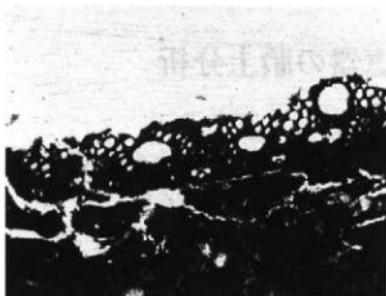


写真2 木口面に相当する組織の顕微鏡写真

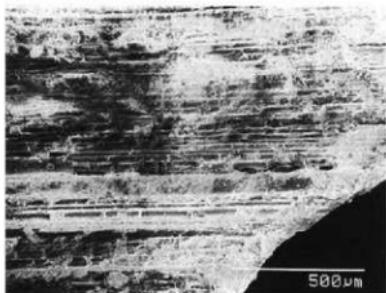
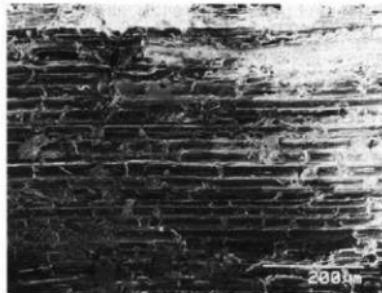


写真3 板目面に相当する組織の電子顕微鏡写真（左：80倍、右：150倍）



萩原遺跡出土須恵器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

山形県山形市に所在する萩原遺跡は、山形盆地南部を流れる須川の支流である本沢川の形成した扇状地上に位置する。3次にわたる発掘調査により、古墳時代、奈良・平安時代、中世の造構、遺物が検出された。

本報告では、本遺跡の3次調査で検出されたS T19堅穴住居跡から出土した平安時代の須恵器について、その材質（胎土）の特徴を明らかにし、山形県内の遺跡出土品におけるこれまでの分析例と比較することにより、該期の須恵器の生産および流通に関する資料を作成することを目的とする。

1. 試 料

試料は、萩原遺跡より出土した平安時代の須恵器の壺9点と蓋1点の合計10点である。各試料の試料名、器種、色調などは分析結果を示した表1に併記する。

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組織を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。また、後者の方法は再現性の高い数値によるデータが得られる。ここでは、薄片作製観察および蛍光X線分析の2方法を用いて試料間のデータを比較検討する。なお、蛍光X線分析については、胎土の外見の特徴である色調と薄片観察結果を考慮して6点の試料を選択した。選択した試料は、分析結果を示した表2に示す。以下に各分析方法の処理過程を述べる。

（1）薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにし、また胎土の基質については、孔隙の分布する程度と砂の配列や孔隙などに方向性が認められるかどうか、および基質を構成する粘土が焼成によりどの程度ガラス化してどの程度粘土鉱物として残存しているかということと酸化鉄などの鉄分の含まれる程度について定性的に記載した。

（2）蛍光X線分析

主要10元素の SiO_2 、 Al_2O_3 、 Fe_2O_3 、 TiO_2 、 MnO 、 MgO 、 CaO 、 Na_2O 、 K_2O 、 P_2O_5 およびLOIについて蛍光X線分析法によって分析した。以下に各分析条件を記す。

1) 装 置

理学電機工業社製RIX1000 (F P 法のグループ定量プログラム)

2) 試料調製

試料を振動ミル (平工製作所製TII100; 10mℓ容タンクステンカーバイト容器) で微粉碎し、105℃で4時間乾燥させた。この微粉碎試料についてガラスピートを以下の条件で作成した。

溶融装置；自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー (3491AI)

溶剤及び希釈率；融剤 (ホウ酸リチウム) 5,000 g : 試料0.500 g

剥離剤；LiI (溶融中1回投入)

溶融温度；1200℃ 約7分

3) 測定条件

X線管；Cr (50kV - 50mA)

スペクトル；全元素K_a

分光結晶；LiF, PET, TAP, Ge

検出器；F-PC, SC

計数時間；Peak40sec, Back20sec

3. 結 果

(1) 薄片作製観察

観察結果を表1に示す。各試料に認められる胎土中の砂粒の種類構成は、互いによく類似する。すなわち、砂粒の全体量は中量、砂粒の最大径は1～2mmで淘汰度は不良なものが多い。ただし、95図399のみ砂粒の量、淘汰度および最大径が他の試料と若干異なる。

各試料の鉱物片では石英が比較的多く、他にカリ長石、斜長石、不透明鉱物などを微量含む。試料によっては黒雲母、角閃石、ジルコンなどが微量認められる。岩石片では、全試料に凝灰岩の岩片が少量または微量含まれる。また、流紋岩、花崗岩類や火山ガラスを微量含む試料も多い。さらに、試料によっては海綿骨針などの生物化石を含むものもある。

96図420、96図425、97図428の3点には、焼成時の被熱によるカリ長石の溶融は認められないが、それ以外の7点の試料にはカリ長石の溶融化が認められ、特に96図413ではカリ長石は完全に溶融化し、ムライトの生成も認められる。カリ長石の溶融は1150℃前後、ムライトの生成は1200℃前後の高温で生じることが知られていることから、96図420、96図425、97図428の3点の焼成温度は1150℃未満、ただし、素地を構成する粘土の多くがガラス化していることから900℃よりは高温である。また、上記3点以外の7点のうち、96図413は1200℃前後の焼成温度であり、他の6点は1150℃前後の焼成温度が推定される。

(2) 蛍光X線分析

結果を表2に示す。まず、主体となる成分であるSiO₂とAl₂O₃の量比において、それぞれ約71%と約20%の94図370および96図419の2点、72～73%と19～20%の94図382および95図400の2点、そして67～68%と約21～22%の95図399および96図425の3グループに分かれる。さらに、94図382と95図400とでは、Na₂OとK₂Oの量比において顕著な差異が認められ、95図399と96図425とではFe₂O₃、CaO、Na₂O、K₂Oの量比において顕著な差異が認められることから、結局6点の試料から、5種類の成分の胎土を認めることができたと言える。この5

種類は、胎土の色調とはほぼ一致し、暗灰色および灰白色とした胎土に2種類の化学組成があることがわかる。なお、95図399は、薄片観察において他の試料とは異なる砂粒の量、淘汰度、最大径を有することがわかっているが、その胎土の特異性は、化学組成では Fe_2O_3 の含有量に現れている。

4. 考 察

今回の試料は、薄片観察における砂粒の種類構成では、石英、カリ長石、斜長石の鉱物片と、凝灰岩、花崗岩類および火山ガラスの岩石片を特徴とする、類似した組成を示す。また、化学成分では少なくとも5種類の胎土を認めることができた。

当社で以前に行った山形盆地西部に位置する三条遺跡出土の須恵器の胎土分析（パリノ・サーヴェイ株式会社、2001）との比較では、次のような類似点および相違点が指摘できる。薄片観察による胎土中の砂粒の種類構成では、今回の試料と同様に、三条遺跡では鉱物片では石英、カリ長石、斜長石を主体とし、岩石片では凝灰岩を主体とする。また、数点の試料には花崗岩類の岩片も認められている。

一方、化学組成では、 SiO_2 が67~70%の試料が多く、これらは今回の試料における SiO_2 約68%の96図425の組成と類似する。また、これらの試料は、 Na_2O と K_2O の量比においても、今回の SiO_2 約68%の96図425におけるそれらの量比と近い値を示す。なお、今回の分析では、三条遺跡の試料で行った粘土ノルム鉱物組成を特に求めていなかった。これは、これまでの事例から、須恵器のように高温焼成ではあるが、陶磁器などに比べれば、粗粒の碎屑物が多く含まれるような試料では、粘土ノルム鉱物組成と実際の胎土中における鉱物の含有状況とが大きく乖離することが多いため、あえて架空の鉱物組成を提示することはせず、化学組成のまでの比較を行った。以上の状況をまとめると、萩原遺跡出土須恵器の中には、三条遺跡出土須恵器の主体を占める胎土と極めてよく類似する胎土を有する試料が少数存在すると言える。逆に見れば、萩原遺跡出土須恵器の中には、三条遺跡出土須恵器とは異なる胎土を有するものも多く存在するということである。

なお、今回の試料における胎土中の砂粒の種類構成は、三条遺跡出土須恵器の多くと共に通するが、三条遺跡の報告書の中では、胎土中に凝灰岩や花崗岩が混在するその地質学的背景として、最上川流域の地質が反映されていることを述べた。したがって、今回の試料も最上川流域に分布するいずれかの窯跡から供給されたものである可能性がある。三条遺跡の報告書では、同時に山形盆地東部に位置する二子沢古窯跡から出土した須恵器も分析している。その試料の多くは、薄片観察により、石英や斜長石および凝灰岩を含むことは共通するが、カリ長石を含まずに安山岩の岩石片が認められるなど若干異なる特徴をもつ胎土であることが明らかとなり、二子沢古窯から三条遺跡へ須恵器が供給された可能性は低いと考えた。このことは、そのまま今回の試料にも当てはまる。

ところで、山形盆地北西部に位置する平野山古窯跡群出土須恵器については、古橋・藤根（1998）による胎土分析例があるが、胎土の特徴記載が本分析とは異なるため、詳細な比較は難しい。そこでは、胎土の特徴として、放散虫化石や海水生珪藻化石および海綿骨針を含有する海成粘土を用いた胎土、これらの海水生化石に堆積環境の異なる淡水生珪藻化石が混在することから海成粘土に淡水成粘土を混ぜた粘土を用いた胎土とに分類している。今回の試料においても海綿骨針は一部の試料に認めることはできたが、放散虫化石や珪藻化石は認めることができなかった。これだけで判断すれば、平野山古窯からの供給はなかったように思えるが、堆積物中における微化石の含有量や偏在性などを考慮すれば、胎土中に「微化石が認められない」ことを「微化石

表1 脱土薄片観察結果

試 料 名	器 色 種 類 調 量	砂 粒 全 淘 全 体 度	砂 粒 の 種 類 構 成														孔 隙 度	方 向 性	粘 土 残 存 量	含 鉄 量	長 石 の 溶 融 度	ム ラ イ ト 化	備 考						
			鉱 物 片 岩 石 片																										
			石 カリ 長 石 英	斜 長 石 英	单 斜 輝 石 母	黑 云 母 石	角 閃 石 石	酸 化 角 閃 石 石	ジ ル コ ン 石	緑 康 石 石	不 透 明 鉱 物	珪 質 寶 岩	流 紋 岩	凝 灰 岩	多 結 晶 石 英 類	花 崗 岩 類	火 山 ガ ラ ス	海 面 骨 針	植 物 珪 酸 體										
			石 カリ 長 石 英	斜 長 石 英	单 斜 輝 石 母	黑 云 母 石	角 閃 石 石	酸 化 角 閃 石 石	ジ ル コ ン 石	緑 康 石 石	不 透 明 鉱 物	珪 質 寶 岩	流 紋 岩	凝 灰 岩	多 結 晶 石 英 類	花 崗 岩 類	火 山 ガ ラ ス	海 面 骨 針	植 物 珪 酸 體										
94回370	坏	暗灰	○	×	1.9	△	+	+			+	+	△			+			△	△	+	+	△	×	カリ長石は結晶表面部が微弱に溶融化している。火山ガラスは微粒程度で含有され、Y字型。				
94回382	坏	灰	○	×	1.3	△	+	+			+	+	△						△	△	△	+	△	×	カリ長石は結晶表面部が微弱に溶融化している。				
95回399	坏	暗灰	△	○	0.3	△	+	+			+	+	△			+		+	△	△	+	+	△	×	カリ長石は結晶表面部が微弱に溶融化している。赤地は、試料表面部において水融化的多い褐色。中心部において灰色を示す。火山ガラスは、微粒程度で含有され、バブルウォール型。				
95回400	坏	灰白	○	×	1.3	△	+	+			+	+	+	+	△	+	+	+	+	△	×	+	+	△	×	カリ長石は結晶表面部がきわめて微弱に溶融化している。火山ガラスは、Y字型。			
95回412	盖	暗灰	○	△	0.6	○	+	△	+			+	+	△	+	+	+	+	△	△	+	+	△	×	カリ長石は結晶表面部から溶融化が進行している。火山ガラスが含有されているようであるが、溶融ガラスとの識別が困難。				
95回413	坏	暗灰	○	×	1.7	△	+	+			+	+	△	+	+	+	+	+	△	△	+	+	△	△	カリ長石は完全に溶融し、斜長石も結晶表面部から微弱に溶融化している。				
95回419	坏	暗灰	○	×	1.5	△	+	+			+	+	△						△	△	+	+	△	×	長石類は結晶表面部から微弱に溶融化している。				
95回420	坏	灰	○	△	0.9	○	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	△	+	△	△	+	+	×	×	長石類の溶融化は認められない。火山ガラスは軽石型。				
95回425	坏	灰白	○	×	1.0	○	+	+	+	+	+	+	+	+	+		△	+	△	△	△	+	×	×	長石類の溶融化は認められない。火山ガラスは軽石型。				
97回428	坏	灰	○	×	1.3	○	△	+	+			+	+	+	+	+	+	+	△	△	+	+	×	×	長石類の溶融化は認められない。火山ガラスはバブルウォール型、軽石型。				

量比 ○: 多量 ○: 中量 △: 少量 +: 微量
程度 ○: 深い ○: 中程度 △: 薄い ×: なし

表2 蛍光X線分析結果（化学組成）

試料名	色調	SiO ₂	TiO ₂	Al2O ₃	Fe2O ₃	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	P2O ₅	Ig.loss	合計
94回370	暗灰	70.99	0.87	19.87	5.71	0.01	0.69	0.25	0.42	1.12	0.00	0.07	100.00
94回382	灰	72.48	0.80	19.60	5.07	0.01	0.71	0.23	0.19	0.86	0.00	0.05	100.00
95回399	暗灰	66.84	0.74	22.00	7.49	0.02	0.80	0.28	0.38	1.44	0.02	0.08	100.00
95回400	灰白	72.86	0.89	18.62	5.08	0.01	0.68	0.28	0.31	1.14	0.05	0.08	100.00
96回419	暗灰	70.92	0.86	20.17	5.37	0.03	0.75	0.39	0.29	1.14	0.00	0.08	100.00
96回425	灰白	67.81	0.82	21.30	5.61	0.02	1.06	0.48	0.96	1.85	0.00	0.09	100.00

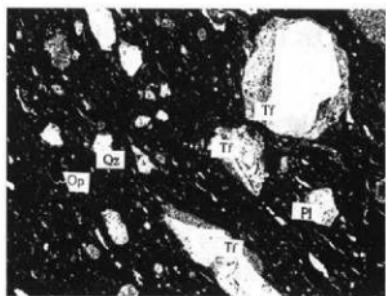
* 単位は重量%

がある」ということと異なる特徴として評価することはできない。したがって、平野山古窯跡との関係については、今後、本報告と同様の方法で分析する機会が得られればさらに検討を行いたい。

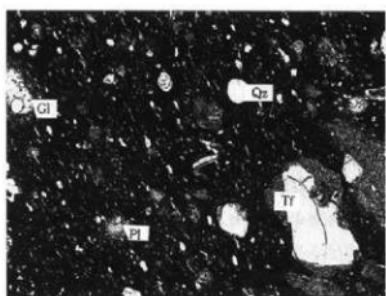
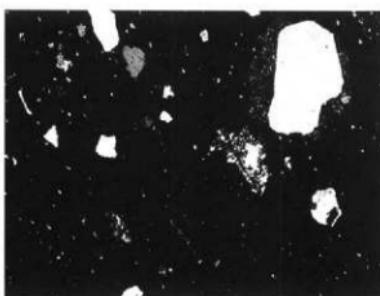
引用文献

- 古崎美智子・藤根 久（1998） 平野山古窯跡群第12地点遺跡出土須恵器等の材料分析、山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集、平野山古窯跡群第12地点遺跡第2次発掘調査報告書、P.15-25、山形県埋蔵文化センター
 パリノ・サーヴェイ株式会社（2001） 三条遺跡の自然科学分析、山形県埋蔵文化財センター調査報告書
 第93集 三条遺跡第2・3次発掘調査報告書、図版・付録編、P.40-60、山形県埋蔵文化財センター

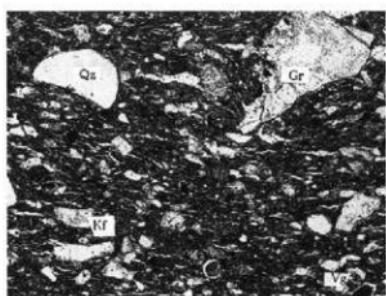
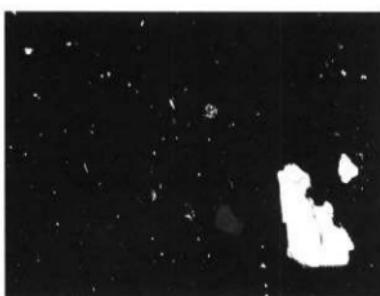
図版1 胎土薄片



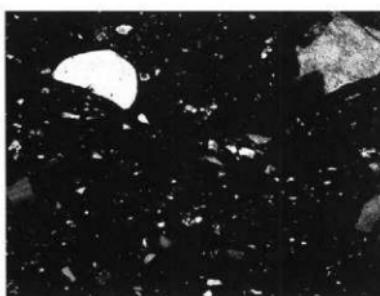
1.94図 370 壤 暗灰色



2.96図 413 壤 暗灰色



3.96図 420 壤 灰色



Qz：石英、Kf：カリ長石、Pl：斜長石、Op：不透明鉱物、Tf：凝灰岩、Gr：花崗岩、G1：ガラス。
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

萩原遺跡の焼失住居跡出土炭化材の樹種同定

植田 弥生 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

当遺跡は山形市大字長谷堂字萩原に所在する。古墳時代から平安時代の遺構を主体とし、当遺跡の南方を流れる本沢川が形成した自然堤防の微高地に立地しており、標高は約132mである。周囲には古墳群もあり、山形盆地の中でも古くから活動の場となっていた地である。ここでは、古墳時代前期の焼失住居ST1から出土した3点、ST6の5点、ST10の2点、ST14の2点、合計15点の炭化材樹種を調べ、建築材にどのような樹種が利用されていたかを明らかにする。

2. 炭化材樹種同定の方法

先ず、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で観察し分類群のおおよその目安をつける。アカガシ亞属・コナラ節・クヌギ節・クリなどは横断面の管孔配列が特徴的であるため、実体顕微鏡下の観察で同定可能であるがそれ以外の分類群については3方向の破断面(横断面・接線断面・放射断面)を走査電子顕微鏡で観察し同定を決定した。またコナラ節やクヌギ節などでも確認を要する炭化材については、走査電子顕微鏡で確認した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果は、ST1の3点はコナラ節2点とケヤキ1点、ST6の5点はすべてクリであり、ST10の5点はクヌギ4点とカエデ属1点、ST14の2点はすべてクヌギ節であった(表1)。

表1 萩原遺跡の古墳時代前期の焼失住居跡出土炭化材樹種

住居跡	樹種	住居跡	樹種
ST1-①	コナラ属コナラ節	ST10-①	コナラ属クヌギ節
ST1-②	コナラ属コナラ節	ST10-②	コナラ属クヌギ節
ST1-③	ケヤキ	ST10-③	カエデ属
ST6-①	クリ	ST10-④	コナラ属クヌギ節
ST6-②	クリ	ST10-⑤	コナラ属クヌギ節
ST6-③	クリ	ST14-①	コナラ属クヌギ節
ST6-④	クリ	ST14-②	コナラ属クヌギ節
ST6-⑤	クリ		

S T 1 -①は薄い板状が不規則に重なりあつていて、この薄い板状の材はコナラ節であることが確認できた。コナラ節の材構造の特徴として横断面を放射方向に走る太い放射組織があり、この広放射組織の部分で割れ安い。従つて、S T 1 -①の産状は炭化後に放射組織の部分で崩れた状態と思われる。ただし、炭化以前に広放射組織の部分で板状に割って加工され、屋根材や壁材として使用されていた可能性も否定は出来ない。

以下に同定の根据とした材組織の観察結果を分類順に記す。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版1 1a-1c (S T 1 -②)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し孔圈を形成し、孔圈外は薄壁・角形の非常に小型の管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は單一。放射組織は単列のものと多數の放射柔細胞が集合した広放射組織がある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

コナラ属クヌギ節 *Q.* subgen. sect. *Cerris* ブナ科 図版1 2a-2c (S T 14 -②)

年輪の始めに大型の管孔が1~層配列し孔圈を形成し、孔圈外は厚壁・円形の小型の管孔が単独で放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は單一。放射組織は同性、単列のものと広放射組織がある。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版1 3a-3c (S T 6 -③) 4 (S T 6 -②)

年輪の始めに中型~大型の管孔が配列し除々に径を減じてゆき、晚材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は單一。放射組織は単列だけで広放射組織は認められない。いずれの試料も保存が悪かった。クリの横断面は広放射組織を持つコナラ節と類似しているため、保存が悪い場合は広放射組織の有無の確認が難しく誤同定する恐れがある。しかし接線断面を観察することにより横断面では認められなかった広放射組織を確認することができ、コナラ節とクリを識別できる場合が多い。当遺跡の試料はいずれも接線断面において広放射組織は認められなかつたのでクリと同定した。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版2 5a-5c (S T 1 -③)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し孔圈を形成し、孔圈外は小型から非常に小型の管孔が多数集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の穿孔は單一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1~8細胞幅、上下端や縁に結晶細胞が顕著である。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。

カエデ属 *Acer* カエデ科 図版2 6a-6c (S T 10 -③)

孔口が丸い小型の管孔が単独または2~3個が放射方向に複合して散在し、年輪界は不明瞭、帶状の柔組織が顕著な散孔材。道管の穿孔は單一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1~2細胞幅。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育する落葉広葉樹林の主要構成樹であり約26種と多くの変種が知られている。

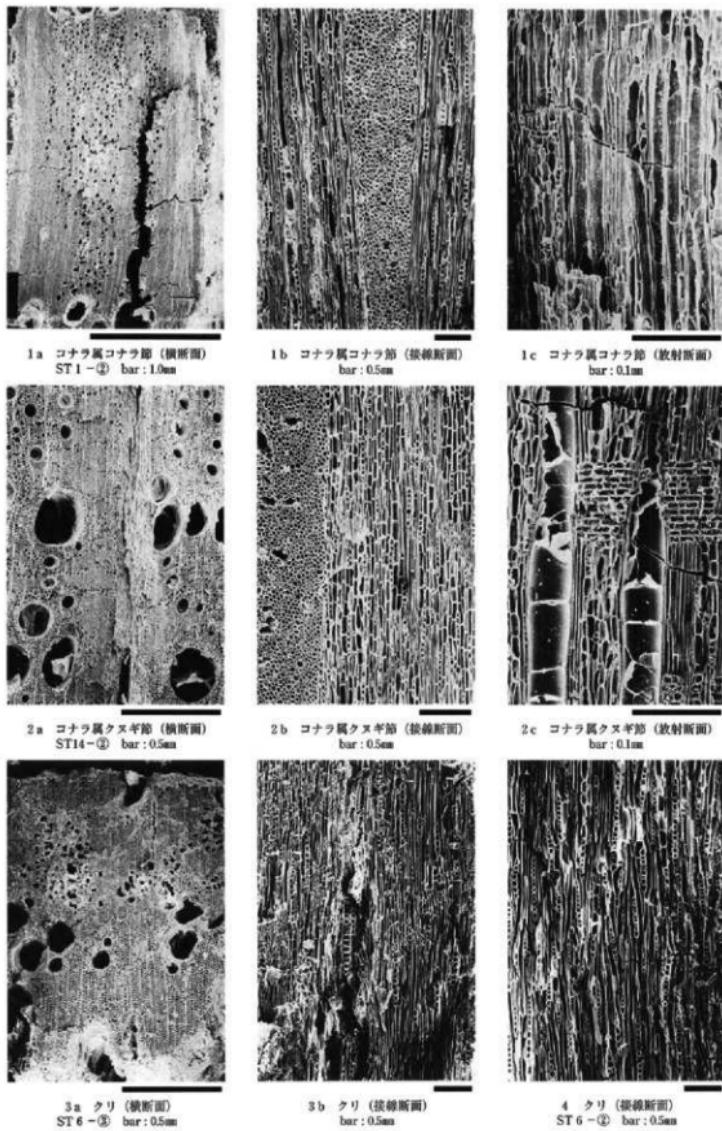
4.まとめ

樹種調査を行った炭化材試料は、各住居跡において異なる地点や材の方向性などの産状を考慮して、異なる材のものが選ばれた。各住居の試料数は2~5点と少ないが、出土した樹種の種類はS T 6ではクリが、S T

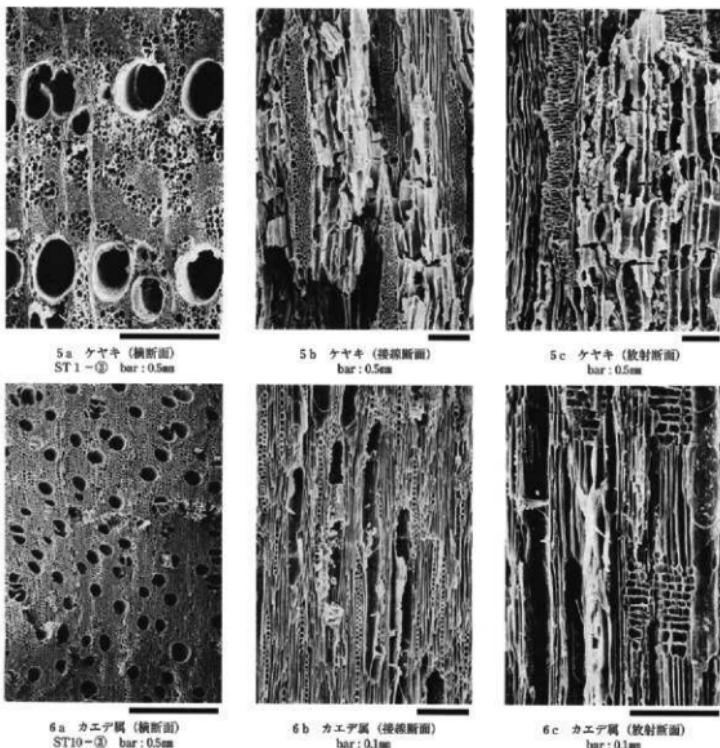
10とS T14ではクヌギ節が、S T 1はコナラ節が優占出土した。このように各住居ごとで出土樹種がやや異なるのは、検討できた炭化材試料数が少ないためなのか、それとも各住居により主に使用された樹種に違いがあったのかは、今後の試料の蓄積が必要であろう。

検出されたコナラ節・クヌギ節・クリ・ケヤキ・カエデ属は、すべて落葉広葉樹であり、これらの樹種構成は当遺跡周辺に成立する温帯落葉広葉樹林の主要素であり、二次林の主要構成要素でもある。またこの5分類群のいずれの樹種も建築材として有用な材であり、建築材としての適材を近隣から伐採して使っていた事を今回の調査で明らかにすことができた。

図版1 萩原遺跡焼失住居跡出土炭化材樹種



図版2 萩原遺跡焼失住居跡出土炭化材柵



報告書抄録

ふりがな	はぎわらいせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	萩原遺跡発掘調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第120集						
編著者名	山口博之・吉田江美子						
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301						
発行年月日	2004年3月26日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はぎわらいせき 萩原遺跡	やまがたけん 山形県 やまとこなし 山形市 おおねだりは 大字長谷 じょうごくは 堂宇萩原	6201	101	38度 12分 46秒	140度 17分 25秒	第2次 19980409 ～ 19981016 第3次 19990624 ～ 19991006	4,900 5,400	東北中央道相馬・ 尾花沢（上山～東 根間）建設工事

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	古墳時代 前期・中期 奈良・平安 時代 中世	堅穴住居 掘立柱建物 土坑 柱穴 河川跡	土師器 石製品 須恵器 中世陶器 中国磁器 錢	古墳時代前期を中心とする集落跡であり、古代にも集落が発展している。中世の遺構も多い（出土箱数102）

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第120集

萩原遺跡発掘調査報告書

2004年3月26日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301
印刷 アベ印刷株式会社
〒990-0894 山形市大字船町82番地
電話 023-681-1951